人 間 関 係 研 究 vol.12(2013)

巻頭言

創設から13年目を迎えて ……津村俊充

特集「共生」

共生のための教育
—民主主義の再建を課題とするシティズンシップ教育— …… 清田夏代…(1)

「多文化共生社会」における災害時外国人支援を考える
—東海・東南海地震に備えて— …… 土井佳彦…(21)

Article

ラボラトリー方式の体験学習を通して得られる気づきに関する検討 …… 中尾陽子…(31)

箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究 …… 楠本和彦…(54)

箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討
—多元的方法・方法のトライアンギュレーション、M-GTAを中心に— …… 楠本和彦…(71)

経済的豊かさか、価値観の共有か?
—家庭生活満足度のマルチレベル分析— …… 森泉　哲…(95)

職場において「ほめ」はどのような効果を持つのか
—アルバイトにおける「ほめ」に注目して— …… 浦上昌則・榊原由奈…(108)

実習

実習「たかが声かけ　されど声かけ」
—より実践的なホスピタリティ・マインドの体験学習— …… 津村俊充・鯖戸善弘…(124)

公開講演会

組織開発（OD）におけるユース・オブ・セルフ
—ゲシュタルトODの考え方— …… ブレンダ・ジョーンズ…(135)

関係性の回復に向けて …… 玄侑宗久…(155)

事業報告 …… (177)

The Nanzan Journal of Human Relations vol.12(2013)

Commentary ····· Toshimitsu TSUMURA

Special Issue : Symbiosis

Education and Multicultural Symbiotic Society:
Citizenship Education for Restoring Democracy ····· Natsuyo SEIDA ··· (1)

Considering Support for Foreign Residents at the Time of Disaster in a Multicultural Symbiotic Society: Preparing for Tokai and Tonankai Earthquakes ····· Yoshihiko DOI··· (21)

Articles

Awareness through Experiential Learning using Laboratory Method
····· Yoko NAKAO··· (31)

A Review of Researches about Process of Sandplay-Picture Construction and Narrative
····· Kazuhiko KUSUMOTO··· (54)

An Examination about Research Methods of Study on Subjective Experiences of Makers of Sandplay Works ····· Kazuhiko KUSUMOTO··· (71)

Monetary Wealth or Shared Values?
Multilevel Analysis of Family Life Satisfaction ····· Satoshi MORIIZUMI··· (95)

The Effects of Praise on Part-Time Worker's Attitude
····· Masanori URAKAMI & Yuna SAKAKIBARA··· (108)

Exercise

"just a greeting, perhaps, but definitely a meaningful first greeting"
Experiential Learning for Training a More Practical Hospitality Mind
····· Toshimitsu TSUMURA & Yoshihiro SABATO··· (124)

Lectures

Use of Self: A Gestalt Perspective Organization and Systems Development
····· Brenda JONES··· (135)

Reweaving the Web of Our Connections
····· Sokyu GENYU··· (155)

Reports ····· ··· (177)

創設から13年目を迎えて

本研究センターも2000年の設立から、13年が経とうとしています。その間、社会人対象の公開講座の充実、南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻の設立と院生の教育研究の支援、さらには、国際医療センターの受託研究「人間中心に向けての教育プログラムに関する研究」、文部科学省大学・大学院における教員養成推進プログラムや専門職大学院教育推進プログラムの採択を受けたプロジェクトの実施などを行ってきています。その活動の中核には、ラボラトリー方式の体験学習の実践研究があります。ラボラトリー方式の体験学習の実践研究は、本学の教育モットーである「人間の尊厳のために」をベースに行なわれています。「人間の尊厳」とは、誰もがかけがえのない価値や権利をもっていること、それを理解し、尊重し合うことです。そうした個性を認め合う、また人間性豊かな社会を創り出すためにラボラトリー方式の体験学習は貢献しうると考えています。

今回の紀要の特集のテーマは、「共生」にしました。まさに、異なる人々がいかに相互に理解を深め、ともに生きる社会を創り出すことができるのかといった問いを立ててみました。共生といっても、関係する者相互に利益を与え受けることができる相利共生の相互関係が生まれることを願っています。今回の紀要に掲載された記事により、こうした共生のありようや共生に向けての実践的研究アプローチに少しでも光があたることを願っています。

2012年度、センター研究員に新しいメンバーが加わりました。南山短期大学から短期大学部への移籍にともない、英語学・言語学を専門とし社会言語学的アプローチから臨床場面での分析を行っている丹羽牧代さん、アートセラピーを専門として自己発見・自己表現のための創造的な活動を行っている伊東留美さん、社会心理学、対人・異文化コミュニケーションを専門として対人葛藤とサポート場面に関する研究を進められている森泉哲さんの３名です。こうした新しいメンバーの加入にともない、センターの活動の活性化が進むことを願っています。

活性化の一つの表れとして、2012年度は定例研究会を４回開催することができました。こうした活動も、今後のセンター紀要に掲載されたり、また前号の紀要で紹介された論文の展開として研究会が開催されたりしています。

今年度は、第１回定例研究会「ソーシャルサポート要請の日米比較―文化の複層性の観点から―」森泉哲研究員（南山大学短期大学部英語科准教授）、第２回定例研究会「社会言語学における『人間関係の中の言語使用』へのまなざし～Welfare Linguistics Rising～」丹羽牧代研究員（南山大学短期大学部英語科教授）、第３回定例研究会「ドイツの市民参加による熟議の手法『Planungszelle』が参加経験者・未経験者に及ぼす効果」前田洋枝氏（南山大学総合政策学部総合政策学科講師）、第４回定例研究会「東日本大震災と災害ボランティア：初動の問題と被災地のリレー」渥美公秀氏（大阪大学大学院人間科学研究科教授）でした。

今後の本研究センターの活動が公開講座や定例研究会、ならび紀要などを通して、ラボラトリー方式の実践研究活動がさらに発展していくことを願っています。

南山大学人間関係研究センター長　**津　村　俊　充**

人 間 関 係 研 究 vol.12(2013)

巻頭言

創設から13年目を迎えて ……津村俊充

特集「共生」

共生のための教育
—民主主義の再建を課題とするシティズンシップ教育— …… 清田夏代…(1)

「多文化共生社会」における災害時外国人支援を考える
—東海・東南海地震に備えて— …… 土井佳彦…(21)

Article

ラボラトリー方式の体験学習を通して得られる気づきに関する検討 …… 中尾陽子…(31)

箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究 …… 楠本和彦…(54)

箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討
—多元的方法・方法のトライアンギュレーション、M-GTAを中心に— …… 楠本和彦…(71)

経済的豊かさか、価値観の共有か?
—家庭生活満足度のマルチレベル分析— …… 森泉　哲…(95)

職場において「ほめ」はどのような効果を持つのか
—アルバイトにおける「ほめ」に注目して— …… 浦上昌則・榊原由奈…(108)

実習

実習「たかが声かけ　されど声かけ」
—より実践的なホスピタリティ・マインドの体験学習— …… 津村俊充・鯖戸善弘…(124)

公開講演会

組織開発（OD）におけるユース・オブ・セルフ
—ゲシュタルトODの考え方— …… ブレンダ・ジョーンズ…(135)

関係性の回復に向けて …… 玄侑宗久…(155)

事業報告 …… (177)

The Nanzan Journal of Human Relations vol.12(2013)

Commentary ····· Toshimitsu TSUMURA

Special Issue : Symbiosis

Education and Multicultural Symbiotic Society:
Citizenship Education for Restoring Democracy ····· Natsuyo SEIDA ··· (1)

Considering Support for Foreign Residents at the Time of Disaster in a Multicultural Symbiotic Society: Preparing for Tokai and Tonankai Earthquakes ····· Yoshihiko DOI··· (21)

Articles

Awareness through Experiential Learning using Laboratory Method
····· Yoko NAKAO··· (31)

A Review of Researches about Process of Sandplay-Picture Construction and Narrative
····· Kazuhiko KUSUMOTO··· (54)

An Examination about Research Methods of Study on Subjective Experiences of Makers of Sandplay Works ····· Kazuhiko KUSUMOTO··· (71)

Monetary Wealth or Shared Values?
Multilevel Analysis of Family Life Satisfaction ····· Satoshi MORIIZUMI··· (95)

The Effects of Praise on Part-Time Worker's Attitude
····· Masanori URAKAMI & Yuna SAKAKIBARA··· (108)

Exercise

"just a greeting, perhaps, but definitely a meaningful first greeting"
Experiential Learning for Training a More Practical Hospitality Mind
····· Toshimitsu TSUMURA & Yoshihiro SABATO··· (124)

Lectures

Use of Self: A Gestalt Perspective Organization and Systems Development
····· Brenda JONES··· (135)

Reweaving the Web of Our Connections
····· Sokyu GENYU··· (155)

Reports ····· ··· (177)

■　特集「共生」

共生のための教育

―民主主義の再建を課題とするシティズンシップ教育―

清　田　夏　代
（南山大学人文学部心理人間学科）

１．社会の多元化と社会的断層の形成

１．１　移民の流入と受け入れ

有史以来、他国へ移動する人びとは常に一定数存在してきたが、それが「グローバリゼーション」という現象として認識されるようになったのは、第二次世界大戦以後のことである。大戦に参加した国々は、戦後復興のため、多くの労働力を必要とすることとなった。そのために、この時期、第三世界から先進諸国へと大規模な人口移動が生じたのである。このことは、それぞれの社会に新たな社会問題を生じさせることとなる。それは主に、習慣、宗教などを含む文化間の衝突に起因するものであった。一つの社会の中での、異なった文化を背景とする複数の集団の共生のあり方を、グローバリゼーションに直面するほとんどの社会が問い直されることになったのである。

同質的な社会のなかに異なった文化を背景とする人びとが存在したとしても、その絶対数が少なく、また、滞在が短期であるならば、それは大きな社会問題とはならない。しかし、その数が増加し、彼らの家族が形成され、子どもや、孫なども生まれ、滞在が長期化、場合によっては永住するようになるとなれば事情は変わる。彼らに対する社会的な処遇のあり方、社会保障制度の適用、住宅問題、宗教上の処遇、さらには、移民の子どもに対する教育機会の整備などが重要な課題として浮上してくることとなる（江原2000：17）。こうして、彼らに対する受け入れの方法が模索されることになるが、それはいくつか異なった段階、局面を経て展開されてきた。英国を一例にとるならば、一九五〇年代から一九六〇年代にかけて、非キリスト教圏からの非白人の移民労働者の子どもたちの教育に対し、政府は当初「同化」政策をとった（佐久間1996：40）。これにより、言語の習得などの機会は保障されることになったが、英国の文化に同化することを強く要求するこうした方針は、やがて移民たちの反発を招くこと

となる（佐久間1996：144）。彼らは自らの固有の生活習慣や伝統を固守しようとし、そのことは、受け入れ国側との間に文化的な断層を生じさせていった。

次の段階として、同化がかえって社会的な分断を深めるとして、異なった方針―「多文化主義」―への転換がはかられた。こうした変化は、「急速に浸透した基本的人権思想や平等主義思想の影響を受けて、少数民族あるいは少数派の異議申立てが活発になったこと」（江原2000：17－18）、また「ナショナリズムにもとづいた国民国家という国家モデルのあり方が問われ、その再構築が求められるようになったこと」（江原2000：18）など、グローバリゼーション自体がもたらしたパラダイムの変容による部分もある。こうしたディスコースの変化に伴い、英国においても、一九六五年から一九七五年にかけ、「文化的多様性」をキーワードとした多文化主義教育が推進された。「同質の文化を背景にした普遍主義的な公教育の拡充整備」による国民統合という前提が疑われ、「多文化主義に立脚し、社会を構成する人びとの文化的・民族的背景の相違」を前提とした国民国家の再編整備が目指されたのである（江原2000：20）。この時期になると、英国が既に多民族国家となっているという事実を多くの国民も認め、英国の文化は、既に移民たちの文化を欠いては成立しえないとすら認識されるようになっていた。そのため、移民たちの文化的アイデンティティをそのまま承認し、英国文化への同化を強制しないという方法がとられた。教育についても、マイノリティ教員が増員され、移民たち自身の文化を教えるような内容が含まれるようになった。その勢いは、「多民族教育の全国連合」が形成されるほど大きなものであった（佐久間1993：144）。

以上、紹介したのは英国の例であるが、外国人労働形態が、男性単身の短期滞在型から家族の形成と滞在の長期化、さらには定住へと変化し、集団としての移民の統合が社会的な課題として認識されるようになるというプロセス、それに対し、同化政策から出発し、後に多文化主義へと方法を転換するというパターンは、移民受け入れ国においては、概ね共通した現象である。

１．２　移民問題の顕在化

「多文化主義とは一般に、ある社会の内部に複数の文化が共存することを積極的に評価しようとする考え方や運動を意味する」（江原2000：22）と定義されている。こうした考えが発展したのは、移民の数の増加によるものである。ところが、皮肉なことに、移民集団の規模が拡大し、文化的多様性への配慮の必要性が叫ばれるのと併行して、彼らに対する反発も高まっていく。マイノリティ文化をより尊重する多文化主義に対して、反動が形成されるのである。

英国も例外ではない。一部の白人たちが移民に対する反感をあらわにし、人種主義に基づく暴力行動なども頻発していたなか、1993年４月22日、友人とバスを待っていたスティーブン・ローレンスという18才の移民の青年が、６人の白人の若者たちに襲撃され、刺殺されるという事件が起こった。この事件は人

種主義的犯罪―ヘイト・クライム―として、大きな社会問題となった。当時の政権は、この事件を重大なものととらえ、調査の対象とした。この事件の詳細を明らかにするために調査団が組織され、事件の概要、背景、改善に向けた勧告などが「マクファーソン報告」として提出されている。

このような過激な人種主義者に限らずとも、一般の人びとの間の移民に対する反感も無視できないものとなりつつあった。そのことは、移民排斥を声高に主張する極右政党に対する支持が強まっていることによって示される。ヨーロッパの極右政党といえば、フランスの国民戦線（Front Nationale）がしばしば話題に上るが、オランダには自由党が、またドイツには国家民主党といった政党が台頭している。英国でも、「国民戦線（National Front）」や英国国民党（BNP）が、移民排斥の声を上げている。これらの政党が、自国の地方選挙、場合によっては国政、さらには欧州議会選挙などで躍進するようになっている。フランスの先の大統領選では、国民戦線は過去最大の得票率を得た。この選挙では社会党政権が誕生し、前政権の保守路線が転換されたかのような印象を受けるが、国民の移民排斥感情は必ずしも解消されていないということが推測される。

１．３　多文化主義の行き詰まり

二〇一〇年一〇月、ドイツのメルケル首相は、「多文化主義による社会構築は完全に失敗であった」という見解を表明した。また、英国のキャメロン首相も、半年後の二〇一一年四月に、英国で育ったムスリムの若者たちが、伝統的なイスラム教の信条も、また多文化共生主義によって薄れてしまった英国のアイデンティティも身に付けず、その代わりにテロリズムの土壌となってしまうようなイスラム過激思想に傾倒するようになっているという危惧を示し、英国のこれまでの多文化主義政策は失敗であったという見解を表明した。キャメロン政権においては、こうした声明とともに、移民統制を厳しくする方向に改革が進められている。具体的には、EU諸国外からの新規の移民の数に上限を設けること、結婚や勉学のための来英の際に行われる家族や親戚の呼び寄せなどに関連するビザの発給制限、不正入国の摘発の強化などである。

キャメロン首相は、移民が英国にもたらしてきた経済的、文化的恩恵を認めつつも、特に一九九七年から二〇〇九年の間（すなわち労働党政権時）に、二二〇万人以上の人びとが国外から英国に定住を目的として入国しているという事実を指摘し、こうした大規模の移民の流入が、もはや恩恵よりも圧力をもたらしていると述べている。こうした圧力は、社会サービスやコミュニティの上にのしかかっている。

また、ドイツにおいて、メルケル首相が問題にしているのは、移民の多くが偏見を受けていると強く感じており、そのため彼らが市民権の取得や社会参加にほとんど関心を示さないということである。多文化主義的な政策は、移民コミュニティと受け入れ国の文化が共存共栄し、新たな共生社会を形成すること

を目的とするものであったが、多文化主義はこうした意図を達成することに成功していない。移民たちのコミュニティが大規模化し、受け入れ国の人びとから完全に切り離された状態で、彼ら独自の言語、習慣、宗教を強固に維持しながら生活できてしまうという事態が起こっている。英国においても、マイノリティとマジョリティが、居住空間から学校、宗教施設、仕事等、生活全般に至るまで融合することなく、隔離化が生じている（佐久間2006：14）。フランスなどでも同様のことが起こっている地域がある。メルケル首相のメッセージは、移民がもっとドイツ社会に溶け込み、また受け入れ国側も移民を受け入れる努力をすべきであるというものである。移民に対しては、ドイツ語を学ぶこと、文化的孤立状態から脱け出し、ドイツ社会の完全な一員としての自覚をもつ努力をすべきであると呼びかけているのである（*Newsweek,* 2001.10.28）。

多文化化、国際化とは、異質な文化間で交流が生じる状態であると佐久間孝正氏はいう。「地域に外国人が住んでいるだけで双方にコミュニケイトのない状態は、『多文化』化でも国際化でもない」（佐久間2006：19）のだ。この意味で理解するならば、ドイツと英国の首相の「多文化主義は失敗した」という発言は、正しいのであろう。移民のアイデンティティを否定することなく一つの社会のなかで共生することを目指してきたはずの多文化主義もまた、いまだ「共生」を実現できていない。移民の受け入れと社会統合の問題は、移民を大規模に受け入れている国にとって、依然として重要な課題であり続けている。

１．４　日本の中の「外国人」問題

日本においては、入国の際に「定住」を前提とする「制度」が存在していないため、「移民」という用語は使用していない。しかし、1990年代以降、日本に在住する外国籍の人びとの数は、顕著に増加してきた。99年以降に外国人留学生は急増し、2003年には10万人を突破した（佐久間2006：８）。農村部でも外国人の女性配偶者が増加し、都市でも農村でも多民族化、多文化化の進行が見られるようになっている（佐久間2006：14）。

児島明氏によれば、1970年代以降に日本に居住することになった人びとを「ニューカマー」と呼ぶが、彼らが問題としてクローズアップされ始めたのは80年代後半以降のことであり、とくに、1986年から94年にかけてと、98年から現在にかけての、二つの時期に「外国人労働者問題」として盛りあがりをみせたという。前者は、いわゆるバブル期であり、急速な円高が多数の外国人労働者を日本にひきつけた。このときは、フィリピン出身者を中心に多数の外国人女性労働者が出稼ぎに来日している。また、88年頃には、バングラデシュ、パキスタンなどの南アジア諸国やイランなどの中近東諸国からの出稼ぎが増え、不法就労が本格化した（児島2006：１）。

現在、我々が直面している外国人問題は、人手不足を背景とした前者のそれとは異なっている。ここ十数年の日本の外国人事情は、日本経済の長期停滞と

将来の少子・高齢化への危機感を背景としている（児島2006：２）。児島氏は、「21世紀における外国人の増加は、90年前後にみられた一時期の「ブーム」という性格のものではなくなり、日本の社会構造に深く根ざしつつ、その大規模な変革を迫るものである」として、「多民族共生の国家と社会の構築は、21世紀の日本に課せられた最重要課題の一つ」であると指摘している（児島2006：４）。外国人の急増が、日本にも多くの議論を要請するようになっている今日、日本よりも早い段階で移民問題を経験しているヨーロッパ諸国の経験に学ぶことの重要性はますます高まっている。

２．シティズンシップ教育の試み

２．１　「成員資格」と排除

「シティズンシップ」とは、ある一つの国家社会における公民としての正統な地位、「成員資格」を示す用語である。グローバリゼーションによって、諸国家がますます多元化していくなかで、「成員資格」の枠組みそのものが国籍の有無、滞在の期間などとの関係で複雑な議論の対象となってきた。シティズンシップの定義もまた論者により多様に設定され、もっとも広義な解釈をなす論者らによっては、国家の枠組みを越えて人びとを結びつける可能性をもつものとして論じられるまでになっている。

山崎望氏は、近年展開されているシティズンシップ論を類型化し―リバタリアニズムのシティズンシップ、共和主義的シティズンシップ、共同体論的シティズンシップ、討議民主主義的シティズンシップ、熟議民主主義的シティズンシップ、差異化されたシティズンシップなど―、包摂と排除の観点からそれぞれの議論の限界と可能性とを論じている。これらの議論は、シティズンシップという概念が国家／国民を乗り越える可能性に関わっている。ここでは、そもそも社会の成員資格という意味をもつシティズンシップを、市民と認められる人びとと、そうした資格から排除される人びととを線引きするものと理解しながら、排除される人びとをいかに最小化できるかということが探求されている。こうした議論においては、シティズンシップの枠組みを国家の枠組み、すなわち国籍と重なるものとする議論は、もはや検討の対象外とされることになる。

山崎氏は、「第二の近代」というものを想定している。「第二の近代」とは、自明性が消えていく脱伝統の時代であると説明されており、そこにこそ、「新たなシティズンシップ」というものが構想されうるという。それは、人びとが国境を越え、相互の差異を乗り越え、承認しあい共生する社会／時代であり、まさに、われわれが生きる近代社会のことである。そうであるならば、「新たなシティズンシップ」とは、われわれ自身の帰属に関わる議論となる。われわれもまた母国とは異なる国家社会と、さまざまな関係を現実的に取り結んでいるのであり、そこで成員として、どのような資格を持ちうるのかということは、シビアな議論である。しかし、「新たなシティズンシップ」をいかに理想化し

ようと、それがシティズンシップの一形態である以上、包摂と排除の臨界を有せざるをえない。そこでは、個人が「再帰性に開かれている」ことが求められる故に、排除されているのは、「再帰性に乏しく変容に開かれていない人びと」であるという。

一方で、自明性の消失は、「伝統による自明性の再建へ執着する原理主義の時代」という逆の方向性を志向する（山崎2005：89）。こうした枠組みのなかでは、伝統的な枠組みのなかで自らを語るスキルを有さない「サバルタン」と、彼らの対極に位置する「原理主義者」が排除されることとなる。後者については、伝統の枠組みに固執し、変容を拒否する存在として、再帰性に開かれていないものとみなされている。第二の近代である現代においても、境界線をもたない「排除なきシティズンシップ」や「排除なき政体」はあり得ないのである（山崎2005：98）。

現代社会における新たなシティズンシップの可能性は、排除されるべき人びとが存在しないということではなく、その線引きが変容に開かれていることにある。こうしたシティズンシップ観においては、サバルタンとは「境界線を失う暴力」であり、原理主義者とは「境界線を引く暴力」であると対照されつつも、いずれも新たなシティズンシップの可能性を掘り崩すものとされるのである（山崎2005：98）。そして、この原理主義者とサバルタンこそ、近代国民国家が、その再解釈、再構築の際に直面してきた主体であった。具体的には、この二つの要素は、国家のなかに存在しながら、近代国家の理念と相容れない信条を持つ一つの集団の中に構造化されてきたものである。しかし、現在、多元化する諸国家が、共生社会を目指すための新たなシティズンシップが排除の対象としているのがこれら原理主義とサバルタンであるというならば、新たなシティズンシップが排除するものは、これまでの国民国家が排除してきた人びとと同一の人びとということになる。

理論の問題として、シティズンシップの枠組みが国家を越えて構想されると主張するのは容易である。しかし、理論をいかに抽象的に構成しようとも、国家の枠組みのなかで国家の理念に反する成員をどのように処遇すべきであるのかという、成員資格をめぐる問いは、依然として極めて高い緊張を現実にもたらしている。近代国家理念と原理主義の信条の対立は、もしそれが国家制度の枠組みで解くことができるものでないのならば、永遠に解かれることはない。この両者は山崎氏の主張においても、常に「新たなシティズンシップ」から排除される存在となるからだ。だから、国家がその基本理念を通じて、市民としての「資格」の具体的な内容を示すことの意義と方法が論じられなければならないのである。

２．２　英国のシティズンシップ教育のねらい

シティズンシップ教育もまた、前節の議論と関連づけられながら、多元化す

る国民国家の成員の再生産に関わるものとして関心を集めている。しかし、国家の枠組みとの関係から見るならば、抽象的な「シティズンシップ」論よりもはるかに葛藤的な問題を理念、政策、制度化の際にもたらすこととなる。すなわち、国家が主導する「シティズンシップ教育」とは、その内容や理念がどのようなものであっても、それが公教育という国家的な枠組みの中で行われる限り、いかにも国家の枠組みのみにとらわれているものであり、それは市民と、「非」あるいは「二級」市民の間の線引きを行うための前時代的で保守的な戦略以上のものとは見られないからである。シティズンシップ教育の内容と方法をめぐる議論は、往々にしてこうした超国家論的な文脈のなかで、国家による主導そのものを懐疑と超克の対象としてきた。シティズンシップ教育が直面するこうした葛藤を、英国におけるシティズンシップ教育の導入について、見てみよう。

英国ではシティズンシップ教育が、二〇〇〇年に公式にナショナル・カリキュラムに加えられた。シティズンシップ教育の導入に際しては、「シティズンシップ教育に関する顧問団」が組織され、新たに開始されるこの教科の理念、内容、方法について検討された。政治学者バーナード・クリック博士が座長に指名され、顧問団が最終的に提出した報告書は、「クリック報告」と通称される。この報告書の内容については、座長であるクリック自身の信念が強く反映されていると見られている。

報告書では、シティズンシップ教育が導入される背景として、英国の総選挙の投票率の低下に対する懸念が示されている。特に若い世代のそれは憂慮すべきレベルに達しており、人びとのこうした非政治化によって民主主義社会が深刻な危機に直面しているというのが、報告書の懸念であった。こうした懸念に対する対策として、シティズンシップ教育の必要性が主張されたのである。そのため、報告書では「全国的、あるいは地域的な政治文化を変革すること」こそが、シティズンシップ教育のねらいとして示されている。この教育の目的は、若者を「行動する市民（active citizen）」となし、彼らを積極的に政治参加するように促すことである。こうした課題意識に基づいて、「民主主義と独裁」「協同と葛藤」「公正、正義、法の支配、規則、法律と人権」「自由と秩序」「個人とコミュニティ」「権力と権威」「権利と責任」などの具体的な項目が立てられている。

シティズンシップ論の古典であるT.H.マーシャルの議論では、シティズンシップは一般的に三つの次元―市民的、政治的、社会的―で論じられてきた。この枠組みに基づき、クリックは、これまでのシティズンシップをめぐる議論において、特に政治的次元についての議論が十分なされてきていないという批判を行っている。議会制民主主義を擁する社会においては、法と正義の区別を理解できる市民を育成することが教育の役割とならなければならない。市民は政治的スキルを身につける必要があるのであり、シティズンシップ教育はそう

した関心に基づいてなされる教育である。

クリック報告には三つの特徴がある。

第一にそれは、英国の人びとの「政治的リテラシー」の促進を目的としている点―政治教育の強調―、第二に、多様性と寛容を強調するものであること―多元主義―、第三に、「コミュニティ」が強調されている点である。

２．３　反人種主義からの批判

クリック報告書については、それがイングランドのシティズンシップ教育の主要な理念と枠組みを示すものであるとして、多くの議論がなされてきた。そのなかには批判も少なくない。本稿の文脈で、それらのうちで最も重要なものは、まさにそれが多元化社会における多様な人びとの共生を可能にするようなものとなりえているのかどうか、という点におかれている。

具体的に示すならば、デビー・ペスケットは、報告書のティスコースについて、「責任をもって行動する」市民を創出することの必要性を強調している一方で、それは経済的命令と結びついたものに過ぎず、実際には民主主義的議論をあらかじめ排除しているものであること、その結果、社会における権限の配分の問題に挑戦することに失敗しており、社会の多元的な本質を無視するものとなっていると批判している（Peskett 2001: 13）。オードリー・オスラーもまた、クリック報告の表現そのもののなかに、人種主義的、植民地主義的なニュアンスがあると指摘している（Osler 2000: 30）。以下の言及は、その主張の批判するところがより明確に示されているものである。

> 残念なことに……少数派の平等な権利に言及しているものはなく、また国際的に合意されている人権基準が多元化社会のなかで共有される価値として発展されうる合意された一般的原理をどのように私たちに提供しているのかということについて、この報告書は強調していない。（Osler 2000: 29）

クリック報告が規定しているイングランドのシティズンシップ教育は、前述したように、政治教育、多元主義、コミュニティの強調という特徴を有するものであった。第２点目の「多元主義」については、それと対照されるものとして、例えば、国家理念の共有を強調するフランスのような国があげられる。それは「共和主義的シティズンシップ」と呼ばれるべきものである。それとの比較を通してみた場合、英国においてはすべての国民によって共有されていなければならないような理念、スローガンが、国家によって提示されるという歴史を持ってはいない。英国においては、良くも悪くも、特に価値的なものについての多元的な状況は当然のように受け入れられてきた。そうした意味では、フランスとは対照的と言えるレベルで異なった市民形成を行ってきた。また、「シティズンシップ」という用語はそもそも一国家社会内の成員資格を意味するも

のであり、フランスのシティズンシップの概念においては、その本来のニュアンスが濃厚に残っている。こうした点から見るならば、英国のシティズンシップ（教育）は、国家による価値的な統合というニュアンスは少なくとも強調されてはおらず、多元主義的なものとしての解釈が可能なものであると説明することができる。

しかし、そのことがすなわち、同国において多様な人種・民族の間に相互に寛容な関係が既に成立しているということを意味するものではない。英国においても、「構造化された人種主義」あるいは「間接的差別」は厳然として存在し続けている。クライド・チッティは、英国社会においては偏見と差別に直面している特定の集団が存在しており、学級内における不公正と不平等の問題についての議論こそが、こうした偏見と搾取の根絶を保障する道への有効な第一歩にならなければならないと指摘している（Chitty 2004: 185）。前述したスティーブン・ローレンス殺害事件は、こうした問題に対する人びとの問題意識を高めることになった。しかし、それにもかかわらず、クリック報告においては、こうした「構造化された人種主義」の問題に対して意欲的に取り組もうとする意図が見られないとオスラーは批判する。

> 構造的な人種主義の排除に向けて努力するという、内務大臣や首相を含めた上級政治家の誓約にもかかわらず、教育サービスにおける構造的な人種主義を理解すること、あるいはカリキュラムを通じてそれに効果的に取り組むために踏み出すという意志は、教育大臣や教育雇用省においては見られない。このことは、シティズンシップ教育の新しい提案においては問題である。（Osler 2000: 34）

ここでの批判の趣旨は、英国におけるシティズンシップ教育の理念が、多様な集団の共生をかかげるものでありながら、既に多様化している社会のなかの偏見や差別に対する問題意識と、それを解決する具体的な手段を提示するものとはなっていないということであろう。

クリック報告の第１の特徴である「政治教育の強調」もまた、強い批判にさらされた。先述したように、クリック報告は若者の投票行動の低下を強く懸念し、英国の議会制民主主義についての理解をシティズンシップ教育の最優先課題としている。しかし、政治制度理解に対するこうした優先的態度は、「より優先されるべき他の主題」、率直にいえば多元主義の問題として指摘された「人種主義問題」に対する強調が不十分であるという批判と強く結びつくことになる。

こうした批判の背景として、当時の移民政策とシティズンシップ教育との関連を理解しておく必要があろう。シティズンシップ教育が正式にナショナル・カリキュラムに導入されるのは2000年であるが、この頃、英国のシティズ

ンシップ政策は、移民や難民、亡命者など、新たに英国にやってきた人びとにどのような条件と手続によって国籍を付与するのかという議論との関連で展開されている。内務省は、シティズンシップ教育の導入の直後、英国国内に増加するニューカマーへの市民権付与に伴う「シティズンシップ・テスト」と国家への忠誠宣誓の枠組みと内容を検討するため、「連合王国の生活」（"Life in the United Kingdom"）に関する顧問団を組織した。この顧問団の座長を務めたのは、先にシティズンシップ教育に関する顧問団の座長を務めたクリック本人である。

英国国民としての資格にかかわる政策は、ブレア労働党政権においても非常に重視されてきたものである。ブレア政権に政権交代した後も、国籍法は幾度か改正されている。特にブレア第１期から第２期にかけては、前保守党政権の厳しい移民排除政策の路線を一部転換し、海外領土の人びとや亡命者・難民の受け入れの寛容化がはかられている。シティズンシップ教育の導入の準備は、別の側面から見るならば、こうした対移民あるいは国籍政策の寛容化とともに展開されていた。英国の生活顧問団の2003年報告書『新参と古参（*The New and the Old*）』では、シティズンシップをめぐる一連の政策が効果的なものとなるためには、内務大臣がこれを主導しつつ、教育当局の十全な協力が必要である旨が勧告されている（par. ８．７）のであるが、英国におけるシティズンシップ教育の導入は、単に学校カリキュラムの改革というだけにとどまらず、マイノリティの処遇をめぐる国家的な取組みの一環であったことが理解できよう。

このように、シティズンシップ教育が一般的なシティズンシップ政策における国籍付与とそれに伴う成員資格のあり方などの議論と、多かれ少なかれ連動する形で展開されてきたことに鑑みるならば、人種主義の問題が関心の焦点となることは必然的な帰結であろう。2006年には『多様性とシティズンシップ』（*Diversity and Citizenship in the Curriculum*）というシティズンシップ教育のカリキュラム・レビューが刊行されているが、その主たる関心は、生徒の多様性理解の度合いを検証することにおかれている。

３．民主主義と共生社会

３．１　現象としての社会的分断の本質

21世紀に入り、ヨーロッパでパリ暴動（2006）とロンドン暴動（2011）という二つの大暴動が勃発した。より規模の小さい暴動は頻繁に起こっているが、より広範に広がり、鎮圧にも時間がかかった大規模の大暴動として社会学、政治学的にも分析、検討の対象とされている。これらの暴動は両者とも、当初は移民統合の失敗に起因するものであると理解されていた。しかし、調査が進むにつれ、原因（と見なされたもの）と、暴徒の主張や要求との関連性が必ずしも明確ではないということが明らかになった。また、両者ともきっかけが移民の若者が警察の行動によって死亡したことであったため、その後展開された暴

動が移民によるものと推測されたが、実際には数多くの白人系の若者が参加していたということも、共通の事象であった。このことは、暴動が移民の不満の噴出であるという説明が必ずしも成り立っていないということを示している。

パリ暴動についての分析のなかで、鈴木規子氏は、受け入れ国の人びとと移民の対立だけではなく、世代間格差とそれに起因する対立を視野に入れる必要があると指摘している。若者たちの親の世代が、社会体制の変化による望ましい影響を享受し、仕事にもつくことができた「恵まれた世代」である一方で、若者世代は経済成長の限界と不況のあおりを直接的に受け、労働市場に参入することも困難であれば、雇用条件も不安定なままであり、怒りや不安を強く感じている「犠牲にされた世代」であるという（鈴木2008：84）。「恵まれた」親世代は人口に占める割合も大きく、彼らに対する老後保障のしわ寄せが若者にのしかかるという懸念も、「犠牲」のニュアンスに含まれている。こうした世代間格差は必然的に、上の世代に対する若者たちの不満を強めることとなる。人種の如何にかかわらず、フランスの若者たちが共通に世代間対立の感情を感じている。英国においても、近年でも、高学歴の若者たちの就職難が深刻な問題となっているが、このような不安や不満を抱える若者たちは、もはや移民だけではない。それらは白人層にも既に蔓延している。稲葉奈々子氏は、こうした若者たちを「新しい貧困層」と称し、それが一九八〇年代中期頃から現象化してきたこと（稲葉2002：152）、さらに、この時期以降、社会統合の課題が移民だけを対象とするものでなくなったことが重要であると指摘している（稲葉2002：158）。

先に、多元化社会における共生という課題が直面している重要な問題として、極右政党の台頭に言及した。それは確かに「多元主義」への反動として現象化してきたものである。しかし、その背景はそれだけではなく、「新しい貧困層」の深刻な問題が存在している。

移民／外国人排斥を叫ぶ極右政党の主な主張は、国を問わず概ね似通っているが、問題は、彼らの主張が人びとの支持を受けて実体化していくことである。選挙での勝利は、彼らの主張に政治的、民主主義的正統性を与えることになる。これらの政党がますます多くの人びとの支持を獲得することになったのは、貧困や失業などの経済問題の常態化にも起因している。とりわけ若者たちにとって移民たちは、彼らの仕事を奪い、また自分たちの税金から「不当に」恩恵を受ける者に他ならない。畑山敏夫氏は、有権者たちが極右政党の主張に引きつけられる大きな理由となっているものが、「自己の財産や金銭、領分を奪われているという感情」であると述べている（畑山1997：32）。

しかし、経済的な不安定さというだけでは、説明は不十分である。移民／外国人の排斥感情を高めてきた大きな原因は、人びとが政府や政治家に対する不満、社会や未来に対する不安を表明し、それに対する改善を要求する手段を喪失していることにある。元来、ヨーロッパ諸国では、左派政党が労働者たちの

「声（ボイス）」を拾ってきた。しかし、80年代に入ると、これらの政党は総じてその影響力を大幅に減じていく（畑山1997：33）。畑山氏の説明はフランス社会についてのものだが、英国においても、その新保守主義的主張に対する国民の支持を得て、79年にサッチャー政権が成立している一方で、英国労働党は、以後18年間、野党の席に甘んじることになったのは周知の事実である。さらに、労働組合や地域社会の人間関係もまた、失業と都市化の時代のなかで衰退していった。「人びとの精神的な安定や連帯感、公共心を保障し、社会的統合作用を果たしてきた労働や生活の場が、もはやそのような機能を果たせなく」なったのである（畑山1997：24－５）。そして、政治的代弁者、政治的なツールの両方を失った彼らは、徐々に極右政党の主張に引きつけられていくことになる。フランスでも、多くの人びとにとって、国民戦線は「現実に押しつぶされている人びとの不平や反抗の叫びを、彼ら自身の言語で話す唯一の存在」と認識されている（畑山1997：33）。

人びとのこうした心情は、表層的なものだけではなく、その根深い原因についてきちんと理解される必要がある。受け入れ国側の人びとの、移民や外国人に対する憎悪感情を駆り立てるのは、必ずしも国籍上、あるいは人種上の優越感とは限らない。問題なのは、こうした感情や行動が、むしろ被害感情―自分たちの権利や安全が脅かされているという―に由来しているということである。極右政党はそこにつけ込んでくる。優越感によってもたらされる差別ではなく、被害感情が引き起こす反撃であると思うことが、移民に対して負の感情を抱き、彼らを攻撃することの負い目を減じさせ、それを正当化する。移民排斥論者たちは、人びとの困難を知り、問題を告発するものは自分たちだけであると、人びとに向けて発信するのだ。

典型的なポピュリスト戦術であるが、彼らの主張に人びとの感情が共鳴しているという事実を無視し、道徳的な非難に終始するならば、事態は悪化はしても解決には向かわないだろう。人びとは移民や外国人を「敵」と認定し、彼らの利益を、正統な権利を有する自分たちよりも手厚く保護しようとするような主張や政策を行う政府や政治家たちに対し、不信感を募らせてきた。その意味で、人びとにこうした感情を抱かせた責任は、左右を問わず、政権を担当してきた政治家たちにもあるといわざるをえない。

もともと「階級社会」であった英国においても、社会問題の中心は階級問題から人種問題へと移っている。そうしたプロセスのなかで、ムスリムや黒人らが「弱者」、あるいは社会統合の中心的な対象として注目を集める一方で、白人貧困層の問題は周辺化されてきた。オーウェン・ジョーンズは「チャヴ」と呼ばれる労働者階級の若い白人貧困層を対象とした研究を行い、「新しい階級ポリティクス」の出現を論じている。彼は、白人貧困層の社会的不利の問題が社会全体の構造的な問題としてではなく、個人の責任として論じられるようになっていること、そして、彼らの多くが政治的主張の手段を失っていると感じ

ていることを明らかにしている（Jones 2011: 247）。階級問題の代わりに、移民問題、彼らに対する社会統合の課題、人種主義の問題が政治的争点の中核に据えられ、白人貧困層の「声（ボイス）」は無視されるようになってしまった。「新しい階級ポリティクス」の問題の本質はここにある。こうした現象もまた、ヨーロッパの各所で見られるようになっている。

３．２　共生のための政治教育

移民の急増により複雑化してきたヨーロッパ諸国において、彼らの不利な境遇に対する対策と、移民統合の問題が重視されてきたことは必然であり、妥当でもあろう。しかし、その影で、受け入れ国自身が抱える階級問題、貧困問題への注目は失われ、そのことが彼らを不満と不安の温床としてきた。移民に対する彼らの反感の背後にあるのは、「被害感情」である。そのことの意味を理解することなく、人種主義に対する道義を只管説いたところで、彼らを納得させることはできないだろう。人種主義に対して道徳的な考え方やふるまいを教えることだけでは、社会のなかにある根深い分断を埋めることはできないのだ。

クリック報告がシティズンシップ教育の主たる目的としていたのは、政治的リテラシーと民主主義の回復といった、シティズンシップの政治的次元に属する課題であった。これに対する批判の要点、すなわち、構造的人種主義に対する言及が不十分である一方で政治的次元が強調されすぎていることについては、既に概括した。特に後者についていえば、教育内容が「政治的」なものによって規定されることについての根強い批判がある。これは、教育のなかに「政治」を持ち込むことそのものが、「真理」に基づくべき近代以降の教育内容の原則に反するという考えによるものである。しかし、教育を通じて政治について理解させようとする試みは、本当に教育学上避けるべきことなのか。さらに、シティズンシップ教育において政治的次元を強調することは、人種主義を軽視していることによるもの、あるいはそれに繋がるものなのか。受け入れ国側の貧困層の間に人種主義的な感情が高まる本当の理由を理解した上で、再度、クリック報告に対するこうした批判の正当性を検討する必要がある。

過度に政治的であると批判されてきたクリックの関心は、民主主義社会の維持と再生産をいかにして実現するかということであった。英国や日本を含めて、現代の多くの国家は、近代国家の民主主義的前提の危機に直面している。そうした危機を早くから感じ取っていたクリックは、「政治」を民主主義の重要かつ唯一の手段と見なしていた。公教育での価値的な教育を通じて追求されなければならないものは、民主主義社会の再生産という明確な課題である。その教育の具体的な内容と方法が検討されなければならない。

英国においても、公民科のような科目は既に存在していた。しかし、それは決して問題を解決に導くようなものとはなっていないと、クリックは批判する。

増大しつつある『若者の阻害』あるいは『世代の対立』に直面して、公的権威筋は学校はもっと多くの時間を公民科（シヴィックス）にあてるべきだと主張しがちである。しかしそうしたみたところで政治学の教師へのギリシャ人の貢献を証しうるだけであり、もしも相異なる諸理念や諸利害間の生き生きとした争いとしての政治―ぎっしり詰った諸規則の紋切り型のとり合わせとしてではなく―に焦点を合わせる現実主義的（リアリスティック）で活気に満ち、地面に足をおろした何物かよりむしろ、「わが栄光の議会」といった類の憲法上の月並みな言葉が、もうすでに懐疑的になっている若者に突きつけられるならば、事態を容易に悪化させるだけである。（Crick 1972=1976: 106）

民主主義が失われているのは、政治が失われているからであると考えるクリックにとって、人びとの政治意識を高め、行動を促すことによって民主主義を再建することが課題であった。政治教育はそのことを目的とするのであり、上記したような紋切り型の制度理解とは異なるものである。クリックの構想する政治教育は、第一に「行動する市民」を育てるためのものである。英国では、道徳的な教育とは市民を「善良に」することを目的とするものであった。しかし、クリックは、政治教育の目的はこのように人びとを馴致することではないと主張する。クリックの関心は、「市民的共同社会において公的な目的のために個人が互いに働きかけあうことを理想とし、市民的自由が確保され自由な市民によって活用される状況に結びついたシティズンシップ」（Click 2011=2000: 137）を構築し、民主主義の機能を回復することであった。

公民科、道徳教育を含めて、価値について教える諸教科は、しばしば「毒抜き」された、ひからびたものになりがちである。それは、生々しい政治を教育することに対する躊躇の表れであろうと、クリックは述べる。このような教育方法、内容では、到底「行動する市民」を育成することなどできはしない。その代わりに、「政治そのものからはじめる」こと、例えば、時事問題を通じるなどの手段で、中等教育段階の若者に政治に対する関心をもつように促すような教育が必要であるとクリックは考える（Click 1972=1976: 107）。政治の本性というものは、つねにものごとの二つの側面を教え、示すように、われわれに要求するからだ。さらに、「国家にたいしてわれわれのためにしてほしいと望むことと、国家がわれわれにたいしてするのを差し控えてほしいこととを、ごく簡単にいえば熱望と限界とを」教える必要がある。そうすることによって、「まったく現実的でない期待から出発したことの所産にすぎない、政治への根源的幻滅、政治からの疎外感の一大原因から子供たちを護ることになる」とクリックは主張する（Click 1972=1976: 105）。これは、現在若者たちの間に蔓延している政治的アパシーが、むしろ政治を忌避するような教育に起因するものであることを示している。教育を通じて政治を忌避するようなメンタリティーを形成してしまうことの問題は、真剣に議論されなければならない。

３．３　英国における政治的シティズンシップ教育の取組み

クリック報告における政治的次元の強調については、多くの論者が、主には反人種主義的立場から批判を展開していた。しかし、クリックの問題関心はシティズンシップ教育の教科書に反映されている。11～16歳の中等教育段階においては、シティズンシップ教育はナショナル・カリキュラムとして義務づけられている。中等学校において広く使用されている教科書『今日のシティズンシップ（Citizenship Today）』の内容を見てみるならば、政治的次元に重要な強調がなされている。以下、各項目のタイトルのみを紹介する。

<table>
<tr><td colspan="3">第1部：今日のシティズンシップ</td></tr>
<tr><td>テーマ１：権利と義務</td><td>テーマ２：権力，政治，メディア</td><td>テーマ３：グローバルな共同体</td></tr>
<tr><td>1.1コミュニティとアイデンティティ
1.2人権，法的権利，政治的権利
1.3（権利の）発展と葛藤
1.4消費者，雇用主，雇用者の権利と義務</td><td>2.1メディアはいかにして公的議論を形成し，影響を与えるか
2.2メディアはいかにして公的意見を形成し，影響を与えるか
2.3正義の制度（司法）
2.4民主主義の声
2.5民主主義の役割
2.6民主主義は機能しているか？</td><td>3.1持続可能性を実現する
3.2現行の経済
3.3共同体に対する人びとのインパクト
3.4世界の中の英国の役割
3.5グローバルな共同体が直面している問題
3.6国連，EUと人権</td></tr>
<tr><td colspan="3">第2部：社会参加</td></tr>
<tr><td colspan="3">第3部：文脈のなかでのシティズンシップ</td></tr>
<tr><td colspan="3">オプションＡ：環境の変化と持続可能な発展
オプションＢ：共同体を変える：社会的アイデンティティと文化的アイデンティティ
オプションＣ：社会と政府の決定に影響を与え，それを変える</td></tr>
<tr><td colspan="3">第4部：シティズンシップの運動</td></tr>
</table>

少し内容を補足すれば、1.3の「（権利の）発展と葛藤」には「投票したい！」という下位項目が含まれている。また、2.4、2.5、2.6はいずれも民主主義についての理解を促すものであるが、それへの参加、議会の機能、議会との関わり方、選挙、投票などについての下位項目が設けられている。2.6の下位項目である「（民主主義は）唯一の方法ではない？」においては、英国においてもすべての人が投票する権利を獲得するようになってから、わずか100年少々しか経っていないこと、また、暴力と恐怖による支配、独裁制などが行われている他の国の状況などについて知り、いくつか異なった統治の制度を比較検討するワークが含まれている。

また、中等教育段階の別のシティズンシップ教育の教科書である『作動するシティズンシップ（*Citizenship in Action*）』は、「人権」に対する強調がより強い教科書であるが、ここでも民主主義は重要なテーマとなっている。意思決定の方法、ローカル・コミュニティと民主主義、政府と選挙などは、独立したテーマとなっている。

なお、５～10歳の初等教育段階においては、シティズンシップ教育は奨励はされているが、法定のものではない。キーステージ１（５～７歳）を対象とした教科書の一つ『おとぎ話を通じてシティズンシップを教えよう（*Teaching Citizenship through Traditional Tales*）』を例として、内容を見てみよう。必ずし

も一般的な教科書ではないが、幼少の子どもに対する「シティズンシップ教育」の内容についてイメージする助けとなるだろう。これは、子どもたちが日ごろからよくなじんでいるおとぎ話―赤ずきんやジャックと豆の木、ヘンゼルとグレーテルなど―の登場人物から子どもたちに様々な手紙が届く、子どもたちはその内容についていろいろ考えて返事を書く、というワークを中心に学ばれるものである。こうしたワークにおいて学ばれるべき４つの重要なテーマ群が設定されている。すなわち、「人びとの間のよい関係を発展させ、違いを尊重すること」、「信頼と責任を発展させ、能力を最大限発揮するようにすること」、「市民として行動的な役割を果たす準備をすること」、「健康で安全なライフスタイルを発展させること」、などである。本稿の関心に関わって重要なものは、３点目の「市民として行動的な役割を果たす準備をすること」である。内容としては、「説得の道徳的／非道徳的なやり方」「ルール」「物事を共有する」「自己と、年配の人／若者のような他者が必要とするもの」「他者の財産と権利を尊重すること」「最近のニーズと将来のニーズのバランス」「結果は手段を正当化するか」「善悪を認識すること」などが上げられている。いずれの「手紙」にも複数の要素が含まれているが、特にこのテーマの要素を多く含んでいるものを一つ紹介する。「ジャックと豆の木」のジャックからの手紙である。

> みなさん
> 金のたまごでかせいだお金をどうすればいいと思いますか？　少しはじぶんたちのために使いたいと思うのですが、世の中のためになることためにも使いたいと思います。なにか、アイデアはありますか？
> 　ジャックと母より

このような手紙をもらった子どもたちは、まず、手紙で相談されている内容について考えたり、話し合ったりし、それから返事の手紙を書くことが要求される。このワークを通じて、子どもたちに考えさせたいこととして「このお金で誰を助けるのか」「必要（needs）と欲望（wants）の違い」、「自分たちのためにどれくらい使うか、他の人のためにどれだけ使うか」などのことが上げられている。この年齢を対象とした教材として、民主主義や政治制度というようなものは直接的なテーマとはなっていないが、世の中に目を向ける、自分が他の人びとにどのような貢献ができるのかということを考えさせるものとなっている。こうした内容は必ずしも「新たなシティズンシップ教育」というよりも、慈善と寄付の社会である英国の伝統的な価値観に関わるものであるかもしれないが。いずれにしても、ごく幼少の段階から、社会とどのように関わるか、自分がどのように社会に貢献していくのかということを意識させるような教育が試みられていることがわかる。この段階の上に、中等教育段階で政治制度理解と政治参加に関わる教育がなされるのである。

また、政府や公教育制度の外側にある中立的な組織であるハンサード協会が、特に若者の政治意識を高め、政治参加を促すことを目的とした注目すべき活動を行っている。これは、議会による統治システムの理想を発展させ、よりよい民主主義理解に基づいた人びとの民主主義参加を持続させ、それをまもっていくために、1944年に設立された無党派主義の独立的な政治研究・教育団体である。無党派ではあるが、現行の政治体制、政治家たちとは大いに関わりがあり、設立時のメンバーにはウィンストン・チャーチルやクレメント・アトリーなどがおり、以降も時の首相や野党第一党の党首がその活動を支援している。なお、庶民院の議長が同協会の会長を務め、主要三政党の党首らが副会長となっている。1970年以降、同協会は議会制民主主義の諸側面や議会に影響を与える社会的政治的な発達について批判的検証を行うことを目的とした活動や出版なども行うようになった。また、80年代以降はさらに活動を発展させ、未来の政治を担うべき人材を支援するためのプログラムにLSEと協同で取り組むなどの活動に取り組んでいる。

シティズンシップ教育に重要な理念上の影響を与えたバーナード・クリックも生前に同団体の活動に重要な関わりをもっており、現在の政治教育、シティズンシップ教育の方針は、クリックの民主主義論を強く反映したものとなっている（クリック自身はLSEで教鞭をとっていた）。2010年２月23日にハンサード協会のシティズンシップ教育担当者に行ったインタビューにおいても、同協会のシティズンシップ教育は、移民統合の問題を必ずしも中心的な課題とはしておらず、その問題も含めて英国の民主主義の政治制度全体の活性化を目的としているということを強調しているという回答を得ている。同協会は学校における政治教育にも積極的に取り組んでいるが、なかでもよく知られているのは、疑似選挙である。生徒たちはそれによって選挙のプロセスを体験を通じて理解することができる。また、学校のなかでのシティズンシップ教育を支援することも同協会の重要な活動の一つである。

英国のシティズンシップ教育の内容が示唆するものは、多様な人びとの共生を可能にするためには、「異なる文化を尊重しよう」あるいは「違いに寛容になろう」というような道徳的なメッセージを発信することだけでは不十分であるということだ。多様な価値はしばしば対立し、多様な利害は往々にして衝突する。こうしたアイデンティティ・ポリティクスの存在を道徳的な言説で覆い隠しても、本質的な社会的分断は解消しないからである。多様な人びとが自らの「声（ボイス）」をもち参加することができるような民主主義的な社会制度を作るためには、学校教育において、それを実現することのできる政治のあり方を理解し、その構築と維持に寄与するような市民となるための教育が必要なのだ。英国のシティズンシップ教育の強調点、ハンサード協会の活動などは、日本にとっても大いに参考となるものであろう。

おわりに

ヨーロッパ諸国と日本とを比較するならば、必ずしも同じ時期に同じ現象を経験しているわけではない。先に見てきたように、ヨーロッパにおいては「新しい貧困」は、80年代頃から顕著に認識されるようになったが、同時期の日本はバブル景気に沸いており、社会全体が豊かさを享受していた。しかし、この時期の円高は、多くの外国人労働者を日本に引き寄せることになる。ヨーロッパが戦後復興期に経験した外国人労働者の流入を、われわれは30年ほど後に経験することになったのだ。その後は、バブル崩壊と不況の時代に入り、労働市場は縮小する。一方で、90年代の頭に、外国人の日本への入国のハードルは下がり、日本に滞在する外国人の数は基本的は増加してきた。二〇〇〇年代に入ると、主に日本の若者の貧困問題が、社会問題として注目されるようになる。この頃、タイトルに「下流社会」「勝ち組・負け組」などの言葉が含まれる書物が注目され、また、メディアでもこうした問題がさかんに論じられるようになった（白波瀬2010: 9-10）。

そして現在、不況、失業、貧困、格差などの社会問題が、主に若者、外国人と結びつく形で語られるようになっている。最近は日本でも、外国人に対する声高な敵意が、街角やネット上で叫ばれるようになった。また、若者にのしかかる年金負担は、高齢者に対する反発をかき立てている。ヨーロッパが少し前に経験した社会的な分断は、もはや他人事ではない。

英国が経験してきた政治的右傾化、外国人嫌悪、暴動などの現象を、クリックは「民主主義の危機」ととらえた。クリックが強く主張してきたシティズンシップ教育の主張は、こうした危機に対抗するためのものである。シティズンシップ教育の政治的次元の強調は、決して人種主義の問題を軽視し、社会統合を後退させるものではない。このことを正しく理解する必要がある。社会に対する不満や不安はいたるところにある。大切なのは、それらを合法的に表明する方法、手段を獲得し、改善に向けた実践に取り組むことができるということなのだ。これは共生が実現する多元化社会に生きるすべての人びとにとって必要なスキルである。

しかし、日本を含めて、多くの民主主義の国家で「政治への根源的幻滅」「政治からの疎外感」が、特に若者を取り込んでしまっている。彼らは、自らが有する政治参加の権利を、些細なもの、無意味なものとして容易に放棄してしまっている。ある者は政治的アパシーに陥り、ある者は非合理的で攻撃的な排除の行動に駆り立てられている。クリックの言葉を借りるならば、政治が失われつつあることが、民主主義の危機をもたらしているのだ。教育を通じて若者たちが学ばなければならないのは、自らが民主主義社会を形成する主体であることを理解し、そのために行動することが意味あることと知ることである。遠回りのようにみえるかもしれないが、共生社会への道をひらくのは、この道より他はないのだと主張したい。

引用文献

稲葉奈々子「新しい貧困層と社会運動―フランスにおける『住宅への権利運動』のなかの移民たち」、宮島喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』東京大学出版会2002.

江原武一「公教育における多文化教育の展開」『多文化教育の国際比較―エスニシティへの教育の対応―』玉川大学出版部2000.

児島明『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー―』勁草書房2006.

佐久間孝正『外国人の子どもの不就学―異文化に開かれた教育とは―』勁草書房2006.

佐久間孝正「地域社会の『多文化』化と『多文化主義教育』の展開：イギリスの『経験』，日本の『可能性』」、広田康生『講座外国人定住問題第３巻多文化主義と多文化教育』明石書店1996.

佐久間孝正『イギリスの多文化・多民族教育：アジア系外国人労働者の生活・文化・宗教』国土社1993.

白波瀬佐和子『生き方の不平等―お互いさまの社会に向けて―』岩波書店2010.

鈴木規子「多文化・多世代交差社会フランスのイスラム系若者の社会統合」，関根政美・塩原良和『多文化交差世界の市民意識と政治社会秩序形成』慶応義塾大学出版会2008.

畑山敏夫『フランス極右の新展開―ナショナル・ポピュリズムと新右翼』国際書院1997.

山崎望「再配置されるシティズンシップ―政治共同体の変容―」、『思想』No.974, 岩波書店2005.

Chitty, Clyde., *Education Policy in Britain,* Palgrave Macmillan, 2004.

Crick, Bernard., *Essays on Citizenship,* Continuum, 2000.（バーナード・クリック『シティズンシップ教育論―政治哲学と市民―』法政大学出版局2011.）

Crick, Bernard., *Political Theory and Practice,* Allan Lane Penguin Press, London, 1972.（バーナード・クリック『政治理論と実際の間II』みすず書房1976.）

Jones, Owen., *Chavs --- The Demonization of the Working Class ---*, Verso, 2011.

Osler, Audrey, 'The Crick Report: difference, equality and racial justice', *The Curriculum Journal,* Vol. 11, No.1, Routledge, Spring, 2000.

Peskett, Debbie., 'A Critical Discourse Analysis of the Current Labour Government's Initial Guidance to Schools on the Introduction of Citizenship Education', Paper for the 51th Political Studies Association Conference 10-12, April, 2001.

The Advisory Group on Citizenship (DfES), *Education for citizenship and the teaching of democracy in schools,* 22 Sep 1998.

The Advisory Group on "Life in the United Kingdom (Home Office), *The New and the Old: The Report of the "Life in the United Kingdom"*, 2003.

シティズンシップ教育教科書
Citizenship Today, Collins, 2009.
Citizenship in Action, Heinemann, 2003.
Teaching Citizenship through Traditional Tales, Scholastic, 2003.

本稿は2011年度南山大学パッヘ研究奨励金Ⅰ-A-２による研究成果の一部である。

■　特集「共生」

「多文化共生社会」における災害時外国人支援を考える

～東海・東南海地震に備えて～

土　井　佳　彦
（特定非営利活動法人多文化共生リソースセンター東海）

1．はじめに

2011年３月11日午後２時過ぎ、大学で会議の最中だった筆者は、突如目眩に襲われた。まるで船酔いにでもなった感覚がし、気分が悪くなり机に伏せようとしたところで、会議室の壁にかけられたカレンダーが左右に大きく揺れているのを目にした。そこではじめて､「もしかして､地震？」と思った。その直後、その場に居合わせただれもがわかるほどの横揺れを感じ、地震であることを確信した。しかし、体感で震度３程度、それも足元から突き上げてくるような縦揺れではなく、しばらくすると揺れも収まったため、たいしたことではないと席に戻り、会議を続けた。まさか、これが未曾有の大災害となるとは予想だにしなかった。その後､「東日本大震災」と名付けられたこの大災害は、死者約１万6,000人、行方不明者約2,700人、負傷者約6,100人を数えた[1]。しかし、震災による被害の大きさを測るには、こうした数値では表せない個々の悲しみや苦しみがあることを忘れてはならない。また、大きな数の中では埋もれてしまい、メディアにも取り上げられないことから一般に認識されにくい「現実」がある。その一つが、高齢者や障害者、外国人等の「災害時要援護者」[2]と位置づけられた人たちの被災状況および、彼らへの行政や民間による対応である。本稿では、まず、過去の大災害を振り返り、「災害時要援護者」のうち在日外

[1] 警察庁緊急災害警備本部広報資料「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」（2013年１月23日）

[2] 災害時要援護者の避難対策に関する検討会（2008）「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」に、「いわゆる『災害時要援護者』とは、必要な情報を迅速かつ的確に把握し、災害から自らを守るために安全な場所に避難するなどの災害時の一連の行動をとるのに支援を要する人々をいい、一般的に高齢者、障害者、外国人、乳幼児、妊婦等があげられている」とある。

国人に焦点を当てて、彼らが災害時に置かれた状況と、そうした人々への支援活動の事例を紹介する。次に、愛知県を中心に東海地域における災害時外国人支援体制の現状と課題について述べる。最後に、それらを踏まえて、30年以内に90％近い確率で起こると言われている東海・東南海地震に備え、今後取り組むべきことを提案したい。

２．震災と在日外国人

（１）阪神・淡路大震災（1995年１月17日）

東日本大震災を除けば、近年起きた大災害として、まず思い出されるのが阪神・淡路大震災であろう。炎に包まれる街並み、横倒しになった高速道路など、未だに当時の様子が鮮明に思い出される。マグニチュード7.2、最大震度７の大地震は、死者6,432名、負傷者４万3,792人という甚大な被害をもたらした[3]。あれから18年、世間一般ではすでに復興を遂げたものとして記憶の片隅に置かれていたが、東日本大震災発生以降、様々な面で比較対象として再び注目されることとなった。しかし、この震災で兵庫県内に暮らしていた外国籍住民の命も数多く失われたことを知る人は少ない。当時の兵庫県総人口は、5,526,689人。このうち1.81％（99,886人）が外国籍をもつ住民であった。しかし、犠牲者に占める外国人比率は3.19％と総人口比の1.7倍、神戸市中央区に至っては206人中25人で12.14％にもなる。実に、９カ国174名の命が犠牲となったのだ（表１参照）。

表１．阪神・淡路大震災における被災外国人状況[4]

地域	人口	外国人の状況		死亡者数	外国人の人的被害	
		登録者数	人口比率		死亡者数	死亡者比率
兵庫県全体	5,526,689	99,886	1.81%		－	－
県内被災地合計	3,598,971	80,857	2.25%	5,431	174	3.19%
神戸市	1,518,982	44,383	2.92%	3,828	151	3.94%
明石市	283,668	3,060	1.08%	5	0	0%
尼崎市	492,793	13,989	2.84%	27	1	3.70%
西宮市	424,101	6,919	1.63%	1,000	10	0.10%
芦屋市	86,862	1,698	1.95%	396	3	0.76%
伊丹市	189,767	3,694	1.95%	11	1	9.09%
宝塚市	206,641	3,453	1.67%	83	2	2.40%
川西市	143,558	1,677	1.17%	1	0	0%
加古川市	252,599	1,984	0.79%	2	1	50%
その他					5	

2011年末現在の日本の総人口に占める外国籍住民の割合が1.63％であること

[3]総理府阪神・淡路復興対策本部事務局『阪神・淡路大震災復興誌』http://www.bousai.go.jp/4fukkyu_fukkou/hanshin_awaji.html（2013年１月４日アクセス）

[4]外国人地震情報センター編『阪神大震災と外国人－「多文化共生社会」の現状と可能性』（明石出版,1996）を元に筆者作表

からすれば、当時の兵庫県は、全国的にも外国人の多い地域だったと言えるだろう。その中心である神戸市は、異人館や南京町など外国と縁の深い土地柄であり、海外に開かれた国際都市というイメージも強い。それにもかかわらず、この地で災害が起きた時、そこに暮らす外国籍住民の存在がマスメディアに取り上げられることはほとんどなかった。

存在が認識されない者に対し、当然、何らかの配慮がなされることはない。すべての災害情報は日本語のみで発せられ、日本語に不自由な外国籍住民は、必要な情報を正確かつ迅速に入手することができなかった。日常生活においては日本語に苦労しなかった人でさえ、「避難所」や「余震」、「罹災証明」など、災害時に飛び交う特殊な用語を理解することは難しかった。ある外国人は、ラジオを聞いて電車が通常通り動いていることを知り駅に向かったが、着いてみるとすべての電車が止まっていて驚いたという。「不通」という言葉を聞いて、「普通」に動いていると理解したのだ。また、別の外国人は、なんとか避難所に辿り着いたものの、“ゲスト”である自分がどのくらいここにいてよいものか、“ホスト”である日本人と同じように炊き出しや支援物資をもらってもよいものかと悩み、大きなストレスを抱えたまま避難所生活を送っていたという。

こうした外国籍住民の問題にいち早く気づいた市民が集い、「外国人地震情報センター」が設立された。同センターは、外国語による情報提供や相談対応を実施し、１月22日から６月15日までの間に最大13言語で計22,300部のニュースレターを発行、929件の電話相談に応じた。外国人被災者への電話相談窓口は兵庫県警や兵庫県国際交流協会でも開設されたが、市民によるきめ細かな支援活動は、多くの外国籍住民に安心と安全を与えたことであろう。

（２）新潟中越沖地震（2007年７月16日）

阪神・淡路大震災以降、その教訓を活かすべく、その後各自治体や地域国際化協会等で防災及び災害時外国人支援に関する取り組みが行われるようになった。しかし、2007年７月16日に発生した新潟中越沖地震（最大震度６強）では、地元の中心的な支援組織として想定された（財）柏崎地域国際化協会職員も被災者となったため、自力での外国人被災者支援活動は困難となった。そこで、県下の自治体や地域国際化協会及びNPO団体等が協力し、翌７月17日に「柏崎災害多言語支援センター」を開設。被災外国人への多言語による情報提供や通訳を介した避難所巡回を行った。

2006年末時点の柏崎市の外国人登録者数は27カ国からの859人（総人口比0.9%）で、その半数を中国籍が占め、フィリピン、タイ、韓国・朝鮮、ブラジル、ロシアと続く。新潟県国際課によれば、７月16日から７月25日の間に柏崎市内62ヶ所に開設された避難所のうち10施設に外国人避難者が確認され、ピーク時（７月18日）には107名であったという。こうした状況に対し「柏崎災害多言語支援センター」は、避難生活での注意事項や相談窓口の案内等を中国語、英語、

タガログ語、ハングル、ポルトガル語、ロシア語等可能な限り被災外国人の母語に合わせて翻訳し、避難所に掲示した。「多言語支援センター」という名称を冠した外国人支援活動拠点が設置され、自治体や地域国際化協会職員らが協働で被災外国人に特化した支援活動を行ったのは、この時が最初であろう。

その後、同センターの運営において、指示系統が不明確であったり具体的な作業の進め方がわかりづらかったりといった課題が指摘された[5]。これを受けて、（財）自治体国際化協会では、同センターの運営に携わった者を中心に今後の災害時外国人支援の在り方に関する検討会議を開き、その結果を『災害多言語支援センター設置運営マニュアル』（2009年）にまとめた。また、翌年には『災害多言語支援センター設置運営マニュアルを活用した訓練事例集』を発行し、全国の自治体及び地域国際化協会等に災害時の外国人支援体制の充実を促した[6]。

（3）東日本大震災（2011年３月11日）

前述の２つの大震災から教訓を得て、災害時における外国人支援の体制は着実に整備されていった。しかし、2011年３月11日に東北地方沿岸部を襲った大津波とそれが引き起こした原子力発電所事故は、そうした取り組みがまるで何の役にも立たなかったと思わせるほどのものであった。東日本大震災と名付けられたこの災害は、範囲が非常に「広域」であったこと、地震以上に「津波」による被害が大きかったこと、そして「原発事故」が加わったことで、人類が初めて直面する大規模災害となった。しかし、そのような状況下だからこそ、すべての人にとって、少しでも速く正確な情報が得られ、直接自分の言葉で相談ができるところが必要になるのだ。表２を見ると、その必要性を理解することができるだろう。

表２．東日本大震災発生時の被災地の外国人状況[7]

	総計	青森県	岩手県	宮城県	福島県	茨城県
総計	91,147	4,331	6,077	15,865	11,085	53,789
中国	32,289	1,783	2,965	7,196	4,789	15,556
韓国・朝鮮	14,007	995	1,090	4,312	1,937	5,673
フィリピン	12,574	567	914	1,003	2,233	7,857
ブラジル	8,985	17	102	157	268	8,441
タイ	5,242	77	53	209	249	4,654
インドネシア	2,251	106	165	249	77	1,654
ペルー	2,120	4	5	43	61	2,007
アメリカ合衆国	1,927	289	170	513	290	665
ベトナム	1,447	71	150	149	196	881
インド	837	24	19	128	65	601
その他	9,468	398	444	1,906	920	5,800

震災当日の19時00分、筆者が理事を務める特定非営利活動法人多文化共生マネージャー全国協議会（以下「NPOタブマネ」とする）は、滋賀県大津市内の施設に「東北地方太平洋沖地震多言語支援センター」を設置し、被災外国人支援活動をはじめた。筆者は、３月12日から同センターの統括であるセンター

長に就任し、災害情報の多言語化や多言語による電話相談対応等の陣頭指揮を執ることとなった。以下に実施概要をまとめる[8]。

【多言語支援センター事業　実施概要】

①多言語情報提供

対応言語：11言語（英語、中国語、ハングル、スペイン語、ポルトガル語、タガログ語、タイ語、ベトナム語、インドネシア語、日本語、やさしい日本語 ）

ウェブ掲載：137報（アクセス数47,072件、ページビュー170,194）

②多言語ホットライン

対応言語：６言語（英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国･朝鮮語、日本語）

相談件数：133件

相談内容：放射線･原発48件、支援希望19件、安否確認13件、帰国･再入国･査証11件、ライフライン７件、住宅７件、補償金６件、仕事６件、地震･余震３件、物資不足３件、その他10件

③被災地派遣・訪問

・宮城県国際交流協会…延べ２名（3/25,4/16）

・岩手県国際交流協会…延べ１名（3/25）

・茨城県国際交流協会 …延べ50名（3/15～27）

・仙台市災害多言語支援センター …延べ７名（3/13～15,25,4/13～15）

・石巻市内 …延べ２名（3/26,4/16）

ここでの支援活動は、被災地の関係団体等と連携を取りつつ、全国の関係団体等からの協力を得て４月末までの51日間続けられた。こうした活動が震災直後から実施できたのは、過去の経験から、災害時には外国人を含む「災害時要援護者」に位置づけられる人に対して適切な支援が行われるべきであるという認識をもち、日頃の活動によってそのノウハウが積み重ねられていたからにほかならない。

---

[5]財）自治体国際化協会「新潟県中越沖地震外国人被災地支援活動を振り返って」『自治体国際化フォーラム』2007年12月号pp.51-55

[6]別府茂・青山清道（2008）「新潟県中越沖地震での被災生活とその課題」『新潟大学災害復興科学センター年報』pp.103-105及び、（財）自治体国際化協会（2009）『災害多言語支援センター設置運営マニュアル』

[7]法務省入国管理局「登録外国人統計」（2011年３月15日時点）

[8]紙幅の都合により、センターの活動詳細については、特定非営利活動法人多文化共生マネージャー全国協議会『東北地方太平洋沖地震多言語支援センター活動報告書』に譲る。

センターが活動を終えた数日後、筆者の元にある外国人から一通のメールが届いた。

> 多言語支援センターの活動のおかげで安心感を覚えました。私たちは見捨てられていない、正確な情報が届けられるという安心感が本当に大きな支えになりました。そして、今後、マイノリティである外国人はどこに、だれを頼りにできるかも知ることができました。あなたたちは何も無駄にせず、一人ひとりの反応を把握され、人を大切にされていることを感じました。
>
> 50日間の活動、お疲れさまでした。そして、心よりありがとうございました。

被災地で直接被災者にかかわるものと違い、後方支援に特化した今回の活動中には、“見えない相手”に対しどこまで意義のあることができたのか、実感を得ることがほとんどなかった。しかし、このメールを読んで、今回の活動の意義を改めて認識し、今後も続けていくことの必要性を強く感じることができた。筆者はこのメールを一生忘れることはない。

３．愛知県の災害時外国人支援体制

筆者は、2011年３月11日から４月30日まで51日間の多言語支援センターでの活動を終えて愛知県に戻った後、県内の災害時外国人支援体制について改めて現状を確認すべく自治体や国際交流協会を回り関係者にヒアリングを行った。

（１）東日本大震災以前

（財）愛知県国際交流協会が2006年度に県内市町村及び市町村国際交流協会等を対象に行った「外国人に対する防災対策調査」（対象数119団体、回答率95.8%）によれば、災害時における外国人対応マニュアルを作成している組織はわずか2.6%で、「現在、作成中」と答えた0.9%を合わせても４%未満であった。また、外国人に対して具体的な防災対策を行なっていると答えたのは29.8%で、その対策は防災マップの多言語化や広報誌等による多言語での防災知識の啓発等、基本的な情報提供にとどまっている。

さらに、災害発生時に外国人に対して特別な対応を「行わない」と答えた組織が72.8%、外国人相談窓口を「設置しない」という答えが81.6%、関係団体との連携・協力を「行わない」（「行う予定」含む）という答えが67.5%であった。連携・協力を「行わない」理由としては、第一に外国人に対して特別な支援を想定していないこと（28.6%）、続いて平常時から連携・協力を行なっている団体がないこと（27.3%）、そして災害時に外国人を支援する団体がないこと（20.8%）があげられた。こうした理由の背景には、「日本人も外国人も同じ被災者であることから、外国人に対してのみ特別な防災対策を行うことは難しい」

という意見や、「対策の必要性は感じているが組織内の体制整備の問題や連携・協力をとれる団体が地元にないことから現実には難しい」という意見が寄せられた[9]。一見、至極もっともな意見のように聞こえるかもしれないが、筆者には過去の災害時対応に関する知識・認識及び現状を打破するための前向きな姿勢が欠けているように感じられる。調査報告書に記述されたデータのみでそう判断すべきことではないが、少なくともこの結果に危機感を覚えたであろう（財）愛知県国際交流協会は、同報告書に新潟県中越沖地震における長岡市の被災外国人に対する災害支援の取り組みを掲載したうえで、まとめに次のような提案を残している。

①地域防災計画または災害時における外国人対応マニュアルにおいて、東海地震の警戒宣言並びに災害情報を的確に伝えるための方策を記述すること。

②災害時に備えて日頃からコミュニケーションの円滑化を図るべく、年に一度は外国人も含めた防災訓練および情報の伝達訓練を実施すること。

③各国大使館等からの在日外国人安否確認に対応できるよう、被災外国人の状況把握を行う体制を整えるとともに、避難所等での日本人住民とのトラブル防止のためにも通訳の派遣や相談窓口の開設等、言葉の壁による不安を取り除くこと。

④災害時には自ら含め地元の協力団体も被災者となりうるため、平常時から広域的な連携・協力が行えるようなネットワークの構築に取り組むこと。

（以上、①～④筆者要約）

その後、県内では県および政令市と中核都市において、災害時外国人支援マニュアル等が作成された。2012年５月現在、筆者が把握しているものには（財）愛知県国際交流協会「災害時外国人支援活動マニュアル」、名古屋市と（財）名古屋国際センターにおける「大規模地震発生時等における外国人支援に関する協定」、（財）名古屋国際センター「大規模地震発生に係る職員初動対応マニュアル」及び「外国人防災救援計画」、豊田市と（公財）豊田市国際交流協会における「災害時における外国人支援への協力に関する協定」、豊田市災害対策本部「外国人支援対応マニュアル」及び「外国人対策班員のための支援ガイド」がある。また、豊橋市も市災害対策本部内に「災害時多言語支援センター」を設置することとなっている。

（２）東日本大震災以後

東日本大震災においては、直接的な被害のなかった愛知県内では、特別な外国人支援活動は行われていない。各自治体や地域国際化協会において、通常業務の一環として災害情報の提供を行ったり、在住外国人からの相談対応にあた

---

[9]（財）愛知県国際交流協会『外国人に対する防災対策調査』（2005年3月）より。

るのみであった。一部、前述のNPOタブマネが設置する多言語支援センターに職員を派遣し活動に携わったところがあったが、自組織で独自に多言語による災害情報発信や専用相談窓口を開設したという話は聞かない。

しかしその後、筆者にとって忘れられない出来事が起こった。2011年９月19日夜から21日夕方にかけて愛知県付近を横断した台風15号である。これは、死者３名、負傷者11名、家屋一部損壊を含む床上・床下浸水238棟、避難所開設数は最大で39市町778カ所、避難者6,517名という近年稀に見る規模であった[10]。

このとき、県及び各自治体に災害対策本部が設置されたものの、災害時多言語支援センターは設置されず、筆者の知る限り（財）愛知県国際交流協会と（財）名古屋国際センターが独自にウェブサイトを通じて多言語での情報提供を行ったこと以外に、外国人への対応は見られなかった。日頃、公式サイトを複数の言語で運営している自治体でも、台風15号に関する情報発信は日本語のみであった。

後日、筆者が特に外国人が多く暮らす名古屋市、豊橋市、豊田市の関係者にヒアリングを行ったところ、避難所からの通訳派遣等外国人への支援要請はなかったとのことである。愛知県の総人口に占める外国人比率は約３％であることから、6,500名以上の避難者には200名近い外国人が含まれていてもおかしくはない。しかし、実際には何らかの支援が必要な外国人の避難者が確認されなかったというのは不思議である。避難勧告・避難指示が理解できなかったのか、理解できてもどこに避難すればよいのかわからなかったのか、避難するほどのことではないという判断によるものなのか、原因は定かではないが、今後の災害時の情報提供の在り方について検討の余地が多分に残されていることは確かであろう。数日前に襲来することがわかっている台風にさえ対応できなければ、突如として起こる地震の前にはただ立ち尽くすしかない。

４．東海・東南海地震に備えて

総務省は、東日本大震災での外国人被災者支援における課題や今後の対応について検討し、2013年１月11日に「『多文化共生の推進に関する研究会』報告書－災害時のより円滑な外国人住民対応に向けて－」をとりまとめた。この中で、日頃の実践的な防災訓練等の実施や広域連携の必要性、過去の震災における具体的な活動体験の共有、ボランティアマネジメント能力を備えたコーディネーターの育成等、多くの重要な指摘・提案が示されている。いずれも今後さらに具体的な実施計画に落とし込み、実施・改善されることを期待したい。本稿では、ここで挙げられた問題点・対応策に加え、新たに２つの提案をしたい。

---

[10]愛知県災害対策本部「台風第15号による被害状況等について（第16報）」（2011年9月22日午前12時30分現在）より。

（1）必要書類の多言語化

災害時には、り災証明書や貸付金申請書類等、公的機関においてさまざまな書類を用いた手続きが必要とされる。言わずもがな、これらの書類は日本語の読み書きができない人にも取得・提出が求められ、阪神・淡路大震災でも新潟県中越沖地震でも外国人や障害者等への対応はスムーズに行かなかったし、東日本大震災でも同様であった。申請書類の多言語化は、必要性も重要性も非常に高いものであるにもかかわらず、17年の間に適切な対応がなされてこなかった。災害が起きてから、利用者に応じて多言語に翻訳することは不可能であるため、今後に備えて早急に整備すべきである。

ただし、単に既存書類を翻訳しただけでは、実際の活用は難しい。申請者が日本語以外で書いたものをだれがどう日本語に翻訳するのか、書き方の説明書や記入例をつけるのか、主要言語だけでも窓口に通訳を配置すべきか等、実際の場面を想定した総合的な検討が必要である。

（2）官学民による支援ネットワークの形成

前述のとおり、過去の災害時には自治体、地域国際化協会、大学、NPO/NGO等が協働で被災外国人の支援にあたった。しかし、平常時は基本的にそれぞれが連絡会議や研修会を開催しており、連携・協働体制の充実に向けた具体的な場が定期的に設けられている地域は極めて稀である。自治体や地域国際化協会が主体となって開催する会議等に大学やNPO/NGO関係者が招かれることはあっても、多くはその場限りのアドバイザーや協力者という立場であり、それぞれの専門性が十分に生かされているとは言えない。「多文化社会における災害時対応」について関係者が集い、対等な立場で意見を交わし、いつ、だれが、だれと、どのような連携をとることで、どれだけの人に安心・安全を届けられるのかをできるかぎり明確にすることで、今後必要となる具体的な取り組みが見えてくる。そのためにも、災害時にスムーズかつ効果的な連携・協働による支援を行うためのネットワーク形成が必要となる。なお、このネットワークの構成員には、支援者としての外国人当事者の参画が不可欠である。

5．まとめ

東海地域は、30年以内に巨大地震の発生する確率が90%近いと言われており、災害時対応の充実は自治体のみならずすべての組織にとって急務である。被災外国人支援においては、他地域に比べ人数の多さや国籍等背景の多様さから想像以上に困難が予想される一方で、日頃から外国人支援を専門とするNPO/NGO等支援の「担い手」となり得る団体も多く、関係者が目的を共有し連携・協働に取り組むことで防災力の向上及び災害時対応の改善に大きな成果が期待できる。

東日本大震災発生時の東北３県の外国人登録者数は合わせて約３万人、愛知

県は１県で20万人を超えている。東海地震・東南海地震のような広域災害では、40万人近い外国人住民も私たちと同じく被災者になり得るのだ。比較の問題ではないが、決して「マイノリティ」の一言で適切かつ迅速な支援がなされないことを仕方なしとは言えない。国籍に限らず、乳幼児、妊産婦、高齢者、障害者、アレルギー患者、特定の疾病をもつ人等、見方を変えれば多くの人が「マイノリティ」側に立たされる。そのすべての人の命の重みは等しい。過去の経験から一つでも多くのことを学び、同じ過ちを繰り返さないことが我々の使命ではないだろうか。

（以上）

■ Article

ラボラトリー方式の体験学習を通して得られる気づきに関する検討

中　尾　陽　子
（南山大学経営学部）

１．はじめに

１－１．問題意識と本研究の目的

本研究は、ラボラトリー方式の体験学習を用いて実施された人間関係トレーニングの中で起こっている気づきの様相を捉えることを目的としている。ラボラトリー方式の体験学習（以下、体験学習と略記）とは、特別に設計された人と人がかかわる場において、“今ここ”での参加者の体験を素材（データ）として、人間や人間関係を参加者とファシリテーターがともに探求する学習である（津村，2010）。また、“今ここ”での自分の生の体験を他者とともに吟味することによって、学習者の態度や行動の変化・成長を生み出す学習方法である（津村，2012）とも言われている。つまり、体験学習は、人と人が実際に関わり、そこで起こる体験を通して学ぶことを大切にした学習方法であると言える。そのため、人との関わりの希薄さが問題視されるようになっている近年では、学校、企業、医療、環境などのさまざまな分野において、この学習法を用いた教育や研修が実施されている。

体験学習は、1946年にクルト・レヴィンとその弟子たちによって実施されたワークショップの中で生まれたと言われており（Benne，1964；Marrow，1969；中村　他，2009　など）、誕生から既に65年以上の歴史がある。この間、アメリカを中心に数多くのトレーニングが実践され、それらに対する研究も行われてきたが、1960年代後半から1970年代をピークに減少している。日本においても、同じく1960年代から1970年代にかけて、Tグループを中心とした実践が盛んに行われてきたものの、研究に関しては、決して十分になされてきたと言えない状況である。このような体験学習の流れを考えると、現在さまざまな分野においてなされている体験学習の実践は、ファシリテーター達が過去に行われた研究成果を踏まえながらも、“今ここ”の参加者のありようを捉え、最も

適切だと考えられるプログラムを試行錯誤しながら設計し、提供している側面があると考えられる。そのため、体験学習の実践に対しては、トレーニングによって生まれる影響や効果を十分に吟味しないまま実施しているのではないかという指摘がなされることも多い。

体験学習のプログラムでは、一般的に、参加者に対して毎回のトレーニングの後にジャーナルの記述を、また、全プログラム終了後にレポートやアンケートの記述を求めることが多い。ファシリテーターは、トレーニングの中で自分自身が捉えたプロセスと、これらに記述された内容の両者を確認しながら、次のプログラムやファシリテーションの計画を立てている場合が多いと考えられる。従って、毎回のトレーニングは決してやりっ放しの状況ではないと言えるのだが、参加者達がトレーニングを通して得る気づきや学びを系統立てて捉えるような試みがほとんどなされていないのも現状である。筆者も、自分が担当するトレーニングにおいて、毎回のジャーナルと最終レポートを読み、参加者達の気づきを確認する過程は欠かさず設けているが、体験学習による学びを今後も多くのフィールドで役立てていくためには、更なる検討と一般化に向けた取り組みが必要であると感じている。

そこで本研究では、このような問題意識に基づきながら、基礎的な人間関係トレーニングのプログラムを通して生まれる気づきの様相を明らかにすることを試みる。具体的には、大学生を対象としたトレーニングに参加した学生のレポートから、トレーニングを通して得た気づきに関する記述を集め、テキストマイニングツールTRUSTIA MiningAssistant（以下、TRUSTIAと略記する）を用いて分析することによって、気づきの様相を検討していく。またその結果から、トレーニングにおける問題点や今後の課題を明らかにし、プログラムの作成やファシリテーションの実際に生かしていくことを目指す。

１－２．分析方法について

本研究では、TRUSTIAを用いて体験学習通して生まれる気づきの分析を行い、その様相を検討すると共に、体験学習研究におけるこのツールの活用可能性についても検討していく。体験学習の影響について検討した先行研究を概観してみると、主に３つの方法を用いて研究がなされてきたと言える。まず、最も多いと考えられるものは、質問紙を用いた検討である（Miles, 1965；Rubin, 1967；Lubin & Zuckerman, 1969；Myers, Myers, Goldberg & Welch, 1969；Nadler & Fink, 1970；Rohrbaugh, 1975　など）。その他に、参加者の感想や気づきを自由記述させ、その記述内容を分析・検討した研究（Bunker, 1965；Bunker & Knowles, 1967；Moscow, 1971　など）、トレーニングの中で起こった現象を取り上げ、それらを詳細に検討しながら解釈を行うタイプの研究（Kuriloff & Atkins, 1966 ；Haigh, 1968　など）が行われている。

これまで多くの研究で用いられてきた質問紙による検討は、研究者が明らか

にしたい側面に対してアプローチしやすく、客観的な分析を行いやすいなどのメリットがあり、研究方法として有効であると考えられる。一方で、体験学習は、全く同じプログラムを体験しても、人によってそれぞれ異ったプロセスが生まれるという特徴をもつため、質問紙を用いて画一的な問いを投げかけることによって、実際に起こっている多様な気づきの様相を見逃してしまう可能性もある。そのため、トレーニングの中で起こっている現象を詳細に分析することや、参加者の気づきを自由に述べてもらい、それらのデータから気づきの様相を捉えることには大きな意味があると考えられる。しかし、こういったデータの分析には非常に多くの時間がかかり、客観性を保つことにも困難を伴うというデメリットがある。

そこで今回の研究を行うにあたり、注目したツールがTRUSTIAである。TRUSTIAはジャストシステム社により開発された評価分析システムの名称であるが、その中に、自由記述文を分析するTRUSTIA MiningAssistant という機能を備えている。本研究では、TRUSTIAに含まれる主題分類機能を用いて、分析を行うこととした。TRUSTIAの主題分類の機能を用いた場合、自由記述文が自動的に主題で分類され、分類された語句同士の関連性や分類された内容の詳細を確認することができる。そのため、従来非常に時間を要した分析作業を効率的に行ないながら、トレーニング参加者全体に起こっている気づきの様相を捉えていく可能性があるのではないかと考えた。本稿では、TRUSTIAにより析出された結果に対してその妥当性を検討しながら、体験学習研究におけるTRUSTIAの利用可能性についても検討していく。

２．研究の方法

研究対象者：大学生10名。対象者達は、筆者が担当したある科目の受講生であり、授業時に受講生全員に対して本研究の説明をした際、研究協力の意思を示した方々であった。

手続き：研究は、以下の手順で実施された。

１）人間関係トレーニングの実施

調査対象者達は、筆者が担当した全15回の授業において、人間関係トレーニングの一連のプログラムに参加した。授業は、毎週１回90分間で行われた。初回の授業では、トレーニング全体のねらいを提示し、説明を行った後、トレーニングを開始した。

本授業全体のねらいは、「ラボラトリー方式による体験学習を通して…　①自分の対人関係やコミュニケーションのパターンに気づく。　②グループププロセスやお互いの影響関係に気づき、それに働きかけるスキルを養う。」とした。授業の初回から第７回目までは、毎回できるだけ異なるメンバーと小グループを組みながら、ねらいの①に重点を置いたプログラムに取り組んだ。後半の第８回目から14回目までは、５名から６名の固定されたメンバーでグループを構

成し、ねらいの②に重点を置いたプログラムに取り組んだ。授業各回のねらいと、実施した実習および小講義の内容は、表１の通りであった。各回の授業は、基本的に、『ねらいの説明』、『体験学習による実習体験』、『ふりかえり用紙の記入』、『わかちあい』、『全体インタビューおよびコメント』、『ジャーナルの記入』という流れで行ない、必要に応じて小講義を加えた。

表１．授業各回のねらいと内容

回	ねらい	内容
1	体験学習を体験する。 クラスのメンバーと知り合う中で、自分の気持ちや行動に気づく。	実習　『フォースド・チョイス』
2	ラボラトリー方式の体験学習を理解する。 自分の対人コミュニケーションパターンに気づく。	小講義『ラボラトリー方式の体験学習による人間関係トレーニングとは』 実習　『私の対人コミュニケーションの棚卸し』 小講義『効果的コミュニケーションの5つの要素』
3	コミュニケーションの中で、お互いがどのように話し・聴いているのかに気づく。 1way・2wayそれぞれのコミュニケーションから生まれる感情に目を向ける。	実習『One way・Two way　コミュニケーション』 小講義『コミュニケーションのプロセスと留意点』
4	自分の持っている自己概念に気づく。 自己概念が対人コミュニケーションに及ぼす影響を知る。	実習　『Who am I』 小講義『自己概念』
5	自分の対人関係を見つめ、どのような感情の伝え方をしているかに気づく。	実習　『私の対人地図』 小講義『感情の伝え方』
6	感情の働きや機能について知る。 感情と行動のつながりに目を向け、自分の感情表現の傾向に気づく。	小講義『感情』 実習『感情とのつきあい方』
7	感情と行動のつながりに目を向け、自分の感情表現の傾向に気づく②	実習『感情とのつきあい方』
8	グループのメンバーと出会う。	実習『グループ・エントランス』 個人の課題の明確化
9	グループで課題を達成する際に起こる様々な事柄（個々のメンバーの動きやコミュニケーションの仕方など）に気づく。	個人の課題のわかちあい 小講義『コンテントとプロセス』 実習　『匠の里』
10	グループの中で起こっているプロセスを捉え、フィードバックする力を養う。	小講義　『グループプロセスを捉える視点』 実習『サバイバル』
11	グループの中で起こっているプロセスを捉え、それに働きかける。 わかちあいの意味を理解し、お互いの成長を目指したフィードバックを試みる。	小講義　『ジョハリの窓』 実習『名画鑑賞』
12	グループの中で起こっているプロセスを捉え、それに働きかける② 自分自身の課題を明確にし、それに取り組む。 お互いの成長を目指したフィードバックを試みる。	実習『若い女性と水夫』
13	メンバー一人一人がグループププロセスに与えた影響を捉え、お互いの成長を目指したフィードバックを試みる。	実習『若い女性と水夫』つづき 実習　『フィードバック・サークル』
14	メンバー一人一人がグループププロセスに与えた影響を捉え、お互いの成長を目指したフィードバックを試みる②	実習　『フィードバック・サークル』つづき
15	半期間の学びをふりかえり、今後の自分の課題を明確にする。	実習『私の旗』

2）気づきの言語化

第14回のトレーニング終了後、受講生には、最終レポートの課題として、これまでの授業全体をふりかえり、自分の対人関係やコミュニケーションの特徴、グループにおける自分と他者について気づいたことや学んだこと、今後の課題などを自由に記述するよう求めた。この際に、本研究の主旨と概要を説明して、研究への協力を求めた。結果として、受講生10名の同意が得られたため、この10名分のレポートを本研究のデータとして用いた。

3）分析データの準備

研究対象者が記述した文章の中から、本トレーニングと関係して生まれた気づきと捉えられる内容を抽出し、一文ずつに分けてデータ化した。文章は、出来るだけ原文のまま用いるようにしたが、その文だけは意味が不明瞭になってしまうと考えられたものについては、前後の文とのつながりを踏まえ、原意を損なわないよう若干の加筆修正を行った。この結果、調査対象者の気づきとして計94文が得られた。また、これらの気づきがどのような体験によって生まれたのかについても、気づきに関する文章と対応させる形でデータ化した。

4）データ分析

TRUSTIAを用いて、3）で整備した気づきに関する94文を対象に、主題分類の機能による分析を行った。TRUSTIAの主題分類機能は、対象データの主題を捉えて文章を分類し、『分類名』、『文書数（その主題に分類された文書の数）』、『信頼度（分類名の確かさ）』、『代表語句（分類された内容に含まれる語句のうち、分類時に注目された代表的な語句）』、『類似度（分類された各本文の内容が、どの程度類似しているかの値）』を析出する仕組みとなっている。本研究では、TRUSTIAにより析出された分類結果を踏まえ、更に、各主題に含まれる文章の内容を詳細に検討することによって、体験学習を通して生まれる気づきの様相を捉えることに取り組む。

3．結果と考察

3－1．TRUSTIAによる主題分類の結果

研究対象者によって記述された文章を、TRUSTIAの主題分類機能により分析し、析出された結果を表2に示す。データとして用いた文章は、10の主題に分類され、それぞれ『自己開示』『積極的』『グループ』『感情』『話』『相手』『意見』『人』『自分』『時間』との分類名がつけられていた。各主題に含まれる文章の数は、3文から16文であった。分類名の確かさを示す信頼度は、最も高いものが100%であり、最も低いものは12%であった。同じ主題に含まれた文章同士の内容の類似度は、最も高い主題で0.899、最も低い主題では0.588であった。信頼度、類似度共に、主題に含まれる文書数が多くなるに従って値が低くなる傾向が見られた。

表２．TRUSTIAによる主題分類の結果

分類名	文書数	信頼度	代表語句	類似度
自己開示	3	100	自己開示/開示/自己/一方/傾聴	0.899
積極的	5	83	積極的/積極/参加/目標/設定	0.859
グループ	6	42	グループ/各メンバー/協力/グループ活動/最初	0.770
感情	6	60	感情/体調/間接表現/持続/伝え方	0.791
話	7	63	話/口火/グループ内/内容/関連	0.760
相手	10	66	相手/建設/建設的/目/勝手	0.720
意見	13	72	意見/他者/互い/お互い/他	0.739
人	13	61	人/初対面/対面/関係/緊張	0.643
自分	15	36	自分/対人関係/対人/能力/コミュニケーション	0.706
時間	16	12	時間/経験/変化/生活/ひとみしり	0.558

３－２．主題に含まれる文章内容の検討

本項では、TRUSTIAによって各主題に分類された文章の内容を検討し、体験学習による気づきの詳細について考察する。また、TRUSTIA　により分類された結果の中に、本研究の目的と照らし合わせて不適切と考えられるものがあれば、より適切な分類への修正も試みる。

３－２－１．主題名『自己開示』の検討

TRUSTIAによって主題名『自己開示』に分類された文章は、表３に示す３文であった。信頼度は100%、類似度は0.899と、共に全ての主題の中で最も高い値であった。３つの文章には､全て『自己開示』という言葉が含まれており、自己開示に関する内容が記述されていた。しかし、気づきの内容という点から見ると、１）は自分自身の変化、２）は自分が自己開示をする理由、３）は自分のコミュニケーションの傾向に関する記述であると考えられるため、共通性があるとは捉えにくいものであった。そのため、主題名『自己開示』に関しては､他の主題に分類された内容の検討結果を踏まえて､再度分類の検討を行う。

表３．主題名『自己開示』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
１）自己開示も少しずつではあるができた。	授業全体をふりかえって
２）自己開示をすることで自分を知ってもらいたい、理解してほしいという気持ちが強いのだと思う。	実習『対人コミュニケーションの棚卸し』
３）明確な表現は得意だが、その一方で傾聴と自己開示が苦手である。	実習『対人コミュニケーションの棚卸し』

３－２－２．主題名『積極的』の検討

TRUSTIAによって主題名『積極的』に分類された文章は、表４に示す５文であった。全ての文章に、主題である『積極的』という言葉が使われており、積極性に関する気づきという点で共通すると考えられた。

記述された文章の内容に注目してみると、１）から３）は『実習を通して積極

的になっていった自分』に関する記述という点で共通していると考えられる。しかし、4）は自分自身の特徴、5）はグループ活動をする上で大事なことに関する記述であると考えられるため、自分自身の変化に関する1）から3）の記述とは意味内容の面で異なるものが、同じ主題に分類されていると捉えられた。

表4．主題名『積極的』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
1）積極的に発言や疑問に思ったことを質問するようになった。	実習体験を通して
2）少し積極的になったと思う。	グループの雰囲気の影響
3）積極的に参加するという目標を設定し、それに対し、積極的になったというフィードバックを受け、進歩を感じた。	グループメンバーとの関わり
4）自分から積極的に働きかけて意見をまとめることができる。	グループメンバーとの関わり
5）本当に大切なのはグループの中で自分の役割を見つけ積極的に話し合いに参加することだと思った。	実習体験を通して

3－2－3．主題名『グループ』の検討

TRUSTIAによって主題名『グループ』に分類された文章は、表5に示す6文であった。全ての文章に主題である『グループ』という言葉が使われていた。記述された内容の面に注目すると、『グループ体験から得られた自分への気づき』という点で共通していると考えられる。更に、その内容に注目してみると、1）と2）は、『グループに入っていく時に自分の中で起こったプロセスや、そこから起こした行動の傾向』に関する記述であり、3）から6）は、『グループ活動を通して気づいた自分の傾向や課題』に関する記述と考えられるため、大きく2つの側面に関する気づきがあったと捉えることができる。また、いずれの文章も、『グループ』という主題に分類されてはいるが、“グループ”についてではなく、“グループの中の自分”に関する気づきの記述という特徴があった。

気づきのもととなった体験との関連をみると、何か特定の実習を通して得られた気づきではなく、グループ活動全般、あるいは授業全般での体験を通して気づきが得られていたものと考えられる。

表5．主題名『グループ』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
1）知らない人ばかりがいるグループに入っていくときすごく不安に感じる。	授業を通して
2）知らない人ばかりがいるグループに入った最初は、不安を隠すように、相手を探って当たり障りのないことを言う。	授業を通して
3）グループになるとしっかりみんなに合わせようという協調性があることに気がついた。	実習体験を通して
4）グループ活動のようなみんなで協力して何かすることが好き。	授業全体をふりかえって

5）集団の中にあまり話せていない子がいたら、グループの中でリーダーシップを発揮していたメンバーのような言動で、その子によい影響をあたえることができたらいい。	グループメンバーの言動
6）各メンバーのグループにおける役割や位置が分かる。	グループメンバーとの関わり

３－２－４．主題名『感情』の検討

TRUSTIAによって主題名『感情』に分類された文章は、表６に示す６文であった。全ての文章に主題である『感情』という言葉が使われていた。記述された内容は、『感情を伝えることにまつわる気づき』という点で共通していると考えられる。更に、それらの内容に注目してみると、１）から３）の３文は、『自分の感情の伝え方の傾向』に関する記述であり、４）から６）の３文は、『感情を伝えること、あるいは伝え方の重要性』に関する記述と考えられる。このことから、主題名『感情』に関しては、二つの側面に関する気づきがあったと捉えることができる。

気づきのもととなった体験との関連をみると、小講義が６文中４文となっており、他の主題には見られない特徴が見いだされた。

表６．主題名『感情』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
１）感情や体調によって、直接表現と間接表現を使い分けている。	実習『感情とのつきあいかた』
２）感情の伝え方は、直接報告をすることが多い。	実習『感情とのつきあいかた』
３）消えない感情を露呈してメリットが出ないときは抑圧する。	小講義
４）よりよい関係を持続させるためには、日頃から感情を伝えあうことが大事だと思った。	小講義
５）ネガティブな感情を伝え、納得がいかないときにはぶつかってくことも必要だと思った。	小講義
６）否定的な感情だけでなく、嬉しい、楽しい感情もその都度伝えていくことも必要である。	小講義

３－２－５．主題名『話』の検討

TRUSTIAによって主題名『話』に分類された文章は、表７に示す７文であった。全ての文章に主題である『話』という言葉が使われていた。記述された内容は、『他者と話をすることによって生まれた自分への気づき』という点で共通していると考えられる。更に、それらの内容に注目してみると、１）から３）の３文は、『話を聴けている、あるいは聴けていない自分』に関する記述であり、４）から７）の４文は、『話し合いの際に自分の中で起こっていたプロセスと、それによって起こした行動』に関する記述と考えられる。従って、この主題に関しても、大きく分けて二つの側面に関する気づきがあったと捉えられる。

表７．主題名『話』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
1）自分が今までいかに人の話を聞いてはいても、聴いていなかったということに気付いた。	授業を通して
2）私は話をしっかり聴くことができているようだ。	フィードバック
3）多く語るほうではないが、話をしっかり聴くことは出来ているということがわかった。	授業全体をふりかえって
4）自分の話はつまらないと思われるのではないか、と考えてしまったから、あまり自分から話を切り出すことができなかったのだと思う。	第1回授業
5）内面的な話をするときは、表面的な話をするときよりも、周りからどう思われるかが気になり、発言するのに勇気が必要だった。	第1回授業
6）会話をするとき、話したい人というのは意外と多くその話をよく聴くことが自分の中では大切だと考えて生きてきたため、まず相手の話を聞いてそれに対して自分の意見を述べるということも非常に多かったと思う。	日常の中での体験
7）常に話の口火を切ったり、議論が息詰まったりした時に内容に関連した冗談などを言って、一度空気を入れ替えていたり、一つの話題について、メンバーたちに話を振ったりして、リーダー性を感じられるなどの意見をいただいているので、グループ内では、リーダーないしは話の進行役だと思う。	フィードバック

３－２－６．主題名『相手』の検討

TRUSTIAによって主題名『相手』に分類された文章は、表８に示す10文であった。全ての文章に主題である『相手』という言葉が使われていた。記述された内容は、『他者の存在や他者との関わりを通して気づいた自分のありよう』という点で共通していると考えられた。更にその中で、1）から５）の５文は『自分の関わり方の問題点や課題』、6）と７）は『自分の変化』、8）と９）は『感情を伝え合う際の留意点』に関する記述であると考えられた。８）から10）の３文は、主題名『感情』の『感情を伝えること、あるいは伝え方の重要性』に含まれる文と、意味内容の面で類似性があるとも考えられた。

表８．主題名『相手』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
1）話し手では、自分の伝えたいことを相手に理解してもらうために、もっと簡潔に話すことが必要だと学んだ。	実習体験を通して
2）聞き手になるときは、相手の会話や説明で分からないこと、あいまいなことをそのまま聞き流して、大体の感じで返事していることがあった。	実習体験を通して
3）自分が普段怒ったとき、黙って直接相手に何か表現するということをしていない、そのためにストレスをためて、相手との関係もぎくしゃくしてしまっている。	実習『感情とのつきあいかた』
4）私は喧嘩になるのが嫌で、自分が我慢すればいいと思い、ネガティブな感情を相手に伝えることを避けてきた。	小講義

5）相手の目を恐れずに、自分から歩み寄っていけるようになりたい。	日常の中での体験
6）建設的にネガティブな意見を相手に伝えることが出来た。	授業全体をふりかえって
7）相手の目を見ること、少しでも相槌や反応を返すことを心がけるようになったと思う。	グループメンバーの言動
8）相手が感情を伝えてきたときに、私がいかに建設的に受け入れ、聴くことができるかも重要だと思う。	小講義
9）相手に嫌われるかもという感情に関しても、自分が真剣に「もう一度教えてほしい」といった意志をもって伝えれば、嫌な印象をうけないのではないか。	日常の中での体験
10）こちらが勝手に距離をとり、壁を作ってしまったら、相手も同じことをし、お互いに悪影響を与えてしまう。	日常の中での体験

３－２－７．主題名『意見』の検討

TRUSTIAによって主題名『意見』に分類された文章は、表９に示す13文であった。全ての文章に主題である『意見』という言葉が使われていた。記述された内容は、『自分や他者がもつ意見の扱い方や、そこから生まれる影響に関する気づき』という点で共通していると考えられた。その中には、三種類の気づきが含まれると考えられた。一つは『自分の意見を他者へ伝えられるようになった』という、自分の変化に関する気づきであり、具体的には、1）から５）の記述がこれに該当すると考えられた。また、『自分の意見の扱い方』と『他者の意見の扱い方』に関する記述があると考えられた。これらは、両者の内容を含む文もあると考えられ、６）から11）の６ 文が『自分の意見の扱い方』に関する記述、７）から９）および12）の４文が『他者の意見の扱い方』に関する記述であると捉えられた。

気づきのもととなった体験との関連をみると、他の主題に比べ、グループメンバーとの関わりを通して気づきを得ているという特徴が認められる。また、授業の中で２回行ったコンセンサス実習のうち、先に実施した実習「サバイバル」が、気づきに影響を与えていたと考えられる。

表９．主題名『意見』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
1）他者と違う意見や自分の意思を言えるようになったと感じる。	グループ活動の繰り返しから
2）他者と違う意見でも、自分が怖れているよりも、周りは受け入れてくれることがわかった。	グループメンバーとの関わり
3）後半グループでは回を重ねるごとに自分の思っている意見を遠慮せずに言えるようになったと思う。	グループメンバーとの関わり
4）他のメンバーと自分だけ意見が違っていたため少し不安になりとまどったが、他のメンバーが違う意見に関心を持って聞いてくれたため、安心して自分の意見を言うことができた。	実習『サバイバル』
5）私もグループの友達に厳しい意見を言えるようになったのでお互いを高め合える関係になっているのかなとうれしく思った。	フィードバック

6）自分の意見を主張するときは、明確な理由もつけてメンバー達に論理的に納得してもらえるようにする。	グループメンバーとの関わり
7）意見の相違や勘違いで対立したとき、急いでいる状況だと自分の意見を言う前に相手の意見を全部聞いてからタイミング良く話し出すのが苦手である。	グループメンバーとの関わり
8）集団で一人だけ意見が違う場合は他の多数の意見に同調することが多い。	実習『対人コミュニケーションの棚卸し』
9）多数決を使わない分、みんなが違う意見の人の話を聞き流さず最後まで聞き、すぐに結論を出さず深いところまでお互いの意見を議論できるというメリットがある。	実習『サバイバル』
10）グループの人に「意見がぶれなくて良い」などの意見をもらって、自分の新しい一面に気づかされた。	フィードバックから
11）グループの話し合いにおいても自分の意見はなかなか変えない。	授業全体をふりかえって
12）グループの意見をひとつにまとめた後に、全員が納得できているか再確認する。	グループメンバーとの関わり
13）他者の意見や少数意見は自分の視野を広げてくれることもわかった。	グループメンバーとの関わり

３－２－８．主題名『人』の検討

TRUSTIAによって主題名『人』に分類された文章は、表10に示す13文であった。一文を除く全ての文章に、主題である『人』という言葉が使われていた。内容は、『人との関わりにおける自分の特徴や課題』について記述されている点で共通すると考えられた。この中には、大きく三つの気づきが含まれていると考えられた。最も多く記述されていた気づきは、『自分にとってどのような関係の人に対して、どのような関わり方をする傾向があるか』に関するものであった。具体的には、１）から８）の８文がこれに該当すると考えられた。二つ目は『初対面の人に対して生まれるプロセスや行動の傾向』関する気づきであり、９）から11）がこれに該当すると考えられた。一つめの『自分にとってどのような関係の人に対して、どのような関わり方をする傾向があるか』という気づきに含まれるとも考えられるが、“どのような関係の人に対して”の部分が明確に記述されていたため、初対面の人に特化した気づきとして取り上げた。三つ目は『人と関わる際の課題と目標』に関する気づきであり、12）と13）がこれに該当すると考えられた。この２文は、自分自身の課題と目標が詳細に記述されているという点で違いがあるものの、主題名『相手』の『自分の関わり方の問題点や課題』に含まれた気づきと類似した内容であるとも捉えられる。

気づきのもととなった体験との関連に目を向けると、半分にあたる７つの気づきが、実習『対人コミュニケーションの棚卸し』、『私の対人地図』、小講義など、個人で取り組む内容から生まれているという特徴を見いだすことができた。このことから、実際に人と関わる体験だけでなく、一人になってじっくり自分に目を向ける体験が、人との関わりにおける自分の特徴や課題に関する気づきに有効であると考えられる。

表10. 主題名『人』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
1）直感的に苦手だと感じる相手のとき以外は、緊張はするがたとえ初対面であっても自分から積極的に話しかけて話題を広げることはできる。	実習体験を通して
2）あまり話したことのない人たちには、当たり障りのない話をして、これからの続くかもしれない関係に支障がないようにする。	実習体験を通して
3）自分のことを前向きにとらえている部分が多いため、人に言われたことを素直に受け入れられないことがよくある。	実習『対人コミュニケーションの棚卸し』
4）悩み事に関しては、本当にごく一部の人にしか言わない。	実習『対人コミュニケーションの棚卸し』
5）同じ「仲のいい友達」でも、その人といるときの自分のポジションやキャラクターが人によって少し違うと感じた。	実習『私の対人地図』
6）とても親しいわけではないが関わる必要のある人には、感謝の気持ちはいいやすい分、怒りや疑問を感じても、あまり態度に出さずに自分の中にため込んでいると気づいた。	実習『私の対人地図』
7）逆に1～2回ぐらいしか話したことのない人たちとは、間接報告や直接表現を用いて、これからも関係が続いていくかもしれないので、当たり障りのない話をすることで、その人がどういう性格であるのか、どういう考えの持ち主なのかを知って、信頼できるかどうかなどを考えて、直接報告に切り替えたりする。	実習『感情とのつきあいかた』
8）親しい関係の人たちに対し、言わなくても彼らは私の気持ちをわかってくれるだろうと思い込んでいたが、そうではないことに気が付いた。	小講義
9）ほとんどの人が初対面で、なかなか自分から話ができなかった。	第1回授業
10）初対面の人に対して緊張や不安を感じるけれど、話しかけて仲良くなりたいという意識からわりと発言を意識的にしていた。	第1回授業
11）初対面の人にも、そんなに仲がいいわけではない友人に対しても、会話を盛り上げるために、自分のことをよく話している。	実習『対人コミュニケーションの棚卸し』
12）相手の立場に立ってみて、どうされたら嬉しいか、どうしたら良い人間関係を築くことができるかを、常に考えて、これから周りの人たちと関わっていきたい。	授業を通して
13）ネガティブな感情を伝えることは勇気が必要で苦手で、すぐに身につくことではないと思うけど、大切な人にこそ実践していかなければならないと思う。	小講義

3－2－9．主題名『自分』の検討

TRUSTIAによって主題名『自分』に分類された文章は、表11に示す15文であった。全ての文章に主題である『自分』という言葉が使われていた。記述された内容は、『自分自身に関する気づき』という点で共通していると考えられ、この中に大きく四つの気づきが含まれていると考えられた。一つ目は、『自分の対人関係やコミュニケーションの特徴』に関する気づきであり、1）から5）の5文が該当すると考えられた。二つ目は『自分の観方・考え方の特徴』に関する気づきであり、6）から10）の5文が該当すると考えられた。三つ目は、『自分と向き合い、気づいた』という内容であり、11）から13）の3文が該当する

と考えられた。最後に四つ目は、『日常では気づけない自分に気づくチャンスとなった』という内容であり、14）15）の２文が該当すると考えられた。

この主題に分類された文は、「気づきがあった」ということを表現する大まかな内容が多く見られ、他の主題に分類された文章に比べて具体的な気づきの記述が少ないという特徴が見られた。もし、主題同士の関係に階層を作って分類するような試みをするならば、主題名『自分』は、他の主題の内容を包含する、より上位の主題として位置づけられるとも考えられた。

表11．主題名『自分』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験
1）自分の思ったことは素直に伝える方である。	授業全体をふりかえって
2）自分は極めてコミュニケーション能力が低い人間だと思ってこの授業に挑んだが、そうではなくとても普遍的なコミュニケーションをとる人間だった。	授業全体をふりかえって
3）違う意見を受け入れるときは、自分から質問するなどをして妥協しない。	グループメンバーとの関わり
4）質問されたり話しかけられるのを待ち、聞き手にまわっている、消極的な自分になっていた。	第1回授業
5）自分の対人関係は非常にせまいことがわかりました。	実習『私の対人地図』
6）他人を自分の中ではっきりと区別して位置づけをしている。	授業全体をふりかえって
7）自分を形成しているものは属性や外見より、内面や性格だと思っている。	実習『Who am I ?』
8）自分が思っているほど自分を肯定的に捉えていない。	実習『Who am I ?』
9）自分の行動に対して、改善できることは否定的に、どうしようもない事実は中立的に捉えている。	実習『Who am I ?』
10）自分を肯定することが多く、それが傾聴の低さにつながっていることを知った。	実習『Who am I ?』
11）自分の対人関係やコミュニケーション、グループでの自分に様々な特徴があることに気づくことができた。	授業全体をふりかえって
12）自分の対人関係やコミュニケーション能力について考え、自分と向き合えた。	体験学習を通して
13）自分自身の傾向を知り、課題が見つかった。	授業を通して
14）普段の生活をしているだけでは気づけない、自分の一面や能力に気づくことができた。	体験学習を通して
15）何が足りなかったのか自分でも気づくことができない点を具体的に伝えてくれた友達もいたので非常に自分にとって糧となった。	フィードバック

３－２－10．主題名『時間』の検討

TRUSTIAによって主題名『時間』に分類された文章は、表12に示す16文であった。信頼度は12%、類似度は0.558と、共に全ての主題の中で最も低い値であった。その他の主題とは異なり、個々の文に主題名の『時間』という単語が使われている記述は２）14）の２文のみであった。内容の面に注目すると、１）２）14）15）は『時間をかけて、自分の変化や他者との関係の変化に取り組んだ』ことに関する記述として纏めることができると考えられた。しかし、その他12文の記述内容は、主題である『時間』との関連を見いだすことが困難であり、むしろ、他の主題に分類する方が適切な内容であると考えられた。具体的には、主題名

『グループ』の『グループ活動を通して気づいた自分の傾向や課題』、主題名『感情』の『自分の感情の伝え方の傾向』（以下、感情①と略記）、『感情を伝えること、あるいは伝え方の重要性』（以下、感情②と略記）、主題名『話』の『話を聴けている／聴けていない自分』主題名『人』の『自分にとってどのような関係の人に対して、どのような関わり方をする傾向があるか』（以下、人①と略記）『人と関わる際の課題と目標』（以下、人②と略記）、主題名『自分』の『自分の対人関係やコミュニケーションの特徴』（以下、自分①と略記）と『自分の観方・考え方の特徴』（以下、自分②と略記）へ、それぞれ分類することが適切と考えられた。表12には、適切だと考えられる主題名を記述文に対応させて示した。

表12．主題名『時間』に分類された文章

本文	気づきのもととなった体験	適切だと考えられる主題
1）少しずつ変化することの大切さを学ぶことが出来た。	授業全体をふりかえって	時間
2）回を増すごとに、時間をかけたり活動を行うことの重要性が理解できるようになっていた。	授業全体をふりかえって	時間
3）人見知りはしないが、一度苦手だと思ってしまうと極端に口数が減ってしまう。	実習体験を通して	自分①
4）発言力は長所であるがといえるが、せっかちで短気であることは短所である。	実習体験を通して	人②
5）分からないことがあっても分からないと言わず、分かったふりをする。	授業を通して	自分①
6）リーダーかサブリーダーを務めることが多い。	グループメンバーとの関わり	自分①
7）伝えることの大切さを学んだ。	小講義	感情②
9）自己概念や経験に縛られて生活している。	小講義	自分②
6）少しひとみしりをする傾向があることに気付いた。	第１回授業	自分①
10）同性に対してよりも異性に対して緊張していた。	第１回授業	人
11）仲がよければよいほど、恥ずかしさと照れくささから、普段あまり感謝の気持ちを伝えられていない。	実習『私の対人地図』	感情②
12）大学生活で出会った人物に大きな影響を受けていると気づいた。	実習『私の対人地図』	自分②
13）親・親戚とほとんどの友人に対して直接報告をしている。	実習『感情とのつきあいかた』	感情①
14）壁を壊すことが出来、後は時間と経験でコミュニケーションのとり方というものは自然とわかるのだと思った。	あえて自分からコミュニケーションをとらなければならない状態を作ること	時間
15）少し変化してみたいと思うようになった。	ジャーナルのコメントを見て	時間
16）聴くときの集中力がない。	日常の中での体験	話

３－３．体験学習を通して得られた気づきの様相に関するまとめ

ここまで、TRUSTIAの主題分類機能を用いてデータ分析を行った結果、本研究で用いた94文はTRUSTIA によって10の主題に分類された。析出された結果を主題毎に検討したところ、分類された文章には、２つの主題を除いて、全て主題名となった単語が含まれていた。このことから、TRUSTIAによる分類は、データに含まれる単語同士の類似性に基づいて行われている可能性が示唆された。一方、この分類結果を気づきの内容の面から検討してみたところ、８

つの主題においては、同じ主題に分類された気づきにそれぞれ共通する意味内容が記述されていると考えられた。しかし、主題名『自己開示』および『時間』には、同じ主題の中に分類しておくことが不適切と考えられる文章も含まれていた。

これらの不適切だと考えられた文章については、適切な主題を検討し、TRUSTIA によって析出された分類を基本としながら再分類した。その結果を表13に示す。分類名欄への記載は、TRUSTIA によって析出された分類名をそのまま用い、その横に分類された文章の総数を示した。しかし、分類名のみでは気づきの様相を表すことが困難であると考えられるため、前項３－２において見いだされた、各主題内で共通すると考えられる気づきの内容を『分類された文章に共通する気づき』欄に、主題内で更に細かな気づきとしてまとめられた内容を『気づきの詳細』欄に、併せて示した。

既に３－２－10. で示したように、主題名『時間』に分類された文章は、16文中４文のみを主題名『時間』に関する気づきとして残し、その他の12文は別の主題へ分類し直した。また、主題名『自己開示』に分類された３文は、気づきの内容から、主題名『相手』と『自分』へ分類する方が適切であると考えられたため、それぞれに分類し直し、主題『自己開示』は削除した。その結果、気づきは９つの主題に分類された。

以下では、この分類結果に基づきながら、体験学習を通して得られる気づきの様相について総合的に考察する。

本研究の結果より、体験学習を通して得られる気づきの特徴の一つ目として、自分自身の特徴や傾向に関する気づきが多く生まれていたという点を挙げることができる。『分類された文章に共通する気づき』および『気づきの詳細』の内容に目を向けると、分類名『積極的』『感情』『時間』には、自分以外の対象に関する気づきが記述されていたが、それ以外は全て自分に関する気づきが記述されているという結果が得られた。そこに書かれた内容が、自分あるいはそれ以外のどのような面に関する気づきであるのかをまとめた内容を、『気づきの内容』欄に示す。23項目に分けられると考えられた気づきの詳細のうち、自分の『特徴』や『傾向』に関する内容が15項目に渡っており、文章数にすると、94文中62文であった。自分の『変化』に関する気づきが15文、自分の『課題』に関する気づきが６文、自分の体験をより『一般化』した気づきに発展させた記述が９文であったため、データ全体の65%以上が自分の『特徴』や『傾向』に関する記述であったことが示された。これらの気づきは、『変化』『課題』『一般化した気づき』に比べ、自分に対する初期的な段階の気づきだと考えられ、初めて体験学習による人間関係トレーニングを経験した参加者が、15回のトレーニングを通して得た気づきの特徴として捉えておくことは重要であろう。

特徴の二点目として、他者との関わりを通して多くの気づきが生まれている

点を挙げることができるだろう。『分類された文章に共通する気づき』の内容に目を向けると、特に主題名『グループ』『話』『相手』『意見』『人』において、このような他者との関わりを通した気づきが生まれていたと考えられる。また、主題名『積極的』『グループ』『話』『相手』『意見』『人』に分類された個々の文章には、他者とコミュニケーションを交わすことや、共に一つの課題に取り組む体験が気づきにつながったと考えられる内容が多く含まれていた。

更に、これらの他者との関わりから生まれた気づきは、はっきりとした実感や感情を伴ったものとなっていることが、これらの主題に分類された文章から推察された。例えば、「積極的に参加するという目標を設定し、それに対し、積

表13. 体験学習を通して得られた気づきの分類

分類名（文章数）	分類された文章に共通する気づき	気づきの詳細（文章数）	気づきの内容
積極的（5）	積極性に関する気づき	実習を通して積極的になっていった自分（3）	変化
		その他（2）	特徴・一般化
グループ（7）	グループ体験から得られた自分への気づき	グループへ入っていく時に自分の中で起こったプロセスや、そこから起こした行動の傾向（2）	特徴・傾向
		グループ活動を通して気づいた自分の傾向や課題（5）	特徴・傾向
感情（9）	感情を伝えることにまつわる気づき	自分の感情の伝え方の傾向（5）	特徴・傾向
		感情を伝えること、あるいは伝え方の重要性（4）	一般化
話（8）	他者と話をすることによって生まれた自分への気づき	話を聴けている、あるいは聴けていない自分（4）	特徴・傾向
		話し合いの際に自分の中で起こっていたプロセスと、それによって起こした行動（4）	特徴・傾向
相手（11）	他者の存在や他者との関わりを通して気づいた自分のありよう	自分の関わり方の問題点や課題（5）	傾向・課題
		自分の変化（3）	変化
		感情を伝え合う際の留意点（3）	一般化
意見（13）	自分や他者がもつ意見の扱い方や、そこから生まれる影響に関する気づき	自分の意見を他者へ伝えられるようになった（5）	変化
		自分の意見の扱い方（6）	特徴・傾向
		他者の意見の扱い方（4）	特徴・傾向
		その他（1）	一般化
人（15）	人との関わりにおける自分の特徴や課題	自分にとってどのような関係の人に対して、どのような関わり方をする傾向があるか（9）	特徴・傾向
		初対面の人に対して生まれるプロセスや行動の傾向（3）	特徴・傾向
		人と関わる際の課題と目標（3）	課題
自分（22）	自分自身に関する気づき	自分の対人関係やコミュニケーションの特徴（10）	特徴・傾向
		自分の観方・考え方の特徴（8）	特徴・傾向
		自分と向き合い、気づいた（3）	特徴・課題
		日常では気づけない自分に気づくチャンスとなった（2）	特徴・傾向
時間（4）	時間をかけて変化することに関する気づき	時間をかけて変化することに関する気づき（4）	変化

極的になったというフィードバックを受け、進歩を感じた」「聞き手になるときは、相手の会話や説明で分からないこと、あいまいなことをそのまま聞き流して、大体の感じで返事していることがあった」などの記述からは、非常に具体的な事実から気づきを得ていること、そしてそれをはっきりとした実感として感じていることが伺われる。また、「知らない人ばかりがいるグループに入っていくときすごく不安に感じる」「他のメンバーと自分だけ意見が違っていたため少し不安になりとまどったが、他のメンバーが違う意見に関心を持って聞いてくれたため、安心して自分の意見を言うことができた」などのように、そのとき感じていた気持ちを伴った記述が複数みとめられた。

これらの気づきは、例えば書物を通して行う概念的な学習や、自分一人で自分のことを見つめるような作業をするだけでは得られにくいものであると考えられ、人と人が実際に関わりながら学ぶことを大切にする体験学習ならではの気づきであると言えよう。表３から12に示した『気づきのもととなった体験』との関連に目を向けても、主題名『感情』『人』『自分』を除く全ての主題において、気づきは主に他者との関わりをもつ実習を通して生まれていたことが伺われる。

４．今後に向けての課題

本研究では、体験学習を用いた基礎的な人間関係トレーニングを通して生まれる気づきの様相を明らかかする試みを行ってきた。結果として、他者と実際に関わる体験から、リアルな感覚を伴った気づきが生まれているという特徴を見い出すことができた。また一方で、自分に関する気づきが大半を占めており、その内容としては初期的な段階にあたるものが中心であることも示唆された。後者に関しては、今後トレーニングプログラムの作成やファシリテーションを行う際に留意することによって、参加者の気づきをより豊かなものにしていく可能性があるとも考えられるため、以下で今後の課題等について考察していく。

４－１．気づきの広がりに関する課題と展望

まず、気づきの大半が自分に関するものであったという点について考察していく。表13に示した『分類された文章に共通する気づき』および『気づきの詳細』の内容を見ると、他者およびグループに関する内容が含まれていることから、トレーニング参加者たちに、他者やグループに対する視点が存在していることは間違いないと考えられる。しかし、レポートの中で語られている気づきを検討してみたところ、結果的に相手側ではなく自分側に目が向いていたことは、興味深い特徴であると言えよう。改めて今回のトレーニング時の様子をふりかえると、毎回のふりかえり用紙には、他者に対する気づきを記入する欄が設けられており、参加者によって程度の差はあるものの、それなりに他者への気づきが記入されていたことは確かである。また、最終レポートを作成する前に記入を求めた全体ふりかえり用紙にも、他者やグループに対する気づきの記

入欄を設けていたが、自分への気づきに比べて記入量が極端に少ないということはなかった。このことから考えると、参加者たちは、15回のトレーニングを通して他者に対する気づきが生まれていたものの、自分への気づきに対する印象の方が圧倒的に強く、レポートとしてまとめた際には気づきとして報告されなかったものと推測される。

このことから、他者やグループに対する参加者の気づきを広げ深めていくためには、今回のトレーニングで実施した以上に、他者への気づきを言語化する機会を作り、共に変化成長していく実感を持てるような場を作っていくことが有効なのではないかと考えている。例えばわかちあいの時間に、記入された他者への気づきを今まで以上にしっかりと伝え合うようファシリテートしていくことによって、フィードバックの時間がより充実したものになると思われる。参加者たちが、照れ臭さや言い難さを感じ、曖昧な伝え方をしてしまいがちな気づきの中に、お互いの成長につながるような重要なフィードバックが含まれていることも多い。そのため、このようなフィードバックがトレーニングの中で十分に授受され、それらを通して参加者一人一人が変化成長していく実感をリアルに持つことによって、他者やグループに対しても、自分のことと同じように気づきを深めていく可能性が出てくるのではないだろうか。たとえばこのようにして、注意が向きにくい、あるいは印象として残りにくいと考えられる側面へ積極的にアプローチし、気づきの範囲を広げていくことは、今度の課題であると考える。

４－２．気づきの深まりに関する課題と展望

もう一つの課題としては、自分自身に対する気づきの内容に初期的な段階のものが多いという現状へのアプローチがあるだろう。今回の分析から、参加者たちには、自分の特徴や傾向に関する気づきに留まらず、『自分の体験の一般化』『自分の課題』『自分の変化』に関する気づきが生まれていることも明らかになった。これらは、参加者たちが持つ気づきの力を示唆するものであり、更なるアプローチが可能な部分であると思われる。

この点について筆者は、体験学習の循環過程（星野，2005）をより強く意識しながらトレーニングに取り組むようなアプローチが有効ではないかと考えている。トレーニング時の様子をふりかえると、参加者たちにとって週１回90分という授業での取り組みは、その時間内で体験学習の循環過程を体験しているものの、そこで得られた気づきや学びは、継続的なものとして次につながりにくいという印象ももつ。今回のトレーニングでは、その日の実習を始める前に、先回の授業後に立てた行動目標をメンバーとわかちあう時間を設け、今から取り組むことに対する意識づけをしてきた。しかし、参加者が授業後にもトレーニングに対する意識をもち続けるような枠組みは、特に設けてこなかった。そのため、授業と授業の間の1週間の過ごし方は参加者自身に任されており、各

自がどのような意識をもち、行動をとっていたのかについては不明である。集中的なトレーニングプログラムと異なり、トレーニングの場を離れた後の参加者に介入することは非常に困難であるが、例えば、授業の最後に立てた行動目標を日常の場でも試みてくるような課題を設け、その結果を報告し合うことから次の授業を始めることによって、参加者が日常の中でも体験学習の循環過程を意識しながら過ごす可能性が出てくるだろう。参加者にとって、トレーニング期間全体が成長に取り組むためにつながりをもった時間となるよう、アプローチしていくことが重要であると考えられる。

４－３．安全なトレーニング環境の確保に関する課題

ここまでは、同じトレーニング期間の中で、いかに気づきを広げ深めていくかについて考えてきた。どちらの課題も、ファシリテーションやプログラム作成の際に、“体験学習を実施する上での留意点”と言われることを実行していくことが重要であると考えられるものであり、改めて、基本を徹底していくことの必要性が示唆されたと言えるだろう。一方、別の観点から今後の課題を考えることも出来ると思われる。もし、今回の研究から得られた気づきの様相が、初めて人間関係トレーニングに取り組む参加者にとって、無理のない、あるいは精一杯の状態であったとするならば、有効なアプローチはまた違うものになっていくのではないだろうか。このような参加者の存在は十分予想できるものであり、安全な枠組みの中で、安心して自分の変化・成長に取り組む可能性を探っていくことも必要だと考えられる。

本研究の結果から、15回の授業で行われた体験学習によって生まれた気づきの大半は、初期的な段階のものであったことが示された。そのため、社会の中で生かすことが出来るような対人関係能力を育んでいくためには、より時間をかけた取り組みが必要であるとも考えられる。このために出来ることとして、筆者は大きく二つの方向性があると考えている。一つは４－２．で示した内容とも関連するが､参加者一人一人がトレーニングを通して得た気づきをもとに、自分の日常生活の中で、自分のペースに沿った取り組みを続けていくという方向である。星野（2005）が指摘しているように、体験学習は生涯学習という特色をもつ学習方法でもあるため、トレーニングを通して得た学び方と気づきをもって日常の場へと出かけて行き、日々の中で自分の課題に繰り返し取り組み続けることが、人と関わる力を伸ばしていくことに有効であると考えられる。私たちの日常は、人との関わりやコミュニケーションの体験と切り離すことが出来ないものであるからこそ、各自が日々の中で意識をもって取り組み、自分の変化成長へつなげていこうという発想である。

とはいえ、このような主体的かつ意識的な取り組みが出来るメンバーは、トレーニング参加者の中でもごく限られることが予想される。ラボラトリーの中で得た学習内容を日常の中へ転移させることの困難性は、体験学習が実践

された初期の頃から指摘されてきたことであり（例えば、Benne,K.D. et al, 1964）、筆者自身も実践の中で常に難しさを感じている部分でもある。そのため、もう一つの方向として、大学生活の中で継続的にトレーニングに参加できるような枠組みを設けておくことは重要であろう。これは、更にトレーニングに取り組みたいと考える学生が、自らの成長に長期的に取り組み続ける場として重要であるばかりではなく、安全な環境でトレーニングに取り組み、変化成長を実現していくための枠組みとしても重要であると考えられる。ベネら（Benne,K.D. et al, 1964）が指摘するように、学習したことが個人の行動に統合されるためには、気づきを実験的に試みる場が必要であると考えられている。新しい行動の効果を確かめられないまま、失敗の許されない日常の関わりに戻ってしまえば、気づきの試みに消極的になってしまうのは当然であろう。特に、日常生活を通して自然にコミュニケーションを身につけることが難しい現代においては、守られた安全な枠組みの中で十分に試みを繰り返し、日常の中へ出かけていくような取り組みが必要であると考えられる。

そのために、具体的にはどのような枠組みを設け、取り組みの機会を作ることが出来るであろうか。本研究で研究対象とした取り組みのように、授業を利用した取り組みは、ある一定規模の参加者に対して、一定期間のトレーニングを提供し続けるという点から、有効な枠組みであると考えられる。例えば本研究の対象とした授業の場合は、学科科目の中でほぼ必修に近い位置づけがなされているため、トレーニングを途中で放棄してしまうメンバーはほとんどいない。とはいえ、全体的な参加者のモチベーションという点からみれば、クラス全体が高い意識をもった雰囲気であるとは言い難いし、単位修得を目的に参加し続けるようなメンバーが現れてくることも珍しくない。

このような状況を避けるためには、やはり学習者が主体的にトレーニングに参加するような枠組みを作っていくことも必要だと考えられる。例えば、キャリア支援室、学生交流センター、保健室などの機関と連携しながら、継続的にトレーニングを提供する場を作り、希望する者が主体性をもって自己の成長に取り組めるよう支援していくことも大切な取り組みであろう。ファシリテーターが、個人的にトレーニングの場を作り、参加者を募っていくこともできようが、組織的な取り組みにしていくことによって、支援できる対象が広がっていくものと考えられる。

５．体験学習研究おけるTRUSTIAの利用可能性について

最後に、本研究で用いた分析ツールTRUSTIAを今後の研究に利用していく可能性について考えていきたい。

本研究を実施した結果、筆者は、体験学習研究における気づきの分析にTRUSTIAを活用していく可能性があるのではないかと考えている。結果と考察の中でも示してきたように、TRUSTIAの析出結果には、信頼度・類似度の

値が高いにも関わらず、本研究の目的から考えた場合、分類として適切でないと考えられるものが含まれていた。そのため、TRUSTIAの析出結果をそのまま使うことは不適切であると考えられたが、析出された結果には一定の妥当性があるとも考えられた。また、大変な時間をかけて行っていた自由記述文の分析が、従来よりも迅速に実施できた。このような時間短縮の実現は、体験学習分野の研究を促進するきっかけにもなるであろう。今後は、TRUSTIAによって析出された結果を複数のメンバーで検討しながら修正するなど、より結果の客観性を担保するような取り組みを行うことによって、研究の信頼性を高めていくことができると考える。

6．おわりに

本研究では、体験学習を通して生まれた気づきの様相を検討すると共に、今後のトレーニングを実施する上での課題について考察を行ってきた。研究の規模としてはごく限られた範囲を対象としたものであったため、気づきの様相を明らかにするためには、更なる検討が必要であると考えられるものの、今後のトレーニングを実践していく上で有効な知見も得られたと言えるだろう。

筆者自身は現在、所属する経営学部の学生たちと共に、いくつかの授業の中で体験学習法を用いた人間関係トレーニングの授業を行っている。これまで経営学部において体験学習を実践してきた印象として、経営学部生の中で、人間関係トレーニングの授業を受講しようとする学生は、人との関わりやコミュニケーションに対して苦手意識を持っている場合が多いと感じる。そのような学生たちが、敢えてトレーニングにチャレンジする背景の一つに、「このままの自分では、社会に出た時にきっと困るだろう」という不安感があるようである。彼らは、メディアなどからの情報を受け、このような不安を漠然と感じているようであるが、確かに、対人関係やコミュニケーションの能力は、現代社会で活躍していく上で必要不可欠な力の一つであると言える。

例えば、労働政策研究・研修機構が企業に対して行った調査の中で、採用にあたり今後重視することを尋ねたところ、「コミュニケーション能力の高いこと」を挙げた企業の割合が最も高いという結果が得られている（労働政策研究・研修機構，2012）。また、経済産業省は、産業人材施策の一つとして、『社会人基礎力』という概念を2006年より提唱している（経済産業省）。同省によれば、社会人基礎力とは「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」であり、『前に踏み出す力』、『考え抜く力』、『チームで働く力』の３つの能力と、その中に含まれる12の能力要素により構成される力である（図１参照）。ここに示されている３つの能力の中でも、特に『チームで働く力』には、『発信力』『傾聴力』『柔軟性』など、一般的な意味でのコミュニケーション能力にあたる能力要素が複数含まれていると考えられる。更に、『働きかける力』『情報把握力』のように、コミュニケーションを通して、お互いの関係を作り

上げていく力の必要性も示されている。

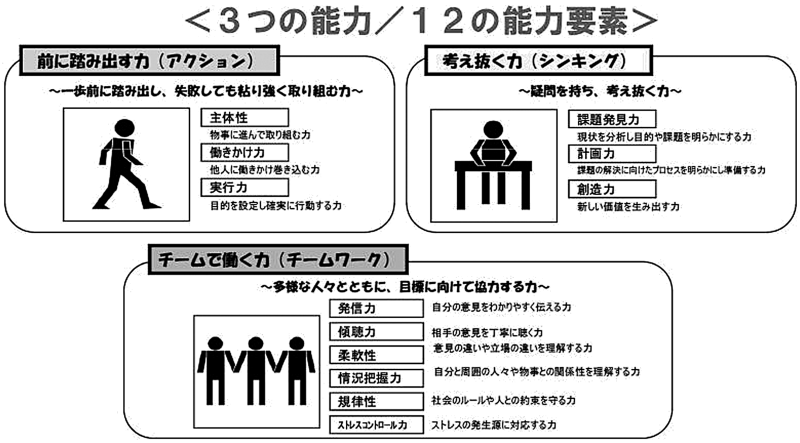


図１．社会人基礎力を構成する3つの能力と12の能力要素（出典：経済産業省）

このように、コミュニケーション能力や人間関係を作る力は、社会的ニーズの高いものであると言えるが、近年では、日常生活を通して自然に身につけることが難しくなってきていることも確かであろう。そのため、社会へ出る前の最終教育機関となる大学においても、出来るだけ多様な人と関わる場を意識的に作り、これらの力を育てていくことが、大切な取り組みの一つになってきているのではないだろうか。体験学習が、このような取り組みの一助となれるよう、基礎研究と実践の両面からアプローチを続けていくことが重要であると考えられる。

参考文献

Benne,K.D., Bradford,L.P., & Lippitt,R.（1964）. The Labolatory Method. In Bradford,L.P., Gibb,J.R., & Benne,K.D. (Ed.) T-Group theory and laboratory method : innovation in re-education. New York : J. Wiley.（ベネK.D.・ブラッドフォードL.P.・リピットR. ラボラトリ法 三隅二不二監訳（1971）. 感受性訓練 Tグループの理論と方法 日本生産性本部 pp.21-60.）

Bunker,D.R.（1965）. Individual Applications of Laboratory Training. The Journal of Applied Behavioral Science, 1, 131-148.

Bunker,D.R. & Knowles,E.S.（1967）. Comparison of Behavioral Changes Resulting from Human Relations Training Laboratories of Different Lengthsa. The Journal of Applied Behavioral Science, 3, 505-523.

独立行政法人労働政策研究・研修機構（2012）. 入職初期のキャリア形成と世代間コミュニケーションに関する調査 独立行政法人労働政策研究・研修機 構 2012年3月30日 〈http://www.jil.go.jp/institute/research/2012/097.htm〉（2013年2月3日）

星野欣生(2005). 体験から学ぶということ―体験学習の循環過程―　津村俊充・山口真人監修　人間関係トレーニング第2版　ナカニシヤ出版　pp.1-6.

Lubin, B. & Zuckerman,M. (1969). Level of Emotional Arousal in Laboratory Training. The Journal of Applied Behavioral Science, 5, 483-490.

Haigh,G.V. (1968). A Personal Growth Crisis in Laboratory Training. The Journal of Applied Behavioral Science, 4, 437-452.

経済産業省. 社会人基礎力　経済産業省 〈http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm〉(2013年2月3日)

Kuriloff,A.H. & Atkins,S. (1966). T Group for a Work Team. The Journal of Applied Behavioral Science, 2, 63-93.

Marrow,A.J. (1969). The practical theorist: The life and work of Kurt Lewin. New York: Basic Books.(望月衛・宇津木保(訳)(1972). クルト・レヴィン　誠信書房)

Miles,M.B. (1965). Changes During and Following Laboratory Training: A Clinical-Experimental Study. The Journal of Applied Behavioral Science, 1, 215-242.

Moscow,D. (1971). T-Group Training in The Netherlands: An Evaluation and Cross-Cultural Comparison. The Journal of Applied Behavioral Science, 7, 427-448.

Myers,G.E., Myers,M.T., Goldberg,A. & Welch,C.E. (1969). Effect of Feedback on Interpersonal Sensitivity in Laboratory Training Groups. The Journal of Applied Behavioral Science, 5, 175-185.

Nadler,E.B. & Fink,S.L. (1970). Impact of Laboratory Training on Sociopolitical Ideology. The Journal of Applied Behavioral Science, 6, 79-92.

中村和彦, 杉山郁子, 植平修 (2009). ラボラトリー方式の体験学習の歴史　人間関係研究　南山大学人間関係研究センター, 8, 1-29.

Rohrbaugh,M. (1975). Patterns and Correlates of Emotional Arousal in Laboratory Training. The Journal of Applied Behavioral Science, 11, 220-240.

Rubin,I. (1967). The Reduction of Prejudice through Laboratory Training. The Journal of Applied Behavioral Science , 3, 29-101.

津村俊充 (2010). グループワークトレーニング―ラボラトリー方式の体験学習を用いた人間関係づくり授業実践の試み―　教育心理学年報　第49集 171-179.

津村俊充 (2012). プロセス・エデュケーション　学びを支援するファシリテーションの理論と実際　金子書房

■ Article

箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究

楠　本　和　彦
（南山大学人文学部心理人間学科）

要旨

本稿では、箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究の先行研究のレビューを行い、それらと筆者の一連の研究を比較することにより、筆者の研究のオリジナリティ、限界、今後の課題について、検討することを目的とした。はじめに、一連の筆者の研究の調査方法、分析方法、研究結果および考察の概要を記した。

次に、箱庭療法において、制作者の主観的体験に焦点を当てることの意義について、確認した。続けて、箱庭制作過程と説明過程における、制作者の主観的体験に関する先行研究を概観した。先行研究との比較から、一連の筆者の研究のオリジナリティ、限界、今後の課題について、検討した。オリジナリティは、通常の箱庭療法にできるだけ近い状況で収集した、継続した箱庭制作面接における制作者の主観的体験のデータによる研究という点にあった。今後の課題としては、a）M-GTAによる詳細な分析が、一部の領域に留まっており、箱庭療法を巡る全体的な領域の知見を得るためには、詳細な考察ができていない領域を考察する必要があること、b）現状では、調査参加者一人のデータの分析に留まっており、もう一人のデータを加え、生成した理論を精緻化し、一般化の可能性をより高める努力が必要であること、の２点であった。

キーワード：箱庭制作過程、説明過程、制作者の主観的体験に関する調査研究

Ⅰ．問題および目的

筆者は、箱庭制作者の主観的体験に関する一連の研究を報告してきた（楠本、2011、楠本、2012、楠本、投稿中）。これらの論文では、箱庭制作過程および説明過程における、制作者の主観的体験を質的に分析した。それに加えて、その主観的体験を系列的に理解することにより、事例研究的な要素も取り入れた

（楠本、投稿中）。

箱庭制作過程という用語は、まだ、充分に認知された言葉ではないため、ここで、伊藤（2005）の見解に基づいて、その意味を確認しておきたい。伊藤（2005）は、一つの箱庭作品が作り上げられる過程を箱庭制作過程と定義し、箱庭療法過程と区別している。箱庭療法過程を扱う研究では、箱庭作品の内容の系列的理解により、治療的展開を追う視点が中心になり、事例研究論文では、この視点から考察されることが多いとする。しかし、実際の箱庭療法場面では、セラピストは、箱庭作品全体としてのイメージやテーマに思いをはせると共に、制作中のミニチュアや砂の動き、制作者の息遣いや言葉などにも細やかに心を働かせる。そのようなミクロな視点から、制作者・セラピストがどのような世界を体験しているのかという箱庭制作過程を理解することが、箱庭療法の実践に重要であると、指摘している（p.52）。

本稿では、箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究の先行研究のレビューを行い、それらと筆者の一連の研究を比較することにより、筆者の研究のオリジナリティ、限界、今後の課題について、検討することを目的とする。別に、多元的方法・方法のトライアンギュレーション、M-GTAを用いた箱庭療法研究に関しては、別稿「箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討」に記す。

すでに発表した論文の記載と重複する部分があるが、調査方法、分析方法について、まずは、Ⅱに記述する。続いて、研究結果および考察の概要を記す。その後、関連する先行研究も含め、Ⅲでは、箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験に関する調査研究について検討する。

Ⅱ．筆者の研究の概要

Ⅱ－1．調査目的・調査参加者・調査方法

本調査は、箱庭制作過程と説明過程における、a）制作者の主観的体験の明示化、b）箱庭制作・説明過程の促進要因の探求、を目的として行われた。

本調査の箱庭制作者は以下の２名であった。両調査参加者とも、心理的問題のセラピーのために、箱庭制作面接[*1]を希望したのではない。Ａ氏は、40歳代女性、夫との二人家族。女性性とキャリア形成に課題を感じ、自己理解、自己実現、自己成長のために面接を希望した。Ｂ氏は、40歳代男性、独身。心理療法家としての教育分析のために面接を希望した。そのような申し出があった際、筆者は一つの選択肢として、本調査参加者として箱庭制作を10回程度継続的に実施することができることを伝え、両氏がそれを選択した。

本調査は、以下の１）箱庭制作面接、２）ふりかえり面接と、３）全過程をふりかえるための面接を複数回行う契約で実施された（図１）。Ａ氏は、箱庭制作面接およびふりかえり面接（各10回）、全過程のふりかえり面接（４回）を実施した。Ｂ氏は、箱庭制作面接およびふりかえり面接（各８回）、全過程のふりかえり面接（１回）を実施した。Ｂ氏の場合も、箱庭制作面接およびふ

時間経過		約2週間		約2週間		約2週間				約2週間		1カ月～数カ月	
調査活動内容	箱庭制作面接（第1回）	VTR視聴・内省報告作成	ふりかえり面接（第1回）		箱庭制作面接（第2回）	VTR視聴・内省報告作成	ふりかえり面接（第2回）	（中略）	箱庭制作面接（最終回）	VTR視聴・内省報告作成	ふりかえり面接（最終回）		全過程のふりかえり面接（1回または数回）

図１　調査の流れ(楠本、2011)

りかえり面接を各10回､全過程のふりかえり面接を複数回行う契約であったが、Ｂ氏の勤務地が遠方になったため、上記の実施形態となった。

１）箱庭制作面接

この面接では、通常の箱庭療法面接と同様の箱庭制作過程と説明過程に、調査目的のための言語化の過程が追加されている。そのため、説明過程は以下の２つの過程から構成された。

（１）自発的説明過程

箱庭制作後、通常の箱庭療法と同様の説明過程（自発的説明過程）が実施された。自発的説明過程で、制作者は、制作中と制作終了時点での感覚、感情、イメージ、意図、考えなどを自発的に語った。調査者は、それを傾聴することを中心的な態度として臨んだ。

（２）調査的説明過程

自発的説明過程終了後、続けて、調査目的のため、調査的説明過程が実施された。調査的説明過程では、調査者は、より積極的に対話や質問を行い、箱庭制作過程と自発的説明過程における、制作者の主観的体験の言語化を促した。

１回の時間は、制作過程・両説明過程を含めておよそ１時間～１時間30分であった。この過程はビデオ録画された。

２）ふりかえり面接

（１）内省報告作成

箱庭制作面接のビデオを制作者・調査者が視聴し内省報告を書き綴った。内省報告の内容､様式を表１に示す｡調査者が設定した｢意図｣｢感覚･感情･イメージ｣｢連想｣｢意味｣の４カテゴリー（表１参照）について、制作過程では５要因（１．ミニチュアの選択、２．ミニチュアの配置、３．砂の造形、４．位置･ミニチュア・造形の変更、５．セラピストの存在・行動）に関して、説明過程では制作者や調査者の言動に関して、内省報告を記述した。制作過程全体を、制作者は任意に区切り、その制作過程毎に内省報告した。例えば、Ａ氏第１回面接では17過程に区切り、報告された。

表１　箱庭制作過程に関する内省報告例
（A氏　第１回面接　制作過程(13)一部抜粋、楠本2011）

時刻	制作過程内容	意図	感覚・感情・イメージ	連想	意味
27:00	壷を選び、波打ち際奥の方に半分うずめ、砂をかける。	サンゴを棚に戻しに行ったら、壷が視野に入った。「あ、これも置こう」と思った。ガラスの壷の蓋をあけようか迷ったが、閉まったままにした。(後略)	青い壷とガラスの壷。青いのは色と形はいいが大きすぎる。ガラスの壷は大きさは手ごろだが、透明で中が見えてしまうのがちょっと引っかかっていた。(後略)		制作終了後の話し合いで、thから「そういう物があるって気づいてるんだ」と言われ、(後略)

（２）ふりかえり面接

ふりかえり面接は、箱庭制作面接における制作者の主観的体験を、調査者と共有するとともに､その内容を明確化するために行われた。ふりかえり面接は、箱庭制作面接の約２週間後に実施された。ふりかえり面接では、制作者の内省が報告され、調査者はそれを傾聴した。調査者は、意識化が過度な知性化とならないように考慮しつつ、明確化したい点に関して、質問や対話を行った。制作者の内的プロセスへの影響を考慮して、調査者の内省報告は控えた。その会話は録音された。

２）の約２週間後に、次の１）が実施された。

３）全過程のふりかり面接

ふりかえり面接の最終回終了後に、全面接過程をふりかえるための面接を実施した。ふりかえりの内容、形式は、制作者に委ねられた。３）は録音された。

（１）Ａ氏

第10回ふりかえり面接終了約３ヶ月後に、全面接過程をふりかえるための面接を開始した。３）は、ほぼ１ヶ月に１度、計４回行われた。第１回では、箱庭制作面接全10回における、各回のタイトル、印象的なミニチュア、連想、制作前後の制作者の現状などが、制作者から報告された。第２回では、「10回の箱庭制作を終えて感じる今の私」について報告された。第３回では、作品の構成・自己像の変化と、サポーター役、調査者像、宗教的要素などについて、報告された。予定時間内で報告を終了できなかったため、続きを10日後の第４回面接で行った。

（２）Ｂ氏

第８回ふりかえり面接終了約１ヶ月後に、全面接過程をふりかえるための面接を１回実施した。Ｂ氏の全過程のふりかえり面接では、各箱庭制作面接につき、「作る」「語る」「影響」に関する主観的体験が一覧表化され、それに基づいて報告された。

Ⅱ－２．分析方法

１）基礎資料の作成

すべての面接の終了後、調査者がビデオを視聴し、制作過程内容をできる限

表2　第2回箱庭制作面接における主な主観的体験(楠本、投稿中)

制作過程	自発的説明過程	調査的説明過程	内省報告	ふりかえり面接
(3)〔川によって二つに分けられた土地を見ている〕	〔制作中の苦しさ〕(3)しばらく作ってて,苦しいですよ。なんか＜はぁ,苦しい＞うん。苦しいっていうかね。人気がないというか。寂しいというか。二つに分かれちゃったなと思って。(後略)		(3)〔制作・感覚〕大地もいまだ生命がなく,乾燥していて,荒涼としたイメージが私に迫ってきた。「こんなに広い川を作ってしまってどうしよう」「生命のない大地がおそろしい」と感じていた。	
(9)〔ライオン,羊,恐竜を手にとる。恐竜は棚に戻す。ライオンは陸地の右手前に,茂みの陰から草食獣をねらうような位置に置く〕			(9)〔制作・意味〕ライオンに恐竜といった力強いもの,時に凶暴なものに憧れのような,親近感のような感覚を抱く。自分が生きていくためには,時に相手を喰らうことも必要。	
(11)〔白い石を左の陸地奥,川岸に置く。左手前の山を奥に移し,ふもとに土偶と埴輪を置く〕	〔石と土偶,埴輪〕(11)この辺の手前のほうにはちょっと置けない。手前のほうにいる生き物とはちょっと違う生き物のような気がして置けなかったですね。	〔土偶,埴輪〕(11) なんか命なんだけど,命を持ってる人として持ってきたんですけどね。半分命じゃないものになっているっていうか。何ていって言うんでしょうね。人間ではない命になってるというか。そういう感じがして,こう動物や人の世界には,ちょっと,いけないんだな,入ってきちゃっていう。そういう感じですかね(後略)	(11)〔制作・感覚〕土偶もいのちの表現だと思っていたが,ふもとに置いたことで,命としての人間の代わりのようでもあるし,山の番人のような気もしてきた。〔制作・意味〕石は「かたまり」。自然の造形物だけれども,生命感は薄くて,動き出すことがないもの。私が左側に置きたかった命とは,そのようなものだったのではないか。はっきりとした形をまだ持たない,抽象的なものがよかったのだと思う。	〔土偶,埴輪〕(11)土偶はだいぶ神様の方に近い。象徴的になってしまっている。深く土の中にもぐって何世紀も経って命の感覚がひどく微かになってしまっている。 〔お山〕(11)信仰の対象になるようなお山のイメージがありましたね。そうすると,お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちょうど山と平地とのちょうど境目辺りに居てくれると,ちょうどころあいがいい。
(12)〔棚に青い鳥を見つけて,白い石の上にのせる〕	〔青い鳥〕(12)実はずっと作ってる最中,なんか,こう,どうしていいんだろうとかね。すごい苦しいんですよね。あの青い鳥を見つけて,置いた時にああよかったと思いましたね。＜ふうん苦しさは＞なくなりましたね＜なくなった＞はい。ほっとしました。あれも何か他のものを探しに行って,たまたま眼に入って,青い鳥がああ,これだぁ。あの青い鳥を置いた段階でほとんどもうこれでいいかな,完成にしてもいいかなと思ったんですけれども。(後略)		(12)〔制作・連想〕青い鳥が目に入ってきて瞬時に,幸せの青い鳥,という言葉が思い浮かんでいた。〔制作・意味〕青い鳥は意図しないところからやってきた意図を超えているという感じかもしれない。これを見つけた途端,私がそれまで作っていた箱庭の調子・トーンが変わった。箱庭ではなくて,変わったのは私の心の調子かもしれない。	
(13)〔鴨の親子を川に浮かべる〕	〔川の鴨〕(13)もうちょっと何か命というか感じたいなと思って棚に戻って。で,この鳥を見つけて。(中略)こうのんびり遊んでる感じのにして。		(13)〔制作・意図〕青い鳥を置いたことで気持ちに余裕が出たように感じた。	

り事実に忠実に記述した。箱庭制作面接の両説明過程とふりかえり面接での会話を逐語録化した。

その後、箱庭制作面接各回の制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告、ふりかえり面接の各データの関連を探るために、各過程のデータを制作者が任意に区切った制作過程毎に、一覧表に再構成し、比較可能とした（表２にＡ氏第２回面接の一部抜粋を例示）。

制作者の内省報告に記された、各制作過程における制作行為を、制作過程の〔〕内に記した。制作過程内容を調査者が一部追加した。両説明過程、内省報告、ふりかえり面接の〔〕内の言葉は調査者が記述した。調査者の発言は＜＞で示した。両説明過程で説明が複数過程に亘る場合、適切と思われる制作過程に分類した。

また、論文として記述する段階で、その論文の結果および考察に挙げたデータに下線を付した。

２）質的分析

基礎資料として整理されたＡ氏のデータに基づいて、楠本（2011）、楠本（2012）、楠本（投稿中）を執筆した。楠本（2011）は、楠本（2012）の探索的研究である。楠本（2012）は、a）箱庭制作面接の促進要因間の交流の全体像を探索し、その概観を把握する。その上で、b）面接内外の促進要因間の交流による促進機能とc）面接の連続性に関する促進要因間の交流による促進機能を探究する、の上記三点に関する理論生成を目的とした。楠本（投稿中）は、データを多層的・総合的に分析した「単一事例質的研究」によって、a）制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討すること、b）独自の

研究法の意義と課題・限界を検討すること、を目的とした。目的に照らして、楠本(2012)では(１)修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)、楠本（投稿中）では（２）単一事例質的研究、の異なる質的分析を実施した。それぞれに関して、以下に詳述する。Ｂ氏のデータに対しても、同様の質的分析を実施する予定であり、現在、Ｂ氏のデータを追加したM-GTAの分析を実施途上である。

（１）M-GTAを用いた分析

両説明過程の逐語記録、内省報告を、木下（2003）のM-GTAに従い、質的に分析した。M-GTAでは分析テーマと分析焦点者の２点から分析を進める。分析テーマを「継続的な箱庭制作面接における促進機能」とした。グラウンデッド・セオリーの適用可能範囲を示す分析焦点者を「自己理解、自己実現、自己成長を目的として、継続的な箱庭制作を実施した心理的に健康な制作者」とした。自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告それぞれの独自性と共通性を確認するため、概念生成はそれらの過程毎になされた。１概念につき、１分析ワークシートを作成し、データから概念を生成した。ワークシートには、概念名、概念の定義、具体例、分析中の思考の記述である理論的メモを記した。類似例の確認だけでなく、対極例の比較を行うことにより、概念の解釈が偏る危険を防いだ。各過程で、調査参加者（Ａ氏）のデータからの概念生成と修正が終了したと判断した段階で、主観的体験に関する各過程（自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告）の概念を総合的に検討した。そして、同一であると判断された概念は、具体例を統合し、一つの概念として扱った。概念相互の関係を検討し、カテゴリーを生成した。

そのデータを基に､結果図（図２）を作成した。恣意性を極力排除するため、論文をまとめる過程で箱庭療法や質的研究を実践している研究者に指導を受けた。また、調査参加者（Ａ氏）に原稿の内容確認を依頼し、若干の字句修正を行った。

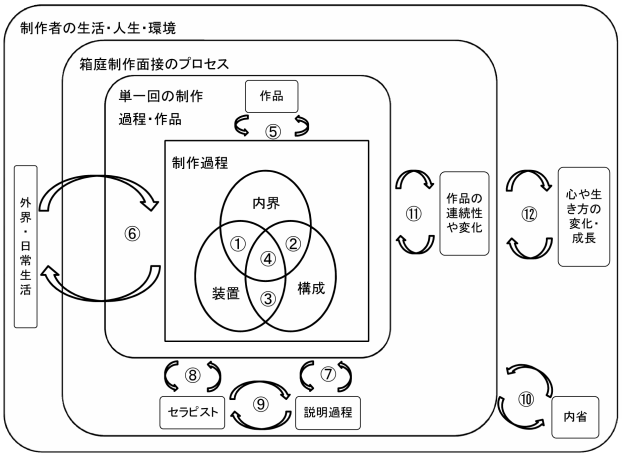


図２　箱庭制作面接の促進要因間の交流(楠本、2012)*2

（２）単一事例質的研究

一覧表化（表２）により、多元的に収集された箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験の比較が可能となり、次の分析を行った。a）制作過程毎に、制作行為、制作内容、制作者と調査者との対話等に関する、制作者の多様な主観的体験について、その内容や関連性を把握・分析した。b）各箱庭制作面接での、制作の経過による制作者の主観的体験の変容や関連性を把握・分析した。c）すべての面接の主観的体験を比較し、テーマの系列的理解や面接の展開、その個人的意味について、多層的・総合的に把握・分析した。

分析は調査者単独で行った。論文をまとめる段階で、指導者に指導を受けた。調査参加者（Ａ氏）に論文の内容の確認を依頼し、承諾をえた。

本研究法を表記するにあたって、楠本（投稿中）の査読者からの提案を受け、「単一事例質的研究」と記載することとした。

３）質的分析の結果および考察の概要

本項では、筆者が行った２種類の質的分析の結果および考察の概要を示す。楠本（2011）は、楠本（2012）の探索的研究であるため、ここでは取り上げない。詳細に関しては、楠本（2012）と楠本（投稿中）を参照されたい。

（１）M-GTAによる分析の結果および考察の概要（楠本、2012）

楠本（2012）では、Ａ氏のデータに対して、M-GTAによる分析を行った。その分析結果から、箱庭制作面接の促進機能は、箱庭制作面接の促進要因間の『交流』であると解釈された（図２）。

目的である「箱庭制作面接の促進要因間の交流の全体像を探索し、その概観を把握する」ために、まず、促進要因間の『交流』の全体像を示した。次に、促進要因間の交流の概要を簡潔に示した。

さらに、「面接内外の促進要因間の交流による促進機能」と「面接の連続性に関する促進要因間の交流による促進機能」を探究するという目的を達成するために、a）**【制作過程と外界・日常生活の交流】**（図２の⑥）と、b）**【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】**（図２の⑪）および**【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】**（図２の⑫）に関して、詳細に検討・考察した。面接内外と面接の連続性に関連する促進要因間の交流による促進機能は、箱庭制作面接の重要な促進機能であることが見出された。

面接内外のできごとをめぐるプロセスの交流（**【制作過程と外界・日常生活の交流】**（⑥））は、制作者の自己実現を促進する一因であることが見出された。箱庭制作面接には面接内の促進要因だけでなく、その外にある制作者の日常生活や人生と連動して、制作者の自己理解、自己実現、自己成長に寄与する促進機能があると考えられた。

面接の連続性（**【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】**（⑪）および**【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】**（⑫））は、a）制作者のイメージ体験に影響し、b）制作者自身が作品の変化から心の変容に

気づくプロセスを生み、c）面接内外を貫いて内的プロセスを生きるという態度を生むことが見出された。

（2）単一事例質的研究による結果および考察の概要（楠本、投稿中）

楠本（投稿中）では、A氏のデータに対して、a）制作者の主観的体験の変容、その個人的意味を検討すること、b）独自の研究法の意義と課題を検討すること、を目的として、単一事例質的研究を実施した。目的b）は、別稿「箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討」に詳述する。

目的a）に関して、以下の四点が見出された。1. 面接の展開に従って、箱庭作品のテーマと制作者の自己像であるミニチュアに変化がみられた。それらの変化に制作者の心の変容が表されていた。2. 宗教性（命、守り、神聖な場所・生き物）は、本面接において、重要なテーマの一つであった。面接が展開していく中で、宗教性が自己の内側に根付いた歓びを、制作者は実感できたと捉えられた。3. 女性性は面接申込時に感じていた自己の課題の一つであった。以前には受け入れることができなかった自己の女性性を、箱庭制作面接を通して、制作者が実感・確認できたと捉えられた。4. 箱庭制作における受動性と能動性との協働、箱庭制作面接内外の真摯な取り組みが、制作者の心の変容を促進した。箱庭制作と命、特に女性という命に共通する、受動性と能動性の協働と、制作への関与の強さ・深さが、制作者の心の変容と面接の展開を促進した重要な要因の一つであると考えられた。また、制作者は箱庭制作面接内外で主体的に自己の課題に取組んでいた。この真摯な取り組み、深い関与も制作者の心の変容の大きな要因の一つと考えられた。

Ⅲ．箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験に関する調査研究

Ⅲ－1．箱庭制作者の主観的体験に焦点を当てる意義

前述のように、本稿で取り上げようとしている一連の筆者の研究は、箱庭制作者の主観的体験に焦点を当てたものである。本節では、箱庭療法において、制作者の主観的体験に焦点を当てることの意義について、確認したい。

岡田（1984）は「制作中の制作者の心の動きは大切であり、これこそが箱庭療法の核心でもあるから、制作過程の研究は今後の重要な課題である」としている。そして、同時に、箱庭制作の過程中に実証的、第三者的な刺激が加えられることが制作を歪曲する恐れについても言及している（p.6）。確かに、この怖れがあることが、箱庭制作者の主観的体験を実証的に研究することを困難にする。この要因は、箱庭制作者の主観的体験に関する実証的研究が、事例研究に比べて、少ないことの一因であろう。

石原（2008）は、箱庭制作過程に対して質的・実証的な研究法を用いて、研究を行った。そして、そのような質的・実証的研究の有効性を明らかにしている。その中で、石原は、制作者の主観的体験に焦点を当てる意義として以下の

４点を挙げている（pp.7-9）。

a）箱庭療法における、制作者の「主観的で内面的な感覚・感情体験」研究の必要性

心理療法において、問題にしなくてはならないのは、クライエントの主観であるとの言及（河合、1991、p.10）や、心理臨床の営みの本質的照準が、クライエントの感覚・感情体験であるとの言及（藤原、2001、p.178）を引用しつつ、箱庭療法においても、表現内容でなく、制作者の「主観的で内面的な感覚・感情体験」に焦点を当てた研究が必要であるとしている。

b）ミニチュアに意味を見出していく制作者の主観的体験の重要性

石原は、箱庭療法では、施設・セラピストにより、用意されているミニチュアが異なり、それらがバラエティーに富んでいることに着目する。そして、もしも、ミニチュアそのものに本質的意味があるとすれば、特定のミニチュアがないことによって、治癒の機会を逃すことが起こりうるはずだが、実際には、そのようなことが起こらないことを指摘する。そして、箱庭療法では、ミニチュアそのものに本質的意味があるのではなく、ミニチュアに意味を見出していく制作者の主観的体験に本質があると考えられる、としている。

c）セラピストが制作者の体験そのものに注目することの重要性

セラピストが箱庭を見るときに、単なる表現や体験の潜在的可能性としてではなく、制作者の生きた体験そのものを見るように心がけるようになったという言及（Bradway、1997）などを引用しつつ、箱庭に表現されたものの意味を考察していくよりも、セラピストが制作者の体験そのものに注目することに意義があることを、石原は指摘している。

d）箱庭療法に関する事柄を理論的にニュートラルな観点から位置づけなおす可能性

石原は、箱庭制作者の主観的体験そのものは、特定の理論に依拠しているものではなく、理論的にニュートラルなものであるとしている。そこで、制作者の主観的体験から箱庭を見直すことによって、箱庭療法に関する事柄を理論的にニュートラルな観点から位置づけなおすことができるのではないか、考えている。

また、石原（2002）は、カルフ（1972）が箱庭療法では、象徴表現が生まれる過程におけるクライエントの象徴体験を重視していたことを指摘した上で、「クライエントの表現とセラピストによる意味づけの間をつなぐものとして、表現の過程でクライエントがどのような体験をしているのか、また、自らの表現についてクライエントがどのように感じているのか、というクライエント側の主観的体験を積極的に取り上げていくような研究が必要である」と述べている（p.62）。

ここまで、箱庭療法において、制作者の主観的体験に焦点を当てることの意義を確認するため、岡田（1984）、石原（2008）、石原（2002）の論述を引用し

てきた。先行研究を概観して確認できたように、制作者の主観的体験は、箱庭療法がセラピーとして機能する上でも、箱庭療法を理論的に検討する上でも、意義があることがわかる。箱庭療法において、制作者の感覚・感情・意味・イメージなどの内的プロセスを制作者自身がどのように体験するのかということ自体が、心の治癒力や成長力が賦活する重要な要因の一つとなる。また、そのような制作者の主観的体験に対して、セラピストが理解を深化させていくことにより、箱庭療法においてセラピストがセラピーの場に存在する意義を高め、クライエントの治癒に貢献できる。このような意味で、箱庭制作者の主観的体験の研究は、箱庭療法研究の一分野として、意義があると考えられる。

Ⅲ－２．箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験に関する先行研究

本節では、箱庭制作過程と説明過程における、制作者の主観的体験に関する先行調査研究を概観する。ここでは、主観的体験に関する部分を中心に検討し、その研究方法に関する検討は、別稿「箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討」で行う。

箱庭制作者の主観的体験に関する調査研究のうち、最も体系的な研究は、石原（2008）である。石原（2008）は、同一調査参加者が、２回に亘って、一つのミニチュアを選び、置く箱庭制作過程の調査研究を行っている。調査参加者は、大学院生20名であった。制作者の主観的体験のデータをM-GTAを準用して質的に分析した。その分析により、制作者の主観的体験を検討するための大枠として、【A．砂箱という前提との間で】【B．モノとイメージの交錯】【C．ミニチュアを置く】の３つのカテゴリーに到達した。それらカテゴリーの中には、複数の概念が含まれている。結果の章において、それぞれのカテゴリー、概念およびそれらが生成されるデータとなったバリエーションが詳述されている。さらに、臨床事例が提示され、最後に、調査研究の結果と臨床事例とを包括した考察がなされている。考察は、1.「制限」として機能する砂箱、2.［臨床事例A］と［調査事例F５－１］の比較、３．制作者の体験からみた「自由であると同時に保護された空間」、４．モノとイメージの交錯、５．箱庭と身体性、6．集合体としての砂と一粒の砂、7.一つのモノを選ぶということ、8．今後の課題、からなっている。この研究は、制作者の主観的体験のデータに密着した理論生成がなされており、砂箱の制限が制限として意識されない主観的体験、モノとイメージの交錯における同時性、感覚やイメージを大切にすることに内包された箱庭における身体性など独自で、新たな視点が提示されたとても興味深く、意義深いものとなっている。

石原は、この研究に先立ち、異なる方法を用いた研究（石原、1999）や、石原（2008）につながる探索的な数量的データの検討（石原、2003）を行っている。石原（1999）は、PAC分析を用いて、箱庭制作者の主観的体験を明らかにしている。この研究では、箱庭制作後、制作者を実験参加者として、箱庭作品を刺激としてPAC分析を行い、制作者個人にとって箱庭作品および箱庭制作体

験がいかなる意味をもつのか、事例を取り上げ検討されている。実験参加者は、大学生女性１名であった。実験者は、石原自身が行った。実験参加者自身によって、PAC分析におけるクラスター構造の解釈がなされ、それが示されている。さらに、実験参加者自身のクラスター構造の解釈を手がかりとして、箱庭作品や箱庭制作体験について、実験者が考察している。このような手法により、箱庭制作者の主観的体験を描き出すことができた。そして、それに基づき、実験者が箱庭作品と制作者の箱庭制作体験を理解することを可能としている。

石原（1999）、石原（2008）では、「箱庭制作過程における制作者の主観的体験」以外には、研究開始時点で、より詳細な研究テーマを設定していない。そして、制作者の主観的体験のデータに基づいて、その分析を通して理論生成を行い、箱庭療法における複数のテーマについて知見を得ている。

花形（2012）は、初回箱庭制作における内的プロセスについて、M-GTAを用いて分析している。この研究は、研究開始時点で、初回制作にのみ限定しているものの、それ以外はより詳細な研究テーマは設定せず、データに密着して理論生成を試みている。また、一連の筆者の研究では、実施できていない理論的サンプリングによる追加データの収集をこの研究では実施している点が、M-GTAの手続きとの整合性を高めている。そして、【事前イメージ】⇨【戸惑い】⇨【体験過程の変化】⇨【制作意欲】という、初回箱庭制作における制作者の内的プロセスのモデルを構築している。

それに対して、制作者の主観的体験をデータとしつつ、研究者が事前に設定した詳細な研究テーマに焦点を当てた、箱庭療法に関する調査研究がある。平松（2001）、後藤（2004）、清水（2004）、伊藤（2005）、片畑（2006）、大石（2010）、中道（2010）などがある。以下に、各先行研究のうち、制作者の主観的体験に関する部分について概観する。

平松（2001）は、箱庭制作後の説明における体験過程に研究の焦点を限定している。箱庭療法における心理的成長の促進要因について明らかにしようとするのであれば、制作者の体験を問題にしなければならないとする。そして、既存のプロセス研究とは異なる視点からの知見を得るために、箱庭療法面接のための体験過程スケール（EXPsp）を作成し、それを適用した研究を行っている（p.132）。その中で、面接回数を12回に制限した箱庭療法の２事例において、箱庭制作後の制作者と面接者の説明をEXPspで評定している。そして、箱庭療法における言語的応答は、非言語的象徴体験を促進するための補助的働きをしているのではないかと推察されるとしている（p.198）。さらに、箱庭療法における体験過程を測定する試みは、箱庭療法の面接過程に関する基礎的研究を可能とする手段を提供し、箱庭療法における治療的要因を明らかにする可能性を開く意義があると述べている（p.199）。

後藤（2004）は、箱庭制作におけるぴったり感に焦点を当てている。そのために、制作者の箱庭体験過程のデータをPAC分析により分析・検討している。

大学院生８名の調査参加者が、各自１回箱庭制作を行った。そして、調査結果の分析から、箱庭療法における「ぴったり感」を、関係性が開かれ、主体が身体感覚に導かれ「さぐり」の動きをすること、主体が再発見されること、つまり自らの存在の本質に関わる体験をすることだ、としている。

清水（2004）は、箱庭制作への立会いがもつ意義に研究の焦点を定めている。そのために、箱庭制作過程における制作者・立会人・非立会人の主観的体験を取り上げ、分析している。調査参加者は、大学生で、制作者・立会人・非立会人とも、男女各６名であった。同一調査参加者の箱庭制作は、１回であった。そして、一人の制作者、その立会人、非立会人の主観的体験を事例として検討している。その分析から、箱庭制作過程への立会いがもつ意義を以下のように考察している。a）立会人は、自らが組み込まれた「今ここ」という制作の場に引き戻され、その過程に参画することになり、動的な関与が生み出される。b）非立会人の場合、手応えや臨場感の乏しさが、制作過程と自らの間の隔たりを不可避的に感じさせられ、関与の動機づけが低下し、箱庭表現を客観的に捉える。そして、c）制作者と立会人の相互作用の結果として箱庭表現が両者の間に生まれることが、制作過程への立会いの意義だと結論づけている。

伊藤（2005）は、箱庭制作過程におけるイメージと意識の関係性の位相とその推移の検討を研究テーマとしている。そのために、制作中と制作後の内観のデータを収集し、分析を行っている。調査参加者は、大学生15名であった。４事例の分析を通して、箱庭制作過程では、イメージと意識の関係性の力動的な位相が様々に推移し、その中で箱庭作品が展開すること、また、それには、a）イメージと意識の主従関係、b）イメージに対する意識の方向性、c）イメージと意識との交流性、の３点が関わってくることが示された。

片畑（2006）は、箱庭制作におけるアイテムの位置を決める体験の中で、触覚を含めた制作者の身体感覚に関する制作プロセスに焦点をあて、検討している。置くミニチュアは、ボール１個であった。調査参加者は、大学生・大学院生28名であった。その内、一人の報告が主に取り上げ、考察された。そして、a）イメージの中で感じられた内的起源性をもつような主観的な感覚（どの感覚器官にも属さず、身体全体で感じるような、より未分化な「身体の感じ」）が、実際に置くときにも反映されるプロセス、b）実際の知覚による目の前にある箱庭から感じとられた感覚によって、未分化で主観的な内的感覚が修正されたり、強まったりするプロセス、の２つのプロセスが存在すると考えている。さらには、このような２つの視点で見られる「身体感覚」が相互作用しつつ箱庭制作プロセスが構成される、としている。

大石（2010）は、箱庭制作における砂にまつわる制作者の主観的体験に焦点を当てている。箱庭に砂を敷いた場合（砂条件）と板を敷いた場合（板条件）の２条件における、制作者の主観的体験のデータを収集し、そのデータをKJ法により分類している。大学生男女各10名が、砂条件・板条件で、それぞれ１

回ずつ箱庭を制作した。そして、調査結果から、砂条件では、砂・玩具・制作者の循環的・連鎖的作用に巻き込まれる形で、制作者が箱庭と一体的に制作に関与していくことを見出した。砂との関わりは制作者の主体性への取り組みであるとしている。

中道（2010）は、箱庭制作者と面接者と箱庭の三者の関係性という観点から、箱庭療法の治療的要因を考察している。その中で、a)「教育カウンセリング箱庭」（スーパーバイザー（中道）－スーパーバイジーという関係性のもと行われた箱庭制作）（pp.89-125、pp.126-164）や、b）関係性の異なる２人のセラピストとのクライエント（中道）体験（pp.165-199）、さらには、c）教育カウンセリングにおける中道自身のクライエント体験（pp.200-223）での、主観的体験のデータに基づき、研究がなされている。a）では、砂と水のみで箱庭が制作され、その制作者の主観的体験が取り上げられている。心理療法を学ぶ50歳代～60際代の女性９名が、各自１回の箱庭制作を行った。b）では、「顔を知っている程度の関係性」であるKセラピストとの１回限りの箱庭制作を行い、その２日後に、10年に亘り教育分析を受けているＬセラピストと箱庭制作を行っている。両面接とも、水を含ませた砂のみでの制作である。そのクライエントとしての主観的体験を中道が報告している。c）では、中道がクライエントとして、Ｌセラピストとの間で行われた30回の箱庭制作のうち、第８回のセッションが取り上げられている。クライエントの箱庭制作後、Ｌセラピストが「応答の箱庭」を制作するという設定で行われ、その際のクライエントとしての主観的体験が報告されている。

そして、中道（2010）は、クライエント－治療者－箱庭の「関係性」について、a）箱庭療法のおける砂への関与とb）クライエントと治療者の関係性の２点から総合的に考察している（pp.224-249）。a）箱庭療法のおける砂への関与について、1．対自的コミュニケーションの促進、２．砂の表現が前面に出る箱庭、３．「おさまり」を「了解」する箱庭制作過程、の観点から考察している。そして、「『ぴったり感』を『模索』し、『了解』するにいたるには、自分自身の内的感覚と常に照合しながら、箱庭を制作する必要がでてくる。内的感覚と照合することで、自身の内界との対話が自ずと生じてくる。つまり、砂に関与することはクライエントの対自的コミュニケーションを促進することにつながるのではないかと考えられる」（p.232）との結論を得ている。b）クライエントと治療者の関係性について、１.場が提供される・理解される・コミュニケートされる、２．治療者の態度、３．contentsをみる・contextを読む、の観点から考察している。そして、「治療者は、クライエントが、自分の意識が無意識の感覚を『了解』できたことをクライエントが意識できるようにフィードバックを行う必要がある。治療者は、クライエントに知識としての解釈を与えるのではなく、（中略）クライエントが無意識の感覚を意識が『了解』したことに気づけるように援助できる態度が必要なのである」と指摘している（p.240）。さらに、ク

ライエント－治療者－箱庭の関係に関して、「治療者の理解が言語的、非言語的に制作者にフィードバックされることによってクライエントの対自的コミュニケーションが促進され、その結果としてクライエントに『ぴったり』した実感をもたすものが作品として表現されていく」と考えている。(p.245)。

Ⅲ－３．先行研究と筆者の研究の比較

箱庭制作における主観的体験に関する先行研究を概観した。ここで、先行研究と筆者の研究とを比較して、筆者の研究の位置づけを確認したい。Ⅱで述べたように、筆者の研究では、「箱庭制作過程における制作者の主観的体験」以外には、研究開始時点で、より詳細な研究テーマを設定していない。その点においては、石原（2008）や花形（2012）と共通点をもっている。石原（2008）と筆者の研究との相違は、使用するミニチュアの限定の有無、面接の継続性、説明過程を研究対象とするか否かに関する研究方法にある。花形（2012）とは、面接の継続性、説明過程を研究対象とするか否かに関して相違点をもっている。

また、筆者の研究では、箱庭制作過程に加えて、説明過程における制作者の主観的体験にも焦点を当てている。研究（評定）方法は異なるが、この点では、平松（2001）と類似性がある。また、継続した面接における主観的体験をデータにしている点でも、筆者の研究と共通点をもっている。しかし、平松は、制作過程における制作者の主観的体験を直接的には研究対象としていない。

中道（2010）の c）教育カウンセリングにおけるクライエント（中道）の主観的体験に関する研究（pp.200-223）と、筆者の研究は、共通点がある。この研究に関して、中道は、教育カウンセリングの枠組みの中で、箱庭療法を体得するために箱庭療法面接を希望したものであり、箱庭を制作した際には、研究目的で置くという発想はまったくなかったと述べている。筆者の研究の場合、Ⅱ－１で述べたように、両調査参加者から面接希望があった際に、筆者が一つの選択肢として、本調査参加者として箱庭制作を10回程度継続的に実施することができることを伝え、両氏がそれを選択した。そのため、筆者の研究で行った面接では、制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進が、目的の一つとなっている。このように、調査のみを目的とせず、制作者の自己理解や自己成長などの促進を含めた面接となっている。このような面接における制作者の主観的体験をデータにしている点では、中道（2010）の c）と筆者の研究は、類似性をもっている。

後藤（2004）、清水（2004）、伊藤（2005）、片畑（2006）、大石（2010）で研究された、制作者の主観的体験に関する諸テーマは、それぞれに箱庭療法において、重要で、興味深いものである。これらの研究は、研究者が事前に設定した詳細な研究テーマに焦点を当てた研究であるという点では、筆者の研究と相違点がある。しかし同時に筆者がまだ充分には考察できていないテーマと関連の深い研究テーマが取り上げられている。楠本（2012）の『単一回の制作過程・作品』の『制作過程』における、「内界」と砂箱、砂、ミニチュアという「装

置」と「構成」の３要因の交流（図２の①～④）内には、②に≪創造における受動性と能動性≫＜構成の非意図性に関する内的プロセス＞のカテゴリーや④に＜ぴったり感の有無＞≪イメージや感覚の他二要因との交流≫などがあった。これら３要因の交流を今後、検討・考察するにあたって、伊藤（2005）、石原（2008）、後藤（2004）の知見を参照できるかもしれない。また、**【単一回の制作過程・作品とセラピストの交流】**（図２の⑧）と**【説明過程とセラピストの交流】**（図２の⑨）は、清水（2004）や平松（2001）や中道（2010）の知見と関連があるかもしれない。身体感覚や砂に関して、筆者の研究の現状では、概念は生成されているものの、いまだ充分な検討を行うことができていない。これらのテーマに関して、片畑（2006）、大石（2010）、中道（2010）、石原（2008）らの知見を参照できる可能性がある。現在、充分に分析できていない促進要因間の交流を検討するにあたって、データに密着した理論生成を基本にしつつも、各先行研究における貴重な知見を参照し、考察を深めていきたい。

本章の最後に、箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験という点に関して、先行研究との比較により見いだされた、筆者の研究のオリジナリティ、限界、今後の課題について記す。

筆者の研究と一部に共通点をもつ先行研究は、少なくない。筆者の研究にオリジナリティが見出せるとすれば、それは、通常の箱庭療法にできるだけ近い状況において収集した、制作者の主観的体験のデータによる研究という点にある。それは、以下のa）～d）が総合的に実現されていることにより、保証されている。a）調査目的のみではない、制作者の自己理解・自己実現・自己成長を目的とした面接場面であること、b）継続した箱庭制作面接であること、c）箱庭制作過程と説明過程両方に亘るデータであること、d）ミニチュアの使用制限を行っていないこと、の４点である。

筆者の研究の限界は、a）心理的な問題・課題を抱えた臨床事例による研究でないこと、b）調査参加者が２名と少ないことの２点が挙げられる。この点に関しては、別稿「箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討」で、より詳しく検討する。

筆者の研究の今後の課題としては、以下の２点が挙げられる。a）M-GTAによる詳細な分析が、一部の領域（図２の⑥、⑪、⑫）に留まっており、箱庭療法を巡る全体的な知見を得るためには、詳細には考察できていない領域を考察する必要があること、b）現状では、Ａ氏のデータだけの分析に留まっており、少なくともＢ氏のデータを加え、生成した理論を精緻化し、一般化の可能性をより高める努力が必要であること、の２点である。

注：

＊１ 楠本（2011）、楠本（2012）、楠本（投稿中）は、治療面接のデータを基にしていないため、箱庭療法という語は用いず、箱庭制作面接とした。ただし、本稿で、他の研究者の研究に言及する場合には、その研究者の用法に従い、箱庭療法という語を使用する場合がある。

＊２ 箱庭療法学研究、25（１）に掲載された図とは、交流を表す矢印の色と傾きが異なるが、それ以外の基本的な部分には、違いはない。

謝辞：

箱庭制作過程の質的研究を開始する以前、Ｔグループに関する質的な共同研究を行う中で、共同研究者から質的研究のノウハウを教えていただくことができた。「Ｔグループにおけるトレーナーのファシリテーション、学習観、トレーニング観に関する質的研究」の共同執筆者である、山口眞人南山大学名誉教授をはじめとする共同研究者の皆様にお礼を述べるとともに、2011年11月１日にご逝去された故山口眞人南山大学名誉教授のご冥福を祈りたい。

また、箱庭制作面接の研究に、主体的に参加してくださり、貴重な主観的体験を報告くださったＡ氏とＢ氏に、深く感謝申し上げたい。

付記：

本稿は、2012年度南山大学パッヘ研究奨励金Ｉ－Ａ－２による成果の一部である。

引用文献

後藤美佳：箱庭表現に伴う「ぴったり感」のPAC分析．箱庭療法学研究、16（2）、pp.15-29.2004

花形武：初回箱庭制作における内的プロセスについて　―箱庭制作経験のない大学生・大学院生を対象に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて. 箱庭療法学研究、25（2）、pp.91-100.2012

平松清志：箱庭療法のプロセス　―学校教育臨床と基礎的研究.金剛出版.2001

石原宏：PAC分析による箱庭作品へのアプローチ．箱庭療法学研究、12（2）、pp.3-13.1999

石原宏：箱庭制作者の主観的体験に関する研究　―「PAC分析」の応用と「一つのミニチュアを選び、置く」箱庭制作．岡田康伸編集、[現代のエスプリ] 別冊、箱庭療法シリーズⅡ、箱庭療法の本質と周辺．至文堂．pp.57-69.2002

石原宏：箱庭制作過程に関する基礎的研究　―「一つのミニチュアを選び、置く」という箱庭制作の数量的データの検討．京都大学大学院教育研究科紀要、49、pp.455-467.2003

石原宏：制作者の体験からみた箱庭療法の「治療的要因」に関する心理臨床学

的研究．平成17・18・19年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書.2008
伊藤真理子:イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程．箱庭療法学研究、17（2）、pp.51-64．2005
片畑真由美：臨床イメージにおける内的体験についての考察　―箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から.京都大学大学院教育学研究科紀要、52. pp.240-252．2006
木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践　―質的研究への誘い. 弘文堂.2003
楠本和彦：箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み、佛教大学大学院紀要教育学研究科篇、39、pp.103-120、2011
楠本和彦：箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用（交流）に関する質的研究．箱庭療法学研究、25（1）、pp.51-64.2012
楠本和彦（投稿中）：箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究. 箱庭療法学研究、25（3）、2013（掲載予定）
中道泰子：箱庭療法の心層　―内的交流に迫る.創元社.2010
岡田康伸：箱庭療法の基礎．誠信書房．1984
大石真吾：箱庭制作における砂の作用に関する一研究　―作り手の主観的体験にもとづいて．箱庭療法学研究、22（2）、pp.63-71．2010
清水亜紀子：箱庭制作場面への立ち会いの意義について　―ビデオ記録を用いたプロセス研究の試み．箱庭療法学研究、17（1）、pp.33-49.2004

■ Article

箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討

―多元的方法・方法のトライアンギュレーション、M-GTAを中心に―

楠　本　和　彦
（南山大学人文学部心理人間学科）

要旨

本稿は、筆者が実施した箱庭制作者の主観的体験に関する研究法について、多元的方法・方法のトライアンギュレーションの観点、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）による分析の観点から、検討することを目的とした。

その両観点から、一連の筆者の研究と先行研究を比較検討した。検討により、研究法における、筆者の研究のオリジナリティは、同一データに対してM-GTAと単一事例質的研究という２種の異なる質的研究法により、多角的、総合的にデータを分析し、知見を得ている点にあった。異なる質的研究法を併用することにより、単一の方法では、明らかにすることが困難であった観点から分析することが可能になり、総合的な考察が可能になったことが確認された。

キーワード：多元的方法、方法のトライアンギュレーション、M-GTA、質的研究法の併用

Ⅰ．問題および目的

一連の筆者の研究（楠本、2011、楠本、2012、楠本、投稿中）は、一人の調査参加者のデータに関して、質的な分析を行ったものである。楠本（投稿中）でも、筆者が行った箱庭制作面接[*1]の調査研究の研究法について検討を行ったが、部分的な検討に留まっていた。そのため、本稿は、より包括的に、筆者が実施した研究法について、多元的方法・方法のトライアンギュレーションの観点、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）による分析の観点を中心に、検討することを目的とする。なお、研究法を除く、箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験に関して、別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」で検討した。

筆者が実施した箱庭制作面接の調査研究は、調査方法、分析方法の両者において、オリジナルな面や限界、今後の課題を有するため、主に、それらの検討が必要となる。その調査方法、分析方法は、別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」に詳述したため、それを参照いただきたい。本稿では、Ⅱで、多元的方法・トライアンギュレーションについて検討する。Ⅲでは、M-GTAによる箱庭制作者の主観的体験に関する研究について検討する。Ⅳで、結論として、検討のまとめを行う。

Ⅱ．多元的方法、トライアンギュレーション

Ⅱ－１．多元的方法、トライアンギュレーションを採用する意義

楠本（投稿中）でも検討したが、一連の筆者の研究における調査方法、分析方法は、多元的方法（multiple methods）、方法のトライアンギュレーションと捉えることができる。まずは、多元的方法とトライアンギュレーションの定義について確認したい。多元的方法とは、「同じ研究デザインの中で異なる方法を組み合わせること。方法を組み合わせる目的は主に２つに分かれる。ひとつは加法的なもので、異なる（しばしば一連の）下位トピックスをそれぞれ異なった方法で扱い、これらの方法を組み合わせることである。もうひとつは、相互作用的なもので、同じ下位トピックスに対し異なる角度からアプローチするものである」（Bloor&Wood、2006、p.132）。また、トライアンギュレーションとは、「ひとつの現象に対してさまざまな方法、研究者、調査群、空間的・時間的セッティングあるいは異なった理論的立場を組み合わせることを意味する」（Flick、1995、p.282）。

次に、質的研究において、多元的方法とトライアンギュレーションという方略をとることの意義について確認したい。Denzin&Lincoln（2000）は、質的研究における多元的方法、トライアンギュレーションに関して以下のように述べている（p.6）。

> 質的研究は、もともとマルチメソッド（多元的方法）指向である（Flick、1998,p.229）。しかしながら、マルチメソッド、あるいは、トライアンギュレーション（三角測量的方法）の利用は、テーマとなっている現象を真意から理解しようとする努力を表している。客観性のある現実が得られることはけっしてない。私たちは対象を表象によって知り得るだけである。トライアンギュレーションは、妥当化（性）のためのツールや戦略ではなく、妥当性（化）そのものとおき換えられるかもしれない（Flick、1998,p.230）。したがって、ある１つの研究において多様な手法、経験的資料、視点、観察者を組み合わせて利用することは、探究に厳密さ、広がり、精緻さ、豊潤さ、深みを付加する研究戦術だと考えるのが最も適切である（Flick、1998,p.231）。

多元的方法、トライアンギュレーションに対する同様の評価は、他の研究者によってもなされている。Flick（1995）は、「トライアンギュレーションは質的方法で得られた知見を基礎づけるひとつの手段である。この場合には、基礎づけは研究結果をテストすることではなく、認識の可能性を系統的に広げ完全なものにすることで達成される。この点で、トライアンギュレーションは、研究の結果と手続きとを妥当化する戦略というよりも、調査手続きのはばの広さ、深さ、一貫性を高める妥当化の一戦略といえる」としている（p.283）。Bloor&Wood（2006）も、「多元的方法の使用には、相互作用的な多元的方法を使えば、分析結果の妥当性を保証できるといった誇張気味の主張がつきまとう。これは事実ではない。（中略）しかし、多元的方法（加法的、相互作用的の両方）をとることは厳密な研究デザインの証となっている」と評価している（p.133）。また、トライアンギュレーションに関して、「異なる方法から導き出された結果からの補強で、妥当化を成し遂げられないことは明らかである。しかし、異なる方法から得られたデータの比較は役に立たないわけではない。逆にそうした比較が分析を深め広げることになるだろう。実際に、上記の比較が多元的方法を用いるリサーチデザインが人気のある主な理由のひとつであり、それが分析を刺激している」との結論にいたっている（Bloor&Wood、2006、p.154）。もともとトライアンギュレーションは、個別の方法で得られた研究結果を妥当化する方略、人間の意識とは関係なく一つの客観的事実を明らかにするために発想・使用されはじめたものであるが（Flick、1995、p.283、Bloor&Wood、2006、p.152）、現在では、そのような意味での方略ではなく、質的研究に厳密さ、広がり、精緻さ、豊潤さ、深み、一貫性を付加する研究戦術と理解されていることがわかる。

続いて、Denzin（1989）のトライアンギュレーションの４つの分類を取り上げ（Flick、1995、pp.282-283）、方法のトライアンギュレーションについて、確認する。

a）データのトライアンギュレーション

異なったデータのソースを用いることである。この下位タイプとしてデンジンは、時間、空間、人を分けて考えている。そして、ある現象について異なった時点や場所で調べたり、またさまざまな人からデータをえることが勧められている。

b）調査者のトライアンギュレーション

「研究者の個人的傾向が研究に与える歪みを明るみに出したり、また最小限に抑えたりするために、異なった複数の観察者やインタビュアーを研究に参加されるというものである。（中略）異なった研究者が調査対象や研究結果に対して及ぼす影響を系統的に比較することに重点がある」。

c）理論のトライアンギュレーション

「この出発点は『さまざまな視点や仮説を考慮に入れてデータにアプローチすることであり、その際にさまざまな理論的立場を、それらの有用性と説明力

とを検証するために並行して用いることである』（Denzin、1978、p.297）。このタイプのトライアンギュレーションによって認識の可能性を基礎づけたり拡大したりすることが目指される」。

d）方法のトライアンギュレーション

「ひとつの方法内のトライアンギュレーションと、異なった方法間のトライアンギュレーションという２つの下位タイプに区別される。前者（方法内のトライアンギュレーション）の例は、ある質問紙の内部でひとつの事象を測るためにさまざまな質問項目を用いることである。その質問紙を半構造化インタビューと併用すれば後者（方法間のトライアンギュレーション）の例となる」。

先にも記したように、トライアンギュレーションは、質的研究において、重要な方略である。Bloor&Wood（2006）は、この４つのタイプのトライアンギュレーションのうち、「一般的には方法論的トライアンギュレーションが最も着目されており、トライアンギュレーションを通して妥当性に耐えうるものとするためには、多元的方法調査デザインによって方法論的な厳密さを示すことが、質的研究者にとって研究を計画する際に、ほとんど義務的なものとなっている」と述べている（p.152）。先に述べたように、現在では、トライアンギュレーションは研究結果の妥当化の方略や客観的事実を発見する方略とは理解されていない向きもあるが、それでもなお、方法のトライアンギュレーションや多元的方法調査デザインが質的研究において、有意義であることがわかる。

Ⅱ－２．多元的方法・方法のトライアンギュレーションという観点からみた筆者の研究法

別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」に、一連の筆者の研究における調査方法と分析方法を記した。本節では、その調査方法、分析方法を多元的方法・方法のトライアンギュレーションという観点から捉えなおしてみたい。

１）調査方法

筆者の研究における調査は、a）箱庭制作面接の1.制作過程、2-1.自発的説明過程と2-2.調査的説明過程、b）箱庭制作面接のビデオを視聴しての内省報告作成、c）調査参加者の内省報告を調査者と共有化するふりかえり面接、d）全過程のふりかえり面接から構成されている。これらのうち、１つのセットとなるa）からc）までの調査構造を図示すると図１のような包含関係となる。各面接、各過程について、方法論の観点から記述していく。

a）箱庭制作面接　1.制作過程

この過程は、制作者が箱庭を制作していく過程である。両調査参加者は、概ね無言で箱庭を制作した。そのため、それに呼応して、調査者は制作過程中、内的にはさまざまな感覚・感情・イメージなどを味わいつつ、無言で、見守ることになった。その場において、調査者は見守り手あるいは広い意味でのセラ

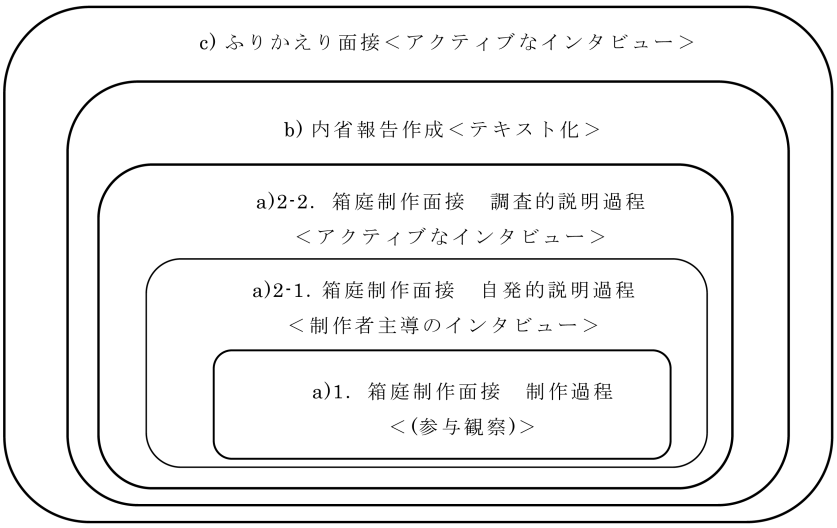


図１　調査構造図

ピストとして、その場にいた。しかし、それを、従来の調査方法にあえて翻訳すれば､参与観察をしていたという風にも捉えることができるだろう。そこで、図１では、一種の留保の意味もこめて、() 付の参与観察とした。

a）箱庭制作面接　2-1.自発的説明過程

これは、説明過程のうち、先に行われる、通常の箱庭療法と同様の説明過程である。自発的説明過程で､制作者は､制作中と制作終了時点での感覚､感情､イメージ、意図、考えなどを自発的に語った。調査者は、それを傾聴することを中心的な態度として臨んだ。そのため、これは制作者主導のインタビューと考えることができる。

a）箱庭制作面接　2-2.調査的説明過程

これは、説明過程のうち、自発的説明過程に続いて調査目的のために行われる説明過程である。調査的説明過程では、調査者は、より積極的に対話や質問を行い、箱庭制作過程と自発的説明過程における、制作者の主観的体験の言語化を促した。そのため､これは「アクティブなインタビュー」と捉えられる。アクティブ・インタビューは、インタビュアーとインタビュイーが協同で知識を構築することに貢献していることを認め、それを意識的・良心的にインタビューデータの産出と分析に組み込んでいく（Holstein&Gubrium､1995､p.22)。この調査的説明過程でなされたことは、アクティブ・インタビューと共通点をもっている。そのため､「アクティブなインタビュー」とした。

b）内省報告作成

箱庭制作面接のビデオ（制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程）を制作者･ 調査者が視聴し内省報告を書き綴った。調査者が設定した「意図」「感覚･感情・イメージ」「連想」「意味」の４カテゴリーについて、制作過程では５要

因（1．ミニチュアの選択、2．ミニチュアの配置、3．砂の造形、4．位置・ミニチュア・造形の変更、5．セラピストの存在・行動）に関して、説明過程では制作者や調査者の言動に関して、内省報告を記述した。上記要因に関する内的プロセスが文章化された。そのため、これは、内的なプロセスをテキスト化する行為と捉えることができる。

c）ふりかえり面接

ふりかえり面接は、箱庭制作面接における制作者の主観的体験を、調査者と共有するとともに、その内容を明確化するために行われた。ふりかえり面接では、制作者が制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程に関する内省報告を行い、調査者と共有化するとともに、調査者が明確化すべきと考えた点に関して確認した。そのため、この面接もまた、アクティブなインタビューと捉えられる。

また、記録方法に関して、a）箱庭制作面接は、ビデオ録画された。b）内省報告は、エクセルファイルで作成され、制作者の内省報告のプリントアウトと電子データは調査者と共有された。c）ふりかえり面接は録音された。

このように、参与観察、インタビュー、テキスト化という多元的なデータ収集を行った。また、記録方法としても、ビデオ録画、録音、テキストと多様な方法を用いている。そして、各面接、各過程が時系列で包含関係となっている。このように筆者が行った調査方法は、多元的・体系的なデータ収集を行っており、多元的方法・方法のトライアンギュレーションと捉えることができる。

2）分析方法

楠本（2012）では、M-GTAを用いて質的分析を行った。M-GTAに関する詳細な検討は、Ⅲで行う。本節では、まず、楠本（投稿中）の単一事例質的研究に関して、検討し、次いで、同一のデータに対して、M-GTAと単一事例質的研究の２つの方法を併用する分析方法について検討する。

（1）単一事例質的研究

単一事例質的研究の分析を可能にするためには、一覧表化が重要であった。箱庭制作面接各回の制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告、ふりかえり面接の各データの関連を探るために、各過程のデータを制作者が任意に区切った制作過程毎に、一覧表に再構成した（表１にA氏第２回面接の一部抜粋を例示）。

表１　第2回箱庭制作面接における主な主観的体験　(楠本、投稿中)

制作過程	自発的説明過程	調査的説明過程	内省報告	ふりかえり面接
(3)〔川によって二つに分けられた土地を見ている〕	〔制作中の苦しさ〕(3)しばらく作ってて,苦しいですよ。なんか＜はぁ,苦しい＞うん。苦しいっていうかね。人気がないというか。寂しいというか。二つに分かれちゃったなと思って。(後略)		(3)〔制作・感覚〕大地もいまだ生命がなく,乾燥していて,荒涼としたイメージが私に迫ってきた。「こんなに広い川を作ってしまってどうしよう」「生命のない大地がおそろしい」と感じていた。	
(9)〔ライオン,羊,恐竜を手にとる。恐竜は棚に戻す。ライオンは陸地の右手前に,茂みの陰から草食獣をねらうような位置に置く〕			(9)〔制作・意味〕ライオンに恐竜といった力強いもの,時に凶暴なものに憧れのような,親近感のような感覚を抱く。自分が生きていくためには,時に相手を喰らうことも必要。	
(11)〔白い石を左の陸地奥,川岸に置く。左手前の山を奥に移し,ふもとに土偶と埴輪を置く〕	〔石と土偶,埴輪〕(11)この辺の手前のほうにはちょっと置けない。手前のほうにいる生き物とはちょっと違う生き物のような気がして置けなかったですね。	〔土偶,埴輪〕(11) なんか命なんだけど,命を持ってる人として持ってきたんですけどね。半分命じゃないものになっているっていうか。何ていって言うんでしょうね。人間ではない命になってるというか。そういう感じがして,こう動物や人の世界には,ちょっと,いけないんだな,入ってきちゃっていう。そういう感じですかね(後略)	(11)〔制作・感覚〕土偶もいのちの表現だと思っていたが,ふもとに置いたことで,命としての人間の代わりのようでもあるし,山の番人のような気もしてきた。〔制作・意味〕石は「かたまり」。自然の造形物だけれども,生命感は薄くて,動き出すことがないもの。私が左側に置きたかった命とは,そのようなものだったのではないか。はっきりとした形をまだ持たない,抽象的なものがよかったのだと思う。	〔土偶,埴輪〕(11)土偶はだいぶ神様の方に近い。象徴的になってしまっている。深く土の中にもぐって何世紀も経って命の感覚がひどく微かになってしまっている。 〔お山〕(11)信仰の対象になるようなお山のイメージがありましたね。そうすると,お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちょうど山と平地とのちょうど境目辺りに居てくれると,ちょうどころあいがいい。
(12)〔棚に青い鳥を見つけて,白い石の上にのせる〕	〔青い鳥〕(12)実はずっと作ってる最中,なんか,こう,どうしていいんだろうとかね。すごい苦しいんですよね。あの青い鳥を見つけて,置いた時にああよかったと思いましたね。＜ふうん苦しさは＞なくなりましたね＜なくなった＞はい。ほっとしました。あれも何か他のものを探しに行って,たまたま眼に入って,青い鳥がああ,これだぁ。あの青い鳥を置いた段階でほとんどもうこれでいいかな,完成にしてもいいかなと思ったんですけれども。(後略)		(12)〔制作・連想〕青い鳥が目に入ってきて瞬時に,幸せの青い鳥,という言葉が思い浮かんでいた。〔制作・意味〕青い鳥は意図しないところからやってきた意図を超えているという感じかもしれない。これを見つけた途端,私がそれまで作っていた箱庭の調子・トーンが変わった。箱庭ではなくて,変わったのは私の心の調子かもしれない。	
(13)〔鴨の親子を川に浮かべる〕	〔川の鴨〕(13)もうちょっと何か命というか感じたいなと思って棚に戻って。で,この鳥を見つけて。(中略)こうのんびり遊んでる感じのにして。		(13)〔制作・意図〕青い鳥を置いたことで気持ちに余裕が出たように感じた。	

一覧表化により、多元的に収集された制作者の主観的体験の比較が可能となり、次の分析を行った。a）制作過程毎に、制作行為、制作内容、制作者と調査者との対話等に関する、制作者の多様な主観的体験について、その内容や関連性を把握・分析した。b）各箱庭制作面接での、制作の経過による制作者の主観的体験の変容や関連性を把握・分析した。c）すべての面接の主観的体験を比較し、テーマの系列的理解や面接の展開、その個人的意味について、多層的・総合的に把握・分析した（楠本、投稿中）。これらの分析、特にc）は、事例研究法と類似点をもつ。そのため、楠本（投稿中）では、単一事例質的研究を事例研究との関係から検討した。長くなるが、以下に、原文にある注を除き、引用する。

一方、本稿は、継続した箱庭制作面接におけるテーマについての系列的理解を行ったため、事例研究とも類似点をもつ。山本（2001）は、事例研究を「臨床の事例研究とは、臨床現場という文脈で生起する具体的事象を、何らかの範疇との関連において、構造化された視点から記述し、全体的に、あるいは焦点化して検討を行い、何らかの新しいアイディアを抽出するアプローチである」と定義している(pp.15-19)。その定義を参照すれば、本研究は、制作者の自己実現・自己成長の促進と調査研究を兼ねた、箱庭制作面接に関して、説明や内省報告により収集された制作者の主観的体験に焦点を当て、単一事例の全体像を厚く記述すること（thick description）により、制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討し、明らか

にした、と定義できる。しかし、本研究は多元的方法を用いた点で、一般的な事例研究と異なっている。そのため、本研究を事例研究とはせず、「単一事例質的研究」と呼びたい。

以下に山本（2001）の事例研究についての定義と、それを参照した楠本（投稿中）の単一事例質的研究の定義を段階的に確認していきたい。山本は、「臨床現場という文脈で生起している」とは、実験研究や調査研究とは異なり、フィールドワークと共通する重要な要件であるとする。心理臨床を構成する複雑な要因である、制度的・構造的・対人的・心理的な「文脈（context）」の中で生起する事象に対して、臨床家が関わりながら観察し、対象化するという難しい作業が含まれると指摘している（pp.17-18）。筆者の単一事例質的研究の一方の側面は、調査研究であるが、もう一方の側面は、制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進を目的とした心理臨床面接である。つまり、筆者の研究の場合、これには、「制作者の自己実現・自己成長の促進と調査研究を兼ねた」（楠本、投稿中）が該当すると考えた。

山本（2001）は、研究方略として「事例」を取り上げる際に必要な要件の一つとして、検討の対象となる事例に帰属する範疇（カテゴリー）が必要であるとしている。そして、事例概念には何らかの類型に分類する作業が想定され、その分類としてクライエントの問題像（例、分離不安の不登校の事例、境界性人格障害の事例）やアプローチの方法（例、夢分析の事例、自律訓練の事例）を挙げている（p.15）。筆者の研究の場合、この範疇としては、「箱庭制作面接に関して」（楠本、投稿中）が該当すると考えた。

山本（2001）は、「構造化された視点から記述し」とは、事象を対象化する際の「視点」ないしは「認知枠」の重要性の指摘であり、研究のねらいと枠組みを明確に意識し、それらを構造化することが大切だとする（p.18）。筆者の研究の場合、「説明や内省報告により収集された制作者の主観的体験に焦点を当て」（楠本、投稿中）がこれに該当すると考えた。

山本（2001）は、「全体的に、あるいは焦点化して検討を行う」とは、事例検討法の２つの方向性を規定したものであるとする。つまり、一つの事例の全体像の本質を詳細に厚く記述（thick description）する方向なのか、事例の特定の側面に焦点をあわせて、研究に不可欠な「重要な事実」（material facts）のみに限定して検討するのかということ、と説明している（p.18）。筆者の研究の場合、これには、「単一事例の全体像を厚く記述すること（thick description）により」（楠本、投稿中）が該当すると考えた。thick descriptionは、Geertzが提唱した概念であり、厚い記述、または、ぶ厚い記述と訳されることが多い。「社会的行為を厚く記述するとは、特定のエピソードを特徴づける状況、意味、意図、方法、動機などを記録することによって社会的行為を解釈し始めることである。記述が厚くなるのは、このような解釈をさしはさむと

いう特質のためであって、単に細目の詳しさだけの問題ではない」（Schwandt、2007、p.3）。

山本（2001）の「何らかの新しいアイディアを抽出するアプローチである」（p.16）には、筆者の研究の場合、「制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討し、明らかにした」（楠本、投稿中）が該当すると考えた。

まとめると、単一事例質的研究では、上述のa）により、制作過程毎に、制作過程、両説明過程における制作者の主観的体験の内容や関連性を把握・分析することができた。b）により、各箱庭制作面接での、制作者の主観的体験の全体像を多層的・総合的に把握・分析することができた。そして、c）により、単一事例の全体像を厚く記述すること（thick description）や、それらを多層的・総合的に把握・分析できた。それらの総合的考察によって、「制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討する」（楠本、投稿中）という目的を達成できたと考える。

（2）同一データに対して、M-GTAと単一事例質的研究との併用を試みる意義

ここでは、同一データに対して、M-GTAと単一事例質的研究という異なる分析方法を併用する理由や意義を確認したい。この点に関して、楠本（投稿中）でも検討を行っているため、まずはその部分を引用したい。

> 楠本（2012）では、本稿と同一のデータに対して、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用い、理論生成した。M-GTAは、データに密着した理論生成が可能であるが、各回のデータは概念生成に活用され、豊富で、詳細なデータを直接的に記述し分析することや、事例の継時的な変化を追うことは困難となる。楠本（2012）では、M-GTAの標準的な研究に比べ具体例を多く示す工夫を行ったが、例示できるディテールには限りがあった。そこで、本稿では「単一事例質的研究」により、より多くのディテールを直接的に記述し、それを多層的・総合的に分析した。同一のデータを用いて、M-GTAによる分析とディテールを直接的に記述分析する質的研究を並行することは、可能であり、意義あるものと考えられている（木下、2003、pp.102-104）。

次に、M-GTAと事例研究との関係に関して、木下の考えを再確認したい。木下（2003）は、「グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析をまとめ論文を完成させた後で、もうひとつのまとめ方としてインタビューのなかにとくに豊富なデータを提供してくれた人がいればその人についての事例分析も可能である。（中略）詳しいデータを提供してくれる人はグラウンデッド・セオリー・アプローチにおいても分析上貴重な存在なのであるが、（中略）この方法では被面接者個人のまとまりは保持されないので、事例としてまとめる方法も可能

である」としている（p.104）。同様の見解は、木下（2009）でも、述べられている（p.18、p.29）。

ただ、楠本（2012）は、A氏一人の、10回に亘る箱庭制作面接のデータをM-GTAにより分析したものであるため、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）では「被面接者個人のまとまりは保持されない」（木下、2003、p.104）という記述は直接的には当てはまりにくい。しかし、A氏のデータをM-GTAで分析した場合、先に引用したように、「各回のデータは概念生成に活用され、豊富で、詳細なデータを直接的に記述し分析することや、事例の継時的な変化を追うことは困難」となった（楠本、投稿中）。そのため、木下（2009）で推奨されているように（pp.34-36）、M-GTAの分析結果であるカテゴリー、サブカテゴリー、概念も意識し、利用しつつ、M-GTAと単一事例質的研究を併用することが、研究目的に照らして効果的であると判断した。

一連の筆者の研究は、M-GTAと単一事例質的研究の併用という点から、分析方法においても、多元的方法、方法のトライアンギュレーションと理解することができる。

Ⅱ－３．多元的方法・方法のトライアンギュレーションという観点からみた先行研究

本節では、箱庭制作者の主観的体験に焦点を当てた先行調査研究を、多元的方法・方法のトライアンギュレーションという観点から、捉えなしてみたい。先行研究の中には、その論文内では、多元的方法・方法のトライアンギュレーションという用語が使用されていなくても、実際には、そのような研究方法をとっているものが少なからず存在するためである。

石原（2008）は、M-GTAを準用した調査研究の成果と臨床事例とを総合的に検討・考察している。また、M-GTAの調査手続きにおいて、a）箱庭制作をビデオ録画している。b）制作終了後に制作者の主観的体験に関する質問紙によるデータ収集を行っている。c）質問紙の回答に対して、インタビューを行い、それを録音している。

平松（2001）は、箱庭療法面接のための体験過程スケール（EXPsp）を用いた数量的調査研究を行っている。２事例に対して、事例研究とEXPspによる評定との総合的研究を実施している。

清水（2004）では、調査Ⅰにおいて、a）制作過程をビデオ録画している。b）制作終了後、制作者と立会人から、質問紙によるデータ収集を行っている。c）調査Ⅰの翌日に行われた調査Ⅱでは、制作者に箱庭制作のビデオ記録を見せ、その中の注目場面に関して、自由な語りを求めている。また、質問紙の記述内容の補足説明を求めている。そのインタビューを録音している。そして、分析においては、d）注目場面毎に、制作者・立会人・非立会人の主観的体験を一覧表化し、その資料を基にプロセス研究を行っている。

伊藤（2005）は、a）制作過程をビデオ録画している。b）制作終了後、制

作中と制作後の内観を問う質問紙によりデータ収集している。分析においては、c）先行研究で実施したイメージと意識の関係性に関する４類型を基に、事例研究を行っている。

片畑（2006）は、a）イメージ場面で、最終的に選んだ位置とその位置に対する感じを質問している。b）実際場面でも、実際にみてどう感じるかを質問している。c)質問紙によるデータ収集を行っている。d)質問紙の記述をもとに、インタビューしている。

大石（2010）では、調査において、a）制作過程をビデオ録画している。b）制作終了後、質問紙によりデータ収集をしている。c）質問紙を基に、インタビューしている。

一部の研究では、記録されたデータが分析にどのように使用されたのか、不明な場合があった。しかし、概ね、上記先行研究では、調査によるデータ収集方法や分析方法、あるいはその両者において、複数の方法が組み合わされていることがわかる。このように先行研究の中には、多元的方法、方法のトライアンギュレーションが実施されている場合があることが確認された。

Ⅱ－４．先行研究と筆者の研究の比較

箱庭制作における主観的体験に関する調査研究に関して、多元的方法、方法のトライアンギュレーションの観点から、一連の筆者の研究と先行研究を見てきた。本章の最後に、先行研究との比較により見いだされた、一連の筆者の研究のオリジナリティ、限界と今後の課題について記す。

本章で、先行研究を概観したところ、先行研究においても、多元的方法、方法のトライアンギュレーションが実施されていることがわかった。しかし、一連の筆者の研究にオリジナリティがあるとすれば、以下のa)、b）の２点にあるだろう。

a）同一データに対して２種の異なる質的研究法を併用し、多角的、総合的にデータを分析し、知見を得ている点である。このような研究法は、箱庭制作における主観的体験に関する､先行調査研究では行われていなかった。そして、Ⅱ－２．２）．（２)で検討したように､異なる質的研究法を併用することにより、単一の方法では、明らかにすることが困難であった観点から分析することが可能になり、総合的な考察が可能になった。

b）通常の箱庭療法にできるだけ近い状況において収集した、継続した箱庭制作における、制作者の主観的体験のデータによる研究という点にある。平松（2001）もまた、継続した箱庭療法面接におけるデータを対象としているが、その分析は主に、箱庭制作後の説明過程に対してなされている。筆者の研究においては、いまだに充分な検討を実施できていない領域・テーマがあるものの、箱庭制作過程と説明過程両方に亘るデータを対象にしている点にオリジナリティがあるといえる。

筆者の一連の研究の限界と今後の課題は､石原（2008）で実施されたような、

調査研究の成果と臨床事例との総合的な検討を実施できていない点にある。このような研究を実施することによって、調査研究において見いだされた知見が、臨床事例における箱庭療法においても、どのような点においては適用が可能であり、反対に、どのような点においては異質性をもつのか、より明確にすることができるだろう。

また、筆者の研究では、ビデオ視聴による内省報告作成を、箱庭制作約１～２週間後に実施する研究計画となっている。この方法では、厳密には、その主観的体験が、箱庭制作面接時におけるものなのか、それとも、ビデオ視聴時におけるものかを判別することが困難となる。これは、一つの限界と言える。

そこで、清水（2004）のように、ビデオ視聴を箱庭制作の翌日に行うことも検討したが、筆者の研究の場合、制作過程と説明過程におけるより多くの場面について、主観的体験に即して、より細やかな内省報告を得ることを優先した。そのため、調査参加者への負荷をできるだけ軽減しつつ、より丁寧に自己の主観的体験を言語化できるよう、調査参加者が自宅で、自己の都合に合わせて、内省報告を作成できる方法をとった。そして、ふりかえり面接で、内省報告を調査者と共有化する際に、その内省が箱庭制作面接時におけるものか、ビデオ視聴時におけるものかについて、調査者が疑問をもった内省報告に関しては、そのいずれかを質問し、明確にするよう工夫した。

調査者自身もビデオ視聴による内省報告を作成した経験から、ビデオ視聴による内省報告作成に関して、感想を以下に記す。ただし、これは、あくまでも、調査者自身の感想にすぎず、厳密なデータの分析によるものではないことを断っておく必要があろう。a）たとえ、箱庭制作後約１～２週間後であっても、ビデオ視聴により、制作過程と説明過程その時の主観的体験を再現することは、かなりの程度可能である。b）ふりかえり面接により、その内省報告が、箱庭制作面接時におけるものか、ビデオ視聴時におけるものかの判別も、かなりの程度可能である。

Ⅲ．M-GTAによる箱庭制作者の主観的体験に関する研究

本章では、M-GTAを用いた箱庭療法に関する研究ついて、検討したい。ところが、箱庭制作における主観的体験をM-GTAを用いて分析した研究は、石原（2008）、花形（2012）と筆者の一連の研究のみである。そこで、本章では、考察の対象をやや広げ、箱庭制作者の主観的体験およびそれと密接に関連したテーマにM-GTAを用いた研究も含め、考察したい。

Ⅲ－１．M-GTAまたはGTAの観点による筆者の研究法に関する検討

楠本（2012）に対して、M-GTAまたはグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の観点から、検討する必要がある。それは、楠本（2012）の研究手続きは、M-GTAが求める手続きを完全に実行できているとは言い難い点があるためである。そのため、データ収集と理論的サンプリングと理論的飽和化

に関する問題を中心に取り上げる。

まず、データ収集と理論的サンプリングについて考える。木下（2003）を参照すると、データ収集と理論的サンプリングとの関連性は、２種に大別できる。つまり、a）データ収集と分析の同時並行および理論的サンプリングによる新たなデータの収集という方法、b）ベース・データと追加データへの２方向への理論的サンプリング、の２種である。

a）は、GTAのオリジナル版などで説明される方法であり、フィールドワークによる調査方法と適合的である。この場合、「最初のデータは関連しそうなものであればよいのであって要はそこから分析を開始し理論的サンプリングを作動していくということになる」。「明らかになりつつある解釈に基づきその適否を見極め、解釈を確定するために、比較思考に立脚する理論的サンプリングにより次に収集すべきデータが何であるか判断する」ことになる（木下、2003、pp.114-115）。

それに対して、b）は、M-GTAで提唱されている方法であり、面接（インタビュー）型調査への適用が強く意識されている。M-GTAは、データに基づいた（grounded-on-data）分析であり、データとの関係はデータから（from data）とデータに向かって（toward data）の２方向に分かれ、相互に関連させて分析が進められるとされている。その後者は、「概念を比較材料としてそれと類似あるいは対極の概念の可能性を考え、データに向かって実際にそうであるかどうかの検討」を行うことである。その自分の解釈に照らして目的的にデータに向かう流れを、理論的サンプリングと呼ぶとしている（木下、2007、pp.50-51）。M-GTAでは、「理論的サンプリングと継続的比較を行うが、データの収集と分析の同時並行性に関しては最初にまとめて収集したデータ（これを『ベース・データ』と呼ぶ）と分析過程にもとづき追加収集されたデータ（同様に『追加データ』と呼ぶ）の二段階に分けて進める」（木下、2003、pp.123-124）。そして、理論的サンプリングは、ベース・データと追加データに対する２方向で行い、その基本は、ベース・データに対する理論的サンプリングであるとする。また、すでに、収集が終わっているデータを分析する場合は、方法論的限定として、ベース・データと追加データをはっきり２段階に区別する方法の変形であり、以下のような点に留意する必要があることを指摘する。追加データは収集できないため、a）ベース・データに対する限定をいっそう明確に提示すること、b）データとの確認が不十分な概念や理論的サンプリングにより確認すべきデータがわかっても実際にできなかった部分について、論文にその旨を明示する必要がある、としている（木下、2003、pp.128-129）。

次に、理論的飽和化について、検討する。GTAにおいて、分析の終了は理論的飽和化をもって判断する。つまり、「継続的比較分析により分析を進めていったときにデータから新たに重要な概念が生成されなくなり、理論的サンプリングからも新たにデータを収集して確認すべて（ママ）問題点がなくなったときを

もって、飽和化したと判断するとされている」。木下（2003）は、このような説明では、どのように理論的飽和化の判断を行うのか難しいことを指摘している（pp.220-221）。そこで、M-GTAでは、grounded-on-dataが成立しやすいように分析対象とするデータを限定的に確定した上で、a）分析の最小単位である概念について分析ワークシートの完成度で「小さな理論的飽和化」の判断を下し、次に、そうして確認的に判断された概念によって構成される分析結果全体対して「理論的飽和化」の判断を下す（木下、2007、p.52）。また、理論的飽和化は、理想的な形であり、完璧に実践しなくてはならないものではなく、その意味を理解した上で、それぞれの分析において収斂化と拡大化との現実的な最適バランスで判断し、その判断根拠を明示する、としている（木下、2003、pp.221-222）。

筆者の研究は、すでに収集された２名のデータに対して、M-GTAによる分析を実施しようとするものである。まずは、Ａ氏の箱庭制作面接10回分のデータに対して、M-GTAによる分析を実施した。それは、確かに、Ａ氏一人だけのデータではあるが、面接回数は10回実施されており、各回のデータを独立したインタビューによるものと考えた場合、M-GTAに必要とされるデータ例の目途を満たすと判断したためである（木下、2003、p.125）。

また、面接回数の設定があるものの、終結を迎えた継続面接による一まとまりのデータであり、「箱庭制作面接の促進要因間の交流の全体像を探索し、その概観を把握する」（楠本、2012）という研究目的に対して、その条件を満たしたデータとなっていると判断したためである。

先に検討した、データ収集と理論的サンプリングと理論的飽和化の観点から楠本（2012）を検討すると、データ収集と理論的サンプリングに関しては、概ねM-GTAが提唱する考え方に則っていると考えられる。しかし、収集が終わっているデータを分析したものであり、追加データの収集が行われていない点で、限界をもっている。今後、Ｂ氏のデータを含めて、分析の精緻化を図ることは可能であるが、Ｂ氏のデータ収集は、Ａ氏の分析以前になされたものであり、追加データの収集とはいえない。理論的飽和化に関して、楠本（2012）では、Ａ氏のデータ全体に対するM-GTAの分析において、データからの概念生成と修正が終了したと判断したという限定が必要となろう。そして、今後は、Ｂ氏のデータも含めた分析を進めることにより、生成される理論をより包括的で、精緻なものにしていくことが目指されるべきである。それにより、「自己理解、自己実現、自己成長を目的として、継続的な箱庭制作を実施した心理的に健康な制作者」を分析焦点者とする限定の中で、面接動機や年代に共通性をもち、かつ、性別の異なる調査参加者のデータを含めることができる。

あるいは、一連の筆者の研究で実施された、同一調査参加者に対する複数回のインタビュー実施を、Charmaz（2006）のGTAの手法を基に、異なった観点から検討することもできる。Charmazは、同一の調査参加者に複数回インタビューすることを行っている。それは、a）データの深さと範囲の広さにより

違いが生じる研究の質や信用（憑）性（credibility）を高めるための一方法であり（pp.24-25）、理論的サンプリングのための一方法である、と説明している（pp.116-117、p.120）。一連の筆者の研究で、同一調査参加者に対して、複数回面接が実施されたのは、理論的サンプリングのためではない。継続的な箱庭制作面接のプロセスを研究目的にしたためである。しかし、継続的な面接は、調査参加者から得られるデータが深さをもったものとなることに寄与した可能性は十分にある。この点に関する一つの根拠として、楠本（2012）や楠本（投稿中）で示した、系列的理解による制作者の主観的体験の変容や面接の展開についての検討による成果が挙げられる。各回単独では、体験や表現に限界がある場合でも、面接が重ねられることにより、それらの体験や表現に深まりや広がりが見られた。そして、それは調査者の制作者への理解の深化に寄与した。

Ⅲ－２．M-GTAを用いた箱庭制作者の主観的体験についての先行研究

別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」に記したように、石原（2008）は、箱庭制作者の主観的体験に関して、M-GTAを準用して、独創的な研究を行っている。「準用して」としたのは、石原が自身の研究に対して、以下のように記しているためである。その部分を直接引用する前に、その記述の前提となる部分をまず記す。

石原（2008）は、木下（2003、p.35）を参照し、GTAと呼びうる研究法の満たすべき５要件を挙げている。それは、a）データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法であること、b）分析において、コーディング方法としてのオープン・コーディングと選択的コーディング、c）基軸となる継続的比較分析、d）その機能面である理論的サンプリング、e）理論的飽和化の５点である。そして、自己の研究を検討し、a）の「データに密着した分析」とb）とc）に関しては、それらが該当すると考えている。しかし、自己の研究が、a）の「分析から独自の理論を生成する質的研究」とは、おそらく呼べないとしている。

石原（2008）がその理由として挙げている部分を長くなるが、以下に直接引用する（pp.17-18）。

> 本研究で得られるデータは、一つのミニチュアを選び、置くという箱庭制作過程における制作者の主観的な体験（の語り）である。そこから記述できるのは、制作者が制作過程でどのような体験をしているのかということであり、データに密着した分析によって、さまざまな体験のヴァリエーションを描くことができたとしても、そこから「独自の理論」を生成するところまで至るのはおそらく困難であろう。このことは、「理論的サンプリング」や「理論的飽和化」という問題ともつながってくる。
>
> 「理論的サンプリング」とは、データの分析を行うなかで、さらなるデータを収集すべき必要が出てきたときには、分析経過から見えてきた必然性に基づいて対象（サンプル）を決定していくことを指す。そして、この「理

論的サンプリング」は、これ以上新たなデータを収集する必要がないと判断される、つまり「理論的飽和化」するまで繰り返される。この考え方自体は、研究を緻密に遂行していくうえで、欠かせないものである。

さて、本研究で扱うのは、箱庭制作過程における制作者の主観的な体験である。たとえば、はじめにいわゆる適応した大学生を対象に調査研究を行い、データを集めるとしよう。そこから得られるデータを一通り分析していったとして、次に必要なデータとはどのようなデータとなるだろうか。

ここで、本研究が心理臨床学の立場から行う研究であることが、大切になってくる。心理臨床の研究は、心理臨床の実践から乖離してしまってはならない。制作者の主観的な体験に目を向けることで、本来照準を当てたいのは、心理臨床の実践において出会うクライエントが、箱庭制作過程においてどのような体験をしているのかということである。したがって、いわゆる適応した大学生を対象に行った調査の次の段階で、そのデータを充実させていこうとすると、今度は、実践場面でのクライエントの体験に目を向けていく必要が出てくるのである。つまり「理論的サンプリング」を行うならば、臨床実践におけるクライエントの主観的体験を「サンプル」としなければならない。

ここに、心理臨床の実践に照準を合わせた心理臨床学の研究が、M-GTAの手法に馴染まない局面が立ち現われてくるように思う。心理臨床学においては、当然のことながら、心理臨床の実践が最優先事項となる。臨床実践の場を訪れるクライエントは、クライエント自身の意思で来談するのであって、セラピストがクライエントを選ぶのではない。心理臨床学の研究者は、まず何よりも心理臨床の実践家なのであり、研究者から能動的に「理論的サンプリング」を行っていくというようなあり方は、心理臨床の実践家としてのあり方と両立しない。したがって、一通り分析を終えたデータを臨床事例によって、充実させていこうとするためには、それに適した臨床事例に出会うという偶然を頼りにするより他ないということになる。

臨床事例によってデータを充実させていくことができないからと言って、いわゆる適応した大学生のデータをどんどん増やしていくというような研究を行うとしても、どこまで行ってもそれは、非臨床事例である大学生のデータであって、臨床実践で出会うクライエントの体験に直接的に迫ることにならない。

以上のような心理臨床学の研究の独自の問題と深く関連して、臨床実践に照準を当てる心理臨床学の研究では、M-GTAで言うところの「理論的飽和化」に達するのは非常に困難であると考えられる。

このようなわけで、本研究でも、おそらく「理論的飽和化」を達成するところまでデータを充実させることはほぼ不可能と考えられ、「独自の理論」を生成するところまで到達することは困難だと考えられるのである。

長い引用のため、整理すると、石原が挙げている論点は、a）理論的サンプリング、b）理論的飽和化、c）データの質（適応した調査参加者と臨床事例のクライエント）、d）心理臨床学における独自の理論生成となるだろう。

筆者は、これらの論点を検討するには、さらに、M-GTAの分析テーマと分析焦点者と【応用者】の観点が加えられる必要があると考える。まずは、これらの用語について、確認したい。M-GTAでは、分析テーマと分析焦点者の２つの視点に絞って、データをみていき、解釈を行う（木下、2007、p.143）。「研究テーマをデータに即して分析していけるように絞り込んだものが分析テーマ」である（木下、2007、p.144）。研究テーマをgrounded on dataの分析がしやすいところまで絞りこむ必要が生じるために、分析テーマが設定される（木下、2003、p.131）。分析焦点者は、M-GTAの方法論的限定の一つである。「分析結果として提示するグランウンデッド・セオリーの適用可能範囲、一般化可能範囲は分析焦点者である、『人（限定集団）』から示すことになる」（木下、2007、p.157）。また、【応用者】は、発表されたグランウンデッド・セオリーの評価と関連する。M-GTAは、「発表されたグランウンデッド・セオリーは、応用されて、つまり、データが収集された現場と同じような社会的な場に戻されて、そこでの現実的問題に対して試されることによってその出来ばえが評価されるべきとする立場である。応用が検証であるという視点と、それから、応用者が必要な修正を行うことで目的に適った活用ができることを重視する。だから、ここでいう応用とは提示されたグランウンデッド・セオリーをただ機械的に当てはめるという意味での応用なのではなく、また、調査が行われたのとまったく同一の場面で当てはめるという意味でもなく―それは不可能である―、応用者がそのときの自分の状況特性と目的に基づき必要な修正をしながら用いていくのである」（木下、2003、pp.29-30）。

石原（2008）は、自身の研究に対して「分析から独自の理論を生成する質的研究」とは、おそらく呼べないとしているが、筆者には、それは厳しすぎる自己評価に思える。先に挙げた、a）理論的サンプリング、b）理論的飽和化、c）データの質（適応した調査参加者と臨床事例のクライエント）、d）心理臨床学における独自の理論生成、の４点について検討していきたい。

a）理論的サンプリングについて

石原（2008）が、理論的サンプリングに関して述べていることは、Ⅲ－１で確認した、データ収集と理論的サンプリングとの関係の問題である。石原の説明は、Ⅲ－１で示した、「a）データ収集と分析の同時並行および理論的サンプリングによる新たなデータの収集という方法」に準じたものとなっている。しかし、M-GTAの場合、理論的サンプリングは、ベース・データと追加データに対する２方向で行い、その基本は、ベース・データに対する理論的サンプリングであると考えるわけであるから、石原の研究の場合、ベース・データに対する理論的サンプリングは実施されていると考えてよいのではないか。そして、

追加データを収集できなかった場合の留意点に関して、明示することで、一定の要件を満たすと考えてよいのではないか。

b）理論的飽和化について

この論点は、M-GTAにおける理論的飽和化についての考え方、分析焦点者と関連していると考えられる。石原（2008）の場合、分析焦点者は、例えば、「適応した箱庭制作者」となるだろう。そのような限定を行った上で、理論的飽和化に関しては、やはりⅢ－１で検討した木下の考えに従うことで、解決されるのではないだろうか。つまり、概念について分析ワークシートの完成度で「小さな理論的飽和化」の判断を下し、次に、そうして確認的に判断された概念によって構成される分析結果全体対して「理論的飽和化」の判断を下す（木下、2007、p.52）。理論的飽和化は、理想的な形であり、完璧に実践しなくてはならないものではなく、その意味を理解した上で、それぞれの分析において収斂化と拡大化との現実的な最適バランスで判断し、その判断根拠を明示するとの考えである。

c）データの質（適応した調査参加者と臨床事例のクライエント）とd）心理臨床学における独自の理論生成について

この両論点は、密接に関連している。このテーマに関する石原（2008）の論は、確かに納得できる点がある。しかし、c）に関して、M-GTAの研究手法で言えば、分析テーマと分析焦点者の限定を行うという方法で、解決可能だとも考えられる。つまり、「箱庭制作の過程における制作者の主観的体験に焦点を当て、この観点から箱庭療法について検討する」（石原、2008、p.20）ことを分析テーマとし、先ほどの分析焦点者の限定を加えるということである。これでは、確かに、M-GTAの分析において、臨床事例におけるクライエントの主観的体験を包含することにはならない。しかし、だからと言って、筆者には、石原の研究の価値が著しく低下するように思えない。

そして、心理臨床学における独自の理論生成に関しては、【応用者】による評価を待つということになろう。つまり、石原（2008）で得られた知見が、臨床事例におけるクライエントの箱庭制作に関する主観的体験と、どの点では合致し、どの点では違いがあるのかは、多くの箱庭療法家による実践や生成された理論の【応用】や事例研究などにより、評価されていくべきだということである。臨床事例には、確かに、その独自性が存在する。しかし、臨床事例のクライエントの心性と心理的に健康な人々の心性の間には、隔絶された溝があるのではなく、「スペクトラム」と表現できるような連続性もある。それゆえに、心理的に健康で、適応した箱庭制作者の主観的体験からデータに密着して生成された理論には、臨床事例にも適用可能な理論が存在する可能性は十分にあると考えられる。石原自身、臨床事例と調査事例の比較を行っている。そして、砂箱が制作者にどのように体験されるのかを検討している。そこには、a）両者に共通する体験として、空間を限定する現物の砂箱と、b）調査事例にのみ

見られた、まるで枠がないかのようにどこまでも広がるイメージの中で背景に溶け込む砂箱体験があった（pp.219-226）。また、箱庭療法が、臨床事例だけでなく、心理に健康な人々の自己実現や自己理解の促進のために行われることもある。それらを総合的に勘案して、研究内容が評価される必要があるだろう。

以上、検討してきたが、石原（2008）がM-GTAを用いた調査研究および事例研究から総合的に得た知見には、確かに石原自身が述べる一定の限界をもちつつも、単なる調査研究を超え、心理臨床につながった独自な理論が存在する、と筆者は考える。

花形（2012）もM-GTAを用いて、箱庭制作者の内的プロセスを分析している。この研究は、初回箱庭制作における内的プロセスに焦点を絞っている。M-GTAにより、【事前イメージ】【戸惑い】【体験過程の変化】【制作意欲】の４つのカテゴリー・グループが生成されている。そして、結果図が示されている。その結果図を単純化して示すと、【事前イメージ】⇨【戸惑い】⇨【体験過程の変化】⇨【制作意欲】となる。このように、データに密着した分析から生成された独自な「初回箱庭制作における制作者の内的プロセスのモデル」が構築されている。また、花形の研究は、理論的サンプリングによる追加データの収集を順次行っている。箱庭制作者の主観的体験に関する研究において、このように理論的サンプリングによる追加データ収集を行った研究例は、他になく、M-GTAの手続きと整合性が高い研究となっている。

大石他（2011）は、M-GTAにより、特別養護老人ホーム入居者の箱庭制作における制作者と箱庭とのかかわりを分析している。この「かかわり」に関するデータとして、調査者が記録した、制作者の箱庭とのかかわりの様子や周囲の状況が用いられている。概念の具体例を見ると、制作者の発言に加えて、調査者の観察記録が用いられている。一連の筆者の研究との関連でいえば、制作者の主観的体験のデータに加えて、制作者の行動や周囲の状況に関する観察データが含まれている点で異なっている。

大石他（2011）では、このようなデータがM-GTAで分析され、「Ⅰ．『鮮やかさ』に触発される感情、Ⅱ．アイテムとのやりとりを通した『鮮やか』とのかかわり、Ⅲ．かかわりのなかで浮かび上がる『鮮やかさ』、Ⅳ．『鮮やかさ』から距離を置く動き、という四つの大カテゴリーが生成された」（p.317）。全体像として、結果図が描かれ、大カテゴリーⅠが、全体を覆うなか、大カテゴリーⅡとⅢが同時並行的・重層的なものとして、入居者と箱庭とのかかわりを構成しているとする。そのようなかかわりから離れる動きとして、大カテゴリーⅣを位置づけている。そして、「入居者と箱庭とのかかわりとは、両面的な感情、さまざまな距離感や濃淡のなか、『鮮やかさ』とのかかわりを積み重ねることで、揺さぶられつつ、そこに自身の存在感が織り込まれ、新たな『鮮やかさ』として浮かび上がるプロセスであった」との結論を得ている。さらに、制作者と箱庭とのかかわり自体の意味の研究は、先行研究では十分に検討されておらず、「鮮

やかさ」という視点は、作品の解釈を行うだけでは十分にそこで生じていることの意味を汲み取れないような状況において、セラピストが箱庭と向き合う際の視座を提供することになる、としている（pp.324-327）。このように、大石他（2011）は、データに密着した分析から、独自の理論を生成した、興味深い研究となっている。

Ⅲ－３．先行研究と筆者の研究の比較

前節で、M-GTAを用いて、箱庭制作者の主観的体験（あるいはそれを含んだ）を分析した研究を概観した。このようなタイプの研究は、まだ、数は少ないものの、それぞれの研究において、独自の理論やモデルが生成されていた。それらの研究と楠本（2012）との比較により見いだされた、筆者の研究のオリジナリティ、限界や今後の課題について記す。

筆者の研究も含む、箱庭制作者の主観的体験をM-GTAを用いて分析した研究群は、M-GTAを用いているという点では共通性をもつが、分析テーマや分析により得られた知見は、それぞれ独自である。このような意味では、楠本（2012）にはオリジナリティが存在すると考えてもよいだろう。a）【制作過程と外界・日常生活の交流】（図２の⑥）と、b）【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】（図２の⑪）および【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】（図２の⑫）に関する考察は、他のM-GTAを用いた調査研究では、取り上げられていない。また、継続した箱庭制作面接におけるデータであることも、他の調査研究とは異なる独自性をもっている。

筆者の研究の限界や課題は、a）理論的サンプリングによる追加データの収集ができていない点と、b）心理的に健康で、適応した制作者のデータであるという点と、c）M-GTAによる、詳細な考察をまだ実施できていない領域・テーマがある点である。

a）に関して、今後、必要なデータを追加収集することは不可能ではないものの、現時点では、調査参加の申し出があるわけではないので、一旦、A氏により生成した理論の精緻化のために、B氏のデータを加え、分析することが、現実的な到達点だろう。

b）に関して、臨床事例のクライエントに対して、筆者が行ったような調査を行うことは侵襲性が高いため、実施すべきではないと考える。たとえ、心理的に健康な調査参加者であっても、筆者が行った調査方法には、いくつかの課題があり、配慮が必要であった。それに関して、楠本（投稿中）で検討しているため、以下に引用する。

> 内省報告、ふりかえり面接は、本研究において必要な調査方法であるものの、その課題・限界も示唆された。
>
> 第４回ふりかえり面接で、制作者は、**箱庭制作面接では深まっていく感じだが、ふりかえり面接では平行移動するような感じ**と語った（**４－ふり**

かえり)。調査者は、ふりかえり面接が制作者の自己成長を阻害していないか危惧し、質問した。制作者は**大きな支障はない**と答えたが、ふりかえり面接は内的プロセスの深まりを小休止させる危険が示唆された。そこで、ふりかえり面接を慎重に継続するが、制作者の自己成長の促進が本面接の第一目的であることを再確認した。

また、ビデオ視聴による内省報告作成は、研究への関与・動機づけが強くないと継続が難しいため、調査参加者の選択や意思確認に慎重な検討・配慮が必要である。さらに、内省報告により、過度の知性化を起こさないための配慮も必要だった。本研究では、知性化を疑わせる内省報告箇所に対して、ふりかえり面接での質問を控え、それ以上の言語化を回避した。それにより、知性化をできる限り避け、箱庭制作におけるイメージの生命力やイメージの自然な流れを尊重できるよう、配慮した。

すると、石原（2008）について検討した部分と重なるが、楠本（2012）においてM-GTAによって生成された理論に関しては、【応用者】による評価を待つということになろう。楠本（2012）で得られた知見が、臨床事例におけるクライエントの箱庭制作に関する主観的体験と、どの点では合致し、どの点では違いがあるのかは、多くの箱庭療法家による実践や生成された理論の【応用】や事例研究などにより、評価されていくことになる。

c）については、今後、B氏のデータを加え、M-GTAの分析を実施した上で、楠本（2012）では、充分に取り上げられなかった領域・テーマについて、詳細な考察を実施していきたい。

Ⅳ．結論

Ⅱ～Ⅲに亘って、それぞれ異なる観点から、一連の筆者の研究のオリジナリティ、限界、今後の課題について、検討してきた。本章では、別稿「箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究」で検討した観点も一部含め、それらの内、中心的な論点に関して総合的に考察する。

Ⅳ－１．オリジナリティに関して

一連の筆者の研究と共通性をもつ、先行研究は少なくなかった。そのため、筆者の研究にオリジナリティを見出せるとすれば、それは複数の要因の組み合わせによるものとなる。それを、１）研究テーマと２）研究方法の両観点から、整理したい。

１）研究テーマ

研究テーマにおいて、筆者の研究は、大枠では、石原（2008）と共通性をもっている。それは、どちらも、「箱庭制作過程における制作者の主観的体験」に焦点を当て、研究開始時点ではより詳細な研究テーマを設定していないためで

ある。そこで、筆者の研究のオリジナリティを見出すためには、他の要因を付加して検討する必要がある。それらの要因は、通常の箱庭療法にできるだけ近い状況における制作者の主観的体験に関する研究という点にある。それは、以下のa）～d）が総合的に実現されていることにより、保証されている。a）調査目的のみではない、制作者の自己理解・自己実現・自己成長を目的とした面接場面であること、b）継続した箱庭制作面接であること、c）箱庭制作過程と説明過程両方に亘るデータであること、d）ミニチュアの使用制限を行っていないこと、の４点である。

２）研究方法

先行研究においても、多元的方法、方法のトライアンギュレーションが実施されていることがわかった。しかし、一連の筆者の研究にオリジナリティがあるとすれば、以下の点にある。それは、同一データに対してM-GTAと単一事例質的研究という２種の異なる質的研究法により、多角的、総合的にデータを分析し、知見を得ている点である。このような研究法は、箱庭制作における主観的体験に関する、先行の調査研究では行われていなかった。そして、異なる質的研究法を併用することにより、単一の方法では、明らかにすることが困難であった観点から分析することが可能になり、総合的な考察が可能になった。

Ⅳ－２．限界と今後の課題に関して

１）研究テーマ

筆者の研究の限界は、心理的な問題・課題を抱えた臨床事例による研究でない点が挙げられる。これに関しては、一連の筆者の研究で得られた知見に関して、M-GTAでいう【応用者】による評価を待つということになる。つまり、筆者の研究で得られた知見が、臨床事例におけるクライエントの箱庭制作に関する主観的体験と、どの点では合致し、どの点では違いがあるのかは、多くの箱庭療法家による実践や生成された理論の【応用】や事例研究などにより、評価されていくことになる。

また、今後の課題として、以下の２点が挙げられる。a）M-GTAによる詳細な考察が、一部の領域（図２の⑥、⑪、⑫）に留まっており、箱庭療法を巡る全体的な知見を得るためには、詳細な考察ができていない領域を考察する必要があること、b）現状では、Ａ氏のデータだけの分析に留まっており、少なくともＢ氏のデータを加え、生成した理論を精緻化し、一般化の可能性をより高める努力が必要であること、の２点である。

２）研究方法

筆者の研究の限界は、理論的サンプリングによる追加データの収集ができていない点である。今後、必要なデータを追加収集することは不可能ではないものの、一旦、Ａ氏により生成した理論の精緻化のために、Ｂ氏のデータを加え、分析することが、現実的な到達点となる。

本稿は、指導者に直接的な指導を受けず、筆者一人で考察を進めてきた。そのため、議論に不備な点があるのではないか、特に、質的研究法に関する検討に関して、筆者の誤解や議論の不足があるのではないかとの懸念がある。箱庭療法の研究者や実践家、質的研究法をもちいた研究を実施している研究者の方々に、本稿に関するご指導、ご指摘をいただければ、幸いに思う。

注：

＊1 楠本（2011）、楠本（2012）、楠本（投稿中）は、治療面接のデータを基にしていないため、箱庭療法という語は用いず、箱庭制作面接とした。ただし、本稿で、他の研究者の研究に言及する場合には、その研究者の用法に従い、箱庭療法という語を使用する場合がある。

謝辞：

佛教大学博士後期課程在学中より、東山弘子先生、石原宏先生から、たびたびご指導いただいたことで、箱庭制作過程・説明過程における制作者の主観的体験に関する研究を、進展させることができた。こころより感謝を申し上げます。

東山紘久京都大学名誉教授には、大阪教育大学修士課程在学中より、永きにわたって、箱庭療法をはじめとする心理臨床に関して、ご指導いただいた。厚くお礼を申し上げます。

付記：

本稿は、2012年度南山大学パッヘ研究奨励金Ｉ－Ａ－２による成果の一部である。

引用文献

Bloor,M.&Wood,F.:Keyword in qualitative methods:A vocabulary of reseach concepts. London:Sage,2006（上淵寿監訳：質的研究法キーワード．金子書房．2009）

Charmaz,K.:Constructing grounded theory:A practical guide through qualitative analysis.London:sage,2006（抱井尚子・末田清子監訳：グラウンデッド・セオリーの構築：社会構成主義からの挑戦．ナカニシヤ出版．2008）

Denzin,N.K.&Lincoln,Y.S.:Introduction:The discipline and practice of qualitative research, In N.Denzin & Y.S.Lincoln（eds）,Handbook of qualitative Reserch（2nd.ed）,London,Thousand Oaks,New Delhi:Sage. pp.1-29.,2000（平山満義監訳、岡野一郎・古賀正義編訳：質的研究ハンドブック1巻　―質的研究のパラダイムと眺望．序章：質的研究の学問と実践.北大路書房．2006）

Flick,U.:Qualitative forschung.Hamburg:Rowohlt,1995（小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳：質的研究法入門　―＜人間の科学＞のための方法論.

春秋社.2002）
花形武：初回箱庭制作における内的プロセスについて　―箱庭制作経験のない大学生・大学院生を対象に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて. 箱庭療法学研究，25（2），pp.91-100．2012
平松清志：箱庭療法のプロセス　―学校教育臨床と基礎的研究.金剛出版.2001
Holstein,J.A.&Gubriunm,J.F.:The active interview,the United States,London and New Delhi:Sage,1995（山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳：アクティヴ・インタビュー　―相互行為としての社会調査.せりか書房.2004）
石原宏：制作者の体験からみた箱庭療法の「治療的要因」に関する心理臨床学的研究．平成17・18・19年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書.2008
伊藤真理子：イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程．箱庭療法学研究,17（2）,pp.51-64．2005
片畑真由美：臨床イメージにおける内的体験についての考察　―箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から.京都大学大学院教育学研究科紀要，52. pp.240-252．2006
木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践　―質的研究への誘い. 弘文堂.2003
木下康仁：ライブ講義M-GTA　―実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて.弘文堂.2007
木下康仁:質的研究と記述の厚み　―M-GTA・事例・エスノグラフィー.弘文堂.2009
楠本和彦：箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み,佛教大学大学院紀要教育学研究科篇,39,pp.103-120,2011
楠本和彦：箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用（交流）に関する質的研究．箱庭療法学研究，25（1），pp.51-64．2012
楠本和彦（投稿中）：箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究. 箱庭療法学研究，25（3），2013（掲載予定）
大石真吾：箱庭制作における砂の作用に関する一研究　―作り手の主観的体験にもとづいて．箱庭療法学研究,22（2）,pp.63-71．2010
大石真吾・高橋優佳・森崎志麻・浅田恵美子・井芹聖文・千秋佳世・加藤奈奈子：特別養護老人ホームに箱庭を持ち込む試み.心理臨床学研究，29（3）,pp.317-328.2011
Schwant,T.A.:The SAGE dictionary of qualitative inquiry 3rd edition,London & New Delhi:Sage,2007（伊藤勇・徳川直人・内田健監訳：質的研究用語事典.北大路書房.2009）
清水亜紀子：箱庭制作場面への立ち会いの意義について　―ビデオ記録を用いたプロセス研究の試み．箱庭療法学研究,17（1）,pp.33-49.2004
山本力：研究法としての事例研究．山本力・鶴田和美編著，心理臨床家のための「事例研究」の進め方．2章．北大路書房．2001

■ Article

Monetary Wealth or Shared Values? Multilevel Analysis of Family Life Satisfaction

Satoshi Moriizumi
English Department, Nanzan Junior College

経済的豊かさか、価値観の共有か？　―家庭生活満足度のマルチレベル分析―

森　泉　　哲
（南山大学短期大学部英語科）

要約

望ましい人生に寄与する要因として心理的幸福感が指摘され、その幸福感を予測する要因として、経済的豊かさ、身体的健康、社会的関係などの要因があるとされる。しかし、これらの測定は個人変数を使用しており、より大きな社会構造まで考慮されたものではない。そこで、本研究では、家庭生活満足度に影響を与えると考えられる要因として経済的豊かさと性役割意識を取り上げ、それらの相対的影響度について検討した。また性役割意識や経済的な豊かさは国によって異なるとされていることから、家庭生活満足度の個人、国レベル、さらには両レベルの交互作用の影響について階層線形モデル（HLM）を使用して検討した。

本研究は、国際社会調査プログラム（International Social Survey Programme, ISSP）が2002年度に世界40カ国で実施した「家族と性役割の変化III」の２次分析である。国レベルの統計データがそろっている25カ国合計34,149名を対象とした。従属変数は、家庭生活満足度１項目であった。個人レベルの項目は、a）家事分担に関する価値観、b）子育ての決定の仕方、c）世帯年間収入である。国レベルとしては、a）性平等主義尺度（House et al., 2004）による国の数値を標準化した値、b）国内総生産額（GDP）であった。

分析を行ったところ以下の結果が得られた。まず個人レベルでは、家事分担と子育ての価値観が配偶者間で共有されることは家庭生活満足度に正の影響を及ぼしており、その効果は子育ての決定においてより強い効果がみられた。また、世帯年間収入はごくわずかだが有意に家庭生活満足度に正の影響を及ぼしていた。国レベルでは、性平等主義は負の影響を及ぼしていたが、GDPは有意ではなかった。個人と国のレベル間交互作用においては、家事分担×性平等主義、子育て×性平等主義が有意であり、両者とも類似した特徴が見出された。

つまり、家事分担、子育ての平等主義が配偶者間で高く共有されている場合、国の性平等主義レベルにかかわらず､家庭生活満足感は高くなる傾向があるが、家事分担と子育ては女性がより行うべきと認識されていると、家庭生活満足感は一般的には低くなり、その程度は性平等主義傾向が高い国では特に低くなるという傾向がみられた。つまり、性平等主義が高い国では、配偶者間で平等な役割が期待されるが、それが期待以下であるとより不満が高まることが考えられる。結論として、経済的な豊かさよりも、性役割の平等性が共有されると家庭生活満足感が高まり、国との交互作用も見られることが明らかとなった。

What enables a good life has been one of the major concerns in social psychology (e.g., Snyder, Lopez, & Pedrotti, 2011). A good life has often been characterized as psychological well-being, including the concepts of happiness and relational satisfaction. In fact, when people were asked to evaluate the life outcomes they would find most desirable, they reported that being happy was more valued than any other factor such as wealth, attractiveness, health, or love (Diener & Oishi, 2004).

Researchers have been investigating how material wealth, physical health, and social relationships affect aspects of psychological well-being such as subjective happiness (Aknin & Norton, 2009; Lucas & Diener, 2008). Among various factors that can be related to psychological well-being, the benefits of social relationships to people's lives have been an important concern. However, in comparisons between income and the effect size of social relationships, researchers found that social relationship variables are significantly associated with happiness, but the effect size tends to be quite small (Aknin & Norton, 2009; Lucas & Dyrenforth, 2006). The size of one's social network and the number of close friends are significant predictors of happiness, but the strength of the relationship is the same as that for income predictors (Lucas & Dyrenforth, 2006).

Beyond general psychological well-being, psychological well-being particularly in the family domain has been also been closely studied. The importance of the family situation for happiness has been demonstrated in a large number of studies (e.g., Broman, 1991; Diener, Suh, Lucas & Smith, 1999). It has consistently been indicated that satisfaction with family life, as well as sound relationships with children and spouses, are substantial contributors to the overall feeling of well-being (Hellevik, 2003). Similarly, marital conflict may lead to adverse effects on children's well-being (Bradford & Barber, 2005) and have a negative impact on overall family satisfaction (Mechanic & Hansell, 1989). Therefore, the sharing of common values among spouses may increase

the chance to spend good family lives together. How well families deal with the dual needs of income and care is a vital issue. However, not many studies have been done to investigate the relative importance of both monetary wealth and the quality of family relationships.

The general purpose of this study is thus to investigate the family satisfaction process by using the variables of monetary wealth and the value of gender roles. Since monetary wealth and gender values are different country by country, the author would like to examine these relationships at both the national and individual levels. Cross-cultural research thus far has analyzed and used only individual-level data to compare and contrast psychological and behavioral processes across cultures. However, this type of research has been problematic in that researchers cannot distinguish the differences between individual and societal levels. This kind of research has underestimated how societal and cultural differences impact on individual differences, and how the individual and societal levels interact with each other. However, the development of statistical analysis and the relative ease of obtaining large data across nations have enabled researchers to pay more attention to the complex relationship between individual and societal processes with respect to social psychological processes. We are at the beginning stage of understanding how the societal and individual levels affect psychological well-being in general, and family life satisfaction in particular.

In a nutshell, the purpose of this paper is to investigate to what extent family life satisfaction is predicted by monetary wealth or the quality of social relationships, particularly focusing on gender roles among married couples. The second purpose is to examine whether individual and national cultural levels interact to predict family life satisfaction.

Method

Data

The author conducted a secondary data analysis by using the dataset Family and Changing Gender Roles III (2002) in the International Social Survey Program (ISSP). The ISSP is a cross-national collaboration survey covering topics in social science such as psychology, politics, and economics. A different topic has been assigned and investigated each year since 1985. For the current analysis, data collected in 2002 are used. Originally data from more than 40 countries were collected, but ultimately data from a total of 34,149 people (15,040 males and 19,074 females) from 25 countries were analyzed in the current study because the author was not able to obtain data

from some countries. Ages ranged from 15 to 96 (*Mean*=45.27, *SD*=16.97). Sample sizes in each country ranged from 888 to 2,455 (See Table 1).

Table 1 Participating countries and sample sizes

Country	Sample Size	Country	Sample Size
Australia	1214	Philippines	1180
Germany	888	Israel	1190
Great Britain	1855	Japan	1122
United States	1148	Spain	2455
Austria	1866	France	1818
Hungary	1018	Portugal	1083
Ireland	1196	Denmark	1341
Netherlands	1200	Switzerland	970
Sweden	1034	Brazil	1987
Slovenia	1070	Finland	1258
Poland	1222	Mexico	1474
Russia	1606	Taiwan	1970
New Zealand	984		

Measurement

Relevant variables for the current analysis were chosen from among various questions that were asked regarding several dimensions of family life in the original questionnaire. More concretely, family life satisfaction is a dependent variable. Division of household work, and decisions regarding childrearing, and household annual incomes are level-1 (individual-level) predictors, while gender egalitarianism and the index of gross domestic product (GDP) are level-2 (country-level) predictors. In other words, as monetary variables, the indicator for household income is used as a level-1 predictor and that of country's GDP is used as a level-2 predictor. As gender role variables, two variables that include gender roles in household work and childrearing are used as level-1 (individual-level) predictors, and gender egalitarianism is a level-2 predictor.

Family Life Satisfaction. Family life satisfaction was measured with one item asking, "All things considered, how satisfied are you with your family life?" This item was measured by a 7-point Likert-type scale (1-*completely dissatisfied,* 7-*completely satisfied*).

Household Income. A level-1 predictor and monetary variable is annual household income. The survey asked how much each household earned. The participants answered by using their national currencies. For example, many European countries use the euro. Because conversion from original national currencies to US dollars was necessary, this was done by checking the average foreign currency exchange rate in 2002. Also, because in many

countries the survey asked monthly salary, the annual income was calculated based on monthly salary.

Gross Domestic Product (GDP). A level-2 predictor is the gross domestic product (GDP) of each country. This index was easily obtained from the International Monetary Fund website. Table 2 shows the top 8 countries in terms of GDP.

Table 2 GDP in Top 8 countries

Country	GDP in 2002
1.US	10,470
2. Japan	4,326
3. Germany	2,400
4. UK	1,794
5. China	1,575
6. Italy	1,465
7. Spain	836
8. Canada	834

Unit: billion U.S. dollars

Household work and childrearing. Two level-1 predictors about gender role are division of household work and decisions regarding childrearing. Division of household work scores were added from four types of household work, including a) doing the laundry, b) shopping for groceries, c) cleaning, and d) preparing meals, taken from the original questionnaire items. Questions "In your household who does ---?" were used, and participants answered from five options (1-*always me*, 2-*usually me*, 3-*about equal/both together*, 4-*usually my spouse/partner*, 5-*always my spouse/partner)*. Because this response style generated different responses based on participants' sex, the author reorganized these categories as follows; 1-*always the woman*, 2-*usually the woman*, 3-*about equal/both together*, 4-*usually the man*, 5-*always the man*. This reorganization enabled the creation of an ordinal scale ranging from 1-*always the woman* to 3-*equal/both together* (i.e., from gender inequality to gender equality), and categories 4 and 5 were excluded because they were qualitatively different from categories 1 and 2. By checking the frequency of each point, very few participants answered that household work and childrearing are the husband's job (See Figure 1 for response to doing the laundry). Thus, the author decided not to include categories 4 (*usually the man*) and 5 (*always the man*) to create the ordinal scale. This fact also shows that it is still rare that husbands predominantly do household work and childrearing in many countries.

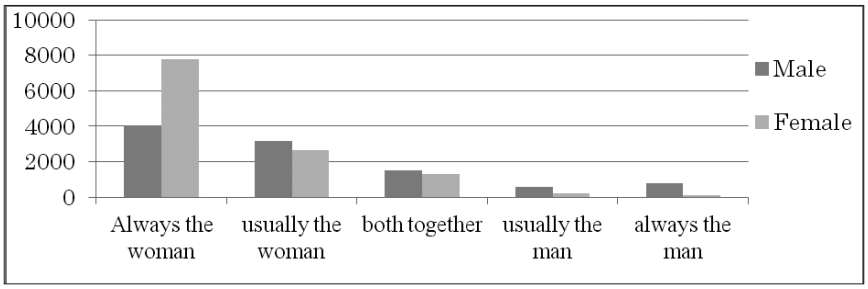


Figure 1. Frequency of responses to the question about division of doing the laundry.

Gender Egalitarianism. Gender egalitarianism is a level-2 predictor in gender roles. This is one of the prominent cultural patterns in cross-cultural psychology. In fact, one of the landmark works of cross-cultural communication and psychology is Hofstede's study (2001), which investigated cultural patterns across the globe. He identified the five dimensions of cultural patterns, and one of them was masculinity-femininity. Recently, a larger study was conducted to examine cultural patterns worldwide. This was done by House and his team of more than 170 investigators (House et al., 2004). The project GLOBE (global leadership and organizational behavioral effectiveness) collected information from nearly 20,000 middle managers in 61 countries. Based on seminal works on cross-cultural research (Hofstede, 1980; Kluckhohn & Strodtbeck, 1961), this team generated the questionnaire items and found nine dimensions. One of them is gender egalitarianism, which is defined as "the degree to which an organization or a society minimizes gender role differences while promoting gender equality" (p. 12). The current study used standardized scores that appeared in Lustig and Koester (2010), which is based on the index of gender egalitarianism found in the GLOBE project. Table 3 shows the index of gender egalitarianism of 25 countries in the current study. Generally, the table shows that the higher negative values, the lower gender egalitarianism.

Table 3 Gender Egalitarianism Index

Country	Gender Value	Country	Gender Value
Hungary	0.22	Finland	-1.75
Russia	0.19	United tates	-1.78
Poland	0.05	Brazil	-1.86
Slovenia	-0.11	New Zealand	-2.10
Denmark	-0.19	Ireland	-2.13
Sweden	-0.43	Israel	-2.18
Great Britain	-0.89	Japan	-2.18
Portugal	-0.91	Germany	-2.42
Philippines	-0.97	Austria	-2.45
France	-0.97	Spain	-2.66
Mexico	-0.97	Switzerland	-2.77
Netherlands	-1.35	Taiwan	-2.91
Australia	-1.61		

Note. See Lustig and Koester (2010) for details.

Results

Hypothesized Model

The following two-level hierarchical model was hypothesized: a) family life satisfaction is a dependent variable, b) level-1 (individual level) predictors are household income, division of household work, and childrearing decisions, c) level-2 (national culture level) predictors are national GDP and national gender egalitarianism index. In the hypothesized model, all level-1 predictors are predicted to have random effects to assess variability across countries.

Null Model

To check the validity of the multilevel model, an intraclass correlation (ICC) was calculated. ICC was .034, $p < .001$, which means only 3.4 % of all variance was explained at the national level. Although this correlation was relatively small, level-2 variance was significant, and thus multilevel analysis was warranted.

Multilevel Modeling

The full model was significantly better than the null model, χ^2 (17) =101095.80-40854.89 = 60240.91, $p < .001$. The results are shown in Table 4.

Table 4 Results of full model of family life satisfaction predicted by monetary and gender role variables (random intercept and random slopes)

Fixed effects

Effect	Estimate	Standard Error	*t*	*p*	95% Confidence Interval	
					Lower	*Upper*
Intercept	4.815	0.108	44.756	<.001	4.593	5.037
Household work	0.096	0.019	4.954	<.001	0.055	0.137
Childrearing	0.242	0.028	8.780	<.001	0.185	0.299
Household income	0.000	0.001	0.058	.954	-0.002	0.003
Gender egalitarianism	-0.183	0.065	-2.830	.009	-0.316	-0.050
Household work * Gender egalitarianism	0.030	0.012	2.560	.019	0.005	0.055
Childrearing*Gender egalitarianism	0.042	0.017	2.515	.020	0.007	0.076
GDP	0.000	0.000	1.048	.302	0.000	0.000
Income * GDP	0.000	0.000	-1.001	.317	0.000	0.000

Random effects

Effect	(Co)variance	Estimate	Standard Error	Wald Z	Sig.	95% Confidence Interval	
						Lower	*Upper*
Residual		0.906	0.011	85.623	<.001	0.886	0.927
1.Intercept	UN (1,1)	0.068	0.026	2.572	.010	0.032	0.145
	UN (2,1)	-0.007	0.004	-1.701	.089	-0.015	0.001
2.Household work	UN (2,2)	0.001	0.001	1.130	.258	0.000	0.006
	UN (3,1)	-0.007	0.006	-1.207	.228	-0.018	0.004
	UN (3,2)	0.000	0.001	-0.263	.793	-0.002	0.002
3. Childrearing	UN (3,3)	0.004	0.002	2.144	.032	0.002	0.010
	UN (4,1)	0.000	0.000	.	.	.	.
	UN (4,2)	0.000	0.000	.	.	.	.
	UN (4,3)	0.000	0.000	.	.	.	.
4. Household income	UN (4,4)	0.000	0.000	.	.	.	.

As for the fixed effect, level-1 predictors of household work and childrearing are positive predictors. The level-2 predictor of gender egalitarianism is a negative predictor of family life satisfaction. Cross-level interactions between household work and gender egalitarianism, and between childrearing and gender egalitarianism are also significant. None of the monetary variables (i.e., household income and national GDP) were significant.

As for random effects, the variance of the intercept was significant; childrearing variances may also be significant since the confidence intervals do not contain zero. The variance of household income cannot be estimated because the convergence was not successful. For a better understanding of the predicted model, another model with a fixed slope of household income was tested.

The revised model as a whole was a significantly better one in terms of the intercept and slopes of all level-1 predictors, χ^2 (4) =40854.89-40523.96=330.93, p < .001. The predictors as a group improved the model substantially even with the smaller number of predictors. The results are shown in Table 5.

Table 5 Results of full model of family life satisfaction predicted by monetary and gender role variables (random intercept and random slope except for household income)

Fixed effects

Effect	Estimate	Standard Error	*t*	*p*	95% Confidence Interval	
					Lower	*Upper*
Intercept	4.855	0.110	44.006	<.001	4.627	5.083
Household work	0.095	0.020	4.774	<.001	0.053	0.137
Childrearing	0.243	0.027	8.972	<.001	0.187	0.299
Household income	1.1E-006	0.001	3.235	<.001	0.000	0.000
Gender egalitarianism	-0.179	0.065	-2.720	.012	-0.315	-0.043
Household work * Gender egalitarianism	0.027	0.012	2.265	.036	0.002	0.052
Childrearing*Gender egalitarianism	0.042	0.016	2.609	.016	0.009	0.076
GDP	0.000	0.000	.693	.492	0.000	0.000
Income * GDP	0.000	0.000	-1.001	.471	0.000	0.000

Random effects

Effect	(Co)variance	Estimate	Standard Error	Wald Z	Sig.	95% Confidence Interval	
						Lower	*Upper*
Residual		0.910	0.011	85.633	<.001	0.889	0.931
1.Intercept	UN (1,1)	0.075	0.028	2.653	.008	0.036	0.156
	UN (2,1)	-0.008	0.004	-1.768	.077	-0.016	0.001
2.Household Work	UN (2,2)	0.002	0.001	1.285	.199	0.000	0.005
	UN (3,1)	-0.009	0.006	-1.487	.137	-0.019	0.003
	UN (3,2)	0.000	0.001	-0.099	.921	-0.002	0.002
3. Childrearing	UN (3,3)	0.004	0.002	2.110	.035	0.001	0.009

The results were basically similar to the previous model except for one change. In the revised model, the effect of household income became significant despite its very small effect. This coefficient suggested that almost one million dollars are needed to increase a unit of family life satisfaction when other independent variables are fixed. Since the revised model showed a better model fit than the full model, the results may indicate that household income is a positive predictor of family life satisfaction.

As illustrated in the full model, household work and childrearing are positive predictors of family life satisfaction. In other words, as both husbands and wives try to share the household work and childrearing, they will be

more satisfied with their family life. Gender egalitarianism is a negative predictor of family life satisfaction. Put differently, as gender egalitarianism decreases, family life satisfaction increases.

Since there are two significant cross-level interactions, a detailed analysis was conducted by drawing separate lines around gender egalitarianism to predict the relationship between level-1 gender role predictors and family life satisfaction (See Figures 2 and 3). According to Figure 2, when the household work is equally shared between husband and wife, the level of family life satisfaction is high regardless of the country. However, when household work is not equally shared (i.e., women predominantly do household work), those who live in high egalitarian countries feel more dissatisfied than those who live in low egalitarian countries. In other words, in high gender egalitarian countries, the equal sharing of household work between husbands and wives is expected, and they have high expectations regarding gender roles. When this is violated, they feel more dissatisfied.

A similar tendency was observed in the interaction between childrearing and family life satisfaction (see Figure 3). Regardless of culture, if childrearing is more collaborative, people tend to have high family life satisfaction. If childrearing is predominantly left to women, those in high gender egalitarian countries are likely to feel lower family life satisfaction than those who live in low gender egalitarian countries. Since the slope of childrearing is steeper than household work, childrearing may be a stronger predictor of family life satisfaction.

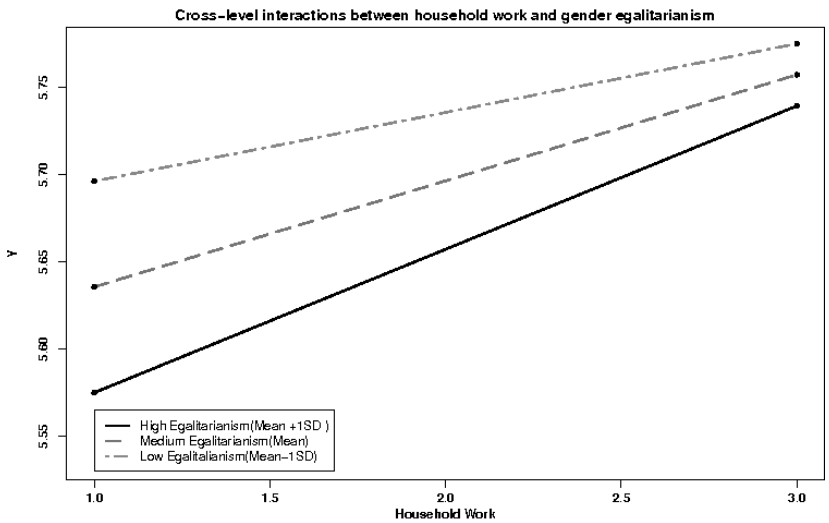


Figure 2. Cross-level interaction between gender role variables (household work *gender egalitarianism) in family life satisfaction

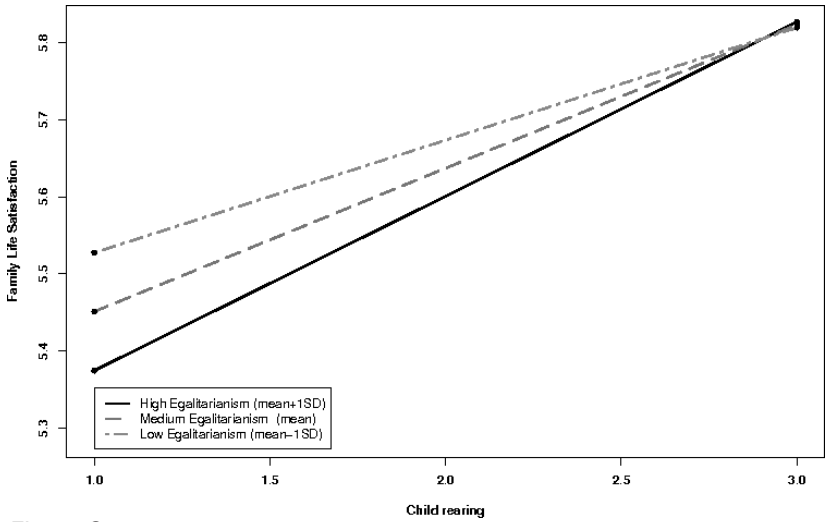


Figure 3. Cross-level interaction between gender role variables (childrearing * gender egalitarianism) in family life satisfaction.

Discussion

The purpose of the current study was a) to investigate to what extent monetary wealth and the quality of social relationships impact on family life satisfaction, and b) to examine whether individual and national cultural level variables interact to predict family life satisfaction. The results revealed that monetary variables did not predict family life satisfaction well, but that gender roles are better predictors of family life satisfaction. Moreover, gender roles were interacted at the individual and country levels; those who live in high gender egalitarian countries are less satisfied when household work and childrearing are not shared than those who live in low egalitarian countries. The results, limitations, and future implications are discussed below.

Overall, monetary variables were not good predictors of family life satisfaction, showing no significant impact on satisfaction. When household income was treated as a fixed effect, this became a significant predictor but with a very small effect. If this result is accepted as valid, this is a welcome trend from a social relationships perspective; family life satisfaction is not predicted by the level of monetary wealth per se, but mutual relationships and collaboration do matter to family life satisfaction. However, further investigation is necessary since the random effects of household income could not be calculated due to measurement problems. One reason why variances cannot be estimated is a suboptimal treatment of monetary variables. If household income is centered from the grand mean, iteration conversion may be possible. Also, I used GDP as a country-level predictor, but GDP per

capita may be a better unit to measure national wealth. GDP does not reflect difference in the cost of living, nor population differences in each country. Using GDP per capita as a monetary variable may be better when comparing differences in living standards on the whole between countries.

Although the current study was significant in that it describes cross-level interactions between gender roles at the individual and national levels, this level-2 predictor of gender egalitarianism had a negative relationship with family life satisfaction, which is counterintuitive. Probably there are confounding factors surrounding this relationship. For example, when checking countries with high gender egalitarianism, I found these countries tended to be former communist countries in Eastern Europe. This speculation is not conclusive, but other national characteristics, including political, economic, and social reasons, may be at play. To increase the level of explanatory power and reduce confounding effects, other variables should be considered in addition to gender egalitarianism.

Another implication is the need to test a more complex model. When women predominantly do household work and childrearing, people in high gender egalitarian countries feel less satisfied than those in low gender egalitarian countries. It seems that there might be gender differences in family life satisfaction in this situation. If so, a three-way interaction may be significant; the same may hold true for a two-way interaction between gender and level-1 predictors of gender roles. To explain the complex picture of the relationship of monetary and gender roles to family life satisfaction, a more complicated model should be tested.

Although this current project was exploratory in nature, it is hoped that it may serve as a catalyst for understanding the multilayered human psychological processes in family life. Multilevel analysis is still in its infancy, so expectations are high that future studies will unveil the complex phenomena underlying human communication and psychology.

Acknowledgements

This work was supported by a Grant-in-Aid for Young Scientists (B) (23730598) and for Scientific Research (C) (23530818) from the Japan Society for the Promotion of Science, and by Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2 for the 2012 academic year.

References

Aknin, L. B.& Norton, D. (2009). From wealth to well-being? Money matters, but less than people think. *Journal of Positive Psychology, 4,* 523–527.

Bradford, K., & Barber, B. K. (2005). Interparental conflict as intrusive family process. *Journal of Emotional Abuse, 5,* 143-167.

Broman, C. L. (1991). Gender, work-family roles, and psychological well-being of Blacks. *Journal of Marriage and Family, 53,* 509-502.

Diener, E., & Oishi, S. (2004). Are Scandinavians happier than Asians? Issues in comparing nations on subjective well-being. In F. Columbus (Ed.), *Asian economic and political issues* (Vol. 10, pp. 1-25). Hauppauge, NY: Nova Science.

Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin, 125,* 276-302.

Hellevik, O. (2003). Economy, values and happiness in Norway. *Journal of Happiness Studies,* 4, 24-283.

Hofstede, G (1980). *Culture's consequences: International differences in work-related values.* Beverly Hills CA: Sage.

Hofstede, G. (2001). *Culture's consequences: Comparing values, behaviors, institutions, and organizations across nations* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.

House, R. J., Hanges, P. J., Javidan, M., Dorfman, P., Gupta, V. (2004). *Culture, leadership, and organizations: The GLOBE study of 62 societies.* Thousand Oaks, CA: Sage.

Kluckhohn, F. R., & Strodtbeck, F. L. (1961). *Variations in value orientations*. New York: HarperCollins.

Lucas, R. E., & Diener, E. (2008). Can we learn about national differences in happiness from individual responses? A multilevel approach. In Van de Vijver, F. J. R., Van Hemert, D. A., & Poortinga, Y. H. (Eds). *Multilevel analysis of individuals and cultures* (pp. 223-248). NY: Erlbaum.

Lucas, R. E., & Dyrenforth, P. (2006). Does the existence of social relationships matter for subjective well-being? In K. D. Vohs & E. J. Finkel (Eds.), *Self and relationships: Connecting intrapersonal and interpersonal processes* (pp. 254-273). New York: Guilford.

Lustig, M. W., & Koester, J. (2010). *Intercultural competence: Interpersonal communication across cultures* (6th ed.). NY: Allyn & Bacon.

Mechanic, D., & Hansell, S. (1989). Divorce, family conflict, and adolescents' well-being. *Journal of Health and Social Behavior, 30,* 105-116.

Snyder, C. R., Lopez, S. J., & Pedrotti, J. T. (2011). *Positive psychology: The scientific and practical explorations of human strengths* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.

■ Article

職場において「ほめ」はどのような効果を持つのか[脚注1]

―アルバイトにおける「ほめ」に注目して―

浦　上　昌　則
（南山大学人文学部心理人間学科）
榊　原　由　奈
（名古屋市立高針北保育園）

問題と目的

近年、何か冷めた感じのする職場が増えているという指摘がある。たとえば、直接対話をせずに全てメールで機械的に返事をする、自分の業績に直接関係のないことには協力・参加しない、状況を伝え合いながら部門間での連携が上手くできないなどの状況があり、現代の職場は「お互いに関わらない、協力し合えない組織」になっているといわれる（高橋・河合・永田・渡部，2008）。このように指摘される職場において、大きな問題のひとつとして離職の問題があろう。もちろん企業にとってはすべての離職が問題というわけではないであろうが、「７・５・３問題」ともよばれる若者の早期離職の問題は頻繁に指摘されるところである。また若者の離職だけに留まらず、特定の企業、看護職や福祉職といった特定の職種における離職率の高さなども問題視されている。

このような状況の中で、従業員同士がほめあう、感謝を交換するといった施策を実施し、離職率を減少させた事例がある。たとえばインターネットメディア事業を手がける株式会社サイバーエージェントでは、「トピックスメール」という制度が導入されている（曽山，2010）。これは、ある社員が他の社員の業績を評価し、ほめるメールを投稿すると、そのメールが社内全体に配信されるというシステムで、そのメールを見た他の社員もメールの内容に対する賞賛メールを社内全体に配信し、評価を共有できるというものである。このシステムの導入以降、同社の離職率は従来の３分の１に減少したという（NHK, 2008）。

また、アステラス製薬株式会社では「HARP」という制度を2008年から導入している。それは、同僚からの思わぬ助けや多忙な中で手伝ってくれたときな

脚注１

本論文は、第２著者による 2011年度南山大学人文学部心理人間学科研究プロジェクト論文をもとに、第１著者が再構成したものである。

どに感謝のメールを出すことを奨励する制度である。利用した社員からは「相手とのコミュニケーションがさらに向上し、仕事上でも好影響がでたように思う」「すき間業務を支えている人間がいることを認知してもらえたことは嬉しく、今後の励みになる」などの感想が寄せられたという（江頭，2009）。

これらの例から、称賛や感謝を示すこと、それをシェアすることが組織に有益な作用を及ぼしていることが推測される。称賛や感謝については、心理学領域において「ほめ」の研究として行われてきた。なお、「ほめ」というと称賛であり、感謝とは若干意味合いが異なるとも考えられる。ところが、たとえば「ありがとう」といった、ほめ手の感情を表現することも「ほめ」として受け取られる（Brophy, 1981）ことから、以前より称賛も感謝も「ほめ」として扱われてきている（青木，2012）。これにならい、本研究でも上述の事例は「ほめ」の作用と考える。

この「ほめ」に関する研究は、達成動機づけや内発的動機づけとの関連で捉えられることが多かった。そして、その効果、すなわちどの程度動機づけを向上させるかという強化子としてこれを検討している場合が多い。このような考え方は職場でも応用されており、称賛や感謝は従業員の動機づけや成長をうながす要因として重要視されることも多い。

しかし、これらとは異なった文脈での検討もある。青木（2005）は「ほめ」の研究をレビューして、動機づけとの関連を検討した研究群に加え、感情的側面、特に自尊感情への影響を検討した研究をまとめ、「ほめ」は自尊感情を高める作用を持つことを指摘している。この他にも、高崎（2002）は、ほめられた子どもが自分自身の存在価値を肯定するという傾向があることを指摘している。さらに「ほめ」は、ほめる側にも、またほめる側とほめられる側の関係についても影響を与える。たとえば柳田（1998）は、ほめることは細やかな観察につながると指摘しており、ほめるために観察をすることによって、ほめられる者の性格や特徴についての理解がより深まると指摘する。また高崎（2010）は、社会人や学生を対象とした調査から、「ほめ」の効果として「相手とのいい関係が作れた」「相手を認めていることが伝わった」などの「コミュニケーション効果」があることを確認している。

このような「ほめ」に関する知見から、ほめられることは自分自身の存在をより肯定的に捉えられるようになり、また自分が相手に認められているという認識を生み出すと考えられる。またほめるという行為は、相手の理解の促進や、コミュニケーションの促進につながっていると考えられる。前述の企業においては、「ほめ」が従来以上に生起するような環境を整えたことによって、こういった「ほめ」の肯定的な影響が生じていると推測できる。

では、サイバーエージェントの事例のように、離職率が下がったことに「ほめ」はどのように影響しているのであろうか。「ほめ」には様々な影響があることは、経験的にも、また上述のように研究においても確認されるが、「ほめ」から離

職に至る過程を明確にした知見はほとんどない。そこで本研究では、これまでの検討をふまえて、「ほめ」から離職に至る過程に次のような関連性を仮定する。

まず職場においてほめられるということは、他のメンバーに受容されている、認められている感情を生じさせると仮定する。「ほめ」は、自尊感情などの自分を肯定する感情や、相手に認められているという認識を生み出す、またほめるためには観察が必要などの知見から、このような仮定が考えられる。鈴木・小川（2008）は「自分は人から受け入れられている、人とつながっているということに根ざした肯定的な感情」を被受容感と定義しており、本研究でもこれを被受容感とよぶ。

さらにこのような被受容感は、組織に対する能動的な意識、すなわち自分はこの職場の一員であり、みんなのために努力するという意識を高めると仮定する。この仮定は、「すき間業務を支えている人間がいることを認知してもらえたことは嬉しく、今後の励みになる」といったコメントがあること（江頭, 2009）や、被受容感はやる気と関連する（杉山, 2002）という知見などを踏まえてのものである。なお本研究では、自分はこの職場の一員であり、みんなのために努力するという意識について、Ames（1992）や小方（1998）などの言及を参考に、これを所属感とよぶ。このような職場への所属感が高まれば、離職という行動は減少すると予測される。

本研究では、以上のような関連性について検討することを目的として、学生のアルバイトを取り上げる。アルバイト先における「ほめ」が被受容感に影響し、それにより所属感が向上し、結果としてアルバイト継続期間が長くなるという関連性を検討していく。

方法

調査時期

2011年10月下旬から11月上旬。

調査対象

愛知県内の大学生、大学院生、専門学校生で、これまでに長期的なアルバイト（１カ月以上在籍）を２つ以上経験したことがある者を対象とした。有効回答は102名（男性21名、女性81名、平均年齢21.34歳、*SD*=1.59）であった。

調査内容

まず、フェイスシートで年齢と性別についてたずねた。続いて、これまでにいくつの長期的なアルバイトを経験したのかについて回答を求め、さらにそれらのアルバイトの中で、職場の人間関係の雰囲気が異なるアルバイトを２つ想起させ、それぞれについて職種や内容と継続期間について記入を求めた。１人の対象に１つのアルバイト経験をたずねたとすれば、良い印象が残っている場合に偏ってしまうかもしれない。それを避けるために、「人間関係の雰囲気が異なる」という表現を用いて２つの経験について回答を求めた。

次に、アルバイト先の「ほめ」の様子について把握するために、２つのアルバイト別に次の内容について回答を求めた。①回答者自身が社員や主任などの責任者にほめられる頻度、②回答者自身がアルバイトメンバーにほめられる頻度、③アルバイトメンバーが社員や主任などの責任者にほめられる頻度について、それぞれ「ほめられることは全くない（１）」から「ほめられることがかなりある（４）」までの４件法で回答を求めた。また、④アルバイト同士でほめあう頻度について、「ほめ合うことは全くない（１）」から「ほめ合うことがかなりある（４）」までの４件法で回答を求めた。なお、③や④を含めたのは、対象者がほめられた経験を測定したいのではなく、その職場環境に「ほめ」がどの程度あるのかを測定するためであった。

さらに、そのアルバイト先での被受容感と所属感を把握するために、鈴木・小川（2008）の被受容感尺度と川嶋（1998）の所属感尺度を参考に項目を準備した。いずれも、アルバイト先での被受容感、所属感を測定する目的の尺度ではないため、適宜修正、追加を行い、18項目を用いた。これらの質問には、それぞれのアルバイト別に、「全く当てはまらない（１）」から「非常にあてはまる（５）」までの５件法で回答を求めた。

なお今回の方法では、１人の対象者から２つの事例についての回答が得られる。これらのデータを分析するにあたり、今回はそれぞれの事例を１ケースとして扱った。102名の回答から204のケースが得られるため、データ数は204となる。また分析には、R（2.15.1）および2012年10月22日現在において最新のパッケージを用いた。

結果

対象者のアルバイト経験

今回は、長期的なアルバイト（１カ月以上在籍）を２つ以上経験したことがある者を対象としているが、この対象における平均アルバイト経験数は3.95（*SD*=2.04）であった。性別では、男性の平均は4.14（*SD*=1.82）、女性は3.90（*SD*=2.10）であり、男性の方がやや多いが、Welchの*t*検定の結果、有意な差は認められなかった（$t=0.52$, $df=34.99$）。

また回答された204のアルバイトケースについて、その継続期間の平均は17.80ヶ月（*SD*=13.82、最大値60）であった。男女別にみると、男性の平均は18.74ヶ月（*SD*=14.47）、女性は17.56ヶ月（*SD*=13.68）であり、これらの間に有意な差は認められなかった（$t=0.48$, $df=61.35$）。

被受容感および所属感についての検討

被受容感と所属感について問うた18の項目については、平均値や標準偏差、また分布の様子を確認し、特に極端な分布の偏りがないことを確認した。続いて、これら18項目の固有値を確認した。固有値の推移は、10.737、1.517、1.019、

0.681と続き、３因子が示唆された。さらに並行分析を行ったところ、２因子が示唆された。この18項目については、被受容感と所属感の項目が含まれること、また抽出後の因子のまとまりを勘案し、２因子を抽出することとした。

主因子法およびプロマックス回転後の因子パタンをTable 1に示す。第１因子には、「14.アルバイト先のために頑張ろうと思う」「9. アルバイト先に貢献したい」「17.特別な事情がない限りこのアルバイトを辞めようとは思わない」といった項目が高い因子パタンを示している。その職場の一員としての自覚があり、そこに貢献したいという意識を示す項目が集まっているといえよう。またこれらの項目は、所属感として準備した項目群でもある。そこでこの因子を所属感因子と命名する。

第２因子は、「3. メンバーから大切にされていると思う」「6. 悩みをきいてくれる人がいる」「2. メンバーから受け入れられていると思う」などが高い因子パタンを示している。これらは職場のメンバーとの関わりに関連する項目であり、またそのメンバーに認められているという意識を示す項目といえよう。これらは被受容感の項目として準備したものでもあり、これを被受容感因子と命名する。なお、因子間相関は.706と高い値であったが、以上の結果が示すように所属感と被受容感は別の因子ととらえるべきであろう。

Table 1　被受容感および所属感についての因子分析結果

項目	F1	F2
14 アルバイト先のために頑張ろうと思う	.855	.037
9 アルバイト先に貢献したい	.780	.122
17 特別な事情がない限りこのアルバイトを辞めようとは思わない	.780	.014
15 常にアルバイトのことを考えて生活を送っている	.755	−.175
11 このアルバイトを長く続けても苦ではない	.749	.068
10 アルバイト先への所属意識を持っている	.728	.193
13 アルバイト先のメンバーであるという意識は高い	.700	.273
12 アルバイト先に対して自分なりの責任感がある	.698	.042
16 アルバイトが生活に占める割合は高い	.680	−.041
8 このメンバーの一員になれてよかったと思う	.486	.433
18 できることならこのアルバイト先のメンバーと長く付き合っていきたい	.466	.433
3 メンバーから大切にされていると思う	.040	.850
6 悩みをきいてくれる人がいる	−.101	.807
2 メンバーから受け入れられていると思う	.129	.777
5 私の考えを何人かのメンバーはわかってくれる	−.056	.744
4 私は優しい人に囲まれて一人ではない	.145	.718
1 みんな温かい心で迎え入れてくれる	.136	.697
7 勤務外でのメンバーとの交流に誘われる	.191	.517

次に、それぞれの因子に.500以上のパタンを示す項目をその下位尺度を構成する項目として選出した。所属感因子は９項目、被受容感因子は７項目で構成される。信頼性の検討のため、それぞれについてCronbachのα係数、因子分析モデルでみた場合の信頼性であるMcDonaldのω_h係数（Zinbarg, Revelle,

Yovel, & Li, 2005）を算出したところ、所属感因子はα=.94、ω_h=.87、被受容感因子はα=.91、ω_h=.77であった。そこでこれらの項目を用い、その合計得点を下位尺度得点として算出したところ、所属感因子は平均値30.36、標準偏差9.75、被受容感因子の平均値は25.94 、標準偏差は6.76であった。なお、いずれの得点においても性差はなかった（所属感：男性30.31（*SD*=10.12）、女性30.38（*SD*=9.68）、*t*=0.04, *df*=61.85、被受容感：男性26.62（*SD*=6.61）、女性25.76（*SD*=6.81）、*t*=0.45, *df*=65.36）。

「ほめ」と被受容感、所属感、継続期間の関連

「ほめ」と所属感、被受容感、継続期間の関連を検討するため、まず各変数間の相関関係を求めた。各測定指標の平均、標準偏差とともに、Table 2にそれを示す。

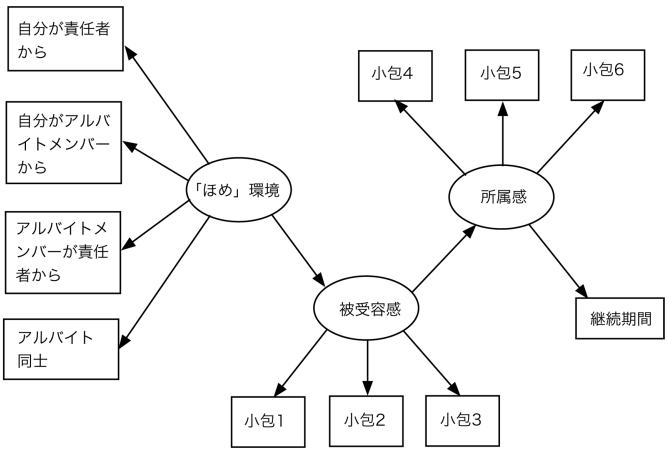
Table 2　各変数の基礎統計量および相関係数

	平均	標準偏差	相関係数 ①	②	③	④	所属感	被受容感
①自分が責任者から	2.67	0.83	—					
②自分がアルバイトメンバーから	2.57	0.84	.583	—				
③アルバイトメンバーが責任者から	2.55	0.80	.638	.336	—			
④アルバイト同士	2.53	0.82	.477	.624	.596	—		
所属感	30.36	9.75	.552	.459	.340	.393	—	
被受容感	25.94	6.76	.541	.548	.421	.564	.729	—
継続期間	17.80	13.82	.331	.215	.211	.255	.389	.401

注）相関係数は全て1%水準で有意

Table 2に示されるように、「ほめ」の頻度に関する4指標間の間には中程度の相関が認められる。また、「ほめ」と所属感、被受容感の間にも中程度の相関が認められる。継続期間については、「ほめ」や所属感、被受容感との間にやや弱い相関が認められるが、「ほめ」よりも所属感、被受容感との相関係数の方が若干高いといえよう。

次に共分散構造分析を適用し、「ほめ」と被受容感、所属感、継続期間の関係についての検討を行った。先にも述べたように、職場の「ほめ」に関する環境は、被受容感に影響を与え、それが所属感に、さらにその職場でのアルバイトの継続期間に影響を与えるという因果関係を仮定する。そこでこれをFigure 1に示すようなモデルに表現した。

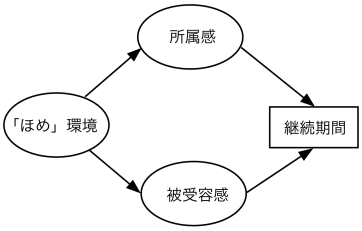


注)　独自性に関する情報は省いている

Figure 1　本研究で仮定されるモデル

なお、「ほめ」についての①から④の項目間に中程度の相関が認められたことから、これらの項目に影響を与える「『ほめ』環境」という潜在変数を仮定した。また被受容感、所属感に関しては、より適切な解の推定を目指し因子分析の結果を用いて項目を小包化した（清水・山本, 2007など参照）。被受容感に対応する「小包1」は項目14、15、13の３項目の合計点、「小包２」は項目9、11、12の３項目の合計点、「小包3」は項目14、10、16の３項目の合計である。所属感に対応する「小包4」は項目３、５、７の３項目の合計点、「小包５」は項目６、４の２項目の合計、「小包６」は項目２、１の２項目の合計を用いた。

またこのモデルの適切性を検討するために、二つの別のモデルとの比較も試みた。そのひとつは、被受容感と所属感の順を入れ替えたモデルである。さらに、Figure ２のように「ほめ」から継続期間の間に被受容感と所属感という複数の経路を持つモデルを仮定した。



注)　測定モデルおよび
独自性に関する情報は省
いている

Figure 2　複数の経路を持つモデル

まずFigure １のモデルについて共分散構造分析を行った結果、モデル中の潜在変数と観測変数間、潜在変数間の全てのパスが１％水準で有意であること

が確認された。適合度については、χ^2値が161.25（df=42, p<.01）、GFIは0.888、AGFIは0.824、RMSEAは0.118、CFIは0.927であった。なお、AICは209.25、CAICは-104.11であった。これらの結果からモデルとデータの適合性は悪くはないが、良いともいえないレベルであるといえよう。そこで修正指標を参考に、自分が責任者にほめられる頻度とアルバイト同士でほめあう頻度の間、自分がアルバイトメンバーにほめられる頻度と、アルバイトメンバーが責任者にほめられる頻度の間、「小包１」と「小包２」の間で誤差間に共分散を仮定するパスを加えた。

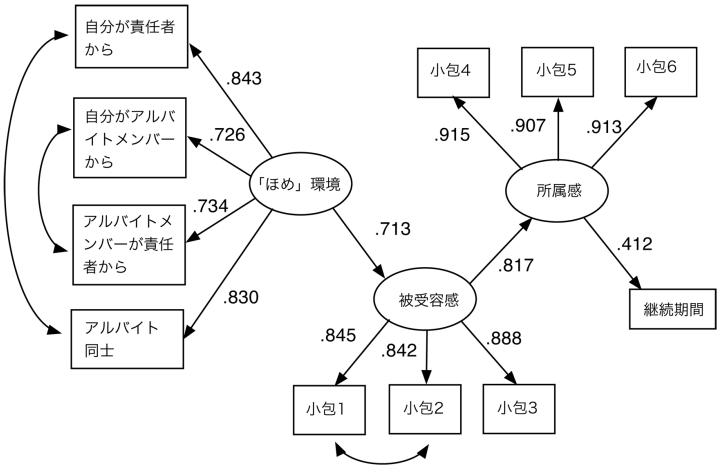
この修正の結果、モデル中の全てのパスは１％水準で有意であり、さらにχ^2値は69.58（df=39, p<.01）、GFIは0.943、AGFIは0.904、RMSEAは0.062、CFIは0.981となった。またAICは123.58、CAICは-176.83であった。パス係数（標準化された推定値）を加えた図をFigure ３に示す。観測変数と潜在変数の間のパス係数は高い値であり、また適合度指標の観点からも、RMSEAは0.05を越えているなどといった点はあるが、適当なモデルといえるであろう。

次に被受容感と所属感の順を入れ替えたモデルについて分析を行った。その結果、モデル中の全てのパスは１％水準で有意であった。適合度指標に関しては、χ^2値は191.02（df=42, p<.01）、GFIは0.867、AGFIは0.790、RMSEAは0.132、CFIは0.909であった。またAICは239.02、CAICは-74.34であった。適合度指標はあまりよくないため、修正指標を参考に、自分が責任者にほめられる頻度とアルバイト同士でほめあう頻度の間、自分がアルバイトメンバーにほめられる頻度と、アルバイトメンバーが責任者にほめられる頻度の間、「小包１」と「小包２」の間で誤差間に共分散を仮定するパスを加えた。その結果すべてのパスは有意となり、またχ^2値は100.07（df=39, p<.01）、GFIは0.919、AGFIは0.863、RMSEAは0.088、CFIは0.963、AICは154.07、CAICは-146.33まで改善された。しかし、この段階においても修正指標は「ほめ」から被受容感、被受容感から所属感へのパスを仮定することを示唆するものであった。これらの結果から、先の被受容感が所属感に先行するモデルの方がより適切と判断できる。

次にFigure ２のように「ほめ」から継続期間の間に被受容感と所属感という複数の経路を持つモデルの分析を試みた。その結果、モデルに含まれる各パスは有意であるものの、適合度指標は先の分析の初発モデルよりも良くないものであった。χ^2値は 205.60（df=41, p<.01）、GFIは0.863、AGFIは0.780、RMSEAは0.140、CFIは0.899、AICは255.60、CAICは-53.45であった。またこれを初発モデルとして先の分析と同様に観測指標間にパスを加える修正を試みたが、あまりよい結果は得られなかった。さらに修正指標は、被受容感と所属感の間に何らかの関係を設定すべきであることを強く示唆するものであった。この結果から、被受容感と所属感という複数の経路を持つモデルよりも、Figure 1のような直線的なモデルの方が適当と考えられる。

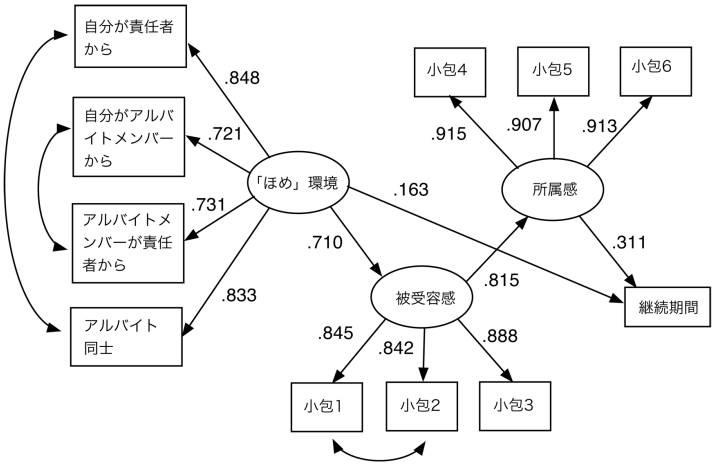
以上の結果、Figure １に示したモデルが３つの中で最も適当なものといえ

よう。そこでこのモデルを基に、さらに「ほめ」から所属感へのパス、「ほめ」から継続期間へのパス、被受容感から継続期間へのパスを加えることの適否について検討した。「ほめ」から所属感へのパスについては、それを仮定しても有意なパス係数は得られなかった。同様に、被受容感から継続期間へのパスも有意なものとはならなかった。しかし「ほめ」から継続期間へのパスを仮定した場合、これは５％水準（p=.048）で有意なものとなった。この場合の適合度指標は、χ^2値は65.73（df=38, p<.01）、GFIは0.945、AGFIは0.905、RMSEAは0.060、CFIは0.983である。またAICは121.73、CAICは-174.36であった。この結果をFigure ４に示す。



注）　数値は標準化された推定値。詳細な情報に関してはAppendix １に示す。

Figure ３　共分散構造分析の結果



注）　数値は標準化された推定値。詳細な情報に関してはAppendix ２に示す。

Figure ４　「ほめ」環境から継続期間へのパスを加えたモデルの結果

Figure ３のモデルもFigure ４のモデルも、適合度指標における相違はほとんどない。しかし継続期間の決定係数は、Figure ３のモデルでは0.169、Figure ４のモデルでは0.182であり、若干Figure ４のモデルの方が高い。また「ほめ」から継続期間へのパスは有意なものであったことも加味すると、今回はFigure ４のモデルの方が適当なものといえよう。

考察

本研究は、「ほめ」を日常的に取り入れた会社において離職率が減少したという事例をもとに、学生のアルバイトの継続期間について、アルバイト先での「ほめ」の頻度が影響すると推測した。アルバイト先での「ほめ」の頻度と継続期間の関連については、その影響過程を説明する変数としてアルバイト先での被受容感と所属感を取り上げた。そして「ほめ」の頻度はアルバイト先での被受容感の向上に影響し、更にそれによって所属感が高まり、結果としてアルバイトの継続期間が長くなる、という関連を仮定し、これを検討することを目的とした。

大学生等102名、204ケースのアルバイト経験をもとに、共分散構造分析を用いてその仮説モデルの妥当性を検討したところ、Figure ４に示されるような関連性が示唆された。これは本研究の仮説をほぼ支持する結果といえる。すなわち、「ほめ」が頻繁に行われるような職場であれば、それがそこで働く個人の被受容感を高める。被受容感が高まれば、組織への所属感が高まり、その結果としてアルバイトの継続期間が長くなるという関連があることが支持された。

なお、仮説においては言及していないことであったが、「ほめ」に関する職場環境は、直接的にアルバイトの継続期間とも関連していた。ただし共分散構造分析の結果は、この直接のパスは仮定しても仮定しなくても、ほとんど適合度は変わらないことを示している。今回は、そのパス係数が５％水準で有意であることと、それを仮定する方が若干であるが継続期間の決定係数が高まることを考慮して、パスを仮定する方が適当ではないかと判断したが、この点は今後さらに検討されるべきといえよう。

また仕事への動機づけが注目される職場での「ほめ」であるが、今回の研究では、動機づけは所属感と関連していると考えられる。この所属感は「ほめ」から直接の影響を受けるものではなく、被受容感を通して影響を受けていた。動機づけの実験的研究では、「ほめ」と動機づけの直接的関連が検討されることも多いが、組織という場面では、被受容感という要因がそれを媒介していることが示された。

このような結果を踏まえると、「ほめ」を積極的に取り入れた会社の離職率が減少した原因は、「ほめ」のある環境によって社員の被受容感が向上した結果、所属感が高まったことにあると推測できよう。斎藤（2008）の『働きがいのある会社 日本におけるベスト25』によると、その25社の強みとして、「信用」

「尊敬」「公正」「誇り」「連帯感」の５つが共通してあると指摘されている。先にあげたサイバーエージェントもその中に選ばれており、中でも「連帯感」の項目において、「この会社には『家族』『仲間』といった雰囲気がある」「一体感を感じることのできる会社である」という評価が高かった。また曽山（2010）も同社について同様なことを指摘している。ここには、社員同士がほめ合うという施策が影響していると推測できよう。

以上のように、本研究は組織への人の定着において「ほめ」のある環境が重要であることを支持するものであるが、そのような環境の形成に対しても示唆が得られる。本研究では「ほめ」のある環境について、回答者自身が社員や主任などの責任者にほめられる頻度、回答者自身がアルバイトメンバーにほめられる頻度、アルバイトメンバーが社員や主任などの責任者にほめられる頻度、アルバイト同士でほめあう頻度、に影響を与えるひとつの潜在変数と仮定した。潜在変数から観測変数へのパス（標準化された推定値）は、.７から．８台という高い値であり、またそこに際立った係数の差はないといえよう。すなわち、職場の「ほめ」の環境を作り出すのは、社員といった責任者の仕事に限定されるものとはいえず、責任者、アルバイトの別を問わず、そこに所属するすべての構成員が他の構成員に対して行うことによって作り出されるものと考えられる。このことは、自らを含む構成員の離職を減少させるために、「ほめる」ということの重要性をすべての構成員が自覚し、実践することが肝要であることを示唆するものであろう。

日本経済新聞、日本能率協会、企業情報化協会、日本能率協会総合研究所の共同による、「新入社員の早期離職対策共同調査 調査結果」（2007）では、社内のコミュニケーションに問題を抱えている企業ほど早期離職に悩んでいるという傾向が認められている。本研究は、アルバイト経験を分析したものであり、正規従業員の離職とはメカニズムが異なっているかもしれない。また本研究では社会的変数を考慮していないことも一般化の限界になっていよう。さらに、１名の対象から２ケースのデータを収集し、これを１つのサンプルとした方法にも課題が残る。しかし、「ほめ」を日常に取り入れた会社の離職率が減少した原因を検討する際の一助にはなるであろう。より望ましい組織形成への示唆を得るため、今後のさらなる検討が求められる。

引用文献

Ames, C. 1992 Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology,* **84**, 261-271.

青木直子 2005 ほめることに関する心理学的研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **52**, 123-133.

青木直子 2012「ほめられる」と「ほめる」速水敏彦編 コンピテンス ナカニシヤ出版 Pp.81-89.

Brophy, J. 1981 Teacher praise: A functional analysis. *Review of Educational Research,* **51**, 5-32.

江頭紀子 2009 社員同士が感謝のメールを送る“HARP（ハープ）制度”の実施でチームワークの醸成にチャレンジ 企業と人材, no.946, 20-26.

NHK 2008 めざせ！会社の星 NHK名古屋放送局＜http://www.nhk.or.jp/kaisha/archives/081004/index.html＞（2013年2月）

日本経済新聞・日本能率協会・企業情報化協会・日本能率協会総合研究所 2007 新入社員の早期離職対策共同調査 調査結果 <http://jmar-im.com/pdf/20070608.pdf>（2013年2月）

小方（川嶋）涼子 1998 課題達成場面における目標指向性とパフォーマンスとの関係 教育心理学研究, **46**, 387-394.

斎藤智文 2008 働きがいのある会社 日本におけるベスト25 労務行政

清水和秋・山本理恵 2007 小包化した変数によるパーソナリティ構成概念間の関係性のモデル化－Big Five・不安（STAI）・気分（POMS）－ 関西大学社会学部紀要, **38**(3), 61-96.

曽山哲人 2010 サイバーエージェント流成長するしかけ 日本実業出版社

杉山　崇 2002 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究 心理臨床学研究, **19**, 589-597,

鈴木真吾・小川俊樹 2008 中学生における自尊心と被受容感から見たストレス反応・本来感の検討 筑波大学心理学研究, **36**, 97-104.

高橋克徳・河合太介・永田稔・渡部幹 2008 不機嫌な職場 なぜ社員同士で協力できないのか 講談社現代新書

高崎文子 2002 乳幼児期の達成動機づけ－社会的承認の影響について－ ソーシャル・モチベーション研究, **1**, 21-30.

高崎文子 2010「ほめ」の構造とその効果4 －「ほめ」関連の態度測定尺度の作成の試み－ 第52回日本教育心理学会発表論文集, 589.

柳田泰典 1998「ほめ方・叱り方」と学級コミュニケーション 長崎大学教育学部教育科学研究報告, **55**, 9-24.

Zinbarg, R.E., Revelle, W., Yovel, I., & Li. W. 2005 Cronbach's Alpha, Revelle's Beta, McDonald's Omega: Their relations with each and two alternative conceptualizations of reliability. *Psychometrika*, **70**, 123-133.

Appendix 1　Figure 3に示した結果の詳細

	推定値	標準誤差	p値
測定モデルにおけるパス			
自分が責任者から ← 「ほめ」環境	1.000		
自分がメンバーから ← 「ほめ」環境	0.864	0.081	.000
メンバーが責任者から ← 「ほめ」環境	0.836	0.077	.000
アルバイト同士 ← 「ほめ」環境	0.969	0.091	.000
小包１ ← 被受容感	1.000		
小包２ ← 被受容感	0.645	0.035	.000
小包３ ← 被受容感	0.657	0.044	.000
小包４ ← 所属感	1.000		
小包５ ← 所属感	1.009	0.049	.000
小包６ ← 所属感	1.086	0.052	.000
構造モデルにおけるパス			
被受容感 ← 「ほめ」環境	2.759	0.297	.000
所属感 ← 被受容感	0.914	0.074	.000
継続期間 ← 所属感	1.868	0.305	.000
分散および誤差間の共分散			
自分が責任者から	0.202	0.035	.000
自分がメンバーから	0.331	0.038	.000
メンバーが責任者から	0.297	0.034	.000
アルバイト同士	0.210	0.034	.000
小包１	2.968	0.427	.000
小包２	1.268	0.181	.000
小包３	0.855	0.145	.000
小包４	1.815	0.270	.000
小包５	2.044	0.290	.000
小包６	2.188	0.322	.000
継続期間	158.617	15.943	.000
「ほめ」環境	0.494	0.072	.000
被受容感	3.646	0.569	.000
所属感	3.086	0.479	.000
自分が責任者から ↔ アルバイト同士	−0.152	0.027	.000
自分がメンバーから ↔ メンバーが責任者から	−0.132	0.028	.000
小包１ ↔ 小包２	0.679	0.227	.003

Appendix ２　Fifure４に示した結果の詳細

	推定値	標準誤差	p値
測定モデルにおけるパス			
自分が責任者から ← 「ほめ」環境	1.000		
自分がメンバーから ← 「ほめ」環境	0.853	0.080	.000
メンバーが責任者から ← 「ほめ」環境	0.828	0.076	.000
アルバイト同士 ← 「ほめ」環境	0.967	0.091	.000
小包１ ← 被受容感	1.000		
小包２ ← 被受容感	0.645	0.035	.000
小包３ ← 被受容感	0.657	0.044	.000
小包４ ← 所属感	1.000		
小包５ ← 所属感	1.009	0.049	.000
小包６ ← 所属感	1.085	0.051	.000
構造モデルにおけるパス			
被受容感 ← 「ほめ」環境	2.732	0.294	.000
所属感 ← 被受容感	0.913	0.075	.000
継続期間 ← 所属感	1.410	0.377	.000
継続期間 ← 「ほめ」環境	3.178	1.611	.048
分散および誤差間の共分散			
自分が責任者から	0.196	0.035	.000
自分がメンバーから	0.335	0.038	.000
メンバーが責任者から	0.299	0.034	.000
アルバイト同士	0.206	0.034	.000
小包１	2.966	0.428	.000
小包２	1.266	0.181	.000
小包３	0.855	0.145	.000
小包４	1.796	0.269	.000
小包５	2.036	0.290	.000
小包６	2.197	0.323	.000
継続期間	156.218	15.640	.000
「ほめ」環境	0.500	0.072	.000
被受容感	3.676	0.573	.000
所属感	3.124	0.483	.000
自分が責任者から ↔ アルバイト同士	−0.157	0.027	.000
自分がメンバーから ↔ メンバーが責任者から	−0.128	0.028	.000
小包１ ↔ 小包２	0.677	0.228	.003

実習

ラボラトリー方式の体験学習に関する知見を公開することで、ラボラトリー方式の体験学習が広く普及することを願って、第７号(2008)より「実習」を掲載しております。ここに掲載されている実習は、当センター研究員とその仲間によって開発され、これまでの教育実践で用いられてきたものです。使用の際には以下の留意事項をお守りください。

なお、ラボラトリー方式の体験学習を実施する際には、まずはご自身がラボラトリー方式の体験学習を体験されることをお薦めします。当センターではラボラトリー方式の体験学習を用いた公開講座を開催しております(詳しくは当センターのWebページ http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/ をご参照ください)。体験学習のファシリテーションを学んだ上でご使用ください。

実習を使用する際の留意事項

１．著作権は著者に属します。実習を販売することや、営利目的の発行物などに転載をすることは禁止します。なお、教育目的での無料の発行物などに転載を希望される場合は、当センター事務局にお問い合わせください。

２．ラボラトリー方式の体験学習として教育・研修などに使用される場合には、各実習の課題シート（実習の指示書）に出典を明記してください。使用の際に当センターや著者に許可を得る必要はありません。また、使用料も発生しません。

【出典の記入例】

出典：大塚弥生（2008）「グループ　エントランス」
南山大学人間関係研究センター　人間関係研究, 第７号より

３．課題シート（実習の指示書）をそのまま使用するのではなく、プログラムの実施状況に合わせて適宜修正・変更した上で使用する場合は、「参考」として出典を明記してください。

４．ラボラトリー方式の体験学習で大切にされている教育観（学習者中心の教育、非操作の教育、学習者が自らの人間的成長に取り組む教育）に反する使用は禁止します。たとえば、営利目的で学習者を操作する自己啓発セミナーなどでの使用は一切禁じます。

■　実習

実習「たかが声かけ　されど声かけ」

～より実践的なホスピタリティ・マインドの体験学習～

津　村　俊　充
（南山大学人文学部心理人間学科）
鯖　戸　善　弘
（愛知県レクリエーション協会）

■　実習創作にあたって：ホスピタリティの構造モデル

体験学習を用いた「ホスピタリティ」についての学びを紹介する。

まず、はじめに、「ホスピタリティ」について説明する。ホスピタリティという言葉は英語であり、その語源は、ラテン語の「ホスペス（hospes）」であり、聖地へ巡礼する者を教会や修道院などで宿泊をさせ、体を休めさせることを意味する言葉である。ホスピスの派生語としてホスピタル（病院）、ホテル（旅館）、ホスト（男性のもてなす人）、ホステス（女性のもてなす人）、ホスピス（末期のがん患者などが心安らかに緩和ケアをする施設）などがある。ホスピタリティの意味として様々な日本語が当てられているが、「訪問者を丁重にもてなすこと」（大辞林　第３版）をもとにして、ここでは、「対象者に対して心のこもったもてなしをすること」とする。そして、ホスピタリティの構成要素として、コミュニケーション、態度、行動、意識などが考えられる。

次に、ホスピタリティの全体像をつかむために、宇田川・岡崎・三好（2002）のとらえるホスピタリティの構造を引用する。

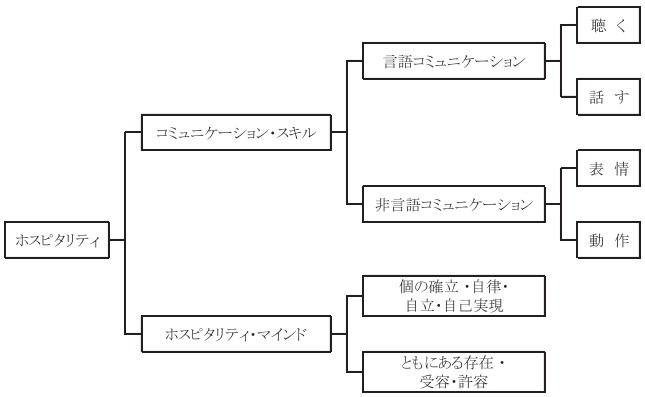


図1　ホスピタリティの構造　（「ホスピタリティ・トレーニング」宇田川・岡崎・三好（2002）より）

宇田川らは、ホスピタリティは、コミュニケーション・スキルとホスピタリティ・マインドから成り立っているとしている。コミュニケーション・スキルの部分は、相手の話をうなずきながら聴く、目を合わせて話す、好感のもてるしぐさなど、いわゆる対面しているときに見えたり聞こえたりする部分である。会話の内容であったり動作であったり、その現れとしての表情であったりする。ホスピタリティ・マインドの部分は、意識の部分である。寄り添おうとする気持ちの部分である。対象者に対面しているときに傾聴したり受容したり共感したりする自分自身の気持ちや何を大切にしているかといった価値観や態度も含まれる。

ラボラトリー方式の体験学習は、「特別に設計された人と人とが関わる場において、“今ここ”での参加者の体験を素材（データ）として、人間や人間関係を参加者とファシリテーターとがともに学ぶ（探求する）方法である」（津村、2008）と定義されている。“今ここ”での参加者の体験から学ぶものである。その体験とは、参加者が話している話題やグループで取り組んでいる課題（コンテント）とあわせて、参加者自身の中や、他者とのかかわりの中で、またグループの中で起こる関係的過程（プロセス）への着眼がとても大切になる。津村（2009）は、コンテントとプロセスの関係を氷山モデルで説明している。

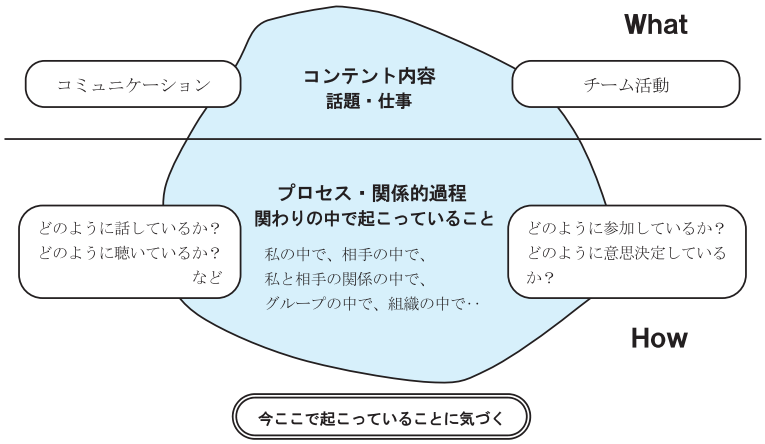


図2　コンテントとプロセス（グループ・レベル）（津村(2009)より作図）

この氷山モデルに宇田川のホスピタリティの構造を対応させ、宇田川のコミュニケーション・スキルである見たり聞いたりして確認できる部分（具体的には、身だしなみ、言葉遣い、表情、動作など）をコンテントとして考えた。また、ホスピタリティ・マインドである他者との関係の中で感じたり気づいたりしている部分（具体的には、対象者の言動を注視し、その背景に寄り添う姿勢で、傾聴、共感、受容など）をプロセスとした。そして、宇田川のコミュニケーション・スキルを、ホスピタリティ・スキルとした。ホスピタリティ・マインドはそのままホスピタリティ・マインドとした。ホスピタリティをスキル

の側面とマインドの側面に分割して構造化した。それが図３である。

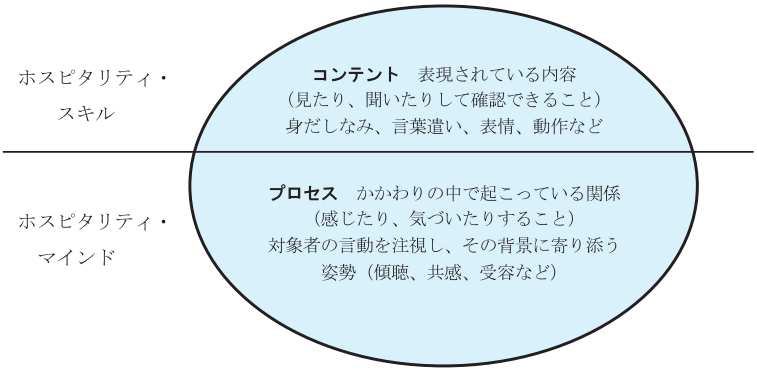


図3　ホスピタリティの構造（鯖戸，2011）

ホスピタリティのとらえ方として、店頭での接遇としてトレーニングされるマニュアル化された振る舞いや言葉がけというよりは、相手に寄り添おうとする姿勢そのものに価値を求め、そこから醸し出される振る舞いや言葉がけに重きを置きたいと考えている。それは、対象者の話に対して気持ちを込めて聴いて理解しようとするカウンセリング・マインドに近い。そうしたことから、ホスピタリティ・マインドの重要な要素を、自己受容、他者受容、共感的態度とした。ホスピタリティ・マインドの根底には、自分自身の良いところも悪いところも受け入れ（自己受容）、対象者に対しても、その人の良いところも悪いところも受け入れ（他者受容）、そして、共感する態度で対象者に対して理解して対応していく（共感的態度）、という姿勢を位置づけている。

とは言え、心のこもったもてなしは、心の中（マインド）で寄り添う気持ちに満たされ、その表現として言葉がけやしぐさが伴うものであるので、ホスピタリティ・スキルとホスピタリティ・マインドは一体となったものであり、決して独立して成り立っているものではない。

■　実習の特徴として：ホスピタリティを学ぶ二重構造

本実習は、ホスピタリティ・スキルの部分、つまりコンテントと、もう一面のホスピタリティ・マインドの部分、つまり参加者の体験プロセスから学ぶことの二重性をもたせた体験学習である。

実習のねらいは、「グループで、コンセンサスによる話し合いをする中で、自分や他者がどのような働きかけ（声かけ）をしているかに気づく」といったプロセスの中での気づきに焦点をあてることと、具体的な行動として望ましいと思われる要素も含めた「話し合いにおいて、メンバーに対して寄り添う気持ちで相手の話を聴き、自分の思いも伝える」といったねらいの項目も付記した。

実習の課題は、「集いに遅れて来た方に対しての声かけ」など、ある状況を設定して、そこでの望ましいと思われる声かけを５つの選択肢からまず自分で

選んだ後、グル―プで話し合って、グループとして望ましいと思われる言葉がけを合意形成しながら決定していくものである。合意形成といっても、これが正解だ、という合意ではない。状況やかかわる人との関係性によるとこの場合はこちらが望ましいことと考えられるといった合意形成である。

グループ討議の過程において、メンバーの言動として「そうだね、相手の顔を見ながら声をかけることって大事だよね」とか「傾聴して受け入れるといいよね」とか「上から目線の否定的な言い方はまずいね」とか「相手と自分との関係性やその場の状況により微妙に声かけが変わるね」などの会話がなされ、ホスピタリティを考えながら、“今ここ”での体験として相互にホスピタリティを学んでいくことが期待されている。

次に、グループで選択した結果を発表してもらう。これは正解のない合意形成であるので、グループごとに選んだ声かけは、異なるであろうが、それでいい。そこで、ホスピタリティに必要な資質や心がけることを実習参加者の発言から拾い出し、傾聴や共感的理解などが大切であることを確認して、その理論的な裏付けを紹介する。それはコンテントしてのホスピタリティを学習する上において、有意義なグループワークとなる。ここまでの学びが第一段階である。

結果の発表後に、ふりかえりシートを配布して、“今ここ”での話し合いにおいてメンバー一人ひとりがどのようにグループ討議の中でいたのか、一人ひとりのホスピタリティがどのようであったかをふりかえるのである。つまり、ホスピタリティについてグループで話し合うと同時に、そのときの自分の声のかけ方や態度にホスピタリティがあったかどうかをふりかえるのである。

ふりかえるポイントとしては、「あなたは、メンバーに対して寄り添う気持ちで話すことができましたか」、「話し合いの中でうれしかったことはどんなことでしたか。具体的に書いてください」などである。自分の意見を主張するあまり、メンバーの意見を聴くことができなかった自分に気づいたり、メンバーが受け入れてくれている態度によって、すごく話しやすくなったりという体験をふりかえる。これらの相互の体験のわかちあいを通して、相互に受け入れようとする姿勢が大切であることを学んでいく。そのことを、体験を通して（身をもって）気づくことで、学びが深まるのである。

マニュアル化された礼儀作法や言葉がけより深い、相手に寄り添おうとするマインドの部分に気づいていくことを期待している。そのように切り込んでいくふりかえりの部分がとても重要であり、このような仕掛けがあるので、二重構造の体験学習とよんでいる。

ラボラトリー方式による体験学習の場合、実習の課題は、“今ここ”での共通体験とその後のふりかえり、わかちあいに重きを置いているため、直接現場での課題を扱うよりは日常とは異なる状況を想定した課題を設定することが多い。しかし、ここで紹介した実習は、福祉の現場などで起こりうる状況を課題としているのでリアリティがあるのが特色である。その意味でも、コンテント

しての学びも現場に活かすことができると考えている。

■　実習の対象

・福祉関係の職場で働く人を対象に考えているが、他者に対して丁寧に関わることを学びのテーマとしたい成人の人たちを対象に実施することができる。
・高校生や大学生などの人と関わることの大切さを学んでもらいたい時にも実施するとよいだろう。

ねらいの例

・グループで、コンセンサスによる話し合いをする中で、自分や他者がどのような働きかけ(声かけ)をしているかに気づく。
・話し合いにおいて、メンバーに対して寄り添う気持ちで相手の話を聴き、自分の思いも伝える。

（上記のねらいは，学習者の状況に合わせて表現を変える必要あり）

グループサイズ

１グループ　４名～６名。グループ数はいくつでも可能。

所要時間

90分（ふりかえりや小講義の時間をていねいにもつと、もう少し時間がかかるだろう）

準備物

１．指示書（資料１）　各自に１枚
２．「たかが声かけ　されど声かけ」課題シート（資料２）各自に１枚
３．コンセンサスの留意点（資料３）　各自に１枚
４．ふりかえり用紙（資料４）　各自に１枚

会場の設定

移動可能な机と椅子を使用することが望ましい。個人決定時には、それぞれ離れた席で個人決定を行ってもらい、グルーピング後は，グループのメンバーが机をはさんでお互いに向かい合える状態になれるよう（グループ形式）に設定する。

手順

1．導入　指示書（資料１）を配布し，ねらいと実習の手順を説明する。
2．個人決定　課題シート（資料２）を配布して、個人決定の時間をとる
3．グルーピング　何らかの方法でグループ分けを行い, グループの場所をセッティングするように伝える。お互いに初めて会う場合は自己紹介の時間を設ける。
4．課題の導入　コンセンサスの留意点（資料３）を配布し，コンセンサスをする際の留意点について説明をする。
　話し合いの時間は、20分間とする。様子をみて、討議のために時間が必要そうならば、もう少し時間を確保する。
5．結果発表　グループごとに選択した回答発表をする。＜10分：グループ数により変動あり＞
6．ふりかえり用紙（資料４）記入　　＜10分＞
7．グループでのわかちあい　　＜15～20分＞
8．全体でのわかちあい　　＜５～10分＞

ファシリテーションのポイント

○ 二重構造をもった実習であることの理解

実習が二重構造をしているので、この実習を進める際に、その点をよく理解しておく必要がある。まず、５つの状況（Ａ～Ｅ）の中でどの声かけが望ましいかを個人決定をした後に、コンセンサス（合意形成）の留意点について説明をする。そして、グループの課題は、グループでコンセンサスに導く話し合いを通して、グループの結論を導き出すことである。

一方で、この実習のねらいは、「グループで、コンセンサスによる話し合いをする中で、自分や他者がどのような働きかけ（声かけ）をしているかに気づく」ことであり、「話し合いにおいて、メンバーに対して寄り添う気持ちで相手の話を聴き､自分の思いも伝える」ことである。グループの話し合いの中で、自分が他者にどのような働きかけ（声かけ）を実際に行っているかに気づくことが学習の焦点になる。課題を理解してもらうことと、同時にこの学習のねらいを参加者に丁寧に語り、実習の意図することをしっかりと理解しておいてもらう必要がある。そのためには、実習の前に、「コンテントとプロセス」に関する小講義なども実施することも効果的であると考えられる。

○正解のないコンセンサス実施について

コンセンサス実習を行うと、どうしても何が正解であるかといったことに議論が集中する可能性がある。また､グループでしっかりと話し合えば合うほど、その思いが強くなる可能性がある。実習のはじめに、正解がない課題であること、グループとして一つの意思決定をすることの大切さを強調してグループ討議を始めてもらうことが大切である。また、話し合った結論（意思決定結果）

を各グループに発表してもらい、各グループの主張をファシリテーターはしっかり取り上げ、それぞれに意味あるものとして、受けいれる必要があるだろう。

○ファシリテーターのホスピタリティ・マインドが試される

ラボラトリー方式の体験学習を実施する際に、ファシリテーターにとって厳しい現実が待っている。それは、この実習が二重構造になっているという記述をしたが、ファシリテーターにとっては、参加者に伝えたいメッセージ性のある実習教材を使うと、絶えず参加者とファシリテーターとのかかわりのありよう（プロセス）が問われることになる。すなわち、参加者が研修会場に入ってきてから、会場を離れていくまでのプログラムの実施の中でファシリテーターのホスピタリティ・マインドはどうであったか、ファシリテーターの働きかけ（声かけ）はどうであったかをファシリテーター自らに問いかけている必要がある。参加者に、前述の「自分自身の良いところも悪いところも受け入れ（自己受容）、対象者に対しても、その人の良いところも悪いところも受け入れ（他者受容）、そして、共感する態度で対象者に対して理解して対応していく（共感的態度）、という姿勢」は、ファシリテーター自身にあったのかと。

引用文献

宇田川　光雄・岡崎　光・三好　良子　(2002)．鼎談『ホスピタリティを語る』、ホスピタリティ・トレーニング　遊戯社　6-9.

鯖戸　善弘　　(2011)．　レクリエーション支援者のホスピタリティ・マインド養成におけるラボラトリー方式による体験学習の活用、南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻修士学位論文.

津村　俊充　(2008)．　学校の人間関係を改善する　宮川充司、津村俊充、中西由里、大野木裕明編　スクールカウンセリングと発達支援　ナカニシヤ出版．143-155.

津村　俊充　(2009)．　プロセスからの学びを支援するファシリテーション－ラボラトリー方式の体験学習を原点として－　人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）,8, 30-68.

注：本実習「たかが声かけ　されど声かけ」は、鯖戸が、2012年12月２日に開催された第14回日本体験学習研究会全国大会のエクササイズセッションで報告したものである。

資料１

「たかが声かけ、されど声かけ」

ねらい

・グループで、コンセンサスによる話し合いをする中で、自分や他者がどのような働きかけ(声かけ)をしているかに気づく。

・話し合いにおいて、メンバーに対して寄り添う気持ちで相手の話を聴き、自分の思いも伝える。

手　順

１．導入（ねらいの提示と手順の説明）

２．個人作業（一人になって個人決定）

３．コンセンサスの留意点の説明

４．グループ討議（グループでコンセンサスによる話し合い）

５．結果発表

６．ふりかえり用紙記入

７．わかちあい

８．インタビューとコメント

課　題

（個人の課題）

１．課題に対して私として一番望ましい声かけと思うものを選択してください。

（グループの課題）

２．グループで話し合って、グループとして一番望ましいと思う声かけを選択してください。その際、コンセンサスの留意点を参考にする。

３．状況の前提条件についてグループ内では統一してください。

４．時間は２０分とします。

資料２

「たかが声かけ、されど声かけ」課題

Ａ．集いに遅れてきた方（２０歳代）に対して

１．おはようございます。受付をしてこちらにどうぞ。
２．今始まったところですので、心配なく。
３．何かあったのか心配していたわ。
４．○○さん、みんな待っていのよ。
５．遅れるときは連絡していただけるとありがたいわ。

わたしの選択	グループの選択

Ｂ．集いでゲームに対応できにくい方（５０歳代）に対して

１．○○さん。できるところまでやればいいですよ。
２．それでいいですよ。何かあれば声かけて。
３．無理をしないで休まれてもいいですよ。
４．頑張ってこのようにやってくださいね。
５．○○さん。ゲームの内容を理解できていますか。

わたしの選択	グループの選択

Ｃ．集いのときに不注意で物を壊した方（１０歳前後）に対して

１．いいですよ。壊そうと思って壊したのではないのでしょ。
２．皆のものでしょう。大事に扱って。
３．怪我はなかったですか。
４．私たちの置いたところが悪かったのね。
５．形あるもの、いつかは壊れるわ。

わたしの選択	グループの選択

Ｄ．デイサービスセンターで、いつまでも噛んでいて、食事が遅い方（７０歳代）に対して

１．次のおかず、おいしそうですよ。
２．そろそろ飲み込んでください。
３．片付けの人が困るから、早くしてね。
４．汁物も飲みましょう。
５．周りの皆さん、食べ終わっていますよ。

わたしの選択	グループの選択

Ｅ．介護福祉施設で、「もう死にたい」と言った方（７０歳代）に対して

１．生きたくても生きられない人もたくさんいるのよ。
２．どうして。何があったのですか。
３．お迎えが来るまで頑張りましょう。
４．そんなこと言ってはダメでしょ。
５．「つらいですね」と言い、ひたすら話を聴く。

わたしの選択	グループの選択

一部　諏訪茂樹 著　「続 介護専門職のための 声かけ・応答ハンドブック」参考

資料３

コンセンサスによる集団決定をする際の留意点

今の時点での個人決定は、あなたの決定です。

これから、コンセンサス（全員の合意）による集団決定をしますが、一つひとつについてグループの各メンバーが合意して、はじめてグループの決定となるわけです。コンセンサスはもちろん容易ではありません。従って、すべての決定が、各人の完全な合意を得ることはできないかもしれませんが、少なくともある程度の合意を示し得る決定を作り上げるように努力して下さい。

・全員が納得するまで、十分話し合ってください。そのためには、自分の考えを主張することが大切ですが、それだけでなく、他のメンバーの考えに耳を傾けることもより一層大切です。

・自分の考えに固執して論争にならないことです。

・多数決はしないでください。少数派になると意見が言いにくいものですが、勇気を出して話してください。少数意見は話し合いの邪魔になるのでなく、互いの考えの幅を広げてくれるもので、むしろ歓迎されるべきです。

・決定をひとつにするためには、誰かが妥協をしなければならないのですが、安易に妥協しないでください。十分納得して譲ることが大切です。

資料４

「たかが声かけ、されど声かけ」ふりかえり

グループの中で交わされた話し合いの内容ではなく、話し合い中のメンバー同士の関係に思いを寄せて下記のことについて気づいたことを書き出してください。

１．あなたは、メンバーに対して寄り添う気持ちで話すことができましたか。

不十分　　十分

１――２――３――４――５――６

その理由は、

２．あなたは、メンバーの考えを寄り添う気持ちで聴くことができましたか。

不十分　　十分

１――２――３――４――５――６

その理由は、

３．話し合いの中でうれしかったことはどんなことでしたか。具体的に書いてください。

４．明日からの自分に活かせることはどんなことですか。

■　南山大学　人間関係研究センター　公開講演会

「組織開発（OD）におけるユース・オブ・セルフ：ゲシュタルトODの考え方」

2012年２月27日（水）
13:30～16:30
南山大学　名古屋キャンパスＤ棟Ｄ51教室

ブレンダ B. ジョーンズ　氏
（NTL Instituteｲ代表）
通訳：溝口良子氏、渡邉昭子氏　校正：土屋耕治

中村：

今日のワークショップの講師、ブレンダ・ジョーンズさんの紹介をさせていただきます。

ブレンダさんは、ODのコンサルタントとして長年の経験を持っていらっしゃいます。それ以外にも、アメリカン大学の講師として、ODのコースを教えていらっしゃいます。NTL Instituteのメンバーです。今日NTLという言葉がずいぶん出てくると思いますが、National Training Laboratoriesの略です。NTL InstituteはＴグループ、それから組織開発を長年引っ張ってきた機関です。1947年に設立されて、今年で65年になります。そのNTLのメンバーでずっといらっしゃって、そして12月にNTLの代表になられました。たぶん、NTLの代表が日本でワークショップを開くのは、これが初めてではないかと思っております。

ブレンダさんはODコンサルタントを独立してやられていたのですが、NTLの代表になられて、すべての仕事を断られたそうです。NTLの代表になられてお忙しくなられたのですが、日本に来ることだけは約束をしたから絶対来ようとしてくださり、今回こうやって奇跡的に来ていただけました。ブレンダさんはこの本、「NTL Handbook of Organization Development and Change」のエディターもされております。それからそれ以外にも、今回のテーマでもあるゲシュタルトOSD（ゲシュタルトの組織システム開発）のGestalt Center for Organization and Systems Developmentというクリーブランドにある機関で講師をされております。

本当にさまざまな輝かしい功績があるのですが、その一つとしてODネットワークというアメリカ最大のODの学会で、2011年の生涯功労賞を受けられたことが挙げられます。アメリカの中でも組織開発の実践家として、それから著

者としてさまざまな活躍をされている方です。組織開発全般と、それからゲシュタルトOSDの両方を語っていただけるという、本当に世界でも稀な方だと言えます。ゲシュタルトの組織開発、ゲシュタルト流の組織システム開発の話というのは日本で今までほとんど紹介されたことがありません。今回ブレンダさんには、ゲシュタルト組織システム開発のお話を、体験も含めながらしていただけると考えております。

ブレンダ：

ご紹介ありがとうございます。ここに来られて、とても嬉しく思っております。これが私の日本への初めての旅行、そしてNTLの代表としての初めての出張です。

NTLは、社会にとても重要な変革を引き起こすという使命を持っております。その代表になれてとてもわくわくしております。また、ゲシュタルトについてここで皆さんにお話しできることを嬉しく思っております。私は25年以上ゲシュタルトについて学んできました。個人的には、ゲシュタルトを通して世界を理解しているという面があると思っています。今日はここでゲシュタルトについて、ある一つの面から光を当ててお話をしたいと思っています。私はゲシュタルト療法を学んだわけではありません。私はゲシュタルト理論を学び、それを組織やシステムに応用するということをしてまいりました。ですから、ゲシュタルトを今日お話ししますが、その際には、グループに関して、非営利団体（NPO）に関して、利益を求める企業に関してと、このような組織との関連でゲシュタルトについてお話ししたいと思います。今回、ゲシュタルトについてのお話を、と頼まれたときに、ただお話しするだけでは分かってもらえることではないと思いました。ゲシュタルトは、とても双方向的なものですので、今日のセッションもただ皆さんが聞くというのではなく、お互いのやりとりをしていただきながら行いたいと思います。ですから、皆さんに「こういうことをしてください」とお願いすることがこれから出てきます。それは、それによってゲシュタルトを体験してほしい、というようなものです。

もし質問があるときには、どうぞいつでもおっしゃってください。

私もよく思うことなのですが、「ゲシュタルト」という言葉そのものが、理解することが少し難しいものだと思っています。私は、ゲシュタルトというのは、「全体を理解すること」と「部分を理解すること」の両方を含んでいると思います。たとえば、私が大学や組織に入っていくときのことを考えてみます。大学に行った場合には大学そのものが全体として、つまり私にとってはゲシュタルトとして考えられるのですが、それぞれの学部やこのWSを主催している人間関係センターもゲシュタルトである、と考えられます。そのものが全体でもありますし、また同時に、全体の一部でもありえるのです。それぞれが別々にゲシュタルトをなしていると言えます。そして、同時に両者が一緒になって一つのゲシュタルトをなしているという言い方もできます。したがって、やや

緩く定義付けるとすると、全体として形を成していたり、実体を成していたり、全体の中の一部として形を成していたりするということが言えると思います。

ゲシュタルトの周りには「意図」があると考えられます。というのは、人間の行動をある意味の完成したものととらえることや、人間の行動や個人をもっといろんなものになりうる存在だと見る見方からすると、できるだけ全体として見るという意図を持って見る、ということも大事になってくるからです。ですので、人間とか組織を相手に仕事をする場合には、マズローの「欲求の段階」と同じようなものが見えてくることがあります。すなわち、自分自身を実現することがよりできるようになって、より全体的になっていくということは、もっと人生全体をかけて考えていくことであると言えます。

ゲシュタルトが始まったのは1920年代ですが、フリッツ・パールズによって1940年代に米国にもたらされました。フリッツ・パールズもローラ・パールズも初期の研究者と言えますが、彼らは研究するだけではなくて、ODにおける理論の構築にも取り組んでいました。最初はそれぞれが一人ずつの個人の患者を相手にやっていたわけですが、70年代にオハイオ州のクリーブランドというところに移動しました。クリーブランドの組織が、初めて組織やシステムを研究するようになった研究所です。

（中村注: ゲシュタルト研究所のクリーブランドというところが、組織についてもゲシュタルトのことを応用していく初めての研究所だったわけです。）

ここに名前があがっている方々（※Edwin Nevis, Carolyn Lukensmeyer, Elaine Kepner, Len Hirsch, and John Carter）は、正に私の先生となっています。80年代の後半から90年代の始めにかけて、一緒に勉強した先生方もたくさんいらっしゃいます。私にとって、ゲシュタルトを特徴付けていると思うのは、西洋の哲学と東洋の哲学を一緒に混ぜ合わせたものだというところのユニークさだと、思っております。西洋・東洋の哲学を学ぶ中で、私ができたことは、「ゲシュタルトが何であるか」とゲシュタルトに統合されていく過程に関連する数多くの理論を学ぶ事でした。したがって、精神分析の理論も勉強しましたし、パールズがよく研究したことの一つは、「我々がどのようにものをとらえるのだろうか、私たちはどういうふうに学んでいくのだろうか」ということでした。私たちが物事を見る能力、物事を理解する能力というものが、ゲシュタルトに大きく関わってくると、個人的には考えています。これは、私が色々と取り組んでいく上でとても基礎となるところで、とても助けになることだったと思っています。ゲシュタルトに関する初期の理論家の一人がクルト・レヴィンで、彼の場の理論がそれにあたります。

ここにいらっしゃる方の、どれだけの方がシステム理論を勉強されたかは存じ上げていませんが、ゲシュタルトとシステム理論というのは非常につながっているものだと個人的には考えています。システム理論というのはある部分が全体とどう関連しているか、どう相互に影響し合っているかということを説明

する理論です。現象学的な考え方というものも勉強いたしました。それはゲシュタルトで言えば、ちょうど今このときに何が起こっているかということに当たるからです。ゲシュタルトを背景として学んでいる全ての方にとって、その焦点はhere now（今・ここ）だからです。ですから、ゲシュタルトを扱う人にとっては、過去の歴史や行動に関心は向かず、あなたの行動の仕方というのが、今ここでどんなふうに現れて、その人にとってどのような意味を持つのかということに関心が向いていきます。実存主義的な考え方では、私たちが知覚できなければそこに存在しないことであり、その存在しないものは現実に経験することができないものである、というような考え方をします。ほかにも多くの理論があります。このようなもの全部を統合して、ゲシュタルトというものが全体的にできあがっているというふうに理解しています。ですから、ゲシュタルトというのはとても興味深い分野だと思っております。

私がゲシュタルトを学んでいる一つの理由としては、1980年代初期に２年間のトレーニングを受けたことが挙げられます。そのとき、個人的には、私自身が、「自分が何かを知らない」ということに対して、もっと居心地よくいたいと思っていました。変革が起こるためには、知っている状態と知らない状態のどちらの状態にあっても居心地がよくいる必要があります。すなわち、自分が何を知っているか、という状態とともに、私が何かを知らない、という状態に対しても快適にいられるということも大事になってきます。なぜなら、どれだけたくさん勉強しても必ずまだ知らないことというのがそれよりもたくさん出てきますので、もしもあなたが変革とか不安定さに対処するときには、多くの不確実さとも向き合わなければならないということになります。ですから、ゲシュタルトというのは、少なくとも私にとっては、「自分が何を知らないかということについて気づく一つの方法だ」と思っています。その結果、私は自分が勉強できることの中で、ゲシュタルトは本当に重要な領域だということが分かってまいりました。

では、皆さんにもう一人誰かを見つけて話しかけてほしいと思います。誰かとペアになってゲシュタルトに対して分かり始めたことについてちょっと話をしてほしいと思います。そして、その後で質問を受けたいと思います。

３分間ですので、周りの方と顔を合わせてやりましょうという感じで見つけてください。

※それぞれの参加者が、近くの人とペアになり、話をする

ブレンダ：

少し聞いていただいてよろしいでしょうか。いくつか質問を受け付けたいと思います。質問ではなくても、この時点ではコメントでも結構です。

参加者A：

知らないことの不安定さとか、それから不快感みたいなものとか、恐れみたいなものというのと、それから知っていることの安心感というのが自分の中にあるんですが、その「知らない」ということを言えるということの大切さみた

いなものも、わずかですけれども少し気づくことができたように思います。具体的に、ブレンダさんの体験をお話ししていただけると私の中のチェンジにつながるんじゃないかと思いますので、よろしくお願いいたします。

ブレンダ：

たとえば、今回日本に初めて来ることになったのですが、それを決めたときのことです。私はどんな文化なのか日本のことも知りませんし、どんな人と会うことになるのかも分からないという状態でした。

私は、実はアメリカではワークショップは何度もやったことがあり、ほかの国でも数カ国でやったことがあります。でも、日本ではやったことがなかったわけです。気づいたことは、特に私のワークショップが、西洋の文化の中では、自分はたくさんの経験があってそれができたのですが、ここ日本で本当にそれが参加者に分かっていただけるかどうか、そのことが不安でした。

一つの組織から次の新しい組織に行くときには、やはりその組織についても知らないことが多いです。自分の理論における主題というのは分かっていて、それはもちろん、前にあった仕事のところではちゃんと合ったのだけれども、その理論が、次に行く新しいところに本当に適切に合うものだろうかは分からない。ですから、私は仮定を持たないようにし、すべてがちゃんと伝わるというふうには思わないようにしています。

ほかにございますか。

参加者B：

何十年か前にたまたまシステム理論の勉強をしたことがあって、それでシステムというのは全体と個の関係で、しかもその物の見方だということを学んだ記憶があります。つまり、人によって異なるわけですけれども、ゲシュタルトもそういう物の見方というか、キャリアなども自分自身の物の見方だと思うのですけれども、そういうふうに理解してよろしいでしょうか。

ブレンダ：

それでは合っているのですけれども、ちょっと付け加えたいことがあります。

ゲシュタルトでは、「全体」というのはもしかしたら「部分の総和」とは違っているところがあるかもしれないと言います。もしもある組織で仕事をしていたとします。そこでは彼らのやっていることが、その組織の目的と合っているかどうかということを見定めたいわけです。全体としては、彼らは目的に沿っていますが、一つの部署では目的と合致しているけれども、ほかのところではそうではない、という場合もあります。ゲシュタルトの視点としては、それぞれの部分にも目を向けられるということです。そして、たぶんこうだろうという仮定をしないということもあります。

次に行く前に、どなたか質問される方はいらっしゃいますか。

まだ、ゲシュタルトについては話し始めたばかりですので、後でまた質問の時間を取りたいと思います。

スライドで、皆さんに、４～５枚の異なる絵をお見せしたいと思っています。自分が何に対して注目しているかということに注意しながら見てほしいと思います。

※スライド上映（いくつかの異なるものに見える絵）

ブレンダ：

それでは30秒ほどかけまして、今見たイメージで本当に自分が何を見ていたのか、どんなことを感じていたのか、どんな音を聞いていたのか、何か自分の中にこみ上げてくるものがあったと思うので、それらを紙に書き止めてみてください。

※個人での作業

ブレンダ：

それでは、皆さんからどのような物を見ていたか、そういうコメントもいただきたいと思います。どんなことでも大丈夫です。

参加者C：

最初に全体として見て、その後パーツとして見ました。

ブレンダ：

ありがとうございます。ほかにありますか。

参加者D：

一つは、地と図というか、見方が二つあるなとか三つあるなとか思うと、それを探してしまう自分がいるなと、そういうことに気づきながら見ていたということと、もう一つは、どういう絵なのかというよりも、その中に出てくる人だとか、背景とその人との関係だとか、どこを見ているのかなとか、何を考えているのだろうとかという、そういうことのほうが見ていて気になるなということを感じながら見ていました。

ブレンダ：

ありがとうございます。もう一人どなたかいますか。

参加者E：

興味が沸く絵をじっと見てしまうなというところがあって、そうすると全体のことを忘れてしまうぐらい、そこに集中してしまうというときがありました。

ブレンダ：

実は、こういうものは見れば見るほど、時間をかければかけるほど、いろいろなことが伝わってくると思います。だから、皆さんは見ながら、この絵が止まってほしいな、もっと見ていたいなという気持ちを持ったかと思います。また、ある絵が、こんなこともあったなと皆さんに思い起こさせるような、つまり、ほかの経験をしたときのことにつなげていく場合もあると思います。

私にとってゲシュタルトの強みというのは、私たちが自分の五感を使うという点だと思っています。見ること、聞くこと、また香り・味そして触覚、これらすべてが機能するのですが、そのような五感の中のいくつかが絵を見ている

ときに働いて、その五感が何か溶け合って一体化しているようなときがあると思います。また、何か絵を見ても何の感情も沸き起こらないこともあると思います。ゲシュタルトが常に言っていることなのですが、私たちはそれぞれ違う経験をします。しかし、自分の感覚というものに自分が合わせていること（tuning）ができる状態ならば、自分の人生においてより効果的なあり方でいることができるのです。

もう一つ、ゲシュタルトのコンセプトで、「地と図」というものがあります。何か絵が皆さんに意味があるものとして出てくるとき、そこに何かの絵が現れてくるわけです。馬が二頭現れていた絵についてですが、時間が経つとその馬に見えていたものが顔にも見えてくるということが分かってくると思います。ときにはその顔が見えづらくなってしまう、見えていないときもあると思うのですが、もしその顔が見えていないとしたら、ゲシュタルトの言い方では顔が地になっていると言います。そしてその場合、馬が図になっています。ゲシュタルトの専門用語で、図が見えているということは見ている人の注意がその図により多く払われていることを意味するのです。これは、ゲシュタルトにとってとても基本的な考え方です。皆さんにとって何か形になって見えてくる物、でもそれだけではなくゲシュタルトの考えではその背景にあるものは何だろうか、地は何であるだろうかというその地も、私たちが絵として見ている図と同じぐらい大切なものだということです。

ですから、私がグループや組織と一緒に働くとき、その人たちが見ている図は何かということを明確にしようと考えます。それはその組織の人たちが一番注意を払っているところなので、それが何であるかを理解しようとします。

次に私が注意をしたいのは、そのグループの中にいる個人個人も同じ図を見ているか、同じ気持ちを共有しているかということです。一つのケースでは、グループの一人ひとりの人が別の図を見ていることもあると思います。ですから、私にとっては地と図というのは非常に面白い現象だと思っています。ときどき友人と話をするときに、新しい車が今売りに出ているねという話題になって、その新しい車というのを彼女は街中でしょっちゅう見ているからそれを話題にするのですが、私は見ていないから彼女が何のことを言っているのか分からない。実際街に出て私が車にもうちょっと注意を払ってみると、その友達が言っていた車が何であったのかが分かるわけです。

皆さんに理解していただきたいのは、絵に皆さんの注意を傾けることがいかに大切かということです。そして、どういうときには図ではなくて地、すなわち、グラウンドの方により注意を向けていかなくてはいけないのか、ということの大切さも理解してもらいたいです。ここまでの図と地についての質問はありますか。

また、ゲシュタルトでもう一つ大事なことは「気づく」ことができる状態にいる、ということで、このことはもう既に少しずつお話をしてきました。もし

ゲシュタルトについて、人びとが重要だと話すことが出てきた場合、そのことに「気づく」ことができると思います。気づけば気づくほど、変革をサポートすることができるようになります。ゲシュタルトのベースになっているものは、皆さんがどれだけ他の人が成長し、発達することに役に立つかということです。そして、そのときの成長とか発達について重要になってくるのは、そのことが、どのように自分自身が理解をし始めるかということや自分の能力を理解することを助けるからです。ですから気づきについて話をするときは、自分たちの感覚についてまず意識を向けて、自分の体験していることはどのようなものか、という理解を深めようとしていくことが重要になります。自分自身について理解すればするほど、より成功できるようになります。

ゲシュタルトの専門用語では、Oは有機体を意味します。Eは環境、有機体と環境の関係性を意味します。ゲシュタルトでは、それぞれ一人一人が自分をよく知ることができる唯一の方法は、他者と相互作用している時であると考えます。自分がよく知っているグループの中にいるとき、自分自身についてよく学ぶことができますが、でも、自分とは全く違うメンバーと一緒にいるときには、もっと自分のことを知ることもできるのです。この概念のもう一つ重要なことは、私は外に向かって開かれているだろうか、自分の外やほかの人に起こっていることを理解しているだろうか、ということと同様に、自分の中で起こっていることにも目を向けるということです。そうすると、重要なこととして、相手と自分の間にバウンダリー（境界）があるということが分かるようになります。つまり、あなたがあなた自身の持っていらっしゃる境界を理解することが重要で、また、私も私自身の境界を理解することが重要です。それを可能にする唯一の方法は、気づくこと（アウェアネス）を通してなのです。

それでは、これからもう一つエクササイズをやっていただきたいと思います。先ほどとは違う方とペアを作って下さい。もし、パートナーが見つからない方は教えてください。一人の人をAとして、もう一人の人をBとしてください。どちらでもいいのですが、今回はBの人から始めてください。「今私は何々ということに気づいている」という文章を言ってほしいと思います。

まずやってほしいと考えているのは、私がストップと言うまでBの人はできるだけずっとその文章を続けて言っていってください。そして、それを言うときに「自分にだけ」注意を向けていてください。

例を申し上げるなら、「私は今手を組んでいます、それに気がついています」というふうに言います。たとえば、「私は今お腹がいっぱいだ、ということに気がついています」などもそうです。これから、自分のペアの人に向かって、声に出して「自分がこういうことに気がついている」ということを言い続けていてください。ストップと言うまでそれを言い続けていてください。その間、Aの人はBの人に注意を向けて、よく聞いていてください。そして、時間がきたら、次にAが同じことをやります。ではBの人、準備いいですか。スタート

してください。
※２人での会話
ブレンダ：
　はい、止めて下さい。
　では交代して、Ａさん、始めてください、ストップウォッチで測ります。
※２人での会話
ブレンダ：
　はい、止めて下さい。まだ今のペアの方と作業があります。
　では第二ラウンドです。これはＢさんから始めてほしいんですが、今のシステムとかやり方は同じです。言っていただく文章も同じなのですが、先ほどは気づいていたこととして、自分の内面のことを話してもらいましたが、今度は自分の外側のことだけを話してください。たとえば、こんなふうに言います。「今私の周りにたくさん人がいることに気づいています」「今ちょっと風が吹いているなと気づいています」というような､外側のことだけを話してください。
　よろしいでしょうか。それではＢさん、スタートしてください。
※２人での会話
ブレンダ：
　はい、では止めてください。Ａさんに交代して､「外側のことについて私はこんなことを気づいています」と始めてほしいと思います。はい、スタートしてください。
※２人での会話
ブレンダ：
　はい、止めて下さい。
　お互いにちょっと話し合ってほしいと思います。自分にとってどっちの話をするほうが簡単だったか、自分の中で起こっていることを話すほうが簡単だったか、外側の環境に気づくほうが簡単だったか、そういうお話を二人でしてみてください。自分の今の体験について話し合ってください。２～３分です、時間が来たらお伝えします。
※２人での会話
ブレンダ：
　こちらに注目して下さい。今話し合った結果とか自分たちの体験について２～３人ほど、全体でのシェアのために発表していただける方はいらっしゃらないでしょうか。
参加者F：
　ちょっと発表の前に質問をよろしいでしょうか。この外側・内側という部分で、外側のこの音とか光とかいろんな物というのが外側だけれど、この光とか音を感じ取って自分の中でこう考えている自分がいるけれど、それは内側と考えるのでしょうか。

ブレンダ：

両方です。外側で起こっていることに対しての自分の反応です。これはよく起こることです。

何かが自分の中に起こっていたり、外で起こっていたり、外で起こっていることに自分が反応したりするということがあります。ですので、大事なことは、そのどちらにもちゃんと注意を向ける能力が自分にあるかということです。

ほかにありますか。外よりも自分の内部に気づくほうが難しかったという方はいらっしゃいますか。反対はいかがですか。どちらが好きでしたか。

参加者G：

普段ですと、ほぼ間違いなく内側に関心を向ける癖があるというのを自分で分かっているんですが、今日に限ってはものすごく早く外のほうに関心が向きました。今日に限ってです。これはちょっと不思議な気持ちがしています。

ブレンダ：

ほかにありますか。

参加者H：

私の場合はすごくいろんな物に好奇心が旺盛なので、外のことはすごく次から次へ出てくるんですけど、いつも家族からも反省がないとか落ち着きがないと言われているので、何か失敗しても反省することなく次のことを考えてしまうので、今日自分の修正というか癖というかいうことがよく自分で気づきました。

ブレンダ：

すばらしいことですね。私たち自身のことについて話しますと、もちろんモットーとしては両方大切に思います。たとえば、自分のことに焦点を当てる時間のほうが多いという場合もあり、ときによってはそういう人が同時に、あるときには外側のほうに焦点を当てることが多いという場合もあると思います。皆さんが多分こうありたいと思ってらっしゃるのは、両方に対して、できるだけ自然にアクセスできるということかもしれません。そうすると今は、こちらのほうにこちらよりも焦点を当てるべきときというのがあります。これが変化が起こる道筋です。これができると、自分がやりたい仕事や自分がすべき決定が、とても効果的にできるようになります。

私はこれからもちょっと話し続けていきたいのですが、たとえば自分にとって何が内側のことでありどちらが外側であるかと思っているときには、図を確認（同定）しているわけです。それで注目している方が、地の方から出てきて図になります。そして、今の体験から自分が何かに注目をすると、そのことが浮かんできて図になるという体験をしていただいたと思います。今、皆さんには外を見てくださいとか中のことで気づいたことを話してくださいとお願いしましたが、このことはつまり、皆さん自身の中に常にこのことはあるということです。つまり、あなたは地の上にいる、ということです。気づきというのは、

それをどのように明確にしていくかというプロセスです。これらがゲシュタルトについての２つの大事な概念で、私たちがこれからも引き続きちょっと勉強していきたいというところです。

今から10分間の休憩を取りますが、その後また続けていきます。

※休憩

ブレンダ：

それでは始めたいと思います。ある映画の一シーンをお見せしたいと思います。注意して見ていただきたいところは、個人個人がどのようにその図と地について、環境も加わりますが、このシーンにどのようにそのような要素が統合されているか見てほしいです。この映画はアメリカの映画で、ロバート・レッドフォードが監督した映画で、彼はアメリカではよく知られた俳優であり監督であります。これはあるゴルファーの物語です。第一次世界大戦の頃の話です。戦争が始まって彼が戦場に行くころに、自分の分野ではトップのプロゴルファーでした。戦場から戻ってきたときには、もうゴルフができなくなっていました。スウィングを失ってしまった、と彼は言っています。でも一度帰ってきてからは、彼の属しているコミュニティがゴルフのゲームを開きたいというふうに思ったのです。外からも有名なゴルファーを招待してこようとしました。もちろん、自分たちのコミュニティからもゴルファーに参加してほしいなと思ったわけです。それで、彼のところに行って「出てくれないか」というふうに尋ねました。最初は「やりたくない」と言ったんですが、その後で「やりましょう」となりました。それで、ゴルフを何ラウンドかをやった後で、ガイドとかコーチの指導を受けられるようになりました。そして、少しうまくできるようになりました。このシーンは、よりよくゴルフをするには何が必要かということが分かった（figure out）というあたりです。ゴルファーにももちろん注意を払ってほしいんですが、図と地にも、そして環境はどんなものかというのにも注意を払ってみてください。

※動画（映画『バガー・ヴァンスの伝説』の一部）を紹介。

ブレンダ：

皆さんがどんなことに気づかれたかとても興味があるのですが、どなたかよろしいですか。

参加者Ｉ：

なんかすべてに溶け込むという感覚が、なんかよく武道とかそうなんですけど、自然体とか無の境地みたいな、そんな感じなのかなと思いました。

ブレンダ：

ゲシュタルトを持ったときのことだと思うのですが、すべてのピースが一つに組み合わさって、そして結果としてとても効果が出たというような場面です。ビデオの中では、その彼自身と自分のスキル（腕）とその環境とが合致したという感じです。

他に、たとえば、気づいたこととか見たこととか、または質問でもいいのですが、何かありますか。今の映画は、少し理解が深まるような体験でしたか。

参加者J：

質問をしていいですか。場と環境の違いがまだちょっとよく分かっていないので、少し教えていただけますでしょうか。

ブレンダ：

実際のところ同じですが、その意図としては、自分自身の外側のことに、可能なだけ気づけているのかということです。レヴィンはこれを「ライフスペース」というふうに呼んでいます。私が効果的に働く唯一のあり方は、自分自身に注意を向けつつ、そして自分を取り巻く周りのフィールド（= 場）にも注意を向けている、というような時です。ときにはその周りのことを環境（environment）というときもあります。ありがとうございます。

もしも、少しずつこれで分かり始めたなという段階にきていただいていたとすると、ゲシュタルトのもう一つの基本となる概念についてお話をしたいと思います。「体験のサイクル」と呼ばれるものです。体験のサイクルとは、そのままの意味ですが、私たちはいつも何らかの形の体験をしています。皆さんは今日、３時間、ゲシュタルトを勉強するためにここにいるという体験をされています。ゲシュタルトの分野では、体験にはサイクルがあると考えます。

まず最初に起こるのは、まずは私たち自身を、人間としての有機体として理解するところから始まります。ここにあるのが有機体の典型的なプロセスです。このモデルは、ゲシュタルトの体験のサイクルと全く同じ段階を経ています。

※「静止中の有機体、内的-外的の機能の中断」→「イメージの創出、または、現実性のプラス-マイナス、図と地の現象」→「解決に向けてこたえる、･･･をめざす」→「緊張の減少、結果に至る」→「有機体のバランスの回復」→最初のものへ、というサイクルの提示

私たちは休んでいるときもありますし、何か刺激が自分たちの中で起こるというときもあります。その刺激は、自分たちの中から起こってくるときもあり、外側からの刺激という場合もあります。そしてそのイメージが形作られると、「図」を確認（同定）するわけです。こういう図があるな、と分かってきます。

今自分の中に沸いてきたこの考えていることに対して、何か解決法はないかなと考え始めます。それに対して、自分の中に抵抗もあったり緊張が生まれたりしますが、そういうものに対処をしていきます。そして、次の場所に行くわけです。

できればそれはバランスのいい場所であってほしいのですが、バランスの悪いところに行き着いてしまう場合もあります。この組織のサイクルと同じことになります。次のページです。

※右側に記述する要素が外側に提示されています

※「覚醒 / 見て調べる」→「気づき / 概念化」→「エネルギーの高まり / コミッ

トメント」→「アクション / 動き」→「コンタクト / バウンダリーでの変化」→「アセスメント終結 / アセスメント」→最初のものへ、というサイクル

サイクルには二つのレベルがあります。そのレベルの違いというのは、言葉の表現の仕方の違いだけで、ゲシュタルトのことを個人について話しているときと、組織に対してその話をするときとは違う表現を使いまして、ここの中側ところは、個人レベルで起こっている時の言い方です。組織レベルのときには外側の表現を使っています。ですから、中と外は言い方が違うというだけです。

まず「覚醒」から始めたいと思います。何か刺激があって、そこから始まる段階です。その刺激というのは、自分の内側から出てくるときもあれば外側のものという場合もあります。それについて、五感を使って見たりかいだり味わったりし始めます。センセーション（覚醒・感覚）とアウェアネス（気づき）の二つの段階の違いというのは、「こんなものが起きている」と覚醒を扱っている段階と、それらを理解しているという段階の違いです。ここでは、だんだんとはっきりした図というものを持つようになります。

私たちは、この一周で終わりではなくて、何度もこのサイクルというのを回っていくということをします。回っていくにつれて、妨害の入らないようなサイクルについてちょっと考えてみたりします。もしも「気づき」が一度起こった後では、その図に対してたくさんの興味というのを持つようになってきます。私がどんな興味を持つのかという例をお話ししますと、たとえばエネルギーとかどんなリソースが私には使えるだろう、エネルギーはどれだけあるだろうとか使えるだろうか、ということを考えます。自分のわくわくする気持ちとか興味から、そしてコミット（関与）を持ってそこにかかわるということになります。

このときになって、「行動（アクション）」を起こしたいというようになります。アクションというのは、それは活動（アクティビティ）であったりします。その起こした行動に基づいて、自分がどこにいるのかと自分が何をやっているのかをはっきりさせ、それらを突き合わせ、どのようなコンタクトがなされる必要があるかを考えます。

「コンタクト」についてゲシュタルトが言っていることは、個人が実際にコンタクトを起こすまでは変化は起こらないというものです。コンタクトとは、ほかの人とのコンタクトとか、環境とのコンタクトのことです。

そして、次に体験の「終結」という段階に入っていきます。この体験のサイクルと呼ばれるものに加えて、これはまた変化のサイクルでもあるというふうにゲシュタルトでは言います。私たちはどのように変わるだろうか、変われるだろうかということを考えると、こんなふうに違いたいんだ、こんなふうに違っていきたいんだ、ということが明確になっているときに変化していきます。そして、それについてわくわくしていき、たとえば、新しい歌を歌ってみたいとか、新しい言語に挑戦してみたいなどの、どんなアクティビティが必要だろうか、どんなことがかかわってくるんだろうかということを考えるのです。でも、

コンタクトの部分では、自分が学ぶ必要がある新しいことというのに、必ず焦点を合わせています。そして、そのプロセスの中での自分の苦しさというものからも逃げずにいるということをしなくてはなりません。まだ自分は本当に行きたい場所に届いていないなと自覚したりします。

このサイクルのどのあたりであってももちろん邪魔も入りますし、実際には何かを本当に完全に仕上げるとか、完璧に終結させるということはないかもしれません。これはゲシュタルトでは「終わっていない事柄」と言います。何かの抵抗というのは、それがどこかに辿り着きたいということの一部です。ですから、このサイクルについて理解しておくべき非常に重要なことは、いろんな部分で終わらないままの状態になってしまうことも、たくさんあるのだ、ということです。時間、というものも、私たちが物事を終結させる道を見つけることを邪魔したりします。

それでは、今まで話し合ったことのない方を見つけていただいて、今のサイクルについてこんなことは分かったけれどもここが分からないというような、分かったところと分からなかったところをちょっと話し合ってみてほしいと思います。２～３分だけですが、ペアでお願いします。

※２人で会話

ブレンダ：

それでは皆さん、何か質問がある方はいますか。

参加者K：

抵抗（レジスタンス）とインタラプションの違いというか、それらがどのように存在するのかというのがちょっとよく分からないです。たとえば、私たちが個人レベルでアクションを起こそうとしたときに、組織全体のレジスタンスがあると、それは私にとってはインタラプション（妨害・障害）であって、経験のサイクルが完結しないというように理解をしていいかどうか教えていただきたいです。

ブレンダ：

クルト・レヴィンに関係することですが、サイクルで起こっていることをこのような図式で表すこともできます。サイクルのすべてのパート（部分）で、変化に対してそれを賛成・支持する力と、それに抵抗する力が同時に働いています。皆さんが何かの感覚を得て、五感をもって覚醒を感じ、それが気づきに至るまでに、そこに何らかの障害があります。そして、「気づき」の段階から、「エネルギーの高まり」へ移る段階に関しても、なんらかの障害があったりします。

ゲシュタルトで重要なことの一つに、抵抗を自然でよくあることだと見るというものがあります。そういう見方をすることで、まだ人々が、それがなぜなのか自分では腑に落ちていなくても、自分が変化への準備ができていないのだと理解することができます。しかし、抵抗について理解できるまで、その自分のサイクルを完結しようという動きを、これからも続けていけるだろうかと考

えます。したがって、変化というのは強制されて起こるべきものではないと考えます。そしてこのことを自分たちが理解していれば、いったいそもそもこの抵抗は何に関するものなのか、と時間をかけてみていくことになるでしょう。ときには、本当に必要なことが「注意を向ける」ということかもしれません。そして、それは自分が今行っている以上に、注意を払ってみるという姿勢につながります。

しかし、抵抗がより減るまで、あるいは自分がその抵抗に対処する準備ができていくまで、そしてそれが私の望むところに到達するようになるまで、無意識ではあってもいつでも抵抗というのは出てくるものです。ですから、変化が起こる起こり方というのは、皆さんがさっき見たサイクルにうまくあてはまってきます。

そしてそのサイクルが邪魔されてしまうと、うまくサイクルに戻すにはどうすればいいかを考える必要が出てきます。サイクルを振り返ってみて、いったいどの段階に自分は注意を向けるべきなのかを考えます。そして、自分自身の行動をサポートするために、このエネルギーの部分にもっと注意を向けなくてはいけないとか、あるいは自分が持っている不安というものが何なのかをより明確にしなくてはいけないなどです。なぜなら、このサイクルの一番下の部分、アクションを起こしていくためにはそういうことを考える必要があります。

ほかにこのサイクルに関して重要だと考えていることは、この覚醒からアウェアネスに行くまでの部分で、そして、このアクションのところに到達するまでの部分で、サイクルが示しているのは、実際にサイクルというのはこのすべての段階を経て終わるのだということです。たとえ、ここに書いてあるすべての段階に長い時間留まっていなかったとしても、このような段階を全て経ていくことが最終的に成功して終結するには、やはり大事なことなのだと思っています。

このようなお答えでお役に立ちますか。

参加者K：

抵抗についての意味がよく分かりました、ありがとうございます。

ブレンダ：

サイクルについて質問ありますか。

参加者L：

アクションについて教えていただきたいのですけれども、アクションというのはどういうものなのかということです。これは、動いてみるとか、とりあえずやってみようということではないように思います。いわゆる、アクションの動きというのはどんなものなのかというのが一つです。そして、もう一つ質問がありまして、そのアクションというのはもし自分ということを考えたときに、自分の得意な何かアクションというものを持ってもいいものなのか、あるいはいろんなアクションというものにチャレンジしたほうがいいものなのか、その

点を教えてほしいと思います。

ブレンダ：

アクションというのは、もともと一連の行動を意味しておりまして、それは私個人だったりグループだったり組織に必要なことで、変革を達成するためにはしなくてはいけないことを意味します。たとえば、グループの一員として何か計画をして行動を起こそうとするときに、アクティビティのすべての一つ一つの部分を意識しておく必要があります。もし計画がうまくできないと、何か事が起こるわけですけれども、コンタクトの部分でそれをきちんと維持することができなくなってしまうということがあったり、自分は熟練者として接したいけれども、コンタクトで何か変革が起こったときに、その力が自分にはない状態で臨んでしまったりすることになります。ですから、行動の量というのは、あるいはどんな行動をするかということは、私がここで起こしたいという変化・変革とすごく関連してきます。

正直な話、しばらくの間はNTLの代表になりたい、と思っている時期がありました。でも、実際に私はまだその準備ができていないなと思っているときには応募しませんでした。まず最初にそのことについて考え始めたのは実際12年前のことだったのですが、それは５年前にまた考え始め、そしてついに昨年応募してみようと思いました。

私のサイクルはすごく早い段階で始まりました。12年前もこの点について始まっていて、私の本当に感情とか気持ちもそこにあったんですが、私は本当にこのNTLというのを率いてみたい・リードしてみたいという気持ちがあって、でも自分に準備ができていると思うまでは実際には応募をしなかったわけです。

しかし、そのときでも実際にその代表を決めるのは、私ではなくて理事会がすることでした。この場合は、私自身が自分のサイクルに邪魔をしていったことになります。ですから、このサイクルというのは何年もかかる場合もありますし、一カ月のときもありますし、何分かのときもあります。

では、サイクルについて理解ができたとしたら、すごく複雑なことではありますが、理解のベースとして皆さんが今注意してくださっているのならば、それはもうゲシュタルトのエッセンスをすごく近くに感じていらっしゃる状態です。

もちろん、ゲシュタルトには他にも理論とか概念はあるのですが、先ほどもやった図と地、アウェアネスそしてこのサイクルというこの三つが大切になります。この三つを理解することで、ゲシュタルトのエッセンスが分かるようになってきている段階だと思います。

では、２～３分取って、ユース・オブ・セルフに今度は関連付けていきたいと思います。ゲシュタルトにとっては、何か療法をされているとしても、コンサルティングをされているとしても、ゲシュタルトはあなた自身、している人自身をとても重要な存在だと見なします。自分自身を「道具」として見ます。ミュー

ジシャンが楽器を見るような見方です。もしも自分自身をよりよく理解して、そしてちゃんと自分の面倒が見られるようになればなるほど、自分の環境においてとても効果に働くようになると思います。たとえば、私の家族の中であったり、組織の中であったり、クライアントとの間のことであったり、友達など、自分がかかわる人とか一緒に働いている人すべての人との間でのことです。

私の人生において築いてきた関係というものが、ゲシュタルトの見方からすると、自分自身をどう使っているかということと、とてもかかわりが深くなってきます。自分を道具として考えるということは、自分にはどんなスキルがあって、自分はどんな行動をして、どんな癖があってということを分かっているかどうか、そして同時に自分はいったい何であるか、そして自分は何を体現しているのかと、考えることです。それは自分の価値観にもとてもかかわることですし、ほかの人をどういうふうに扱っているかということとも関連してきます。また、そういうことを自分のやっていることにちゃんと統合するということができているだろうか、という視点とも関わってきます。自分が発達していくには、自分のやっていることについても、自分はどんな人であるか、という理解に関しても、両方同時に発達させていかなければなりません。

私が喜んでやりたいことは、本当に役に立ちたいということ、できるだけ役に立ちたい、ということです。私自身が健康でなくては、ほかの人を助けることはできません。というのは、自分自身に何かが起こっていることを、それを相手の人に投影（プロジェクト）させないということも大事だからです。たとえば、人を援助するという分野で働いていると、ほかの人の中に自分というものを見てしまうときがあります。そして、私のことかしら、それとも相手のことかしら、と混乱してしまいます。ですから、ゲシュタルトでは、自分を発達・開発（develop）させるということをまずやります。すると、誰かと会った時に、他の人との関係の中での自分、ということが理解できるようになります。

すると、相手があなたのことを好きじゃないとしても、正直にならなければならないときがあり、その時にも、どれだけ自分を使うことができるのか、そしてどれだけのリスクを取れるのだろうか。相手の感情に敏感でありながら、言う必要があることを言えるだろうか。そして、この関係というのをどうやって扱っていくのか、ということが問われます。ゲシュタルトは自分が、自分自身は何者であるかを知るということを通して、個人を手助けします。

では、２～３分ほど取ってほしいんですが、自分はどんな人間か考えてみてください。

たとえば、自分のしている役割に関してとか、自分が楽しんでやることとかについてです。それで一番大事なことは、どんなことがあなたにとって一番深い意味があるかということについてです。とにかく２～３分取って、自分自身のために、そのことを書いてみてください。

※各自作業

ブレンダ：

ちょっと２～３、お話ししておきたいことがあります。まずは「あなたはどんな人ですか」という問いに関することです。自分がどんな人間であるかというのを知ることはとても重要です。自分自身が自分自身にわくわくするようにさせるような、一番深い部分の自分自身を知るということです。この部分は、私たちがこれから先、人生でどんなことを体験していても、いつもある部分だからです。私が年取っていっても、私の一部としてずっと残っていくもので、変化していかないものです。

たとえば、人類に対する深い感謝と評価することであるとか、世界中の誰も一人一人みんな大切なんだと信じること、などです。自分が何をすることになろうとも、こういうものは自分自身が存続することを助けているものです。したがって、皆さんにしてほしいことは、自分の責任や役割を越えた部分で考えてほしいということです。そして、そのあなたの一番最も深くにあって意味を持つところにいつもいてほしいんです。

ゲシュタルトで「ユース・オブ・セルフ」という言葉は、プレゼンス（存在感）を持つということと関連します。単純に言えば、フル（全部）な自分として姿を見せるということです。私たちは、全体として・全部で存在するということを、少し過小評価しがちです。

この３時間私たちは一緒におりますが、私にとってはここにいらっしゃる皆さん以外は、もう何も重要ではないのです。時間に関して言うと、私たちはいつもこの瞬間にいるということが大切です。ただし、だからと言って周りのほかのことが重要ではないという意味ではありません。でも、効果的にあるためには、一度に一つということも、とてもいいやり方だと思います。

存在というのは非常に大事になってきますが、そのスタイルのこともお話ししたいと思います。スタイルももちろんある程度重要なんですが、でもスタイルというのはときには表面的だけということになりがちです。たとえば、自分自身はどんな人だということをパッケージにして示すようなことに近いので、それは本当の人間というようにはなりにくいと思います。

時間どおりにいきたいのでこのあたり少し速く進みます。もし私が効果的でありたいとしたらどんなふうに自分を見せるのかということに関して、いろんな幅・レンジがあります。それには、チャレンジングでありながらも人をサポートするという両面を同時に持つようなあり方もありますし、たとえばときにはどちらか一つの状態しか取れないときもあります。ゲシュタルトでは両方というふうに言っています。自分のある一面に、自分は気づいてアクセスしていく時もあると思いますし、自分の中の２つの面が葛藤していてもそれはそれでOKでしょうし、また、とても協調的に２つの面が働く、ということもOKだと思います。自分自身の一番いい部分の自分に出会ったときにはどちらもできると思います。

ゲシュタルトの見方から自分を理解する、とはどういうことかということを皆さんには分かって帰っていってほしいと思います。たとえば、先ほど外側・内側を見渡すというのをやりました。それは感覚の気づきに関する話でした。私は、自分がどんなことを考えているかも分かっていたいと思うのですが、同時に自分が今何を感じているかということも分かっていたいと思っています。自分の持つバウンダリー（境界）というのも、自分で扱っていきたいと思っています。これは、自分自身を、周りとの環境との関係の中で理解するという意味です。それで自分自身が「地」の真ん中にしっかりいるということもしていたいし、意図にも明確でいて、自分がどんな影響を周りに与えるのかということも、明確にしていたいです。そして、ほかの人と一緒にいながらに、健全なあり方をしたい、そして全体としてしっかりそこに存在するやり方も明確にしていたいと思っています。このように、いろんなことを組み合わせたり統合したりして理解していくと、私たちはより効果的に働くと思います。

これで、今日のゲシュタルトに関するプレゼンテーションを終わりたいと思います。

中村：

ちょうど時間になりました。ゲシュタルト組織開発について、３時間で体験と講義を組むのはとても無理な話で、全体像が少し分かったなという方もいれば、まだまだよく分からないなというふうな方もいらっしゃるかなと思います。私なりに言うと、ゲシュタルトのサイクルの気づきの部分は図が明確になるときですよね。それで、先ほどのたくさんの絵が出てきて図が見えると同じように、グループや組織の中でも同じ図をみんな、これは私たちの問題で、また私たちの課題はこれだなと同じ図を共有して、これに向かって行こうとエネルギーが高くなって、そしてアクションをしていく。そうすると、変革も大きく起きる、というふうにとらえられるのかなと、今の話を聞きながら思いました。

リーディングの中にもありますが、またリーディングを読んでいただくといろいろ皆さんもご理解いただけるかなと思いますが、ツァイガルニック効果というのが出てきまして、未完な物ほどより勉強したいという気持ちになってきます。今日、なんかちょっとまだまだもっと知りたいなという方は、これからゲシュタルトODをどんどん学んでいただければと思っています。

リーディングをぜひ読んでいただければというのと、ちょっと宣伝になってしまいますが、ゲシュタルトODについての論文が、当センターの紀要（※『人間関係研究』第11号）に掲載されます。当センターのWebページからダウンロードできますので、ぜひそちらもご参照ください。

では、ゲシュタルトのサイクルから言うと、終結というのはとても大事になりますので、このワークショップも、津村センター長から一言いただいて、終結とさせていただきたいと思います。

津村：

どうもありがとうございました。ブレンダさんの、皆さんにコメントとか質問しているときのにこやかな顔が、何とも言えないです。受け入れてくれているというか、受け入れようとするというか、そういうのがすごく印象的でした。

それから、もう一つ、何かこの私も十分分かっていないのですけれども、図と地というふうなゲシュタルトをこう聞かせていただいて、私の気持ち的には心が広がるというか、組織の中ではいろいろあるんですが、何か文句を言ってきても、それが「彼は図になっているんだな、ほかに図はたくさんあるよね」というふうな気持ちになれば、かなり幅広く受け入れられる、なんかそんなことをちょっと私の中には残っていて、図になっています。なんかたくさんの図を探すといいますか、今日見つかった図からまだまだ見つかっていない図の探求を、先ほど中村先生言われましたけど、できると、そんなつながりがまたできていくといいかなというようなことを思っています。

こんな機会を作っていただいたブレンダさん、ありがとうございました。

中村：

それではこれで今回の公開ワークショップを終了させていただきます。

■　南山大学　人間関係研究センター　公開講演会

関係性の回復に向けて

2012年５月30日（水）
18:30～20:30
南山大学　名古屋キャンパス　Ｒ棟フラッテンホール

玄　侑　宗　久　氏
（臨済宗福聚寺住職・作家）

司会（川浦）：南山大学の川浦と申します。

本日は、南山大学人間関係研究センター公開講演会にお越しいただき、本当にありがとうございます。本公開講演会に、玄侑宗久先生をお招きできますことを、本当にうれしく思っております。

玄侑先生は、福島県田村郡三春町の臨済宗福聚寺第35世のご住職でいらっしゃいます。また、皆様ご存じのように、2001年『中陰の花』で芥川賞を受賞されるなど、文筆家・作家としてもご活躍でいらっしゃいます。

私自身が玄侑先生のお考えに触れるようになったのはごく最近で、2010年に放映されたNHKの「なりゆきを生きる」というインタビュー番組がきっかけでした。この番組の中で、「覚悟を持って現実に向き合い、決然と生きる」ということをおっしゃっていたのが、大変強く印象に残っております。

そして、この「なりゆきを生きる」という言葉は、昨年、2011年3月11日に東日本大震災が起こりましたこと、その後まもなく福島において原発事故が起きましたこと、こうした事態を考えますと、新たな意味・深さを持って私たちに迫ってくるように思います。

玄侑先生は、2011年4月から今年の2月に至るまで、東日本大震災復興構想会議の委員を務めておられました。この委員会におかれましては、医療・福祉・研究・リゾート特区構想ということをご提案されまして、こちらのほうも採択されているというように伺っております。この復興構想委員会の提言をまとめた「復興構想７原則」というものがあるのですけれども、その最初に次のような文言がございます。

「失われたおびただしい「いのち」への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとって復興の起点である。」

玄侑先生の近著、『福島に生きる』の一節を引用したいと思います。

「膨大な死者を思いつつ、未踏の大地を進んでいく私たちは、明らかにフロンティアに立っている。これから先も「福島に生きる」ということは、フロンティアスピリッツを獲得していくことに違いない。」

現状を見つめ、情報を収集し、提言を発信し続けていらっしゃる玄侑先生は、まさになりゆきを覚悟を持って生きる実践家であられると思います。

それでは玄侑先生、ご講演の方、よろしくお願いいたします。

玄侑：こんばんは。玄侑宗久と申します。

このところ、立て続けにキリスト教系の大学に呼ばれておりまして、キリスト教が最近自信をなくしているのではないかとちょっと心配なのですけれども、そういうことではないようであります。

今日は「関係性の回復に向けて」というタイトルなのですが、昨日の昼間に明日のタイトルは何だったかなあと思って伺ったところ、聞いても覚えがないのです。これは自分で考えたんだろうかというほど、あまり記憶になかったのですけれども、ここは人間関係研究センターというところなので、そういうふうにつけたんだろうなあと思います（笑）。このタイトルでまとめるつもりなので、よろしくお願いします。

「人間」という単語は、もちろん中国でできた言葉です。日本では「人間」と書いて、ヒューマンビーイング（human being）そのものの意味で使っていますが、これはかなり大胆なアレンジでありまして、中国の漢字をアレンジして使うというのは、本当にいろいろやっています。

例えば、「櫻」という字は、本当はサクラの木ではありません。サクラの原産地は日本ですから、中国にサクラを意味する文字があるはずがない。あの文字は本当はユスラウメのことなのですが、まぁユスラウメなんか気にしなくていいだろう、サクラに使っちゃえということで、「櫻」がサクラになりました。

あるいは桂という文字も、中国ではキンモクセイの木です。ですから、桂林にはキンモクセイの並木があります。しかし日本には当時キンモクセイの木はなかったので、カツラという木に使ってしまったのです。

そのように、「人間」と書きますと、本来は存在そのものではなくて、世間とか我々が暮らす社会のことを意味しました。しかし日本人は、人間そのものが世間というか関係性の上に生きている存在なのだという認識だったのでしょう。「人間」と書いて、人そのものを表すことにしたわけです。

「人」という字もよくできています。支え合っているというのですが、あれは男と女だという説もありますが、支えがなくなると倒れてしまうのがやはり男でしょう。上になったほうが先に倒れますと、下のほうがぐっと伸びてくるわけです。ですから、夫の死後、奥さんの余命は17年ですが、奥さんの死後、旦那の余命は２年です。

人間という存在を関係性の上に考えたのが日本人だったということでありま

すけれども、どのような関係性があったのか、人はどんな関係の上に生きているのかということを考えてみますと、まず一緒に住んでいる家族というのがもちろんあるわけですけれども、大震災の後だと、やはり死者との関係も我々の中にかなり色濃くあるのではないかと思います。死者とうまく関係が結べないと、ふつうの生活もなかなかうまくいかないという部分がありはしないだろうか、と思うわけです。

現在、福島・宮城・岩手の３県で亡くなった方が16,000人を超えていますけれども、行方不明という方がいます。行方不明が3,000人以上いらっしゃる。この行方不明とはなんでしょう。

遺体が確認できなくても、今回は死亡届を出していいということになりました。ですから、遺体がなくても死亡したということにできるのですが、死亡届を出してない人が3,000人以上いるんです。不思議に思われるかもしれませんが、死亡届を出してない人でも、お葬式はやりましたという人もいます。

例えば、自分の子どもはいなくなってしまったけれども、着ていた服は見つかったと。その服を小さな棺桶に入れて、火葬してもらってお葬式はしました。そうしないと、万が一死んでいた場合、お盆に戻ってこられないと困るから、というんです。じゃあ、死亡届はと言うと、それは出してないと言うのです。どうしてですかと訊くと、いや、万が一死んでいるかもしれないけれども、万が一ということは、あと残り9,999あるわけですから、どこかで生きているかもしれない、と。どこかというのがどこかは分かりませんけれども、要するに、津波のショックで何もかも忘れてしまって、記憶喪失のまま別の浜に流れ着いて、全く知らない人のお世話になりながら元気でいるかもしれないじゃないですかと言うのです。そんなことはあり得ない、とは言えません。

でも、そういう一縷の望みをかけられて死亡届を出されないという人たちが3,000人以上いるということは、その周りにそういう判断をしている家族親族が少なくとも３人ぐらいはいるでしょうから、約10,000人ぐらいの人々がまだ死んでないのではないかと思っているということです。これはちょっと驚くべきことではないかという気がします。

死亡届を出しますと、お金が入ってくるということの影響もあります。いろいろな要因が絡むのでしょうけれども、それがいやだという方もいます。

死ぬという言葉を皆さんはふつうに使われると思いますが、「死」という言葉は、実は日本の古い古典、『万葉集』や『古事記』には出てきません。『万葉集』や『古事記』のころはどうも死ななかったらしい（笑）。では、死なずにどうなったのかといいますと、「避（さ）る」です。避るという字は、避難の「避」です。ほとんど「去」と同じような意味で、この場からいなくなったというように表記されています。おそらく、人がいなくなるということを「死」という言葉で認識するようになったのは、仏教が入って以後だろうと思います。それまではやはり、「避った」のであって、ここからはいなくなったけれども、死んだの

ではない。ただ、仏教の「死」というのも輪廻というのを絡ませて考えますと、ここにいたあの姿はなくなったけれども、何かは続いていると思っていたわけです。

日本に入ってきた仏教の場合、だいたい輪廻という考え方を取り外してきています。本来の輪廻という考え方からすると、先祖にブタがいたりウシがいたりということになるため、これは中国の儒教が許さなかった。先祖にブタがいる、そんなことは許せないということで、中国において輪廻という考え方は仏教から切り離されます。切り離した形で受容された仏教が日本にやってくるわけです。

亡くなるにしてもどこかへいなくなるにしても、いずれにしても、我々が住む社会の外に行くことになります。外の世界に住む人のことを、中国では「鬼」と表現しました。鬼とはもともと死者のことです。雲を意味する「云」に鬼と書くと「魂」（たましい）ですね。「白」に鬼も「魄」（たましい）です。こちらは白い骨に宿る魄、魂（こん）のほうは上に上るたましい、それが両方合わさって魂魄になるということです。

日本という国は、今回の大震災以後皆さんもお感じになったと思いますが、とにかく天災の多い国だなあと思います。神様はいろいろいます。キリスト教の神様ではなくて、日本の八百万（やおよろず）の神様ですけれども、日本にしかいない神様がいます。日本にしかいないといっても、天照大御神（アマテラスオオミカミ）も日本にしかいません。ただ、あの方は太陽の女神ですから、その意味ではアジア一帯にいるわけです。ヨーロッパに行くと太陽は男性神になりますけれども、とにかく太陽の神はどこにでもいるわけです。では、須佐之男（スサノオ）はというと、風の神ですからギリシャ神話にもいます。そういう意味で、日本にしかいない神とはいったい誰か。

これは大穴牟遅（オオナムチ）の神といって、鳥取県伯耆の国の国づくりを少彦名（スクナビコナ）と一緒にやったと言われています。大穴牟遅というのはもともと「大穴持ち」です。大きな穴、つまりこれは噴火口です。鳥取県の大山は、元は富士山のようにきれいな山だったそうですが、上半分が吹っ飛ぶ形で噴火しましたから、その被災者も出ています。そして、それを復旧するために、大穴牟遅の神と少彦名が協力したという神話になるわけです。

日本の神はややこしいことに、どこで何をしたかということで神様の名前が決まりますから、別のところで別な仕事をすると、別の名前になるわけです。大穴牟遅の神も、伯耆の国から次に出雲に行きますと、皆さんご存じの大国主（オオクニヌシ）になります。ですから、大国主と大穴牟遅の神は同一人物なのです。いろいろ申しましたが、要するに日本にしかいない神は、噴火口の神だと申し上げたかったわけです。ですから、噴火はあるわ、地震はあるわ、津波は来るわ、そしてまた、木造住宅ですから火事はある、台風も散々来ます。大変な天災の国です。

富士山もこれまでに巨大な爆発を３回経験していますけれども、今回有名に

なりました貞観の噴火の前に、延暦の噴火というのがありました。その後、江戸時代、1706年に宝永の噴火というのがありますが、やはり富士山というのはすごいです。この学内にも富士山の写真のポスターが張ってありましたけれども、富士山というのは噴火をするたびに高くなったのです。こんな山はほかにはありません。紀元前の富士山は3,000メートルなかったと言われています。噴火しながら大きくなるというのは、めったにない山であります。

そんなふうに天災が多い中で、日本人独特の考え方・感じ方、それを示す言葉、あるいは態度ができてきます。『万葉集』を眺めておりますと、ときどき「なつかし」という言葉が出てきます。「なつかし」という意味の言葉は中国にはなかったのですが、日本人は和語としてしょっちゅう使っていたわけです。ですから、「なつかし」というのを中国の漢字の中で探すと、はっきり言ってないのです。「なつかしむ」という意味の漢字はなかった。現在は「懐」という字で代用していますが、辞書で調べてみると分かるように、あの字には思うとか抱くというような意味はありますけれども、なつかしむという意味はありません。代用しているだけです。

『万葉集』はご承知のように、簡単な文字はもう既に訓読みにしています。しかし、そういう文字、そういう意味のぴったりした言葉がなければ、完全に当て字にします。『万葉集』に出てくる「なつかし」は、「夏樫」と書いてあります。中国人は、はっきり言ってあまりなつかしまない(笑)。王朝が倒れると、本も焼き尽くす、人も殺し尽くすというように、なつかしむどころの話ではない。どちらかというと、革命的に変えていく、過去は振り返らないと言ったほうがいい。

ところが日本人は、天災が多かったということもあると思いますが、とにかく「なつかし」む人々だった。夏樫という言葉は、使用回数までは数えていませんが、とにかく『万葉集』の中にたくさん出てきます。

夏樫の目的語は、「誰」「それ」と言ってもいいのですけれども、普通なつかしむ対象は誰かの「面影」です。面影も、日本語にはありますが、おそらく英訳は難しいでしょう。日本人独特の感性です。だから我々は、今回の津波もそうですけれども、とにかく忘れられない人たちは死んだとさえ認めたくない人たちで、それがたくさんいるのです。その面影がよみがえって仕方がないわけです。

日本人は、そういう目にたくさん遭ってきたと思います。ですから、自然にそういうものに対処する生きかたをするようになります。どういうことかといいますと、この国独特の挨拶を考えました。日本人の挨拶の基本は、深々と頭を下げることです。これは世界的に珍しい。エスキモーも変わっています。近づいて口を開いて、いきなりベロを出して付け合うという、すごい挨拶です。それも変わってますが、我々の挨拶もじつは凄い。

日本人は深々と頭を下げあい、しかも「こんにちは」と言いながら、何をし

ているのか。まず深々と頭を下げて、さっきまでのことを全て捨て去るのです。そして、生まれ変わって白紙に戻って敷居を跨ぐ。敷居を跨ぐ瞬間に生まれ変わるのです。そして「一」に戻るといいますか、ニュートラルになって客を迎える。お客さんが来たときでも、夫婦げんかをしているかもしれないでしょう。そんな波立った気分をいったん寂滅させるわけです。そして起き上がったときには、もう夫婦げんかのことなど忘れてないといけない。なんでこんなときに来たんだというタイミングで来る人がいますが、そうも言ってはいられませんから、こちらが白紙になるわけです。うれしいときにも来るかもしれない。でも、うかれて会ってどうするのか。やはり、白紙に戻って会うわけです。

こうした心の動きを仏教的には「寂滅現前」といいます。いったんそれまでの自分を鎮めて寂滅し、白紙になってニュートラルで客と会うわけです。

ではなぜ「こんにちは」と言うのか。これも珍しい挨拶です。ふつうは、「グッドモーニング」でも「グーテンモルゲン」でも「ボンジュール」でも「ニーハオ」でも、「グッド」、あるいは「ボン」、「ハオ」という、言ってみれば祈りの内容というのでしょうか、あなたにとってよい日でありますようにというように、「よい」という言葉が入るのです。

日本人の挨拶はどうでしょうか。英訳したら怒られます。「Today is ･･･ 」今日はいったいどうしたというのでしょう。どんな祈りが込められているのか、ちょっと分かりませんが、じつはそこには最大限の意味が込めてあるわけです。こんにちはの「は」というのは強調の副助詞といいますが、そこに込められた意味は、今日「は」とにかく昨日までと違って、生まれ変わったような１日であってほしい、昨日の続きであっては困るという願いが込められている。それが「こんにちは」です。いわば「今日こそは」なんです。

そんな大事なことをなぜ省略するのか。大部分の日本人は、「こんにちは」の意味を分かっていないのではないでしょうか。日本人は省略が好きです。「君が代」もそうでしょう。「君が代は　千代に八千代に　さざれ石の巌となりて　苔のむすまで」、副詞句を並べただけで終わっているではないですか。苔のむすまで、どうだというのか。なぜ大事なことを省略するのか。「惻隠の情」と言いますが、日本人なら分かるだろうということなのでしょうけれども、今や言わないと分からなくなってきています。

「こんにちは」もそうだろうと思いますけれども、昨日の続きであっては困る、そのくらい、昨日というのが思い出したくないつらいことにあふれている。特に、災害というのはそうです。ですから、さっきは夫婦げんかと申しましたけれども、そうではないと思います。死というのがやはり周辺にあって、その悲しみから立ち直ってから客を迎える。そして、今日は昨日の続きではいけない。悲しい気持ちもいったん寂滅させて今日はまた新たに生きようではないか、というのが我々の挨拶なのだと思います。

私はこのことを、「無常」という法則の行動化であると思っています。世の

中は無常に変わります。しかし世の中が無常に変わることに戸惑って、悲しんでいるだけでは仕方ないじゃないか。こっちも無常に変わってやろうじゃないか。いや、実際、無常に変わっているわけですが、それを自覚しようじゃないか、ということです。昨日の続きなんか生きないで、今日からまた出直すんだと、先輩達は考えたのではないでしょうか。

日本人は一から出直すのが好きです。先輩達は「諸行無常」という仏教的な概念の「諸業」という上着を取ってしまって、単に「無常」という非常にカジュアルな姿にして、我々の身近な感覚に入れ込んでいった。そして、我が身も無常であろうとすることで、無常の世の中を生きやすくしていったのだろうと思います。ですから、こんなに災害の多い国だからこそ、「こんにちは」という寂滅現前の挨拶なのです。

ところが、そうはいっても、人には忘れられないことがあります。あるいは、忘れてはいけないだろうということがあります。身内の死というのもそうでしょう。忘れたいと言ったら変ですけれども、日常に戻りたいのです。悲しみから癒されるということは、日常に戻るということです。しかし、日常に戻りきってしまったら、忘れるということにもなりかねない。忘れたくはないし、日常にも戻りたい。この板挟みの中で、我々は儀式というものを作り出す。そのときだけ集中的に悲しめばいいじゃないかという儀式を持つことで、我々の悲しみは自覚的に特定の時間に集中することができるようになる。朝から晩までだらだらと悲しんでいるというのは、日常生活が立ち行かない。ですから、朝、集中的にそういう時間を持つことで、あとは会社にふつうに行くということができるようになってきます。

しかし、なかなかそのようにできないという状態もあります。無常であろうとするのですけれども、ずっと頭の芯から離れない、忘れられない、忘れてはいけないとも思う、なかなか日常生活が立ち行かない。こういうことがやはり生きていると起こってきます。

それを昔は、「あはれ」、あるいは「もののあはれ」と表現しました。あはれという言葉は、『古事記』や『日本書紀』、『万葉集』にも既に出ております。しかし、やがて「もののあはれ」というように進化してきます。もののあはれ、これは『土佐日記』や『大和物語』、あるいは『拾遺和歌集』あたりに出てくるようになります。

本居宣長が江戸時代後半に、『源氏物語』を論じた『紫文要領』という文章の中で、「もののあはれ」がいかに日本人の美学を作ったかということを述べています。それによりますと、簡単に申し上げれば、我々は無常であろうとするのですけれども、どうしてもわだかまっているというか、変わりにくい自分の中の思い、記憶がある。その思いを、もののあはれというわけですけれども、人情や世の中のことがよく分からないと、もののあはれというのは分からない、と書いてあります。ですから、我々としては、まずとにかく無常であろうとし

たわけです。とにかく一から出直す。しかし、それでもリセットできないもの、そういう「無常と拮抗する力」、これをもののあはれと言ったのだと思います。

一から出直すといえば、例えば世阿弥は「初心」ということを言っています。「初心にかえれ」と言っていますが、初心にかえれというのはいつにかえればいいのか。まだオムツをはいているころに戻ったら初心になるのか。そうはいかないでしょう。やはり50代には50代の初心があり、40代には40代の初心がある。そのように世阿弥は言ってますから、その歳なりに身に付いていることは「初心」のうちです。身に付いていることはそのままに、頭の中にあることをとにかく払い捨てる、払い除けるというか、無心になるということだろうと思います。

「一に戻る」や「裸になる」ということは、すでに日本人の美学になっていて、それが完成するのがおそらくお茶の世界だろうと思いますが、千利休がうたいます。

「稽古とは　一より習ひ　十を知り
　十よりかへる　もとのその一」

だから、いろいろ学ぶのはいいのですが、学んでいって身に付いていないものは、ちりやほこりのようなものです。身に付いているものというのは、頭ではなくて身に付いたのですから、無意識にできることです。それだけが美しい。もちろん新たなことを学ぶのはいいのですが、完全に身に付いて無意識になるまで習熟しなければいけない。別の言いかたをすると、身に付きすぎて忘れるぐらいやらなければいけないわけです。

要するに、なぜ私がこういうタイトルで話をしているのかと言いますと、復興する、復旧するということは、結局、関係性が回復されればやっていけるのです。何か足りないものがまだあったとしても、いろいろな関係性が回復されればそんなことは問題じゃありません。その一つが死者との関係であり、途中から自然との関係もちょっと入ってきたと思うのですが、今回の出来事を受けて、死をも含んだ自然との関係が改めて今、問われていると思います。

津波・地震、この危険性は今やどんどん増しております。世界の400分の１の面積のこの国に、世界に起こる地震の10分の１以上が起こっているわけです。とてつもない話です。富士山の北側、富士吉田と富士宮の距離が、2009年のGPSによる計測では、２センチ増えています。膨らんだのです。富士山が膨らんだ理由は、溶岩が滞留したとしか思えない。考えてみれば、1706年ですから、前の噴火から300年以上経っています。いつ来てもおかしくない状態です。こういう中で、自然との関係というのはどのように保っていったらいいのか。

田老町に、万里の長城と言われる防潮堤がありました。高さ10メートルでしたが、今回10メートルではどうしようもありませんでした。一番低かった福島県でも、相馬や南相馬の辺りは15メートルの津波だった。津波というのは波と言うから紛らわしいのですが、あれは波ではない。波には波長があるでしょう。

一番低いところから次の低いところまでの長さを「波長」と言いますけれども、今回の津波の波長は200～300キロメートルあったのです。だから、上がりっぱなしでずっといくわけです。200～300キロメートル先でようやく下がる。波が来たというよりも海が来たということですね。じゃあ15メートルの津波が押し寄せた地域はどうするのか。その海と戦うのか。戦うといっても今回、最大の力を向こうは出していません。日本に押し寄せた津波でかつて最高のものは、1760年代に小笠原にやってきた津波で、高さ85メートルだそうです。すると、90メートルの防潮堤を造らないといけない。15メートルの波が来たから16メートルの防潮堤を造りましょうという人が実際いるのだから驚きます。しかし、16メートルの防潮堤を造った海というのは、海岸線からの距離にもよりますが、まず泳ぐ場所ではなくなります。しかも、住んでいるところから船は見えません。つまり、漁をする場所でもない。海に、敵としてずっと向き合うという態度をとるということです。敵と言っても、身内がまだ海にいるのです。それを敵に回せるのか。回せないから怯えつつ、なだめて奉るという方法を日本人はずっととってきたわけです。綿津見神（わたつみのかみ）といって、海そのものを神にして奉ってきた。戦うということを決してしなかった。

でも、またきたらどうするのか。ここで国の役人たちは、おおむねコンクリートの物を造らないではいられない。なぜそんなにゼネコンに奉仕するのかと思うのですけれども、ゼネコンに奉仕するだけではなくて、今の風潮として何もしないではいられないのです。二度とこのようなことが起きないように、こうしました、ああしましたという書類を提出しないといけないでしょう。だから、バスの運転手が事故を起こしましたが、何かシステムが悪かったのだろうと考える。システムではないと思うのですけれども、システムのほうも二度とこのようなことが起こらないように改訂してくるわけです。そうすると、関係ない人が非常に棲みにくくなっていくということが起こってきますが、これは仕方がないと考えているようです。普段は味方なのに、たまに敵になる。たまにくる敵と味方が一体になっている。どうしたらいいのか。たまにくる敵が今回よりも大きいかもしれない。そういうのとどうやって付き合っていくのかという問題です。やはり、自然観が問われているのだと思うのです。

しかし、自然の驚異そのものを神として奉ってきたこの国において、とるべき態度は決まっているはずです。ただ現状では、海岸線があまりにも人工化してしまった。「白砂青松」と言いますが、マツばかりでは弱い。間にタブノキやツバキ、サカキなど、常緑の潅木がいっぱい入り組んで生えているのが理想です。こういう日本の昔からの海岸の様子が、復活してほしいのです。日本は、第二次世界大戦の空襲で森がかなりなくなりました。なくなった森が、岩手県一つ分だったと言われています。しかし日本人は勤勉に植林をします。結果的には岩手県一つ分の植林をしたのですが、その木はスギ・ヒノキ・カラマツだけです。なぜこんな根の浅い木ばかり植えたのですかというぐらい根の浅い木

で、しかも、それがスギ花粉の問題まで引き起こしています。もともと生えていた木にしましょうということで、常緑の照葉樹が選ばれて、それを植えていったら、かなり海岸は強くなるのではないでしょうか。そういう運動をしている人々がいます。

松島を見てください。確かに松島は、ほかに無数の島という要素もあります。松島にやってきた津波は、瑞巌寺の門を少し入ったところで遠慮するように止まったのです。まさにパワースポットですね（笑）。

やはり自然との関係に、今、日本人は自信を失っています。つまり、ここしばらくこんなに大きなことはなかったですから、西洋風の考え方で固まっていた。西洋風の考え方というのは、自然はコントロールすべきもの、かなわない敵ではない、というものです。

その考え方は、要するにドラゴンに対する扱いですね。ドラゴンはサタンの使いです。龍とドラゴンを一緒だと思っている人がいますが、特に中日ドラゴンズの本拠地の人たちにはそういう誤解がありますけれども、実は違うのです。龍は中国人が考えた。天候の変化はいったいどうやって起こるのか。こういう生き物がいるのではないか。こういう生き物がいて、こういう生態なので、冬場になると、水の中に潜んでしまうから雲が少なくなる。春になると空に上がってくるので、春霞が立つ。それでまた暴れたりするので、夏頃から竜巻も起こったりいろいろするわけですが、同じようにヨーロッパ人もそういう生き物がいるのではないかと思ったわけです。それがドラゴンですが、龍とドラゴンは明らかに違います。ドラゴンは背中に羽がありますが、龍はないでしょう。別の生き物なのです。

インド人もまた似たようなもので、ナーガというものを考えました。これは巨大なヘビのようなものですけれども、いずれも自然の象徴です。人間にはコントロールできにくいというか、はっきり言って制御できません。でもヨーロッパ人は、それをドラゴンというサタンの使いと認識してましたから、人間がせっかく予定どおりやろうと思っていることを邪魔する存在でした。なんとしても制圧すべき敵なのです。

しかし龍は違います。ではどう違うのか、龍とはどう付き合うのかというと、日本人というか東洋人は、龍に味方になってもらわないとうまくいかないと考えたわけです。とても退治しようなどという相手ではない。

でも、ヨーロッパの人々にとっては、思うようにならないことはまずいことなのです。マニフェストやマニュアルが最近流行っていますが、そのとおり行くことがどうも彼らの理想らしい。最近ではデートに行くときのマニュアル本まであります。公園へ行って、そこで何分ぐらい話すと夕日がちょうどあの辺に来るので、こういう話題をふってはどうか。その後、近くにあるこういうレストランへ行って、こういうものを食べてはどうかと、その本を見ながら計画を立てておくわけです。ところが、現実は予定どおりいきません。彼女が夕日

よりもCDを買いに行きたいと言い出したものですから、すべての計画が崩れてどんどん不機嫌になる。計画通り行かないものですから、何のためのデートだったか分からなくなるぐらい腹が立ってくる。思うようになってほしいという欲求が強いと、大変困ったことになるわけですけれども、龍と付き合うということは、思うようにならないこととどうつきあうかということです。

被災地に、ブータン国王夫妻がやってきました。何をしに来たのかというと、「親愛の情を示しに来た」とはっきりおっしゃいました。悼み、慰め、励まし、そして一言で言えば、親愛の情を示しに来たのです。親愛の情を示すという用件だったのです。今では、そういう用事で人の家に行ったら、追い出されるんじゃないですか。「ごめんください。親愛の情を示しに来ました」と言ったら、何を企んでるのかと疑われますが、親愛の情を示すというのは本来、とても大事な用事だったのではないかと思います。

私の住んでいる東北地方ではそういう習慣がまだ残っています。たとえば午後３時になると、どこの家に出かけていってもいい。何をしに来たのかというと、お茶を飲みに来たのです。そして、必ず30分で終わります。それ以上続くということはないのですが、３時から３時半まではどこの家へ行ってもいい。たいして用事があるわけではないのですが、何の予告もなく近所の人が来たりする。そういう地域なのです。だから、親愛の情を示しに来たというのはとてもよく分かります。

そのブータン国王が、相馬の小学生に向かって、こんなことをおっしゃいました。「君たちの中には１匹ずつ龍が住んでいる。龍は経験を食べて大きくなる。今回の体験は龍のえさです。自分の中の龍が大きく育つ体験です。だから、皆さんは自分の中の龍を今後とも鍛えて、育ててください」。自分も一つの自然なのです。人間も一つの自然だから、龍が自分のなかに住んでいるわけです。

この自然というのが本当に難しい。「あなた、ちょっと不自然じゃないの？」なんて気楽に言いますが、誰にでも簡単に自然が分かるはずがないじゃないですか。誰かがそれは自然だと言ったとしたら、それはすでに自然ではありません。自然はもっと人間の理解を超えなければいけない。

「寒九の雨」という言葉をご存じでしょうか。大寒から九日目に降る雨のことをいいます。大寒の後は、雪が降るのがふつうですが、大寒から九日目ぐらいに寒が緩んで雨が降るというのです。そこまで微妙な観察を日本人はしているのです。九日目ぐらいに雨が降るのは自然だというわけです。そこまで自然というのを理解した上で、不自然という言葉も使わなくてはいけません。

日本が震災のさなか、あのころタイも大変でした。ちょっと日本人には理解しがたい洪水で、なぜあんなことが起こるのだろうか、あの水はいったいどこから来るのだろうか、と思った人も多いと思います。何日も前に降ったものがああやって押し寄せるというのは、日本では考えられない、信じられないですけれども、あれがどんどん押し寄せてきたとき、プーミポン国王はタイのメコ

ン川の流域にある病院に入院されていました。その病院からメッセージを出されたのです。それは「王宮を守るための特別な処置は一切するな。バンコックを守るための処置も一切するな」というお言葉でした。王宮だけは守りたいとか、バンコックだけは大事だから守りたいと言うと、その周辺の被害が広がるということです。バンコックの直前の町や村は、バンコックを防護するために、被害が拡大するわけです。それだけはするなと国王陛下はおっしゃったのです。でも、実際はバンコックの被害を少なくするための処置をしていました。

埼玉はともかく、東京だけは救わないと、という感じの動きがやはりあったわけですけれども、それをするなということを、プーミポン国王はメッセージとして出したんですね。要するに自然に任せて何もするなということなのです。それができたらすごいと思います。今度津波が来たときに、自然に任せなさい、何もするなと言っても、日本でそれはできないでしょう。誰かがそうしますと言っても、おそらくそんなことは許されないでしょう。二度とこのようなことが起こらないように万全を尽くしましたという態度をとらないと、日本は今、許さなくなっています。

一時帰宅というのがありました。20キロメートル圏内の警戒区域に住んでいた人が、一時帰宅を許されました。あのとき、みんな白い防護服を着ていましたが、あれはなにか役に立つのでしょうか。放射線は防げません、素通りします。ただ、もし放射性物質が舞い飛んでいれば、付着するのは防げるでしょう。けれどもあの時期は、もうほとんど舞い飛んでいなかった。しかも、あれをはくとトイレに行けないのです。それで、一時帰宅は２時間以内。２時間という短さで、そんなに危険なのかと思わせてしまいましたが、じつはそれはトイレの都合だったんです。あんな服装をする必要が、一体どこにあったのか。もう、ほとんど地面などに付着しているところから放射能が出ていただけです。防護服はそれを防ぐ何の役目もなさない、鉛も入っているわけではない。でも、まるで口蹄疫のときのような、病原菌相手のような服装をさせたわけです。それで、ああ、これは大変な土地なんだなと、みなが見て思ってしまったのではないでしょうか。

死者との関係、そして自然との関係は、ここで語り尽くせない難しい問題ですが、いろいろと述べてきました。

先ほど、ブータン国王が親愛の情を示しに来たという話をしましたけれども、人間関係はどのようにして発生するのか、その辺りを考えてみたいと思います。

最初、家族というのがありますけれども、家族から関係が広がっていこうとするときには、横のつながりだろうと思うのです。横というのは、対等の立場での連帯でどんどん広がっていく。そして、地域社会で、親愛の情を示しにお茶を飲みに行っているような関係がある程度広がるわけです。

そこで、人間関係の中で新たに縦の関係が必要なのではないかということになってくる。これは、ある程度集団が巨大になってきたということがまずあり

ます。それと、外敵が現れたということです。そうすると、集団には何より機動力が問われる。それから、全体が一つになるという一体感も問われる。そのときにこの集団の中に、縦の力が芽生えます。

組織の作りかたというのは、日本人はわりと自然発生的なままやってきました。縄文時代は結構大きい集落です。三内丸山遺跡を見ると、一つの集落に500人以上住んでいました。500人・1,000人という集団が一緒に住んでいるわけです。これが、唯一動物に勝つ方法だったのでしょう。１対１でクマに勝てる人はいません。クマが近寄ってこないほどの集団を組んで、暮らしていたとしか考えられない。クマでもオオカミでも、彼らが持っているような牙も爪も人間にはありません。でも、人間がなんとか生き残ってこれたのは、やはり集団を作る能力に長けていたからではないか、という気がするのです。

今回こういう事故が起こってみると、どの程度が適当な集団なのだろうかということが、とても意識されます。

小泉首相のときに、平成の大合併という、札束で横っ面をたたくような合併がありました。合併すればお金をやるよというような合併でしたけれども、私が住んでいる三春町は合併を断り続け、不思議な状況になったのです。郡山市があって、その東側が田村郡だったのですが、田村郡全体で田村市になろうということで、三春町にも入ってくれないかと言ってきたわけです。田村という名前はうちのお寺の開基の田村家の名前からきていますから、三春町が入らなかったら仏作って魂入れず、目がない龍みたいなものです。しかし何とか入ってくれないかと言われても、図体が大きくなるとろくなことがないですから、いやだと断りました。

西の端の三春町が断り、東の端の小野町も断って、真ん中に市ができた。郡山市と田村市があって、田村郡三春町と田村郡小野町が飛び地になってしまったのです。そのように、巨大になるということをどんどん目指した人がいたんです。

最初に中央集権というありかたを知った人は、おそらくローマ教皇をトップとするビショップ、神父さんたちのヒエラルキーというのでしょうか、これを知ったのだと思います。なんて機動力があるのだろうか。上の一言でぱっと広まるし、こんなに動ける。それを知ったのが信長でした。信長が日本で最初にワインを飲んだと言われていますけれども、「鳴かぬなら　殺してしまえ　ホトトギス」。誰が作ったのかは分かりませんが、実にうまい。

秀吉は、「鳴かぬなら　鳴かせてみよう　ホトトギス」。家康は、「鳴かぬなら　鳴くまで待とう　ホトトギス」。やはり江戸があれだけ続くというのはすごいことだなあと思うのですが、最終的に家康が作り上げたのは、いわゆるピラミッド型のヒエラルキーではないのです。一応、譜代・親藩・外様という枠組みはあっても、譜代なら譜代で全部一緒かというと、違うのです。外様でも、例えば島津藩などは扱いが全く違います。かつての歴史上の関係をみんな取り

込んで、個別の関係を結んでいるというのですか、徳川家は各藩とそれぞれ歴史に応じた個別の関係を結んできた。単純なヒエラルキーの図式ではないのです。あれが実に、縦と横のほどよい感じかなという気がします。

要するに、私が言いたいのは、関係性の回復です。死者との関係を最初に申し上げました。それから、自然との関係は、今後、いったいどう取り結んでいくべきなのかのか、問題提起しました。震災前にすでに、日本古来の関係性ではなくなってきていたという気がするわけです。ほとんど無意識にそうなっていたことがとても怖い。防潮堤を造るというのが当たり前みたいな感じでしたよね。

でも、こうなってみると、結構それに反対する動きが出てきています。コンクリート物を造らせないという動きが、気仙沼辺りから出てきているわけです。自然とそこの住民との関係をどうしていくのか。これは単なる震災前の回復では済まないのです。もう少し前に戻らないと、強い、良好な関係にはならないような気がします。

そうやって死者と自然について話し、その後は人間関係というところで縦と横という話になったわけですね。人間関係ということを考えると、今回大震災を受けて最後の救いになったのは、横の連帯です。各行政の町村長たちは本当によくやってくれましたけれども、決して知事や国ではなく、小さい町や村のまとまりの中で、トップ、あるいは役場の職員たちを信じることができた。だから震災当初、パニックにならずに済んだと思うのです。ただ、今後の問題も非常にたくさんあります。

とにかく、福島県民は全国に散らばっていますから、今後いったいどうなるのでしょうか。なぜ散らばっているのかは分かりますが、その対処法は結構難しい。散らばった人の大部分は、３月15日、16日あたりの爆発が恐ろしくて、より遠くまで出たのです。でもそれだったら、政府がその時点では信用できなくても、大体落ち着いてきた今、なぜ戻らないのか。それは、県外に行っている人たちは、いろいろな理由があるのでしょうけれども、まず福島県はいまだに人が住まないほうがいいほど危険だと本気で思っている可能性があります。そして、そういう話をわざわざする人もいます。

それから、もし福島県でこの子が育った場合、将来この子は結婚できないのではないか。だから、福島県で生まれはしたものの、育ちは名古屋です、静岡ですと言いたいのかもしれない。真相はちょっと分かりません。

でも、かなりの不便をかこちながら、あちこちで世話になりつつ暮らしていると思うのですが、純粋に放射能に怯えているという話だと、つじつまが合わないところがあるのです。例えば、白河辺りからも県外に避難しました。白河から神戸に行った人もいました。しかし実は、神戸のほうが白河よりも放射線量が高いのです。

今の全国的な放射線量はご承知ではないと思いますけれども、愛知県はそれ

ほどではないですからご安心ください。しかし、けっこう高いところもあるのです。2002年の長瀬ランダウアの調べですと、年間１ミリシーベルトを超えているところが11県あります。滋賀県もその一つですが、その時点で一番高かったのは富山県です。富山、石川、この辺りが１・２番を争っています。富山、石川、福井が並んで高いのですけれども、なぜあの辺が軒並み高いのでしょうか。しかも、あるとき突然トップに躍り出てきた。やはり、中国から黄砂に混じって飛んできたのでしょう。この話を出してしまうと、ほかの話とうまくつながらなくなる。論理的な進行がしにくくなる。でも、出さないのも変だと思うのです。

一つだけ最後に話しておきたいのは、人間関係という観点から、いろいろなことを考えていくというのはすばらしいことだと思いますが、現代人はそういう考え方もする一方で、もう一つ、人権という見方もします。

「人権」という言葉は聞いたこともあるでしょうし、大事なものだと思っていらっしゃると思うのですが、この言葉を使うと、いろいろなものが組み込まれてしまうという面があります。今回、2012年１月８日ですが、双葉町の井戸川町長が中間貯蔵施設を巡って、「双葉町民も同じ日本国民ですか。法の下に平等ですか。守られていますか」と会議で発言しました。あれは、どう考えても人権意識です。人権意識があの段階で出てきてしまうと、中間貯蔵施設は決まりません。決まることはまずあり得ないです。どこの町も、うちの町には造らないでいただきたいと言う権利がある。どこの町の人々にも、自分の土地の近くには造らないでほしいと言う権利がある。人権という見方をすると、そうなります。これがあの時期に出てきてしまうと、もうどうしようもない。人権というのはある種、爆弾です。

国家が何かをするということは、一部の人々の人権を踏みにじる行為です。何をやろうと必ずそうなります。

例えば、成田空港ができました。成田空港に反対で、小屋を作って抵抗していた人が、最後に撤退したのは一昨年です。それを知ってか知らずか、我々は成田空港は便利だといって使ってきたわけです。でも、あれを造るために、どれだけの人権が踏みにじられてきたか。それを承知で、うまく人権蹂躙に見えないための施策をうつというのが、政治的な力です。

ところが、そういうことが今の政権はどうもできない。人権を主張されるとすぐに手を離してしまう。

沖縄の基地問題もそうです。ああ、かわいそうにと誰でも思うかもしれませんが、かわいそうにだけでは政治は進まない。代わりを着々と見つけなければいけないわけですが、やはり見つかりませんでした。福島県の中間貯蔵施設も、30年以内にどこかへ持っていくそうです。しかし、そんなところがあり得ますか。あり得ないとすれば、中間貯蔵なんて逃げ口上を言ってないで、別の貯蔵の仕方をしなければいけないはずです。しかも、あの時点で人権意識が出てき

てしまったら、おそらくこれは決まりません。

今回、復旧・復興に当たって、特にばらばらになってしまった土地の人たちにとって、今もそうなのですが、今後、何らかのまとまりを保っていけるものは何かあるでしょうか。名古屋ではどうでしょうか、氏子という意識はありますか。都市部では薄れてしまっていますが、ここに住んでいるということは、ここの神様に守ってもらっているということです。それは、承諾するも何も、当たり前のことだったわけです。地域の神社の氏子になりたくないというなら、よそに行けばいいわけです。

ところが、この人権というのは、氏子に入るかどうかを問題にしてしまう。入るか入らないかということは本来そこに住むかどうかという問題ですから、住んでいるなら入らないなんて許されないのですが、人権意識はそれを許す方向にはたらいています。「私は氏子になりません。でも、住みます」というのが認められるのです。今、東北は、これだけばらばらになってもなぜある種の紐帯が保たれているのかというと、同じ神様の氏子であるからです。だから、祭りのときはどこにいても集まろうよということになります。その土地に住んでいるということは、そのままその土地の氏神様に守られているという連帯感になるのです。

これは都市部では薄れてきていますけれども、それを極端に薄れさせつつあるのが、私は人権意識だと思っています。入らない権利があると思っているようですが、私はそれはあり得ないと思います。本人がキリスト教であっても仏教徒であっても、それはいいのです。ここに住むことで自動的に氏子になるということは、こういう危機的な状況で一つの力を発揮しているのです。だから、そういうのが復活してほしいなあと私は思うのです。

先ほども申しましたが、日本人が「こんにちは」とかお辞儀というものを生み出していった心というのは、まず自分自身が無常であろうとしたのだと思います。無常であろうとしながら、しかも深々と積もっていくもの、忘れることができないものもある。我々の心のなかで、両方が同時に存在しているのではないか。

この国には、歴史的に震災が多かったし、これからもあるでしょう。でも、日本人が持っていい希望というのでしょうか、それは「一から出直せばいい」ということです。それもそうですが、しかし日本人はそれだけでなく、地震に対する挑戦もしているのではないかと思うんです。

なぜなら、3.11が来たときも、浅草では着々とスカイツリーを造り続けていました。その後なんら特別な変更もせずに、完成させてしまったでしょう。

仏舎利塔というものがインドでできました。初めは饅頭型でした。それが中国へ伝わって階層型になり、五重塔ができました。それから朝鮮半島に伝わって、五重塔がいくつかできました。しかし今は、中国に１基、韓国にも国宝の１基しか残っていません。

日本には、観光目的のものを除いて五重塔が47基あります。１基１県の割合です。なぜこんなに五重塔を造るのかというと、これは間違いなく地震への挑戦でしょう。現状は47基ですが、かつてあったのに今はなくなったのが５基あります。そのうち３基は、火事の類焼です。もう１基は久能山にあった五重塔ですが、なぜか取り壊しになっています。残りの１基は幸田露伴がモデルにして、『五重塔』という小説を書いた東京谷中の五重塔で、72.9メートルあり、日本一高かった。これはなぜなくなったのかというと、関係性の回復に悩んだ男女がやってきて、五重塔と一緒に心中しようということになって火をつけたのです。暴挙ですよね。要するに、なくなった５基のうち４基は火事、そして、１基は取り壊しですから、日本でこれまで造られた五重塔で、地震で倒れたものは１基もありません。絶対に倒れない自信を持っているんですね。

今、設計士たちは必死に分析していますが、どうしてここがこうなっているのかというのが、どうしても全部は分からないと言っています。しかし、それが免震のためにそうなっているということだけは分かるそうです。五重塔というのは不思議です。ご承知だと思いますけれども、芯柱というのがあります。中心にある柱ですが、これが浮いているのが多いんです。芯柱が土の中にどんと入っていたら、これが揺れたらひとたまりもないでしょう。ですから、五重になった一番上の屋根の付け根のところで芯柱は止めてありますが、多くの芯柱は宙づりになっていたり、何本かに分断されています。揺れるとこの柱が揺れるのですが、建物全体の揺れかたとむしろ干渉し合うように揺れます。そして、不思議なことに、例えばこのように揺れたら、五つの屋根のこちら側が一気にすぼまるというような絵柄が浮かぶかと思いますけれども、そうはならないのです。こちら側がすぼまるとこちら側がすぼまり、こちら側がすぼまりと、交互になるようになっています。とにかく、あの建築技術は地震への挑戦です。そして、無敗を誇っているのです。

だからこそスカイツリーに五重塔の技術を使いましたと言って、あの3.11のさなかも淡々と工事を進めていたのです。あれは東武鉄道のものですから、民間会社です。もし倒れたら、さしもの東武鉄道といえども賠償で吹っ飛ぶでしょう。どれだけの人間が死ぬか。行政は絶対に手を出さない仕事です。しかし、東武は絶対に倒れないという自信があるから挑戦したのでしょうね。

東京タワーも個人のものです。もちろん、行政はああいうものは絶対に造りません。だからこれも民間で、持ち主はマザー牧場の経営者と一緒なのです。あれも倒れたら大変ですけれども、あれだけ踏ん張っていれば倒れないかなという感じはしますね。しかしスカイツリーは見ていると本当に危うい。でも、大丈夫なんです。無常でありながら、一から出直すと言いながら、この技術は蓄積してきています。だから、結構日本人はしたたかだと私は思っています。

放射能の問題も、今のレベルは、はっきり言って私は気にしていません。うちの町が比較的低いということもありますけれども、福島県内のあらかたのレ

ベル、中通り辺りのちょっと高めのレベルというのも気にしてないのです。しかしそれをあまり早く言ってしまうと賠償問題に響いてきますから、言えなかったのです。そうやって放置しているうちに、放射能の低線量に対する解釈がややこしく入り組んできてしまいましたけれども、気にすべきだという考えかたと問題ないという考え方が両方あります。つまり、一番参考になるのは、広島とチェルノブイリです。

広島は原爆が落ちたときに、放射能がものすごく飛び散っています。被爆者の数もすごい。しかし大量に被爆しておきながら、2005年に広島市は、世界のある人口以上の都市の比較で、世界一の長寿を実現しました。広島市が世界一長寿で、出生者の死亡率が世界一少ない、出生奇形率が世界で２番目に少ないという町になりました。なぜそれができたのか。

広島の人たちは、誰も放射能を怖いとは思っていなかったからです。原爆は怖かった。でも、放射能に対するストレスは全くなかったので、身内を助けに翌日から入っていきました。そして身内も被爆者になったわけですが、チェルノブイリはそれより被爆量が少ない人でも、年間５ミリシーベルトを超えるエリアは、何年も経ってから居住禁止にされたのです。このストレスと、そのころは放射能に怯える傾向も定着していました。将来のがんに怯えながら暮らしていて、チェルノブイリは寿命を９年縮めました。広島は、特に女性ですが、世界一の寿命を実現しました。そういう意味で、ストレスを持ちすぎることが自分を苦しめるということもよく分かりました。

だから、二段構えと言っては変ですが、一つの考えではなくて、やじろべえのような状態で人々の心は揺れています。新しいことが起こってくると、また揺れて新しい重心を探すというか、そういう暮らしかなと思います。でも、いろいろなことが新たに更新されていくので、それはそれでなかなかのフロンティアライフではないかと思っています。

うまくまとまっていないと思いますが、ご静聴どうもありがとうございました。

司会（川浦）：玄侑先生、どうもありがとうございました。

フロアのほうから質問、あるいはコメント等がありましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

質問者１：震災後のことで、遺体でなく、服を棺に入れてお葬式をしたという話がありましたが、もし死んでいたらお葬式をしないと戻ってこれなくなるとおっしゃってましたが、どういうことでしょうか。

玄侑：お盆に亡くなった人が戻ってくるという考え方は、疑いなくみんなそう思っています。ところが、お葬式は向こう側に行けというような儀式だと思ってますよね。そうすると、向こう側に行ってないのに、行ってなかったら戻ってこられないじゃないですか。ですから、戻ってくるためにもお葬式をやる必要があるという、そういうことです。

お盆というのは、仏教の話とたまたまぴたっと重なったのですけれども、日本人はお盆の時期にもっと古く仏教以前から先祖祀りをしていたようです。だからどうやらお盆に戻ってくる世界も仏教の極楽浄土とは思ってないのです。

かぐや姫が月から来ますよね。竹取物語を読んでいると、月にいたころは人情が通じなくて困ったというように書いてあるのですけれども、月が死者の世界だと思っていた節があるのですね。それで、一刻も早く戻りたいと言って、キュウリのウマに乗って戻ってきて、帰りはゆっくりナスのウシに乗って帰るというのは、どう考えてもかぐや姫の世界ですよね。ご参考まで。

司会（川浦）：ほかにいかがでしょうか。

質問者２：今日はありがとうございました。

最後のほうの人権のお話でちょっと分からないのが、今の時代にどこまでの人権が望ましいのかなあというのが質問したいことです。

というのは、戦前は国家権力が非常に強くて、国に逆らう人は拷問をしたりして統制してましたよね、抑えてましたよね。その反省があるものですから、今度はGHQ主催で、国がそういうことをしてはいけないということで、下から目線で国を統制しているのが憲法のような気がするのですね。そこでみんな自由を勘違いしてしまって、なんかしっちゃかめっちゃかなことばかりやっていると、まとまりがないというのを年寄りが悲観しているわけですね。

そこで、今の時代の中で、人権のありようというのはどういうことなのでしょうか。

玄侑：私の個人的な見方かもしれませんけれども、ある集団がまとまって人権を主張するということも、ときにありますよね。例えばここに何かをつくるということに反対するとき、このまとまりは俺はいやだよという形で、内部からぶち壊していく力が出てくることがありますが、これが人権なのです。要するに、人権というのは、横のつながりをぶった切るように働くことが多い。だから、たまたま利害が合うと、同じ人権を振りかざして一緒になって戦うということがありますが、最終的に人権を言っていたら一人一人ばらばらになりますよね。協力しない権利があるというところまでいってしまうわけです。要するに、みんなが協力して何かをするということは、誰かが何かを飲み込むというと変ですけれども、やはりみんなの共通の利益のために何かを飲み込むという発想をしていかないと、話がまとまっていかないわけです。

でも、人権というのは、それは誰かがやらなければならないかもしれないけれども、俺はいやだよという話なのですね。全員がそれを言ったら、もうお終いなのです。だから、あの早い時期に人権という意識が出てきたというのは、もうぶち壊しの話なのですね。

だから、ゴミ焼却場でもそうですが、中間貯蔵施設ともなるとなおさら、うちの町だけはいやだとみんな思っているわけです。それを認めるのが人権らしいですけどね。

よろしいでしょうか。

司会（川浦）：あと一つ、二ついただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

質問者３：ご講演どうもありがとうございました。

先ほど先生のお話の中にもあったのですが、幸福度が最も高いブータンのお話がありましたけれども、今、この国では年間３万人を越える自殺者を生み出しています。僧侶の立場から、ブータンと比べてこの国は何が足りないのか、あるいはそういった違いというのは、GNPでは結構いいところにいっているのですけれども、どこの部分が問題だと思われるか、お聞かせください。

玄侑：12年間３万人を超えっぱなしで、本当に尋常じゃないことです。よその国では自殺というのは、たいがい男性の特権なのですけれども、女性の自殺率が今、日本はどんどん高くなっています。それも一つの特徴ですけれども、生きにくさというのはいろいろ絡んでいるとは思うのですが、日本人は亡くなった人に優しいですね。自殺をした人を責めません。自殺者は葬式をやらないなんて言いません。まして、エラスムスのころみたいに自殺者は泥沼に捨てますというような懲罰は一切ありませんし、丁重にお葬式をやりますし、「こういう死にかたでも成仏できるのでしょうか」と訊かれますから、「できます」と答えます。

だから、起こってしまったことはしょうがないじゃないか、と考えている。その死をおとしめないような解釈をするというのは、お釈迦様もそうだったのです。自分の弟子が自殺してしまった。もちろんしてはいけないと言っていたのですけれども、してしまったというのは、あの人の自殺はどうなんだとほかの人から責められたときに、彼は自殺する直前に解脱に達していたとお釈迦様はおっしゃったのです。リップサービスと言っては悪いですけれども、やはり死者をおとしめないという考え方はあると思うのですね。

もちろん、私はそれをおとしめれば減るということを考えているわけではないのですが、なぜこんなに苦しくなってしまうのかというのは、やはりすべてを競争にしてしまっている、新自由主義と呼ばれる考え方は問題が大きいと思いますけどね。福祉の世界も教育の世界も、経営的に勝ったほうが残ればいいと考えてしまった。今度参加するかもしれないＴＰＰでは、はっきりと学校と病院はサービス業という括りになりますね。

私も病院の経営審議委員というのをやっていると、ときどきいやになります。医療経済学というのは、どれだけもうかる患者かというのがあるわけです。私の友達は病院の学部長になれと言われて、学部長になったらここまで見てもらわないと困ると、「もうかる病気一覧表」というのを渡されたそうです。それで、彼はもうやれないといって辞めてしまいましたけれども、病院がもうかるようにするにはどういう患者を増やせばいいのか、どういう患者を断ったほうがいいのか、そういう経済の話なのですね。

どこから入ってきた考え方なのか、誰がこの国を売っているのか分かりませ

んけれども、みんなが苦しむようなシステムを作っている人がいます。私は、やはりそれが非常に大きいような気がしますね。だからといって、死んではいけないとは思いますけどね。

やはり個性はペルソナですから、神様からいただいた美点だと思っているわけですね。美点を伸ばしましょうと言われても、簡単には伸ばせないし、美点じゃない私の部分はどうしたらいいのか。手癖が悪いやつだというのも、美点ではないけれども、一つの特徴です。手癖の悪さをうまく使うとすごい職人になるかもしれませんが、今の社会は、そういう褒められないことを続けていく気力がわかないのですね。私だって、小説も、小説として完成して、これは小説ですと言われるまでは、ずっと褒められないわけですよ。「何やってるんだ、あいつ」という境遇を続けていかなければならない。誰でもそれをやる時間を持たなければいけないと思うのですけれども、褒められもせず、けなされてばかりのことを続けていくのは大変やりにくい世の中なのではないかという気がしますね。ご参考まで。

司会（川浦）：よろしいでしょうか。

それでは、先ほどお手を挙げていただいてましたので、申し訳ありませんが、短くよろしくお願いいたします。

質問者４：今日はありがとうございました。

死者との関係というか亡くなられた方との関係ということで、先日、僕の友達が亡くなったのですね。それは僕にとって初めての体験でしたので、どういうふうにかかわっていったらいいのかなあと思っています。

その友達というのが、僕が気を遣ってこんなことをしたらいいんじゃないかなあと思うと、やめなよみたいな感じで、いつも怒られたりしながら付き合っていた友達だったので、今までどおりこんなことをしたら喜ぶかなあという形で付き合っていくのがいいのか、それとも、先ほど「こんにちは」という話がありましたが、忘れていくといったらなんですけれども、引きずらないほうがいいのかなあということを素朴にお伺いしたいと思ってご質問させていただきました。

玄侑：親しい友人が一人亡くなったわけですから、自分に何の変化もなかったということはあり得ないので、あの死をきっかけに私はこんなに変わりましたということが一つの供養になるという側面はあります。だから、あなた自身が変わるきっかけですよね。

でも、変わらないでいたいという部分もやはりあるだろうと思います。変わらないことと変わることというのは両立するのです。もっと言うと、変化しないものが変化してしまうのです。

つまり、松の木があるでしょう。松の木は葉っぱを毎年落としているので、ずっと緑でいられるのですね。あれがもし造花のビニールだったら、単に古びていくだけじゃないですか。ですから、人知れず、変化することで変化しない

でいられるというのがあって、変化と無変化は両立するのです。だから、自分の中で大きな変化も起こらないといけないと思うし、そうであればこそ変わらない部分が見えてくるという構造だと思います。

質問者４：ありがとうございます。

司会（川浦）：ありがとうございました。

時間になりましたので、これで講演を終了したいと思います。

玄侑先生、長時間にわたりましてのご講演、本当にありがとうございました。拍手をお願いいたします。

玄侑：どうもありがとうございました。まとまりのない話で失礼しました。

司会（川浦）：万葉の時代からスカイツリーに至るまで、さまざまな話題をいただいてのご講演となりました。私たちの中に住む龍も今日はたくさん食べる物があって、夢に出てくるかもしれません。

皆さんにおかれましては、アンケートがお手元にあるかと思います。一言でも何かお書きいただいて、出口のところで出していただければ幸いです。

本日はお集まりいただきまして、本当にありがとうございました。

（終了）

■　2012年度人間関係研究センター事業報告

（2012年４月～2013年３月）

Ⅰ．センター員構成

［センター員］

津村俊充	（人文学部心理人間学科教授・センター長）
グラバア俊子	（人文学部心理人間学科教授）
石田裕久	（人文学部心理人間学科教授）
伊東留美	（短期大学部英語科講師）
金田裕子	（人文学部心理人間学科講師）
楠本和彦	（人文学部心理人間学科准教授）
森泉　哲	（短期大学部英語科准教授）
中村和彦	（人文学部心理人間学科准教授）
中尾陽子	（経営学部経営学科准教授）
丹羽牧代	（短期大学部英語科教授）
土屋耕治	（人文学部心理人間学科講師）
宇田　光	（総合政策学部総合政策学科教授）

［公開講座担当者及び外部講師］

林　芳孝	（日本体験学習研究所研究員）
長濱文与	（三重大学高等教育創造開発センター教員・日本協同教育学会認定トレーナー）
中川貴嗣	（臨床心理士）
佐竹一予	（愛知県立大学学生相談室・人間環境大学附属臨床心理相談室・臨床心理士）
関田一彦	（創価大学教育学部教授・日本協同教育学会会長）
杉山郁子	（人文学部心理人間学科非常勤講師）

［事務局］

石川りつ子　　小野良子　　園木紀子　　鈴木加奈子

Ⅱ．活動報告

①人間関係研究センター定例研究会

〈第１回〉
日　時：2012年７月４日（水）18：30～
場　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
報告者：森泉　哲（南山大学短期大学部英語科准教授）
題　目：ソーシャルサポート要請の日米比較－文化の複層性の観点から－
参加者：18名

〈第２回〉
日　時：2012年10月31日（水）18：30 ～
場　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
報告者：丹羽牧代（南山大学短期大学部英語科教授）
題　目：社会言語学における「人間関係の中の言語使用」へのまなざし
～Welfare Linguistics Rising～
参加者：21名

〈第３回〉
日　時：2013年１月９日（水）18：30～
場　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
報告者：前田洋枝（南山大学総合政策学部総合政策学科講師）
題　目：ドイツの市民参加による熟議の手法「Planungszelle」が参加経験者・未経験者に及ぼす効果
参加者：17名

〈第４回〉
日　時：2013年３月１日（金）18：30～
場　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
報告者：渥美公秀（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
題　目：東日本大震災と災害ボランティア －初動の問題と被災地のリレー－
参加者：18名

②人間関係研究センター公開講演会

〈春　期〉

日　時：2012年５月30日（水）18：30～
場　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｒ棟フラッテンホール
講　師：玄侑宗久（臨済宗福聚寺住職・作家）
題　目：関係性の回復に向けて
参加者：257名

〈秋　期〉

日　時：2013年２月23日（土）13：30～
場　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
講　師：ジュリー・ヌーラン（NTL Instituteメンバー）
題　目：組織開発（OD）の考え方の応用
参加者：73名

③人間関係研究センター公開講座

［コア講座］

第85回人間関係講座（グループ）［春］

開講期間：2012年６月９日（土）10：00～18：00
　　2012年６月10日（日）　9：00～17：00
場　　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
参 加 者：36名
担 当 者：津村俊充、中尾陽子

第86回人間関係講座（グループ）［秋］

開講期間：2012年９月１日（土）10：00～18：00
　　2012年９月２日（日）　9：00～17：00
場　　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
参 加 者：33名
担 当 者：楠本和彦、土屋耕治

第87回人間関係講座（コミュニケーション）［秋］

開講期間：2012年９月20日（木）～11月29日（木）
　　木曜日　全10回　18：30～21：00
場　　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
参 加 者：23名
担 当 者：伊東留美、土屋耕治、中村和彦、佐竹一予

アドバンス体験学習

開講期間：2012年９月13日（木）～９月16日（日）　３泊４日
場　　所：南山学園研修センター
参 加 者：20名
担 当 者：津村俊充、林　芳孝

第４回　組織開発ラボラトリー
「Diagnosing Organizations with Impact〔影響力のある組織診断〕」

開講期間：2013年２月16日（土）～２月21日（木）　５泊６日
場　　所：丸紅多摩センター研修所
参 加 者：10名
担 当 者：ジュリー・ヌーラン、中村和彦

Ｔグループ〔人間関係トレーニング〕

開講期間：2013年３月10日（日）～３月15日（金）　５泊６日
　　フォローアップ　2013年６月23日（日）　南山大学　Ｄ棟
場　　所：（財）ＫＥＥＰ協会・清泉寮
参 加 者：19名（2013年３月１日時点）
担 当 者：津村俊充、楠本和彦、中村和彦、杉山郁子

［関連講座］

ボディワーク・セミナー

開講期間：2012年６月16日（土）～７月８日（日）
全５回　土曜日４回　14：00～17：00
日曜日１回　10：00～17：30
場　　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
参 加 者：12名
担 当 者：グラバア俊子
（ゲスト：シン・インテグレーション　プラクティショナー）

ブリーフカウンセリング入門

開講期間：2012年７月28日（土）10：00～17：00
2012年７月29日（日）10：00～17：00
場　　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
参 加 者：12名
担 当 者：宇田　光、中川貴嗣

協同学習ワークショップ〈ベーシック〉

開講期間：2012年８月25日（土）10：00～16：00
2012年８月26日（日）10：00～16：00
場　　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
参 加 者：31名
担 当 者：石田裕久、長濱文与

協同学習ワークショップ〈アドバンス〉

開講期間：2012年11月10日（土）10：00～16：00
2012年11月11日（日）10：00～16：00
場　　所：南山大学　名古屋キャンパス　Ｄ棟
参 加 者：17名
担 当 者：石田裕久、関田一彦

■社会人公開講座／参加者統計（2012年度）

講座名		場所	担当者	期間	時間	曜日	参加者数	性別 男性	性別 女性	居住地 市内	居住地 市外	職業 公務員	職業 団体職員	職業 会社員	職業 自営業	職業 医療関係	職業 教育関係	職業 教会関係	職業 主婦	職業 学生	職業 その他	職業 無回答	年代 20代	年代 30代	年代 40代	年代 50代以上	年代 無回答
前年度までの総計							6,651	1,859	4,792	2,772	3,879	507	316	1,510	443	521	1,327	83	787	362	608	236	1,669	1,827	1,997	953	205
コア講座	第85回人間関係講座（グループ）	南山大学	津村・中尾	2012/6/9、6/10	10:00～18:00 9:00～17:00	土日	36	18	18	8	28	12	0	10	1	0	8	1	1	0	3	0	9	9	10	8	0
コア講座	第86回人間関係講座（グループ）	南山大学	楠本・土屋	2012/9/1、9/2	10:00～18:00 9:00～17:00	土日	33	19	14	2	31	10	0	4	4	3	9	0	0	1	2	0	13	3	9	8	0
コア講座	第87回人間関係講座(コミュニケーション)	南山大学	伊東・土屋 中村・佐竹	2012/9/20～11/29 (全10回)	18:30～21:00	木	23	8	15	10	13	2	0	7	0	1	7	0	3	1	2	0	4	3	9	7	0
コア講座	アドバンス体験学習	南山学園研修センター	津村・林	2012/9/13～9/16	3泊4日		20	8	12	2	18	0	2	5	5	0	6	0	0	1	1	0	0	4	11	5	0
コア講座	第4回組織開発ラボラトリー Diagnosing Organizations with Impact	丸紅多摩センター研修所	ヌーラン・ 中村	2013/2/16～2/21	5泊6日		10	8	2	0	10	0	0	7	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6	3	0
コア講座	Tグループ*	清里・清泉寮	津村・楠本 中村・杉山	2013/3/10～3/15	5泊6日		19	11	8	0	19	0	1	9	2	2	0	0	0	0	5	0	1	5	7	6	0
関連講座	ボディワーク・セミナー	南山大学	グラバア	2012/6/16～7/8 (全5回)	14:00～17:00 (7/8 10:00~17:30)	土(日)	12	2	10	4	8	0	0	5	0	1	3	0	1	0	2	0	0	6	5	1	0
関連講座	ブリーフカウンセリング入門	南山大学	宇田・中川	2012/7/28、7/29	10:00～17:00	土日	12	2	10	3	9	1	0	3	1	0	6	0	1	0	0	0	1	4	5	2	0
関連講座	協同学習ワークショップ〈ベーシック〉	南山大学	石田・長濱	2012/8/25、8/26	10:00～16:00	土日	31	16	15	2	29	1	1	2	0	0	24	0	0	2	1	0	1	9	16	5	0
関連講座	協同学習ワークショップ〈アドバンス〉	南山大学	石田・関田	2012/11/10、11/11	10:00～16:00	土日	17	9	8	2	15	0	0	0	1	0	15	0	0	1	0	0	0	2	10	5	0
2012年度合計							213	101	112	33	180	26	4	52	17	7	78	1	6	6	16	0	30	45	88	50	0
総計							6,864	1,960	4,904	2,805	4,059	533	320	1,562	460	528	1,405	84	793	368	624	236	1,699	1,872	2,085	1,003	205

※参加者総数は、前身である南山短期大学人間関係研究センター公開講座（1977年～）参加者との累計で表示されています（人数は修了者数）。

＊2013年３月１日時点の参加予定者数

2010～2012年度　コンサルテーション及び受託事業

（順不同）

研修・講座・企画名等	委託者・主催者
2010年度	
キャリア教育コンサルテーション	聖霊高等学校・中学校
看護部研修「人間関係」	名古屋記念病院
現職教育「ブリーフ学校カウンセリング」	名古屋市立砂田橋小学校
カウンセリング校内研修「ブリーフ学校カウンセリング」	聖霊高等学校・中学校
小牧市教職員研修「コミュニケーションスキル向上のために」	小牧市教育委員会
いのちの電話相談員 全国研修会 仙台大会「ボディワーク」	日本いのちの電話連盟　仙台いのちの電話
社会福祉施設職員研修 課題別専門講座	三重県社会福祉協議会
「人間関係のなかで自己成長を学ぶ」	
名古屋市立小中学校 指導者研究集会＜講演＞	名古屋市教育委員会
「豊かなコミュニケーターとなるには」	
「チームビルディング・セミナー」	日本経営協会
ファシリテーション・フォーラム「組織開発とファシリテーション」	日本ファシリテーション協会
平成22年度名古屋市教育センター教育相談実践研修会	名古屋市教育センター
「人間関係づくりに活かすグループ体験学習の進め方」	
平成22年度幹部教育幹部科昇任課程研修	名古屋市消防学校
「職場におけるリーダーシップ」	
平成22年度認定看護師教育課程	愛知県看護協会
「脳卒中リハビリテーション看護」	
教職員研修「人間関係力の育成について」	小牧市立岩崎中学校
平成22年度新採用者フォローアップ研修	南山学園
「コミュニケーション実習－私のコミュニケーションを考える－」	
平成22年度認定看護師教育課程「リーダーシップ」	愛知医科大学看護実践研究センター
2011年度	
キャリア教育コンサルテーション	聖霊高等学校・中学校
平成23年度認定看護師教育課程「脳卒中リハビリテーション看護」	愛知県看護協会
リーダーシップ・リーダーシップ方法論	
校内現職教育「円滑な人間関係づくり」	小牧市立北里小学校
平成23年度新採用者フォローアップ研修	南山学園
「コミュニケーション実習 －私のコミュニケーションを考える－」	
平成23年度名古屋市教育センター教育相談実践研修会	名古屋市教育センター
「グループワークトレーニング」	
名古屋家庭裁判所調査官自庁研修	名古屋家庭裁判所
「グループファシリテーションの講座」	
平成23年度認定看護師教育課程「リーダーシップ」	愛知医科大学看護実践研究センター
看護部ラダー研修　「人間関係　レベルⅡ」	名古屋記念病院看護師
看護部ラダー研修　「人間関係　レベルⅢ」	名古屋記念病院看護師

研修・講座・企画名等	委託者・主催者
課題別専門講座「人間関係の中で自己成長を学ぶ」	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
平成23年度南山学園内高中校新任教員合同研修会「教育活動におけるプロセスを大切にした教育をめざして」	南山学園高中校連絡協議会
平成23年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育「グループマネジメント」	奈良県看護協会
平成23年度私立学校初任者研修中京地区研修会「グループワーク」	愛知県私学協会
体験学習（ラボラトリー方式による）を通しての人間関係作り－心理学的アプローチ－	仁愛大学教職課程委員会
平成23年度岐阜県看護教員再教育研修「体験学習とファシリテーターのあり方」	岐阜県健康福祉部医療整備課
平成23年度岐阜県子育て相談員研修会「子育て支援チーム力～人間関係力について～」	特定非営利活動法人くすくす
教職員研修「人間関係－距離のとり方・自立－について」	聖カピタニオ女子高等学校
2012年度	
からだと心の健康講座	愛知県教育委員会
看護部ラダー研修　「人間関係　レベルⅡ」	名古屋記念病院
看護部ラダー研修　「人間関係　レベルⅢ」	名古屋記念病院
名古屋市立中川区正色小学校、校内研修	名古屋市中川区正色小学校
組織開発基礎講座	OD Network Japan
コミュニケーション変革プログラム開発	富士ゼロックス総合教育研究所
メンタリング研修	株式会社 プレスタイム、日本マイクロソフト 株式会社
人間関係づくりトレーニングの基礎とコツ	愛知県立総合看護専門学校
リーダーシップ	愛知医科大学看護実践研究センター
ファシリテーター・トレーニング	名古屋大学附属病院
施設内教育ブラッシュアップセミナー	日本看護協会
グループワーク	愛知県私学協会
2012年度南山学園内高中校新任教員合同研修会	南山学園高中校連絡協議会
2012年度新採用者フォローアップ研修	南山学園

南山大学人間関係研究センター規程

第１条　本学に南山大学人間関係研究センター［Center for the Study of Human Relations］（以下「センター」という）を置く。

（目　的）

第２条　センターは、広く学際的視野にたった人間関係研究を行うとともに、その成果を積極的に公表することを目的とする。

（事　業）

第３条　前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

１　本学における人間関係研究の推進と調整

２　本学における人間関係研究分野の教育の推進

３　センターと目的を共通する学外の研究機関並びに研究者・実務家との協力

４　研究会、研修会等の開催

５　文献、資料の収集と利用

６　研究成果等の編集と刊行

７　その他センターの目的を達成するために必要と認める事業

（組　織）

第４条　センターに研究員を置き、そのうち１名をセンター長とする。

②　センター長は、研究員のうちから学長の指名する候補者について、大学評議会の承認を得て委嘱する。

③　研究員は、本学専任教育職員のうちから、学長が指名する候補者について、大学評議会の承認を得て委嘱する。その任期は２年とし、再任を妨げない。

④　必要に応じて、客員研究員、非常勤研究員を置くことができる。この採用については、別に定める。

第５条　センター長は、センターの事業を掌理し、センターを代表する。

（センター会議）

第６条　センターにセンター会議を設け、センターの運営に関する重要事項を協議決定する。

第７条　センター会議は、次の者をもって組織する。

１　センター長

２　研究員のうちからセンター長の指名する者若干名

第８条　センター会議は、センター長が招集する。

②　センター会議は、構成員の３分の２以上の出席がなければ議事を行うことができない。

③　議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（事　務）

第９条　センターに事務職員を置く。事務職員は、センター長の指示をうけてセンターの事務を担当する。

（規程の改正）

第10条　この規程の改正は、センター会議の議を経て、大学評議会に諮るものとする。

附　　則

この規程は、平成12年４月１日から施行する。

附　　則

この規程の改正は、2006年４月１日から施行する。

編集規程

1．本誌「人間関係研究」は、南山大学人間関係研究センター（以下、本センターと略記する）が編集し刊行する紀要であり、当面の間、１年に１号を発行する。本誌の英文表記は、“The Nanzan Journal of Human Relations”とする。

2．本誌は、本センターの研究成果等を広く一般に紹介するために編集される。

3．本誌には、Article、研究ノート、実習集、特集論文の他、研究会・講演会等の報告などを掲載する。

4．Article、研究ノート、実習集、特集論文は、本センターから寄稿を依頼する依頼論文と、本センター研究員からの投稿論文から構成される。なおArticle、研究ノートに関しては、本センター研究員以外の著者による単著、もしくは本センター研究員以外のメンバーのみによる共著の投稿も受け付ける。この場合は、本センターの依頼した審査者による審査を経て掲載の可否が決定される。

5．本誌に掲載する論文等は、原則として未公刊のものとする。

6．社会通念としての倫理に抵触するような内容、表現を含むものは、これの掲載を認めない。

7．本誌に掲載された論文等の著作権は、本センターに帰属する。

8．この規程の改正は、センター会議の議を経て行う。

附則

この規程は、2009年10月14日から施行する。

編 集 委 員　楠本和彦・石田裕久・土屋耕治
表紙デザイン　濱本博司

人間関係研究　第12号
2013年３月25日　発行

発 行 所　南山大学人間関係研究センター
代表者　津 村 俊 充
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18番地
電　話（052）832―5002
ＦＡＸ（052）832―3202

印 刷 所　㈱尾頭橋印刷所
名古屋市中川区南脇町３丁目20番地
電　話（052）351―6231番（代表）